

フェンスレス 第2号 目次

特集 占領と開拓の〈記憶〉

- はしがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 故郷喪失の季節・・・・・・・・・・・・・・・・ 小泉京美 5
満洲郷土化運動と金丸精哉〈満洲歳時記〉の錯時性
- プロレタリア文学の中の植民地主義・・・・・・・・ 島木圭太 23
伊藤永之介「万宝山」を読む
- 迎合と抵抗の記憶・・・・・・・・・・・・・・・・ 澤辺真人 43
太宰治『惜別』と大東亜共栄圏
- 歴史の裂け目を縫うように・・・・・・・・ 村田裕和 61
貴司山治「雷新田」論
- 日本語は誰のものか？・・・・・・・・ 下岡友加 77
ポストコロニアル台湾の日本語作家・黄靈芝の方法
-
- 特別寄稿 サンパウロから帰国して・・・・・・・・ 尾西康充 90
石川達三『蒼氓』雑感

論文

- 「頽廢」の価値・・・・・・・・・・・・・・・・ 福岡弘彬 103
マルクス主義文学における／または平林初之輔の〈デカダンス〉

展覧会レビュー

- いま「昭和初年代」を見直すこと・・・・・・・・ 秋吉大輔 119
『昭和モダン 文学と絵画 1926-1936』展（兵庫県立美術館）

書評

- 「外地」と向き合う試み・・・・・・・・ 矢部真紀 125
藤森節子『少女たちの植民地——関東州の記憶から』

資料

- 〔翻刻・抄録〕貴司山治『蒙古日記』（一九四三年）・・・・ 130

解題

- 北涯の“大東亜共栄圏”終末像・・・・・・・・ 伊 藤 純 158

表紙 柳瀬正夢「落日を惜む農夫」（『協和』1930年8月号）

戦後半世紀を前にした数年間、アジア・太平洋戦争をめぐる暴力の「記憶」はきわめてアクチュアルな問題として歴史の表層に噴出していた。今あえて二十年前の記憶をたぐり寄せてしまうのは、当時は意識もしなかった妙にざらざらとした日常の空気を、少し違った風にだがこの頃また感じ始めているからである。

湾岸戦争を受けて一九九二年に通称「PKO協力法」が成立した際には、加害であれ、被害であれ、戦争という巨大な暴力の「記憶」をとどめる人はまだ多く存命であり、成立に至る議論は文字通り世論を二分した。一九八九年に提訴された薬害エイズ訴訟にかかわる報道の中では、満洲第七三一部隊の存在が亡霊のごとく呼び覚まされた。一九九五年に沖縄で起こったアメリカ兵による婦女暴行事件は、「記憶」という言葉がまったく不似合いなほどに、半世紀の間持続されていた沖縄への日米合作の暴力を露わにする出来事であった。

また、中国残留日本人孤児の来日身元調査が毎年のようにニュースとなっていた一九八〇年代が過ぎ去り、一九九〇年代に入ってとりわけ前景化されてきたのが、「従軍慰安婦」問題であった。一九九三年の河野洋平内閣官房長官談話では、徴募の強制性を示す物証が見つからない中で、当事者（被害者）の「記憶」の信憑性に依拠して強制性が推認された。その結果、彼女たちの「証言」にはきわめて重大な政治的意味が付与され、それらの「証言」や「談話」が否認されるたびに、さらなる「証言」の要請とその否認が繰り返されることとなった。

一九九五年一月号の『現代思想』で、「戦争の記憶」がテーマとなったのはこうした時代背景ゆえだった。そこで高橋哲哉は、過酷な体験を公然と物語るよう強いることを、「第二の暴力」[＊]と指摘していたが、証言に対する「否認」の連続は、いわば「第三の暴力」である。いやむしろ、ことの全体がいまなお継続中の一つの暴力であると捉えるべきであろう。いずれにせよ、過酷な体験をみずから語ることではか、その体験の真实性が証明できないとすれば、証言されるべき出来事はいつまでも真実に到達できない。「否認」は、ついに勝利するであろう。

しかし右の論考で高橋は、レヴィナスの議論を批判的に継承しつつ、こうした「満身創痍の証人たち」に代わって「私」Ⅱ「第三者」が証言することの可能性を模索している。〈他者〉の証言への応答として、「第三者」が、〈証人に代わって証言する証人〉となることは、本当に可能なのだろうか。

この頃に刊行された村上春樹の長篇『ねじまき鳥クロニクル』新潮社、一九九四年、九五五年）は、戦争の「記憶」と「忘却」、あるいは「証言」の可能性と不可能性にかかわる問題系を正面からみずえたテキストであった。理由も分らずに妻や飼い猫が不在となった「僕」は、井戸の底で耳を澄ますことで、「満洲」の時空へと結ばれていく。完璧な消去であるために、もはやその暴力の痕跡さえ知りえないような「忘却の穴」（H・アーレント）に抗して、その穴の底で声を聞くことはできるのか。不在者の声なき証言に応答すること、あるいは、あまりに過酷であるがゆえに「記憶」さえも破壊されているような他者に代わってわれわれが語りうることとはいったい何だろうか。

日本では、メディア、義務教育、市民運動などの中で、原爆や空襲の被害（の証言）を継承する努力が続けられてきた。体験を持たない世代がそれをどう継承するかも真剣に議論されている。しかしそうした圧倒的な質・量の証言が語り継がれる一方で、加害の「記憶」や、〈他者〉たちの「記憶」はますます忘却され、一部の人間たちによって、その被害（の証言）は辱められてもきた。「記憶」のマジョリティーを構成し、その一員となることは、結果的に「忘却」を生み出してしまふ。かといって、誰もが同じ一つの歴史を共有することは不可能だ。戦後半世紀からさらに二十年。他者への想像力を欠いた「忘却」の共同体ではなく、互いの「記憶」を分かち持ったものの〈開かれた場所〉を構築することが求められているのではないだろうか。

（村田裕和）

* 高橋哲哉「満身創痍の《証人》——〈彼女たち〉からレヴィナスへ」『現代思想』一九九五年一月号、『記憶のエ

チカ——戦争・哲学・アウシュビッツ』（岩波書店、一九九五年／二〇一二年）所収。

特集 ● 占領と開拓の〈記憶〉

故郷喪失の季節

満洲郷土化運動と金丸精哉〈満洲歳時記〉の錯時性

小泉京美

一 遼東の詩情^{ホシイ}

南満洲鉄道株式会社（以下満鉄）社員会の機関誌『協和』に、「郷土色」のコーナーが設けられたのは一九二九年五月のことだ。同欄には「満洲」（現・中国東北部）の四季に即した風俗文化を題材とするエッセイが掲載された。連載第二回目となる五月一五日号の編集後記に次のように趣旨が表明されている。「郷土色」は単なる支那風俗研究に止まるものではない。まず、常識として心得置くべきもの、興味豊かなもの等のほかに、此地に住むものが、此地を郷土として、びつたりと板についた生活をなすべく、故郷としての此地の物象を親しみをこめた眼で眺め、しつくりと考へて見たいといふ所に此の欄の本質的な立場があるのです」。もちろん、「此地の物象」を取り上げる彼らのまなざしは、大半の社員の生活の拠点であった「満鉄王国の

首都」（与謝野寛・晶子『満蒙遊記』大阪屋号書店、一九三〇年）、大連を起点としている。社員とその家族の定着・定住を課題としていた満鉄社員会に、地域に密着した文化を促進する動きが起ったのは自然なことであつただろう。

一九一五年に「南満洲及び東部内蒙古に関する条約」が締結され、関東州と附属地の租借期限の延長が実現すると、満鉄は「附属地小学校児童訓練要目」を制定し、「国体ノ尊厳」「国民道德」の会得に加えて、「帝国ノ地位ヲ了解セシメ土地ト相親シムノ念ヲ養ヒ質素ニ安ジ勤勞ヲ樂マシムベシ」と、満洲に定住し、開拓・発展に寄与する人材の育成を目標に掲げた。一九一九年に附属地の日本人教育施設を視察した学務課長保々隆は、次のとおり訓示を行っている。「殖民は民を植ゑること、即ち附属地を埒として経済的發展をなさしめ、過剰人口を調和するにある。然らば人を殖やすには如何なる方法を取るべきかといふに、此の地にあるものを去らせないやうに為すこ

と(中略)此の方法として、例へば奉天の小学校の児童には東京の次に好い処は奉天であると謂ふことを思はしめる必要がある。児童の親は「内地恋しや」の人々であるから、一層力を入れて、此の土地に親しむやう教育せられたい」(訓示要領)『滿鉄附屬地経営沿革全史』南滿洲鐵道、一九三九年。滿洲在住日本人の定住を促進すべく、次世代教育が重視され、「内地延長主義」から「適地主義」への転換が図られていた。

「郷土色」の二回目が連載された『協和』(一九二九年五月一日)には、雑誌『滿洲短歌』の創刊が告知されている。『滿洲短歌』は「滿洲郷土芸術の将来を明るくするといふ目標」を掲げて同年発足した滿洲郷土芸術協会の機関誌である。同会を結成した歌人の八木沼丈夫を筆頭に、『協和』の編集部が中心となつて創刊された。⁽¹⁾創刊同人の城所英一は「滿洲短歌」の立場(『滿洲短歌』一九三二年五月)で次のように述べている。

地方雑誌の立場として我々が亘に考へてゐることは、内地歌壇の徒らな延長に終らしめ度くないこと——滿洲の土の匂ひ——を作品に浸透させ度いこと。

遠く母国を距てた海外に住む我々の精神を姿を、しっかりと把握して、彫心鏤骨しんじつに歌ひあげ度いこと。我々の郷土としておそらくは骨を埋めるであらう此の地に、我々の郷土芸術を樹立すべき責任をさへ感じてゐること。

城所英一の言には、多くの日本人が「骨を埋めるであらう」同様に、「郷土芸術を樹立する責任」という社会的な責務観だけではなく、「母国を遠く離れた、伝統圏外の不羈奔放な新天地に住む我々である。我々の立場こそ、何か新しいものを創造する良き條件を盡く備へたるが如く見える」という、文学的野心が滲んでいる。そもそも、城所は大連で発刊され、「内地」の詩壇にも大きな影響を与えた短詩運動の詩誌『亞』(一九二四年創刊)の創刊同人だった。『亞』は一九二七年一二月に終刊し、安西冬衛や北川冬彦ら主要な同人は、「内地」の『詩と詩論』(一九二八年創刊)に参加していた。城所の「我々は内地歌壇の不断の喧騒を傍聴してゐる。——その離合集散を遙かに傍観してゐる。その圏外に在つてそれらを静かに批判し得る事を幸福だと思つてゐる」という、いささか冷笑的な態度は、「内地歌壇」(詩壇)への対抗心のあらわれであつたのかもしれない。⁽²⁾

「内地」に対抗して「此地独自の郷土色」を創作に反映させようとする動きは、大連の文学状況において共有されていた。『亞』の強い影響下で、一九二九年に創刊された詩誌『戎克』は、「遼東のポエジー」(小杉茂樹「断片言」『戎克』一九二九年三月)を、翌年創刊された『燕人街』(一九三〇年創刊)は「滿洲の詩野」(冬樹伸一「模倣詩」『燕人街』一九三〇年三月)の広さを主張した。それぞれ、詩風・歌風や主義・主張を異にしていたとはいへ、同じように『亞』以降の大連の文学状況を、地域の独自性を強調

することでも乗り越えようとしていた。⁽³⁾「我々の時代、と云つても先輩の開拓した土地を耕してゐる様ではだめだ。我々はおつともつと、新領土の創見に努力すべきだ」(城小碓「領土片」『戎克』一九二九年八月)と奮起する彼らは、「新天地」という地政学的な前衛性に、詩や短歌における「新領土の創見」という文学的な前衛性の条件を見出そうとした。「郷土色」への関心は、満洲事変後には政治的な目的意識に支えられることになる。

今や満洲の情勢は明るく転向し、母国の生命線たる意識は一入判然として来たのである。従来所謂出稼人根性を完全に揚棄し、此処に定住する気持ちをしつかりと持ち直すことによつて、新たに特殊な感情が甦つて来るであらうし、特色のある歌が来ると信ずるのである。

つまり、土に即し大地に腰を据えることである。新しい郷土の観念を更めて樹立することである。

城所英一「地方色といふもの」『満洲短歌』一九三二年七月)では、満洲を「母国の生命線」として位置づける地政学的思考が明確化されている。中央と地方、「内地」と「外地」を差異化し、「植民地在住の我等の精神」を「郷土色」として發揮するという営みは、満洲を日本の「地方」として「新しい郷土」に再構成し、「母国」に対して「植民地」の役割を果たすという植民地主義的な目的意識に尖鋭化していった。それが大陸侵略の拠点として、

満鉄が本社を構えた租借地、大連の「^{ワカライ}地方色」だった。

一九三二年三月一日、「満洲国建国宣言」がなされると、満鉄社員会は「満洲郷土化運動」に乗り出した。一九三三年九月一日発行の『協和』の巻頭言「満洲を『住みよきところ』には、『王道楽土』とは『住みよいところ』を意味するであらう」と述べ、満洲郷土化運動を提唱する。⁽⁴⁾

満洲が、日露戦役以来、日本人に開かれて、既に三十年の月日は流れた。(中略) 附属地の文化は日本の都市はおろか、欧米の田舎都市等は到底及ばぬ程、立派な施設に栄えた。但し附属地の外一步を出づるや、そこには何等邦人の足溜りになすべき所は見出されぬ。

三十年間僅に猫額大の州内と附属地の物質的施設にのみ終始した事は、何と言つても残念である。是に対してはいろ／＼な申訳はあるだらう。だが、諸々の障害を碎破して、斯の地を楽土とすべく一步でも前進せしむる自発的勇猛心の不足して居た責任は、在満同胞の凡てが負うべきであらう。

しかし、満鉄の「附属地の外」へ拡張して「王道楽土」の実現を目指す満洲郷土化運動は、境界線の移動と同時に新たな分岐を内部に抱えることにもなった。『協和』の「郷土色」のコーナーは、同年八月一日に「新京の地方色」を掲載し、以降

は各地の「地方色」の連載に変わった。「母国」の「新しい郷土」として日本に編成されたはずの満鉄沿線各地の「郷土色」は、しかし「国都」に定められた「新京」（現・長春）を起点とする「満洲国」の「地方色」でもなければならなくなったのである。

二 大連と新京

まず、関東州や満鉄の附属地において、在住日本人の故郷・郷土意識を高め、「母国の生命線」としての役割を果たす人材の育成や、そのための日本人の定住を目指す運動があった。そして「建国宣言」（一九三二年）がなされた後の「満洲国」で、日本とは異なる文化を創造する動きが起こる。しかし、この二つの運動を同時に進めることは、「満洲国」を独立国家とみなす以上は矛盾するだろう。

大谷健夫は「千九百三十一年の満洲事変は、日本と満洲の結びつきを緊密にし、続いて昨年の支那事変以来、更に支那本土とも結びつき、その三つを一九にした「新しい日本」が誕生しやうとしてゐる」（『小説界概観』『満洲文芸年鑑』第二輯、満蒙評論社、一九三八年）と歴史認識を示した。この歴史認識に呼応するように、満鉄の郷土化運動は、「満洲国建国」後にそれまでの永住促進の潮流を引き継ぐかたちで高揚し、一九三七年にいよいよ本格化した。⁵⁾

だが、大谷健夫が一方で「満洲国は日本の一地方ではない。

風土や政治経済的環境は、日本内地とは全く異なっている。ここに日本の一地方文学ではない「満洲文学」と云ふ特殊な存在が要求せらるゝのである」とも述べたように、「満洲国建国」は、それまでの事態とは決定的に異なっていた。満洲事変が「母国の生命線」として、満洲を包含する「新しい日本」の再編成を意識させたとするならば、「満洲国建国」はそうした植民地意識を揚棄し、「日本の一地方」ではない「満洲国」に独自の新文化を建設する機運を巻き起こした。満洲の日本人社会で高揚した二様の国家主義は、「満洲国建国」を分水嶺に、鋭いイデオロギーの対立を惹き起こさずにはおかなかったのである。

こうした「満洲文学」をめぐる葛藤や矛盾は、しばしば都市のアナロジーで語られた。「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」という概念は、「満洲国」の首都建設計画の進展に伴って、文化の中心が大連から新京へ移動する過程で生じた文芸思潮の対立として指摘されてきた。日本浪漫派の作家、北村謙次郎は次のように回想している（『北辺慕情記』大学書房、一九六〇年）。

その頃の満洲国官吏というと、よく飲みよく遊びもしたようだが、協和服を着込んで建国精神や協和理念を説くあたり、颯爽たる気概にむしろ筆者などアテられ気味で、渡満当初はひどく当惑したことを思いだす。（中略）そこでこの「風」を新京イデオロギーと尊称し、満鉄マンあたりによつて代表される自由主義的な大連イデオロギーなる

ものが、はつきりこれと対立することになった。もともと関東州や満鉄附属地に住み、長年に亘りこつこつ一家をなしたという連中は、大正時代の思潮を背景とすると同時に、自由港大連の影響もあつて、考え方が小市民的、自由主義的なのは当然である。これを大きく支えるのが、満鉄という大温室であつた。

当初から内実が不明瞭だと批判（大連生「大連イデオロギーと満洲文学」『満洲日日新聞』夕刊、一九三七年四月二日）されるほど印象的な差異でしかなかったものが、なぜ、とりわけ「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」として強調されたのか。

日露戦争後に日本が租借し、都市建設や行政事業の大部分を満鉄が担った大連と、「満洲国」の首都として、国都建設局が主導する「国都建設計画」が推進された新京という都市の成り立ちは、それぞれいかなる文芸思潮を表象していたのだろうか。

「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」の対立を、批評の場に持ち込んだと目される評論家の西村真一郎は、「在満作家に当然起るべき問題」『満洲日日新聞』夕刊、一九三七年四月一〇日）において、「満洲文学」を「日滿不可分の精神に基づく日本民族の指導、強化であり、満洲工作の線に沿ふ文学活動である」と規定した上で次のように述べる。

然しながら現在の過程にあつては、茲に当然起つて来る

問題がある。それは関東州内に於ける作家と満洲国内に居住する作家の問題である。このことは一般的には新京イデオロギー及び大連イデオロギーに依つて代表されるものであつて、両者の環境上の相違に依つて決定づけられた相克である。然し大連イデオロギーは日本内地及び満洲国との間に生れた私生児乃至は庶子のやうなものであつて、早晩いづれかに従属しなければならぬが、満洲国の健全なる躍進を擁護し指導するといふ我が国大局の見地に立脚するとき、大連イデオロギーは当然新京イデオロギーに解消する必然性があるのだ。

西村真一郎は「満洲文学」における「新京イデオロギー」の「指導性」を主張した上で、大連の作家に「満洲工作に対して作家としての熱情が見受けられない」と指摘し、その理由を「満洲事変の温床地である大連が、建国と共に満洲工作に対する熱情が失せてしまったからだ」と述べる。一九三七年に「満洲国」における日本の治外法権撤廃及び満鉄附属地行政権の移譲が実現し、満洲全域が「満洲国」の名の下に一元的に支配されることになった。しかし、大連を含む関東州は「満洲国」から租借権を与えられる形式に変更されてはいたものの、「満洲国」の一部でありながら統治権益は日本にあり、日本の統治下にありながら日本の領土ではない、租借地という曖昧な形態のままであつた。

それまで日本の大陸支配の最前線だった関東州は、両義的で境界的な場所とみなされ、「日本内地及び満洲国との間に生れた私生児乃至は庶子」として、「満洲国の健全なる躍進」の前に「解消」されようとしていた。「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」の対立は、人脈や居住地の分布に基因する雰囲気の違いなどという曖昧なものではなく、文学理念上の鋭いイデオロギーの対立として、「満洲国建国」後の地政学的文脈において生起していた。

だが、西村真一郎が「満洲文学」の成立に「我が国対局の見地に立脚」した「日本民族の指導」性を疑わなかったように、「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」という分断は、排除と包摂の論理を内包する政治的な身振りでもあった。このことは、満洲事変以前に高揚していた故郷・郷土意識の高まりが、租借地から独立国家へとという統治形態の移行によって生じる論理的矛盾を解消しないまま、「満洲国建国」後の満洲郷土化運動へ接続したことに関わっている。

大連在住の小説家、吉野治夫は「満洲文学の現状」『セルパン』一九三九年四月）で次のように述べる。

満洲に発芽してゐる文学が一つの運動となつてゐるとすれば、（中略）その特色は、一、満洲に於いて独自の主題を発見しようとする、二、日本文壇依存心を排棄すること、三、満洲独自の文学形式を発見しようとする

ことに雪崩れのごとく行進してゐることであらう。右は事変後、殊に昭和八、九年頃より強調され、年々共鳴を集め、今では容易に動かし難い信念に近いものにまでなつてゐると見て間違ひない。その理由としては三十数年来、満洲がほとんど日本から無視されてゐたことに對する反撥と、満洲建国後の新情勢に依つて自覺した新文化建設に對する責務觀と、日本文壇の行詰りに對する慚然なさが挙げられ、これらが支那事変により更に確信にまで飛躍したものと見る事ができる。

吉野治夫に従えば、「日本文壇依存心を排棄」して、満洲に「独自の主題」「独自の文学形式」＝「満洲文学」を求める動きは、満洲事変を契機に高揚し、日中開戦の一九三七年に最高潮に達したことになる。そこでは「満洲国建国」によって生じた政治的・文学的葛藤は、満洲と日本（内地）を差異化する文脈の中に埋没している。先にみたとおり、こうした操作は満鉄の満洲郷土化運動においてもみられた。

大連在住の詩人で、かつては『亞』以降の詩に「遼東のポエジ」を發展せしめよう（小杉茂樹「断片言」）とした『戎克』の同人だった城小確は、「満洲国建国」によって生じた葛藤を「祖国愛」と「郷土愛」の問題としてとらえた（『満洲文学の精神』『満洲日日新聞』夕刊、一九三七年五月二日、四日、五日）。

我々の墳墓の地となるべき、我々の子孫に残して行くべきこの満洲国をよりよき理想郷を建設しなければならぬのである。郷土愛、つまり郷土愛そのものが五族を同一方向に転ずる唯一の道である。

茲に於て問題にされるべきものは祖国愛である。当然現在の満洲国の国家を形成する。しかも一つの大きな民族の帰趨である。祖国愛か、郷土愛か。文学の場合に於てもこの問題の動向によつて満洲文学の方針が分岐されるのである。

祖国愛か、郷土愛か。郷土愛か、祖国愛か。

城小確は「私の現在では、郷土愛より、この祖国愛の方が大きいのだ」と述べつつ、「祖国愛を犠牲にしてこそ満洲国を愛し満洲文学を世界文学の水準に引上げる過程ではなからうか」と植民地意識の超克を示唆した。「郷土愛」と「祖国愛」の分岐が問題視されつつも、しかし一方を断念しなければならぬという志向は、西村真一郎が「大連イデオロギー」を淘汰されるべきものとしたことと重なり合うだろう。そしてここでも、自覚された分岐は直ちに覆い隠されてしまう。城に応答した角田時雄「満洲文学に就て——城小確氏の論を読んで——」『満洲日日新聞』夕刊、一九三七年五月一四日（一六日）は、「真に祖国日本の建国精神と、満洲帝国の建国精神を体感せらるゝならば、祖国愛と郷土愛とを分岐点におくのは矛盾ではなからうか。い

ふまでもなく郷土として満洲を愛することは、祖国愛に出発し、祖国愛に徹底することであらねばならぬ」と述べた。

これらの経緯が示しているのは、日本と「満洲国」の地政学的葛藤が、一連の歴史的発展として文脈化されることで覆い隠される軌跡に他ならないだろう。満洲を日本の一地方としてとらえ、「母国の生命線」としての役割を期待する植民地主義的な言説と、「満洲国」を日本から自立した独自の国家としてとらえ、脱植民地化を強調する言説は、日本と「満洲国」の境界線をときに無効化し、ときに強調する二重基準として、互いを補完しつつ機能した。「郷土」「故郷」「祖国」という言葉の観念性が、その二重性を覆い隠す煙幕となったのである。

三 故郷喪失の季節

ここでふたたび「大連イデオロギー」に目を向けなければならない。大連の曖昧な都市の成り立ちとともに二重性を被りながら、しかもそれゆえに過渡的な状況として表象され、解消されようとしたことがらは、満洲在住日本人二世の「故郷喪失」の問題として浮上する。

「祖国愛」と「郷土愛」の相剋を、満洲在住日本人二世の喪失感として吐露し、満洲の文学状況に波紋を投げかけたのは、大連で発刊されていた文芸誌に発表された秋原勝二の小説「夜の話」『作文』一九三七年七月）だった。秋原は次のように述べ

る（『故郷喪失』『満洲日日新聞』夕刊、一九三七年七月二十九日～三十一日）。

考へてみると私は、現実を血肉化する手段すらあたへられなかった。内地のまゝの言葉をつかつて、日本のまゝのおべゝを着て、内地の風物で教育され、二十有数年、内地、内地と日本人の心は満洲でから廻りをつづけてゐた。これは確に過去の在満日本人の姿である。

満洲日本人の精神所得は、さうして過去において全然無に等しいものとなつた。語るべき何も持つてはゐないのだ（中略）。

故郷喪失——そんな言葉すら何か遠い感じ。喪失といつてしまつては、既に失ふ何かがあつたことになるが、ほんとは、それすらなかつたやうだ。

秋原勝二が示した満洲在住日本人二世の位置を、より辛辣な批判とともに浮き彫りにしたのは江原鉄平「満洲文学と満洲生れのこと」（『満洲日日新聞』夕刊、一九三七年八月一日～二日）である。江原は「満洲生れの故郷喪失は、つまり殖民倫理への猜疑から出る。自分の生地を思想的疑惑によつて失つた者の一種の虚無感である」と述べた。

われ／＼が小学校の頃から教へられたのは「お前達の国は海に向ふにあつて此処は植民地である。お前達は植民地へ

来て生れたのだが母国を忘れてはならぬ。海に向ふのが国は山紫水明の国、緑深く、花咲き、鳥歌ふ夢の如く美しい国」それから幾多のそれに関する知識である。（中略）

つまり、私は、他家に育つた継子が母を持つてゐないやうに、満洲にも内地にも愛着を持つてゐない（一）

私には故郷がない。さうして故郷ならぬ養家へ歸つて見れば、そこでは養家の文学といふものが提唱されてゐたのである。私は継子の文学ではないのかと疑つた。

江原鉄平にとつて「満洲文学」とは「われ等の父母が如何にして大連、奉天、長春（新京）を築いて行つたか、満洲事変前後の経緯、その他日本人中心の勢力扶植史を書く」という「植民文学」か、日本人開拓移民が入植した「佳木斯辺の移民地」に「第二の東京」を築く「帝国主義文学」としてしか成立しない⁽⁸⁾。

一九三七年、広田弘毅内閣が「二十カ年百万戸送出計画」を策定し、開拓移民事業は飛躍的に拡大した。一九三九年には大陸開拓文芸懇話会が発足している。いわゆる「開拓文学」と「満洲文学」との懸隔は、早くから指摘されてきた。尾崎秀樹は「開拓文学」に対して満洲居住の日系作家はかなり冷淡だった。拓務省あたりの派遣で渡満することからして反撥をまねいたらしく、一部の作家を除けば両者の交流はそれほどしつくりといつてはなかったようだ。（中略）いわゆる開拓文学は満洲文学のな

かからは育たなかった」『近代文学の傷痕―旧植民地文学論』岩波書店、一九九一年」と述べた。⁹⁾人脈や具体的活動において接点をもたなかったとされる「開拓文学」と「満洲文学」の担い手たちは、しかし満洲を「日本の生命線」として郷土化する理念を共有する限りにおいて、同じように「帝国から派遣された者」(江原鉄平「満洲文学と満洲生れのこと」)であった。

むしろそこで顕在化したものとも深刻な溝は、等しく満洲を郷土・故郷として理想化することができた「開拓文学」や「満洲文学」の書き手たちと、「満洲にゐて満洲知らず日本人にして日本知らず」(秋原勝二「故郷喪失」)と自らを位置づける二世作家との間に横たわっている。江原鉄平が「満洲の都会に育った第二国民」の「植民文学」と「佳木斯辺の移民地」の「帝国主义文学」を、同じ穴の貉と弾劾しつつも二分していることには、「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」の対比が作用しているだろう。西村真一郎が「日本内地及び満洲国との間に生れた私生児乃至は庶子のやうなもの」と述べた「大連イデオロギー」を反転させ、江原は「継子の文学」という自覚とともに「満洲文学」を断罪したのである。

金崎賢はエッセイ「ふるさと」『満洲日日新聞』夕刊、一九三七年九月七日(一二日)において、「大連の空気は実にそれは／＼してゐる。所謂植民地的風景である。植民地といつても定住植民地ならふさと感^{マヤ}は起るであらうが、大連の如きは浮浪的植民地ではふるさと感の起りやうがない」と述べた。「満洲

文学」の不可能性として浮かび上がった二世の「故郷喪失」の問題は、その母胎となった大連の都市イメージによって語られることになる。だが、「浮浪的植民地」としての大連は、「満洲国」の文化工作が隠蔽しようとした「満洲文学」の欺瞞を照らし出す条件となっただけではなかった。

同じ時期、大連で「満洲アヴァンガード芸術家クラブ」が結成されている。中心になった三好弘光は大連のシュルレアリスム系画家の団体である五果会(一九三二年結成)や、詩誌『鵲』(一九三四年創刊)に参加した大連在住の画家・詩人である。三好は大連に写真の「前衛運動」が「登場する必然性がある」とする文脈で、次のように述べる(薔薇的条件―写真造型への発足)『フォトタイムス』一九四〇年二月)。

大陸で張作霖が幅を利かしてゐた頃、まだ僕等が少年であつた頃、この大陸の門戸の一であり、ある意味では頭脳であつたところの大連に、日本詩壇の最も新しい前衛詩の運動が芽生へたのである。同人雑誌「亞」を中心に、北川冬彦、安西冬衛、瀧口武士その他の詩人が、所謂日本前衛詩運動の先頭に進んで行つたのである。

一九二〇年代の大連で「前衛詩の運動」を展開した「亞」を自らのルーツに位置づける三好弘光は、「詩や絵画の上では、早くから前衛運動が行はれてゐるこの地では、さういふ新しい

写真を消化するに充分な蓄積的条件があつたのである」と述べた。

「満洲のものは眼ではみても言葉ではいへない。内地のものはその逆で本に書いてあることだけは言葉でいへて、一体それがどんなものか実物はサツパリ御存知ない」（秋原勝二「故郷喪失」）。満洲在住日本人二世に「漂泊者」（秋原勝二「故郷喪失」）、「放浪者」（江原鉄平「満洲文学と満洲生れのこと」という自覚をもたらし「故郷喪失」は、既成の表現形式の破壊や、規範からの逸脱を志向する「前衛運動」の可能性としてもとらえられていた。「故郷喪失」の場所、あるいは「浮浪的植民地」大連は、表現の革新を志す芸術家たちにとって、なおも「蓄積的条件」を備えた「前衛」^{アヴァンギャルド}だったのである。

ところで、当然のことではあるが、江原鉄平が「私は満洲第二世のすべての人に故郷喪失の事実を強ひやうとは思はない。満洲を故郷として愛してゐるといふ友もある。また内地の生れ故郷を少しも懐しいと思はない人もある」（満洲文学と満洲生れのこと）と述べたように、満鉄の満洲郷土化運動や、「満洲国」の「建国文学」としての「満洲文学」の創造に情熱を燃やした満洲在住日本人二世も多かった。「内地」で展開した「故郷喪失」の問題系は、失われた故郷を求めて「古代日本」の回復へ傾倒し、「文芸復興」の潮流を形成した。だが、「満洲文学」を創造することは、満洲に独自の日本人の故郷を建設し、同時に失われるべき故郷を希求する欲望自体をも作り出さなければならな

かった。その困難な営みはどのように展開したのだろうか。

四 満洲郷土化運動と〈満洲歳時記〉

城小確は「満洲国の建国精神を文学に受け入れなければならぬ。（中略）我々の墳墓の地となるべき、我々の子孫に残して行くべきこの満洲国をよりよき理想郷を建設しなければならぬのである。郷土愛、つまり郷土愛そのものが五族を同一方向に転ずる唯一の道である」（「満洲文学の精神」と述べた。日本の郷土研究は、地方の風俗文化を調査することで、国民国家の始源^{ルーツ}の姿を発見しようとしたが、「満洲国」では、「五族を同一方向に転ずる唯一の道」として「郷土」が模索された。当然、その関心は諸民族⁽¹⁰⁾の風俗文化に分け入っていくことになる。満鉄の満洲郷土化運動は「吾等の生活様式の参考に資すべく満洲土俗の研究資料を蒐めたる各地の土俗博物館と総合研究所」（「満洲を『住みよきところ』に」の設立を目標のひとつに掲げ、各地の風俗文化の調査を行っている。

広範囲にわたる調査と蒐集の前提となつたのは鉄道網の拡大である。すでに一九三三年に「満洲国国有鉄道経営及び建設委託契約」、一九三五年に「北鉄譲渡協定」が締結され、新京以北の北滿鉄路と国有鉄道の経営が満鉄に委託されていた。満鉄の郷土化運動の文化面を担ったのは、旅客課や弘報課に勤めた文化人や芸術家だった。彼らは各地の風俗文化の調査成果を、

社員会の機関誌だけではなく、観光案内や旅行雑誌に発表した。これらの雑誌は満洲に暮らす日本人を、鉄道を利用した旅行や行楽に誘い、土地の歴史や風俗文化への関心を高めるメディアでもあった。

例えば、「奉天」（現・瀋陽）の満鉄鉄道総局旅客課に設置されていた満洲観光聯盟の機関誌『満洲観光聯盟報』には、満鉄沿線各地の風俗文化の調査をもとに、満洲の歴史・風物・年中行事などを、歳時記を模して発行時期に即して解説した、金丸精哉「満洲歳時記」（一九四一年一月～一九四二年一月）が連載されている。金丸精哉は満鉄の弘報課に勤めた俳人で『満洲グラフィ』の編集も手がけた。『満洲グラフィ』は、満洲郷土芸術協会を結成して『満洲短歌』を創刊した八木沼丈夫が、写真家の淵上白陽を招聘して編集にあたらせた。満鉄と「満洲国」のプロパガンダとして名高い同誌は、最先端の写真技術やタイポグラフィ、フォトモンタージュなどの技法を駆使して、「満洲国」の都市造成や鉄道新設の進展、満鉄沿線各地の名所や風物、諸民族の風俗文化などの写真を掲載した。キャプションには日本語と英語が併記され、対外宣伝誌としても意識されていた。⁽¹⁾

単行本にまとめられた金丸精哉『満洲雑暦』（満洲日日新聞社出版部、一九三九年）⁽¹²⁾や『満洲歳時記』（博文館、一九四三年）の装丁や装画を手がけた甲斐巳八郎は、やはり満鉄弘報課に勤め、一九三四年から『協和』に「郷土画譜」⁽¹³⁾を連載した画家だった。甲斐は郷土玩具収集家の須知善一や詩人の古川賢一郎らと

満洲郷土色研究会や、搬不倒集團⁽¹⁴⁾を結成して、民俗芸能の調査や展覧会なども行っている。これらの活動は、『協和』はもちろんのこと、『満洲グラフィ』でも取り上げられた。満鉄の郷土化運動は、社員の永住促進という枠組みを越えて、さまざまな芸術ジャンルを総動員しながら、「満洲国」の建国宣伝に合流していった。

このような潮流のなか、八木沼丈夫の『満洲短歌』や金丸精哉の『満洲歳時記』をはじめ、土地の季候や風物と密接に結びつく短歌や俳句が、満洲の郷土化により敏感に反応したのは当然のことではあった。『満洲文芸年鑑』第二輯に掲載された甲斐水棹による和歌の概説をみると、『満洲短歌』を含む主要な歌誌が、それぞれ満洲の風土に即した短歌を目指していたことがわかる。また、一九三八年の俳句の状況を概説した、金子麒麟草「満洲俳壇展望」（満洲文話会編『満洲文芸年鑑』第三輯、満洲文話会、一九三九年）では、「満洲の自然」「満洲の風物」「満洲の感銘」といった「満洲俳句の特殊性」⁽¹⁵⁾に「郷土味」を基準に俳句を分類し、「満洲の郷土に深き根底を有すると認められた各派の作品」として、とくに「郷土色豊かなもの」が選出されている。麒麟草の「満洲俳句」の指針は以下のとおりである。

- (1) 形式として広義の十七字音（定形律）を肯定する。
- (2) 内容としての自然感（中略）を欲求する。
- (3) 本質として宇宙自然の原理大道をさながらに実現し

てゐる日本肇国の精神に胚胎することを念願する。

- (4) 特殊性として前記三項を基調として満洲の人情、風俗、土地、氣候の眞実を表現することを理念とする。

金子麒麟草は「満洲の自然により影響せらるゝ感情」や「満洲の風物」を、「日本人の伝統的本然の精神」を盛り込む器としての「定形律」に流し込むことで、満洲に「郷土味」を付与しようとする。定形を固持することで「日本肇国の精神に胚胎する」ことを期した麒麟草の「満洲俳句」は、やはり文語定型という日本の伝統的な文学形式の枠組みに、満洲らしい素材を代入することで「母国の生命線」である満洲の文学を体現しようとした『満洲短歌』の試みと同一線上にあった。

そこでは、あくまでも「満洲の独自性」は日本を標準とする「特殊性」としてのみ処理され、日本の文学形式と満洲の風土との距離は問題視されなかった。表現が安定した形式に準拠して風土を取り込み、かつその表現によつて風土が喚起されるという幸福な円環が揺らぐことはなかったのである。例えば、表現と風土との対応関係をめぐる「満洲にゐても満洲特々の取材によつて色づけらるゝ外は日本歳時記の季感によつて詠ひ得らるゝもので何等満洲カラーを出すことも出来ぬ」（高山峻峰『俳句研究』一九三九年四月）という齟齬の解消を、金子麒麟草は「満洲出生の第二世の時に於て完成して戴ければいい」と断言する。だが、秋原勝二が「故郷喪失」において、「満洲のもののは眼

ではみても言葉ではない。内地のものはその逆で本に書いてあることだけは言葉でいへて、一体それがどんなものか、実物はサツパリ御存知ない。（中略）樹の名、魚の名、そして小さな周囲のいろへなものの名、自然の移り変はり、実物と名前がいつも頭の中でゴチャ／＼になる（それに日本語は、満洲の現実に、これまた必ずしも密着してゐない）」と述べたように、「第二世」にとつて、そこは風土と言葉の対応関係に亀裂が走る場所だった。金子麒麟草のいう「満洲の自然により影響せらるゝ感情」を表現に定着させるためには、まず「満洲の自然」に対応する文学形式と、「自然観」を喚起する主題の体系化が必要だった。

その試みの一端を金丸精哉の一連の仕事にみることができるだろう。金丸は「日本肇国の精神」に準じる「特殊性」ではなく、「満洲国」を自立した文化の郷土として発見し、再構成しようとする。その活動を貫いているのは、満洲の風土を体系化することで、新しい文化の基盤となる「満洲国」の「国土」を形象化しようとする欲望である。

金丸精哉『満洲雑暦』には、「満洲国祝祭日」「満洲国民間重要節日記念日表」と「思ひ出の歴史」と題された一年三六五日の年表が収録されている。また、『満洲歳時記』には、満洲の四季の分類を試みた「満洲の季について」や「奉天附近に於ける植物の開花期」、慶祝日や節気表などをまとめた「満洲国時憲書抄」が収録された。さらに、満洲各地二四箇所の観

測地別に、平均気温・最高極気温・最低極気温・降水量・降水日数・快晴日数・霜雪期節などの気象情報が示され、節氣に従って各地の日出入時刻及び方位表まで網羅された。上記の観測地は北緯・東経・標高がそれぞれ記されている。

気象観測には標準時に基づく同時観測が必要とされるが、これには「満洲国標準時」¹⁶が使用され、節氣下の日出入時刻は「国都」新京が標準とされた。観測地の配置と標準地・標準時の設定は、国都に収斂される統一的な時空間としての国土を構成する。観測記録に基づくことで客観性を装った国土表象は、『満洲歳時記』に収録された「普通穀類耕作順序」のような農事暦や、「慶祝日」「満洲国民間重要節日記日記念日表」といった曆象に連ねられることで体系化され、「満洲国」という新たな郷土のかたちに成形された。この膨大なデータが「満洲国」の文化の枠組みとして提供されていることは言うまでもない。

五 〈満洲歳時記〉の錯時性^{アノクロニ}

金丸精哉の目的は、測量と観測に基づいた国土認識の延長線上で、満洲の風土に即した風俗文化を、歳時記の形式を模して日本語で紹介し、満洲の風土と日本語・日本文学を結び付けることにあった。したがって、本文篇は、単なる事項の羅列に止まらず、日本との関わりにおいて満洲の歴史と風土が結び付けられ、満洲で暮らす日本人の感受性を刺激するよう企図されて

いる。例えば、満洲の年中行事「かまど祭」の記述から始まる『満洲雑暦』の二月の記述は、「日露開戦」「独立宣言」と続けられ、日露戦争や満洲事変の進展、「満洲国」の帝政移行があった二月という月を、「実に二月は、満洲にとつて、新生命を生み出す胎動の月とも言ふことができる。目のとどろかざり氷雪に蔽はれた大地も、裸身の木々も、やがてめぐり来る春のために精一ぱいの力を秘めながら、黙々と隠忍の日を送つてゐる姿は、この上もなく尊いと思ふ」と意味付ける。

金丸精哉は『満洲雑暦』の序文で「筆者が本書執筆の念願を起したのは、要するに歳時記に偶して満洲独自の詩源を季節の序に従つて開発し、一は以て満洲に対する世人の理解と親愛の情を深め、一は以て満洲を対象として詩歌俳諧を試みんとする風雅の士に詩材を提供せんとするに他ならない」と述べた。『満洲雑暦』は「あふれ出る詩魂」（北野堺「饒かな風物」『満洲日日新聞』一九四〇年一月一二日）、「诗情豊か」（村岡勇「新刊紹介」『満洲日日新聞』同一五日）と評されたが、その熱意は満洲の風土をめぐる多様な知識を詩材として集成するだけではなく、「満洲独自の詩源を季節の序に従つて開発」することに傾けられた。満洲の歴史を自然と関連させながら、日本語によつて诗情^{ポエジ}を喚起すること。それは、満洲の四季に接し、歴史を想起しながら、満洲在住の日本人が何を思うべきかを網羅した感受性の手引きでもあった。『満洲雑暦』の序文には次のようにも記される。

大正初年に大連の小学校・中学校で共に学んだわれわれの学友の中で、現在両親揃って健在なものは極めて少い。そして多くは満洲の現地で亡父の遺業を継ぎ或は親の勤めた会社で働いてゐる者もある。つまり、われわれは文字通り二世になつてゐるわけである。かうして見ると、満洲はもはやわれわれには切つても切れぬ郷土でなければならない。

しかし、この試みは明らかな混乱を呼び寄せることになつた。『満洲雑暦』に収録された年表は、一年三六五日を月別日付順に並べ、その日に起きた歴史的事件が記述されている。表の最上段が日にち、その下に年、出来事の順に構成されており、日が年よりも上位項目にあるために、年表の時間は直線的ではなく、場合によっては大幅に前後する。歳時記の原理は、線状に流れる時間を毎年反復する時間の中に収めることで歴史的な時間を解体し、循環する時間＝季節を創出することだが、『満洲雑暦』は偶然近しい日付を分有している出来事の相似性を必然性に転化することで季節を作り出し、そこに意味を与えようとする。

例えば、二月五日、満洲事変における関東軍の哈爾濱入城（一九三二年）、一〇日、日露開戦（一九〇四年）、一八日、東北行政委員会の成立（一九三二年）、二三日「満洲国」の年号決定（一九三四年）、二四日、旅順進撃（一九〇四年）といった出来事は、

一	昭和 二二	奉天―北京間直通列車を一日二回に増發、同時にスピードアップを實現
二	昭和 二二	滿鐵の遼東島築港計畫、大擴張と決定
三	昭和 九	滿洲國民生部では、保甲法遵守に關する訓令を發す
四	昭和 一〇	トルコタール極東民族大會、奉天に於て開催さる
五	昭和 七	多門中將の率ゐる第二師團、哈爾濱に入城す
六	昭和 五	國民政府は遼東島築港契約を認可
七	明治 二八	山崎、鐘崎、藤崎三烈士の遺骸、金州西門外で發見さる
八	昭和 八	滿洲國政府では、滿鐵に對する新線建設と國有線の委託經營方針を決定
九	昭和 二	滿洲輸入組合見本市の北支進出決定す
一〇	明治 三七	露國に對し宣戰詔勅下る
一一	明治 三七	露國水雷敷設艦エニセイ號、大連灣口で作業中爆沈す
一二	明治 三八	永沼拒捕騎兵隊、范家屯の新開河鐵橋を爆破す
一三	明治 四一	大連、遼陽間の廣軌改築工事成り、廣軌列車の試運転行はる
一四	昭和 四	關東州塔子溝に匪害取締のため出張中の安住大連法院長、匪彈に殉職
一五	大正 六	東支鐵道との交渉のため、哈爾濱に滿鐵公所設置さる
一六	明治 二八	皇軍、海城に逆襲の清兵を撃退す
一七	明治 四五	革命軍、鐵嶺に民國新政廳を開き、三日にして潰ゆ
一八	昭和 七	東北行政委員會の組織成立し、新國家三大使命に關する獨立宣言文發表
一九	昭和 八	滿鐵では奉天中學校（現奉天一中）設置の件を決定
二〇	昭和 七	滿洲建國の促進民衆運動、奉天を皮切りに各地に行る
二一	明治 三七	東清鐵道爆破の我が特別任務班新賓、沖一行十二名、北京を出發す
二二	明治 三八	我が鴨綠江軍、清河城に進撃、奉天大會戰の火蓋を切る
二三	昭和 九	滿洲新帝國、年號を康徳と決定、三月一日より實施を見る
二四	明治 三七	第一回旅順口閉塞決死隊、壯途に就く
二五	昭和 七	滿洲國の國號、元首、國旗、年號、首都を發表
二六	大正 五	奉天で耐寒飛行の我が陸軍機モ式十六號、大連より旅順間を飛ぶ
二七	昭和 七	三月一日より開業の滿洲中央銀行に關し、政府聲明を發す
二八	昭和 八	熱河方面に進撃の服部旅團、支那軍を撃破、沙桓山を占領

金丸精哉「思ひ出の歴史」（『満洲雑暦』満洲日日新聞社出版部、1939年）より2月の表を抜粋。

年代や歴史的文脈とは無関係に、連続する日付という共通点のみを基準に選択され、配列された出来事の相似性から「新生命を生みだす胎動の月」という二月の意味が抽出される。この奇妙な年表の目的は、直線的に進行する歴史的時間を、循環する季節に再構成して暦を創り出し、暦に対応した折々の詩情や感受性の基盤を、日本人の精神風土に定着させることであつたはずだ。

しかし、この暦からは出来事の因果関係を辿る歴史的時間も、毎年おとずれることで風土を固定し、感受性を強化する、安定した季節の循環も見出すことはできない。歴史的秩序にしたがつて線上に進む時間は進行（退行）と同時に絶えず解体され、過去に引き戻され、あるいは未来へ飛躍する。しかも、一回的な出来事の偶然的な抽出を基準とするため、ここで演出された循環する時間を再現することはできない。この年表では過去・現在・未来を錯綜する時間として示すという混乱があり、作り手の意図しない時間の乱調が起こっているのだ。この暦によって導き出される時空間は、日本でないのもちろんだが、「満洲国」でもなかった。

一九四〇年二月一日、『協和』は「満洲定着特輯」を組んだ。巻頭言「我等満洲に永住せむ」には次のようにある。

嘗て後藤新平、児玉源太郎の二先達は、満洲に五十万人の日本人の移住を以て、大陸開発の礎となさんとせり。以来

春風秋雨、日本人の満洲永住を試みんとせば、内に老後の家計に苦しみ、出でては虎狼の如き緑林の秕政に却けられ終りぬ。また大連農事会社が関東州内に於ける移住を企てしも及ばず、更に又社員会が満洲郷土化運動を試みて続かざりしも、昨夏再び満鉄人の満洲永住を促さんとして拓殖運動の形となりて再現す、また機を得たりとせんか。

この巻頭言は日露戦争で総参謀長として指揮をとり、満鉄設立委員会の長を務めた児玉源太郎と、満鉄初代総裁の後藤新平の植民地経営から、満鉄社員会の郷土化運動、満鉄拓殖委員会の拓殖運動までをひとつらなりの発展の歴史として記述する。満洲を郷土化することで、日本の国土に再編成する植民地主義的な欲望の発露は、「満洲国建国」を分水嶺に、満洲を日本から自立した独自の故郷として意味付ける営みへ転回した。

満洲郷土化運動や「満洲文学」の創造といった試みは、いずれにしても、日本語・日本文学の枠組みを特権的に満洲の風土に適用したことに変わりはない。それは結局のところ、日本の文学形式に、満洲らしい素材を代入することで独自性を主張した、文学による風土の植民地的収奪に過ぎなかったのかもしれない。それは、日本語・日本文学、あるいは日本人に連繋のない風土、つまり異郷に故郷を作りだす運動だった。金丸精哉の文学的営為もまた、満洲に独自の風土を発見し、季節の循環として安定させることで、その歴史の強化に寄与する試みだった。

た。だが、金丸精哉の年表は、偶然性から選択された断片が恣意的にコラージュされたものとして提示される。むしろそこでは出来事の因果関係によつて線上に推移する歴史的時間は解体の危機に瀕している。

近年、「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」について、「当時大連市で発行されていた文芸同人誌『作文』と、新京創刊の『満洲浪漫』が対比され「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」として比較されるようになった」（守屋貴嗣『満洲詩生成伝』）と指摘される一方で、「明確な思潮を表徴するに至つていたとは思えない」（葉山英之『満洲文学論 断章』三交社、二〇一一年）というように、明確なイデオロギーの差異や、人脈上の対立は認められないとも言われてきた。また、「現実生活に密着した、あるいはみずからの感性に忠実な文学を追求する姿勢」を「大連イデオロギー」と措定し、新京の「政治主義」に対抗する「文学主義」と捉える見解も示されている（岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』研文出版、二〇〇〇年）。

「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」は、「満洲国建国」後の地政学的文脈において顕在化し、満洲在住日本人二世の「故郷喪失」の問題が浮上すると、喪失を積極的な条件とするアヴァンギャルドと、故郷を創造しようとする「満洲文学」の対立として再演された。しかし、それは単なる文芸思潮の対立ではなく、政治的な文脈が交差する問題系でもあった。『満洲雑暦』や『満洲歳時記』などの金丸精哉の仕事は、新京を国

都とする「満洲国」に日本人・日本語・日本文学の新しい郷土・故郷を作り出す「満洲文学」の延長線上でなされた。だが、その意図に反して、満洲の風土と日本文学を架橋することの不可能性と、満洲を日本人の故郷に変える営みの前衛性は、〈満洲歳時記〉にも構造化されていたのである。

注

(1) 八木沼丈夫と満洲郷土化運動の関わりについては、拙稿「満洲郷土化運動と〈日本文学〉——短歌・俳句・歳時記——」（『東洋通信』二〇一三年十二月）に詳しく述べた。

(2) 守屋貴嗣は、『亞』の創刊同人で終刊後に『満洲短歌』に参加した城所英一と富田充が、文語定型の短歌を志向したことについて、「中央中心主義による内地に対するコンプレックス、西欧至上主義に対する反発、植民地主義による「満洲」に対する日本人としての優位性、「日本の生命線」たる満洲居住者であることの優越感といった、満洲在住者の様々に屈折した心性があった」（『満洲詩生成伝』翰林書房、二〇一二年）と指摘している。

(3) 『亞』以降の満洲における日本語詩の展開については、拙稿「まなざしの地政学——大連のシュルレアリスムと満洲アヴァンギャルド芸術家クラブ——」（『アジア遊学』二〇一三年八月）に詳しく述べた。

(4) 「福祉増進と満洲郷土化運動」（『協和』一九三三年一〇月一日）には次のようにある。「磐石の安定を見たる満洲国は吾等にとつても亦楽土に相違ない。吾等は安んじて満洲に根を下すべきである。定住せんがためには満洲を郷土化するの要がある。所謂生命線を実質的に表現すべく、此地に生命を託すべく努力邁進すべき

である。

- (5) 「満洲郷土化に満鉄社員会の運動」(『満洲日日新聞』一九三七年二月二五日)は、「満鉄社員会では昨年末評議委員会で社員及びその子弟を第二の故郷たる満洲に永住せしめる具体案を樹立することになり調査部によつて研究中であつたがこの程具体案が出来上つたので近く正式に役員会に上程して承認を得た上、満洲在住者の郷土化運動と銘打つて積極的に乗出すことになつた」と報じている。詳しい経緯は「満洲郷土化運動と(日本文学)」(前掲)に述べた。

- (6) 西村将洋「満洲文学」からアヴァンギャルドへ―「満洲」在住の日本人と言語表現」(『外地』日本語文学論)世界思想社、二〇〇七年)は、一九三七年に「満洲文学」に関する議論が活発化する過程で「内地」との上下関係を切断しようとする、ポスト植民地の意識」が強調されたことを指摘している。

- (7) 日本と満洲における「故郷喪失」の問題については、拙稿「満洲」における故郷喪失―秋原勝二「夜の話」(『日本文学文化』二〇一一年二月)および「まなざしの地政学」(前掲)に詳しく述べた。

- (8) 西村将洋「満洲文学」からアヴァンギャルドへ(前掲)は、秋原勝二「夜の話」における差延機能を「満洲」在住の日本人の表象」として分析し、「満洲文学」論は台頭と同時に骨格を脱臼していたと指摘している。また、江原鉄平の「満洲文学と満洲生れのこと」を取り上げ、「満洲文学」は在満邦人の感情を排除することでは成立しない、その点を無視する以上、「満洲文学」(中略)は、必然的に権威的な日本人による「帝国主義文学」や「植民地文学」にならざるをえないと断言したのである」と述べた。

- (9) 西原和海「満洲文学研究の問題点」(『昭和文学研究』一九九二年九月)も「内地作家の、いわゆる『開拓文学』は、満洲文学の

動向とはほとんど関わりを持つことがなかった」と指摘している。

- (10) 「満洲国」の民族構成は、「満洲国建国宣言」に記された「原有の漢族、満族、蒙族及び日本、朝鮮各族」の他、「満洲新国家には漢、満、蒙、日、鮮、露の六民族が居住することになる」(佐々木一雄『将来の満洲国』兵林館、一九三二年)というように、ロシア革命後に満洲に亡命した白系ロシア人をはじめ、ツングース系、モンゴル系の先住少数民族が加えられた。

- (11) 竹葉文「異郷のモダニズム―満洲グラフ」と写真画集『光る丘』(『彷彿月刊』一九九四年六月)、長野重一・飯沢耕太郎・木下直之編『淵上白陽と満洲写真作家協会』(岩波書店、一九九八年一〇月)によれば、八木沼丈夫と淵上白陽は「満洲国建国」に際して、新政府の官吏として資政局弘法処に所属し、建国宣伝に従事した。西原和海「満洲における弘報メディア―満鉄弘報課と満洲グラフのことなど」(『國文學』二〇〇六年五月)によると、このとき金丸精哉も参加している。

- (12) 『満洲日日新聞』夕刊の学芸欄に、一九三九年一月から九月にかけて毎月三回ずつ連載された「満洲雑暦」に、一〇月から一月份が書き下ろしで加えられた。

- (13) 図録『甲斐巳八郎展』(福岡市美術館、一九八二年)では「満洲郷土画譜」の連載は一九三三年からとされており、『協和』誌上に同趣旨の記事が確認できるが、目次上に「郷土画譜」(満洲郷土画譜)と記されたのは、一九三四年二月一五日発行号以降であるため、本稿ではこれに従った。

- (14) 会員は赤羽末吉・古川賢一郎・福富壽生・市丸久・甲斐巳八郎・国井真・中島荒登・須知善一・内田俊治・山越音(須知善一編『苦力素描』満洲郷土色研究会、一九三七年)。

- (15) 搬不倒は日本の起き上がり小法師に似た粘土製の人形。コレクターの須知善一を筆頭に、満洲郷土色研究会のメンバーは『満洲

土俗人形』(満洲郷土色研究会、一九四〇年)に調査研究の成果をまとめている。

(16) 貴志俊彦『満洲国のビジュアル・メディア―ポスター・絵はがき・切手』(吉川弘文館、二〇一〇年)によれば、一九三七年「一徳一心」をスローガンとする日満一体化の名の下に、日本と「満洲国」の一時時間の時差が解消され、同一の標準時が適用されることとなった。これを機に「満洲国」の鉄道・船舶・航空機のダイヤが全面改正されている。

付記

本稿は二〇一三年輔仁大学日本語文学科国際シンポジウム「文化における異郷」(二〇一三年一月一六日、台北)での口頭発表をもとに執筆したものである。会場内外で貴重な意見を賜ったことを記して感謝申し上げたい。なお、本稿は平成二五年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

特集●占領と開拓の〈記憶〉

プロレタリア文学の中の植民地主義

伊藤永之介「万宝山」を読む

鳥木圭太

はじめに

伊藤永之介「万宝山」は『改造』一九三一年一〇月号に掲載された。この小説に描かれているのは、同年七月一日に中国吉林省で起こった朝鮮人農民の開墾をめぐる中国人農民との武力衝突事件（万宝山事件）である。

事件の発端は、一九三一年四月一六日、中国人ブローカー郝永徳（長農稻田公司支配人）が万宝山附近の土地三〇〇ヘクタールを、中国人地主二人より一〇年契約で借り上げ、これを直ちに九人の朝鮮人農民に転貸したことにある。¹⁾

土地を借り受けた九人の朝鮮人は間島の頭道溝に居住しており、彼らは周辺に居住していた朝鮮人農民約二〇〇人を集めて、伊通河の近く馬家哨口から水路を掘り始めた。²⁾

五月末に入り、郝の口頭での許可のもと、水路の建設が始め

られるが、附近の中国人農民らは工事の中止を求め長春県当局に訴え出た。この請願を受けて県公安局は数度にわたり局員を派遣し、工事停止を命じたが、朝鮮人農民側はこれに応じなかったため、五月三一日には長春県当局が二〇〇人の保安隊を派遣し、九人の朝鮮人代表を逮捕、水路からの退去を命じた。これに対し長春の田代領事は逮捕者の即時釈放を求め、六月二日には領事館警察官五名を派遣し、工事を続行させた。公安局側も翌日一〇〇人の武装騎馬警官と三〇人の徒歩警官を派遣し、日本側も急遽警官を増派したため、問題は農民間の争いから日中官憲同士の対立へとエスカレートしていった。双方の交渉は平行線をたどり、日本側は一二日警察官を再度派遣し、その保護下に工事を続行した。同二六日には水路はほとんど完成し、伊通河の堰止め工事に着手した。これに対し中国農民側は七月一日、附近の数十村の農民五〇〇人あまりを集め、水路埋め立てを強行した。田代領事はすぐさま警察官九名を現地に派遣し、

水路を挟んで中国人農民と向かい合った。その際、双方から発砲があったことを受け、日本側はさらに四〇人の武装警官を増派し、中国側も三〇〇人の警察官を現地に急行させた。にらみ合いが続いたまま事態は両国間の交渉に移ったが、日本側は圧倒的な武力を背景に工事を強行し、水路を完成させた。

この衝突による死者は出なかったものの、『朝鮮日報』『京城日報』による扇情的報道の結果、朝鮮国内における中国人排斥事件へと発展し、多数の死傷者を出すこととなった⁽³⁾。

伊藤永之介「万宝山」はこの事件を題材に、故郷を追われ満洲に流れてきた趙判世(チョパンセ)・裴貞花(ベチョンハ)夫婦を主人公として、日本と中国の領土をめぐる対立の狭間で辛酸をなめる朝鮮人貧農の姿を描き出した。作品末尾に「一九三二、七、二五」とあるように、事件発生から一ヶ月という驚くべき早さで執筆された本作は、当然のことながら事件の顛末を完全には反映できず、「万宝山事件は形としては中国東北地方での朝鮮農民の生存権を日本の警察が守るようにして展開していった。それが伊藤の「万宝山」の中では、日本警察が傍観者的な態度を取って、中国側と日本、朝鮮側の力関係が事実とは逆転してしまう」と任秀彬が指摘しているように⁽⁴⁾、情報の不備、あるいは検閲を意識したと思われる箇所が見受けられる。

しかし、わずかな事件報道を頼りに作者の想像力を駆使し、ある意味では強引な解釈によって書かれたともいえる本作は、

当時朝鮮人農民の置かれていた苦難を主題として前面化しつつ、その背景に日本側の朝鮮人農民の利用政策があることを告発することでプロレタリア文学の面目を保った作品ともなっている。本稿は、この植民地主義の問題を描いた伊藤永之介「万宝山」を手がかりに、プロレタリア文学運動の中に生起した開拓と占領の記憶を手繰り寄せる試みである。

一 開拓の記憶

趙判世と裴貞花、五歳の長男大秀(テス)は、「朝鮮の故郷を追ひ出され、満洲での永い放浪生活」の末に、万宝山へとたどり着く。そこでは開墾した水田に水を引くための水路掘削作業が行われ、趙も多くの同胞たちと共に作業に従事することになる。趙たちは、中国人警官と、彼らと結託した中国人地主、商人たちから「県指定の」農具を購入することを強要されたり、家計のたしに「夜業」をして拵えた「柳斗子」(リュートウツ)柳で編んだ種籠)までも取りあげられるなど、圧迫を受けながら日々を送っている。

「何だ、そりや、柳斗子ぢやないか」

黒い顔に菊面のある巡警は前に屈んで、趙が出した柳斗子を鉄棒に引っかけて、グイと引ツ張った。

「こつちへ出せ、お前は許可を受けてるのか、指定のもの

以外勝手に売り廻はることはならん」

狡そうな眼の支那人は、猫のやうに素早く、二つの柳斗子をひつた。『万宝山』¹⁾

このように小説「万宝山」は万宝山事件における朝鮮人農民たちを抑圧する具体的な存在として、中国人地主や官憲の姿を前景化しているが、これは実際に当時の国民党政府が朝鮮人移民を圧迫していたという事実に基づいている。

中国東北部における朝鮮人移民は、一九三〇年末には六〇万人に達していた。その六割が東部の間島地方に集中し、多くが小作農兼雇農として厳しい生活を強いられていた。これは、日韓併合以後の「土地調査事業」「林業調査事業」における申告制度や、会社令を名目とした日本資本による土地収奪により、農民の離村現象が促進され、多くの朝鮮人が移住、開墾に従事していたことによる。こうした背景のもと、間島地方は日本・朝鮮・中国・ソ連各国の利害が複雑に絡み合う地域として、朝鮮独立運動の拠点、民族運動、共産主義運動の拠点として推移していくことになる。日本は「北満物資の開発・輸送と満蒙進出の立脚地」(東亜経済調査局『間島問題の経緯』一九三一・六)として、間島地方を梃子に満洲進出を期することとしていたが、そのために推進されたのが、中国の間島領有権確立と引き替えに朝鮮人の間島における土地商租権を保障する間島協約を拡大解釈した朝鮮人移民の利用であった。

これは端的に言えば、日本国籍(平島籍)を有する朝鮮人移民に、中国国籍を取得させ、中国の土地を買収させようとするものであった。さらに、治外法権を口実に朝鮮人に警察権を行使するため、朝鮮総督府は朝鮮人の「日本国籍」離脱を認めなかった。国民党政府はこれに対抗するため、同様に朝鮮人に中国国籍を与え、彼らに対し中国の主権を及ぼそうとした。緑川勝子は、国民党政府による朝鮮人の取締は、朝鮮人の二重国籍問題に端を発した警察権問題及び土地商租権をめぐる日本との攻防であったことを指摘し、国民党政府は「朝鮮の独立の問題と自己の主権回復との有機的関連性を認識し、それを自己の運動内部に於て展開させることができなかった。この為、東北の朝鮮人を日帝の「尖兵」としてしか評価し得ず、その結果単純な民族排外運動に流れていった」と批判している。⁵⁾

こうした日中双方による二重国籍政策の推進の結果、間島地方における中国と日本の主権争いは、朝鮮人農民の身体をめぐる警察権の攻防として表面化していくことになるのだ。

小説「万宝山」は、こうした朝鮮人農民の身体をめぐる日中双方の警察権争いを浮き彫りにしていくが、同時にここで明らかにすることは、朝鮮人農民たちに与えられた日本の保護は、彼らが「帝国臣民」であるが故に与えられる保護ではないということだ。それは端的に「満蒙権益」に対して与えられた保護であり、趙判世たちは、彼らの存在が「満蒙権益」と同義である場合においてのみ、「帝国臣民」たることを要請されてい

る。宗主国と被植民地民双方を結びつけるこの利害関係の一致点においてこそ、「帝国臣民」たる朝鮮人という幻想が立ち上がるのだ。しかし「万宝山」では、こうした幻想は遂に描かれることはなく、趙判世たちはその後も大日本帝国の臣民としてアイデンティファイされることは決していないだろう。このことは、再び流浪を余儀なくされる主人公たちの姿を描き出すラストシーンに最もよく現れている。

百人近くの女や子供たちは、ただ押し黙ってボソ／＼と歩いた。彼等は言はばかうして、故郷を追はれ、国境をさ迷ひ出で、涯しない満洲の広野をあてもなく歩いて来たのだ。またそれが始つた。(中略)

もう平原に出て居た。

群衆は涯てない闇にはの白く／＼と流れて行つた。

工事場の柳條^{リユーテャオ タンビン}に当兵が放つた火は、まだ東の空をボーと明るませてゐた。

霧に濡れた平原を、白衣の群れは長春^{チヤンチュン}の方へ何処迄でも揺れ動いて行つた。(「万宝山」7)

裴貞花たちは、水路の完成を見届けることなく、再びあてのない流浪を強いられることになる。

ところで、朝鮮を舞台にした小説『楮土に芽ぐむもの』(改造社 一九二二)や「不逞鮮人」『改造』一九二二・九)で知られ

るプロレタリア作家中西伊之助は、この時期こうした朝鮮人農民の迫害問題についても精力的に執筆している。『中央公論』一九三一年二月号に掲載されたルポルタージュ「惨たり！在満朝鮮同胞」は、柳条湖事件後の朝鮮人農民への報復的迫害の実情を詳しく報告している。ここでは難民化する朝鮮人農民たちの実情が描かれ、その後の裴貞花たちの行く末を暗示するような悲慘なエピソードの数々が紹介されている。

翌日、私はH氏に伴はれて、避難鮮人の泊つてゐる撫順附近の農家に行つてみた。

その家は、それでも二間の温突(ここは支那式の爐になつてゐた)を持つてゐた。が、一室は四畳半、一室は三畳くらゐのもので、その二間に三十人近くの男女や子供が溢れてゐた。何しろ撫順附近へは千人近くの避難民が押しかけてゐるのであるから、或はこのくらゐのことは当然かも知れない。支那人に変装してゐるものが多かった。(「惨たり！在満朝鮮同胞」)

朝鮮における対日抵抗運動からも抑圧される朝鮮人農民たち⁽⁶⁾は、中国国内における朝鮮人圧迫を受けて、避難民となりながら朝鮮国内に帰ることができず、広大な満洲の大地に離散していくことになったのだ。

二 「民族」の隠蔽

ところで、このように満洲における「朝鮮人同胞」の窮状を訴えつつ、日本の大陸政策の手口を暴露する意図を持った野心作「万宝山」は、当時どのように評価されたのだろうか。

「万宝山」の同時代評としてよく知られる宇野浩二「文学の眺望」『改造』一九三二・一二は、次のように本作を高く評価している。

この作に現れるのは朝鮮人の百姓の一家だけではない、彼等と共に生れ故郷にゐられなくなつてさ迷ふ民族の苦痛が現されてゐる。やつと逃れて来た土地から追ひ出されて、「霧に濡れた平原を、白衣の群は長春の方へ何処迄も揺れ動いて行つた。」といふのが最後の一節である。この白衣の群が荒涼たる満洲の自然と戦ひ、狡猾な支那人に迫害され、××な×××に圧迫され、時には砲火や銃声や兵隊の馬蹄の響きやに脅され、真に餓えと死の恐怖に襲はれつゝ生息（生活ではない）してゐる有様——かういふ生温い言葉でいひ尽くせない程、この作は近頃の私の読んだ小説の中で心を打たれた作の一つである。

ここで述べられているように、宇野は作中での朝鮮語の多用をはじめとする、朝鮮人農民たちの細かな日常の描写から、被

抑圧民族の運命そのものを読み取っている。任秀彬はそれを可能とした条件として、次に引用する伊藤の自叙伝に描かれた朝鮮人同居者の存在を指摘している。⁷⁾

今にして思へば、なるほどなまじつかなところでジャーナリズムの流れに乗らうなどと試みない方がよかつたのであつたが、私は幾分不服な顔つきで、そのころ上京して来た弟と、植民地を描いた私の作品を読んで訪ねて来てゐるうちに失業して転げこんで来た朝鮮の李君とを加へた六人の家族を、わずかな編輯手当てだけでやつて行かなければならないといふ一寸言葉では言ひ様のないほどいひ貧乏な家を振り返りもせずに「文芸戦線」の編輯の仕事で駆け廻りつづけた。（中略）：困窮はいよいよ加はつて来るばかりであつたので、私は思ひ切つて一時一家離散の旨を宣言した。それで子供は女房の叔母のところにあづけ、女房は同じ店で働いてゐる同僚と店の近くに部屋を借り、家に残つた私は「万宝山」（改造）を書いたのであつた。（伊藤永之介「文学的自叙伝」浦西和彦編『伊藤永之介文学選集』和泉書院 一九九二 初出は『新潮』一九三九・一二）

また、任は当時伊藤の長屋のとなりの棟に中西伊之助が居住していたことを挙げ、『文芸戦線』同人のネットワークによりもたらされる、朝鮮についての豊富な情報を作品成立の根拠と

して挙げている。⁽⁸⁾ 中西の存在が作品の成立に及ぼした影響の有無についてはひとまず措くとしても、作品の背後には、読者としての朝鮮人との共同生活があったことは注目に値する。本作が万宝山事件を最も早い段階で文学作品として形象化し、被抑圧者として朝鮮人移民たちの姿を可視化したことは、宇野の言うように、一定の評価に値するだろう。

しかし一方で、この作品はプロレタリア文学の陣営からは厳しい批判にさらされることになる。たとえば宮本顕治は、「藤森成吉の「転換時代」・その他」(『東京日日新聞』朝刊一九三一・九・二五)の中で、本作を「万宝山事件の本質的契機をなす帝国主義的矛盾の鋭い対立は本質的な展望においては勿論描かれてゐない」と切り捨て、「産業労働時報八月」の「万宝山問題」を読んだ方が「問題の本質」をつかむことができる」と述べている。宮本の批判は、小説が事件の現象のみを取り上げ、その背後にある日中朝各国の力関係や搾取の実態といった、事件の本質を読者に明示していないとするものである。

ここで宮本が小説に對置している左翼系労働機関誌『産業労働時報』(一九三一・八)の該当記事を確認すると、「万宝山問題——満洲を中心とする戦争の切迫——」と題し、満洲における日本權益を、次のような経済学的観点から分析している。

以前長春附近の三姓堡に移住し来り、水田經營を営んで居た九人の朝鮮人農業資本家は、長春の北方約三里万宝山

の麓に可成り広大な平原が未開墾のまゝ残されてゐる事に着眼し、そのうちの最有力者李某は長春の鮮人救済協會——背後には日本領事館——から二千元の融通をうけ、今年二月に支那人ブローカーをして「長春稻田公司」といふ幽霊会社を設立させ、会社名義で同地方支那人地主十二名から約三千町歩の土地を借りうけた。この契約が成立する為には猶、県政府の認可をうけねばならなかつたのだが、日本帝国主義を背景に持つ朝鮮人資本家はそんな手続きなどは問題にしなかつた。彼等の計画は水田を作る事にあつたので何処からか水をひかねばならぬ。それには南方約十五支里伊通河から導くのが最も便利である。併しその土地は全部支那地主の私有地になつて居り、これを借りるとなればまた面倒である。この間の交渉に就て我々は正確に知る材料を持ち合せては居らぬが、恐らく充分の代償を提供する事なしに朝鮮人資本家共は力づくで開墾工事を開始したのであらう。兎も角苦力が極めて安い賃金で雇ひ入れられ工事は四月から始められて六月末には九分通り完成した。(傍線は引用者)

ここで注目すべきなのは、事件の首謀者が郝永徳から最初に土地を借り受けた九人の朝鮮人であるとされていること、さらに趙判世たちのような、作業に従事した朝鮮人小作農の存在が綺麗に消去されていることである。これにより、事件の構図は

朝鮮人地主と彼らに低賃金で雇われた苦力たちというように単純化されてしまっている。確かに、昭和恐慌期における朝鮮農業の実態についてみる時、一部朝鮮大地主による小作農の搾取があったことは従来の研究によっても明らかにされている⁹⁾。

しかし、このように事件の構造を地主（＝資本家）によって搾取される苦力（＝プロレタリア）という構図に還元することは、そもそもこの九人の朝鮮人地主たちがなぜ故郷を離れ満洲に土地を求めたかという根本的な問いをも封殺していく¹⁰⁾。

つまり、事件の構図が宮本顕治のいう「万宝山事件の本質的契機をなす帝国主義的矛盾の鋭い対立」に還元されることで、朝鮮人地主を資本家と見る認識が導きだされ、現実の襞——複雑に構成されていたであろう社会諸階級の階層構造は見失われていく。すなわち、「階級」問題が「民族」問題を隠蔽していくことになる。

三 植民地と農民文学

日本の大陸経営により引き起こされた民族問題に対して、これを階級問題とみなす認識は、どのような意識によってもたらされたのだろうか。次に、この問題をプロレタリア文学運動における農民文学との関わりから考えてみたい。

日本の満洲進出と時を同じくして、プロレタリア文学運動においては、農民文学が大きなテーマとして取りあげられること

になる。

一九三〇年十一月、ソ連のハリコフにおいて、国際革命作家同盟第二回大会（ハリコフ会議）が開催され、日本からは日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）の藤森成吉と、当時ベルリンに滞在していた勝本清一郎が代表として出席している。この会議において、「日本に於けるプロレタリア文学運動についての同志松山（引用者注、勝本）の報告に対する決議」が採択され、一九三二年二月号の機関誌『ナツプ』に掲載された。その三つ目に次のような決議がなされている。

国内に大きな農民層を持つ日本にあつては、農民文学に対するプロレタリアートの影響を深化する運動が一層注意される必要がある。日本プロレタリア作家同盟の内部に、農民文学研究会が特設されなければならぬ。しかし言ふまでもなく、それがあくまでもプロレタリアートのヘゲモニーの下に置かれなければならぬことは、勿論である。

これを受けて、作家同盟内でも直ちに農民文学研究会が設置され、研究会による単行本『農民の旗』が一九三一年一月に新潮社より刊行された。ここに収録された柴田和雄（蔵原惟人）「農民文学の正しき理解のために」は同年の『ナツプ』七月号に掲載されたものの再録であるが、蔵原はここで「現代日本の農村は、決して『農民』一派が考へてゐるやうに一色の農民か

ら成るものではなくて、地主や富農から貧農や農業労働者に到る様々の階級若しくは層に分割されて居り、そしてその各々の階級若しくは層は夫々異なつた欲求、夫々異なつた努力を代表してゐる」と述べ、農村の現状を資本家化しつつある地主と小作人の階級対立と捉える認識を提示している。

さらに、蔵原は農民と都市プロレタリアートとの関係について、次のように述べている。

農民の大部分は小所有者であり、小ブルジョアである。従つて彼等は、資本主義との決定的闘争に於て動揺する可能性を持つてゐる。そこで我々は彼等のこの動揺をもつと少くし、彼等の勤労的部分をして、ブルジョアの搾取者部分と対立せしめ、彼等の闘争をブルジョア民主主義的なものから社会主義的なものにまで高める為に、農民に対するプロレタリアートのヘゲモニーを、確保する必要がある。

したがって、プロレタリア文学者が農民文学を書くにあつては、次の点が喚起される。

この××的な貧農の欲求、このイデオロギーの上に立つた文学は（中略）まだそれ自身ではプロレタリア文学ではない。それをそう呼ぶことは、たゞ単に理論的のみにでなく、また政治的に誤謬である。何となればそれは農民文学に対

するプロレタリア文学の指導といふことを曖昧にするから。

こうした蔵原の農民文学の主張は、農民と都市プロレタリアートの階級的異質性を前提として、貧農（小作農）と自作農及び地主階級との階級対立に主眼を置くものであり、農民文学とは「革命的貧農」の文学であり、あくまでもプロレタリアートのヘゲモニーのもとに置かれなければならないという結論に到るのだ。

これに対し、伊藤永之介が所属していた労農芸術家連盟（労芸）でも、ハリコフ会議の決議をめぐり議論が交わされた。労芸所屬の評論家檜六郎は「文芸時評 農民作家の「用意」についての走り書」『文戦』一九三・一一の中で、「ハリコフ大会が、世界プロレタリア文学当面の日程として農民文学をとりあげたのは、絶対に正しい」としながら、次のように述べている。

私の立場は、むしろ、農民文学をいふところのプロレタリア文学と対立の関係にあるものではなく、反対に、農民文学は一般プロレタリア文学に内包されつゝも特殊的存在の必然性と必要性とを有するものと規定するにある。換言すれば、あくまでマルクス主義的世界観を出発点としながらも、その対象が『農民』ないしは『農業の生産関係』といふ特殊性によつて一定の制約を受けることを認めるも

のである。従つて、農民文学には、一定の特殊性が存在するが、窮極においては、それは、プロレタリア文学、ないしマルクス主義文学の一般的性質によつて、あくまで規定されなければならない。従つて、いかなるかたちにおいても、農民文学とプロレタリア文学とは対立はもちろんのこと、並立、並存のごとく同格視することは、意味をなさぬことと思ふ。

このように見てくると、ハリコフ会議決を受けて浮き彫りとなつた、ナルブと労芸それぞれの農民文学に対する認識の違いは、農民文学とプロレタリア文学の異質性については認めつつ、前者を後者に包摂するか否かという点に集約できるだろう。むしろ、ハリコフ会議以前は両者の違いは不明で、この議決を起点として農民文学に対する両者のスタンスがはっきりしてきたともいえる。逆に言えば、ナルブも労芸も、ともにこの問題を階級問題として認識するという点では共通していたのだ。ナルブの認識も労芸の認識も、ともにマルクス主義階級史観に基礎を置く以上、それは当然といえは当然の帰結である。しかしこうした認識が、そのまま植民地の問題に適用される際に、問題点が浮き彫りとなるのである。

では「万宝山」を描いた伊藤永之介は、この農民文学問題についてどのように向かい合つたのだろうか。伊藤は「農民文学のために」『文戦』一九三・七の中で次のように述べる。

然らば貧農を取り扱ふことの意義は何処にあるか？それは単に貧農が酷い搾取と圧迫のもとに喘いでゐるからではない。それはブルジョアジーとの決定的対立に於けるプロレタリアートとの同盟の本隊であるからである。したがつて、貧農の中に発展しつつあるプロレタリア性、革命性を明確にとらえるところに、貧農を文学の舞台に登場させる意義がある。

ここにも農村問題を階級問題としてとらえるという観点があらのは明らかであるが、しかし伊藤は、

極左文学の論者たちが、プロレタリアのヘゲモニーの問題を注入的にしか理解しなかつたのに対して、青野氏が農民のなかに生起し発展しつつあるプロレタリア性に、即ち内部から発展するものと外部からの意識性との結びつき、その弁証法的統一に、問題の具体的な基礎を置いたことは、問題の確立のための確固たる指針である。

と述べて、プロレタリアートのヘゲモニーにもとづく農民への指導を否定し、両者の意識の弁証法的・発展的なあり方を主張する。堀江信男は、この時期の伊藤のこうした考え方について、「貧農をとりあつかいながら、むしろ「他の農民層に対する貧

農の革命的優位性」というプロレタリア文学運動理論から解き放たれたところ」に、この後の「鳥類物」と呼ばれる農民小説の成功が生まれたと評価している。⁽¹⁾

ところで、このような農民文学の前景化が、伊藤の創作活動に与えた具体的影響の一つとして、「万宝山」単行本収録時における固有名詞の消失が挙げられるだろう。この点について、任秀彬は次のように指摘している。

「今の言葉でいへば報告文学といっても差し支えないやうなものであるが、自分では決してさう言つたやうな実用だけのものに終わつてゐないと思つてゐる」と作者自身が述べているがその工夫のひとつが固有名詞の変容である。長秋―長春、井通河―伊通河、橋林省―吉林省、三世堡―三姓堡、三荷屯―三家屯、峰天―奉天、間島―関東のように、日本語で訓読みした時に同じ漢字を使って（長秋―長春を除く）、虚構の舞台を作ろうとしたのである。（『満洲』・万宝山事件（一九三二年）と中国、日本、韓国文学―李輝英・伊藤永之介・李泰俊・張赫宙―前出）

また、佐賀郁朗も本文の異同について次のように指摘している。

日中戦争が激化した昭和十四年に刊行された新潮社版

『鴉』に収録された「万宝山」では、発禁処分を免れるためであろうが、原文の満洲と万宝山をすべて消したり、この地方、その地などとり替え、長春を長秋に、奉天を峰天とごまかしている。しかも、引用した部分は原文を書き改め、伏せ字をなくして次のように半分たらずに短縮されている。（『受難の昭和農民文学―伊藤永之介と丸山義二、和田伝』日本経済評論社 二〇〇三）

ここで佐賀が指摘する、初出から単行本収録時の異同部分は以下の通りである。

――鮮農の背後には××（日本）がある、支那に帰化した鮮農の名義で×××（日本人）が田地を買入れた。満蒙百数十万の鮮農を手先として、××（日本）は次第に膨大な土地を自分の手に入れるだらう。

が××（黒帽子）は××（鮮農）がどんな××（圧迫）を受けても知らぬ顔をしてゐる。当兵が××（鮮農）を殴つたり蹴つたりすれば、××（日本）はその最も恐れる××××××××（共産主義者を駆逐）出来る。だから支那も××（日本）が喜ぶやうに共産主義取締の名義で、××（鮮農）を荒野にたゞき出し、ブタ箱にプチ込むのだ。（『万宝山』初出 伏せ字は『日本プロレタリア文学集10「文芸戦線」作家集（二）』新日本出版社 一九八五 所収本文により引用者が補った）

その結果は鮮農はどこへまで行つても追ひたてられた。地主に故郷を追はれて国境を越えて来た彼等は、こゝでは当兵の銃で追ひまくられた。落ちつく先々にそれは執拗く追ひかけて来た。「万宝山」「鴉」収録本文

こうした語句の改編により、「万宝山」は農民文学の一つとして『昭和名作選集18 鴉』（新潮社 一九三九）に収録されることとなる。それはいわば植民地文学の農民文学への改編でもあったといえるだろう。「万宝山」執筆当時の心境について、伊藤自身は次のように述べている。

イドしていくことになる。この文章につづいて、伊藤は次のように述べている。

満洲事変の起つた昭和六年から翌年にかけて書いた「春遠し」「非常時」「採草地」「熊」などが、いづれも凶作を扱つてゐるのは、今にして考へれば、その年の東北地方の凶作がいかに作家としての自分に強く作用したかを物語るものであつた。これは近頃の私の鳥類物の素地を為してゐるものであるが、この凶作から私は本当の意味で絶えず農村に注意を向けるやうになつた。（『文学的自叙伝』同前）

先の「万宝山」本文の異同と併せて考えると、ここには植民地問題から国内農村の問題へと作者の意識をスライドさせていく認識が作動していたことが見てとれる。その移行はプロレタリア文学運動における、農民文学をめぐる言説によつてもたらされたことは先に見てきた通りである。しかし、そのこと自体は実はそれほど不自然なことではない。なぜなら、日本の近代化過程において、農村が都市による搾取と寡奪にさらされてきたことを考えるならば、東北は紛れもなく国内における植民地であつたからだ。

西川長夫は国内植民地主義と国外植民地主義の差異について次のように述べている。

伊藤のこの「関心」は、満洲事変以降、日本の農村へとスラ

ただ国内植民地という言葉が発せられたと勝手に予測されたはずの一つのことについてだけ記しておこう。それは、国外にあるいわゆる植民地を対象とした植民地主義と国内植民地主義とは本質的に異なるものであるのか、という問いである。その答えは、国家的な、したがってナショナリズムの観点に立てば「然り（異なる）」であろうが、被害者である住民の立場に立てばどうかだろうか。あるいは問いを変えて、自国の軍隊による虐殺と他国の軍隊による虐殺とは本質的に異なるものであろうか。その答えはすでに出ていていると思う。あるいは民族資本による搾取と他国の資本による搾取とは本質的に異なるものであろうか。『〈新〉植民地主義論——グローバル化時代の植民地主義を問う』

平凡社 二〇〇六)

西川のこの問いを手がかりにするならば、農村の窮乏問題と、満洲における朝鮮人農民の苦難とを並行的に思考すること自体の意味は極めて大きいといわねばならない。「万宝山」に描かれた趙判世たちの苦難を、東北の農民たちのそれと重ね合わせることで初めて明らかにされる植民地主義の問題は確かにあるはずだからだ。

しかし問題は、プロレタリア文学運動における農民文学という問題項が、両者の相似性を浮き彫りにするような言説機構であったかどうかにあるだろう。むしろそれは一方が一方を隠蔽

する役割を果たさなかっただろうか。そしてこうした観点に立てば、プロレタリア文学運動における農民をいかに獲得するかという命題には、東北を国内植民地として捉える視点があったのか、あったのだとしても、それは国外（満洲）における開拓移民政策へとスライドしていく危険性を孕むものではなかったかという疑問点が常につきまとう。

たとえば、満洲権益は国内における農村の窮乏と密接にかかわり、昭和恐慌下における救農政策としての側面を持っていたことは、すでにこれまでの研究によっても指摘されている。¹²⁾

満洲進出論が具体的な国策と結びついた背景には、昭和恐慌による増税・農産物価格の暴落、物価高騰による農村恐慌が発生し、自作農家も小作農家も農業所得が激減したという事実がある。さらに一九三一年には東北地方を中心に冷害と大凶作が襲い、農村は大きく疲弊した。これらは東北地方を中心とする農家に深刻な打撃を与え、農村における人口過剰問題を浮き彫りにしていく。こうした国内農村窮乏問題は、関東軍による満洲支配を実効的なものとするために利用された。つまり、満洲国の成立によって、満洲国の関東軍と日本の満蒙植民論者との満洲農業移民に対する需要と供給が一致し、移民事業の発足につながっていくのである。

農民文学に対する伊藤永之介の関心も、そもそも出身地である東北農村の窮乏に端を発している。しかし、この伊藤の関心が、植民地文学を経て再び東北の農村を舞台とした農民文学へ

と帰っていくという事実をどのように考えればよいのだろうか。

李相瓊は朝鮮における「民族主義陣営」「社会主義陣営」それぞれ、排華事件に対する反応を整理し、前者が問題を一部の民族主義の表出と捉え、「知識人たちは、無知な民衆に「万宝山地域事件」を朝鮮民衆と中国農民の間で発生した民族問題ではなく、それが中国政府と日本政府の間の外交問題であると論すことが急務である」とし、問題の解決を朝鮮人農民の中国籍への「入籍」に求めたのに対し、後者は前者が「事態を階級的なものとして受け取らず、「満洲」における朝鮮農民が中国人地主に受ける抑圧を地主——小作人の問題として説明せず、中国人（満人）——朝鮮人（韓人）の問題として大衆に説明したことが排華事件を自ら招いた」と批判したことを指摘している。¹³

小説「万宝山」とそれをめぐる諸言説は、植民地文学から農民文学へとスライドする言説機構から見失われるものの一つに、こうした民族問題があることを浮き彫りにした。朝鮮の民族主義者たちがそうしたように、万宝山問題を中国と日本の外交問題としてのみ捉えていくと、そこに生起していたであろうさまざまな民族間の接触の痕跡は見失われていくことになる。作中に描かれた民族的多様性、すなわち、朝鮮人地主・小作農・日本人官憲・中国人農民・中国人官憲・苦力として描き出された人々相互の接触、そしてそこに飛び交っていたであろう複数の言語（日本語・朝鮮語・中国語）の存在を看取することこそが、

満洲における植民地近代を浮き彫りにしていくのだ。

しかし、同時にプロレタリア文学運動がそうしたように、問題を「階級問題」としてのみ捉えることも、実はこの隠蔽に加担していくことであったのだ。

四 苦力という身体

小説「万宝山」では、作品後半で趙判世の回想が挿入される。それは趙一家が移住先の奉天を追い立てられ、流浪の旅に出るシーンであり、長男の大秀はまだ裴貞花の胎内にいた。荷物を質に入れてようやく手にした貨物列車の切符で一家はあてもなく北へ向かう。その列車には鉄道工事へとむかう大勢の苦力達が乗り合わせていた。彼らと共に家畜運搬車両に押し込められた裴貞花は、そこで大秀を産み落とす。

豚の糞の臭ひに息詰まる彼等の貨車には、苦力が一杯に詰つてゐた。鉄道工事に行く四、五百人の苦力達の巻添へで、趙は有蓋車に投げ込まれた。

戸口から吹き入る風に、蒼ざめた顔を晒らして、肩で息してゐた女房が、突然ガクツと首を折つて、ウン／＼唸り出した。

殴りつけるやうな風で、フワ／＼裳の裾から、赤黒い肉塊がのぞいた。

趙は子供のようにあはてた。

苦力が馬の小便に濡れた藁を握み出して、肉塊をその上に置いた。

赤子は喚いて、ピン／＼手足を動かした。

『棄てちまへ、どうせ満足に育ちはしねエ』

『余計な世話だい、黙つてスツ込んでろ、小兔子め』

世話好きな苦力が怒鳴った。

趙はたゞ小さい肉塊を見入つてゐた。小指の尖ほどの鼻と口――

苦力たちは面白がつた。

『えゝ子だぞオ』

『女の子だなア、こりやめつけものだぞ』

『心配すんない、手前のもんぢやねえや』

貨車が大きく動揺する度に、赤子はコロ／＼と藁の上から馬の小便でヌラ／＼する床に転げた。

『今にそこいらにぶつかつてくたばツちまはア、抱きなヨ』

趙は長々と牛糞の粘り着いた床板に仰向けにふんぞり返つた。

そしてボロ屑に包んだ赤子を、自分の腹の上に安置した。臍のあたりに肉塊のぬくもりが伝つた。

それでも趙は、貨車の烈しい動揺と響音が、今にも小さい生命を爆発させてしまひさうな気がして、息が詰まりさうだつた。(『万宝山』6)

ここでは趙一家と苦力達の触れ合いが描かれているが、この場面とは対照的に、作品の前半では、苦力たちは趙判世たちとともに水路の掘削工事に従事し、中国官憲に追い立てられる存在として、いわば作品の後景としてしか描かれていない。

逃げるひまもなかった。バーツと飛沫のやうに逃げ散る苦力と百姓を蹴散らして、馬隊は疾風のやうに駆けぬけた。そしてまた戻つて来た。

野面で、汚れた白衣の百姓達が野鼠のやうに乱れた。悲鳴、叫び、呻めきがドドドツと地殻に轟く馬蹄にこんがらかつた。(『万宝山』2)

先の回想シーンで初めて苦力たちは言葉を持った存在として描かれる。しかし時系列で言えば、趙一家と苦力たちの交流は、工事が始まる以前のことであるのだから、結果としてこの小説は、そうした交流の失敗をも描き出している。だとすれば、まさにそのことが「万宝山」という作品を植民地小説の水準になぎ止めているといつてよいだろう。

ところで、万宝山事件に関する歴史資料の中で、この苦力の存在に言及したものはそれほど多くはない。管見の限り先に見た『産業労働時報』をはじめ、李輝英『万宝山』(注10参照)などに言及があるのみである。いわば、万宝山事件において、苦

力たちは不可視化された存在なのである。

南満洲鉄道株式会社経済調査会編『満洲の苦力』によれば、「苦力」という語は、タミル語を語源とする英語の「colly」あるいは「coolie」から来ているという。

今日吾々が謂ふ苦力とは満支人の不精鍊労働者の総称であり力に頼つて生活をなす社会群「受苦累の人」の意であるが、この苦力と云ふ言葉が何うして労働者の意に通ずるやうになつたかについては人に依り説を異する。(南満洲鉄道株式会社経済調査会編『満洲の苦力』南満洲鉄道株式会社

一九三三)

苦力は中国語における労働者を意味する「做工者」「力作者」「工人」「小工」などと区別され、東インド会社の对中国貿易において取引の対象とされた労働力及び無資本の労働移民を指す言葉であつた(『満洲の苦力』同前)。そもそもは乾隆年間(一七三六—一九五年)ごろに端を発する農地不足および「封建的土地所有關係の矛盾が農業經營の零細化を助長」したことによつて生み出された「自給できない小作農民、いいかえれば純然たる農業労働者」がその起源である。⁽¹⁴⁾

前出『満洲の苦力』に「満洲には鉄道港湾の荷役、土木建築の如き季節的に繁閑の伴ふ作業が多く、其間労働者の需給關係に著しき落差が生ずる、之を一例を以て示せば、鉄道荷役苦力

の如きである」と述べられているように、季節労働に従事する苦力たちは、仕事を求めて大陸を移動した。彼らは極めて低廉な賃金で雇用できたこと⁽¹⁵⁾から、満洲開發における重要な労働資源であり、趙判世たち朝鮮人農民たちに先だち、大陸を浮動する無資本の労働移民たちであつた。

彼らの移動手段は主に鉄道であつたが、「万宝山」にも描かれてるように、有蓋貨車に家畜とともに詰め込まれ、劣悪な条件で長時間の旅を強いられた。

此の苦力の為に發行する乗車割引券をば世人は特に四等票と呼で居る、露国時代鉄道經營の遺物である。余一日大連駅に此等苦力の実況を目撃したることあり、即ち有蓋貨車に一車につき七十人位を詰め込み煎餅布団を昆布巻きにせる彼等の集団は潮の押し寄せるが如くに貨車に集り来る、その光景は何とも形容のしようがない。(満蒙産業研究会編『満洲産業界より見たる支那の苦力』満洲経済時報社一九二〇)

夏目漱石が『満韓ところどころ』(春陽堂 一九一〇)において、「船が飯田河岸の様な石垣へ横にびたりと著くんだから海とは思へない、河岸の上には人が沢山並んでゐる。けれども其大部分は支那のクーリーで、一人見ても汚らしいが、二人寄ると猶見苦しい。斯う沢山塊まると更に不体裁である」と描写した

ように、近代日本文学における苦力とは不潔の象徴であり、労働の最底辺として表象されてきた。たとえば、改造社社長山本実彦は、外遊中に目にした苦力の衛生状態について次のように述べている。

また、彼等の衛生保険の状態はどうであらう。ちよつと考ふれば、彼等はいへん不衛生であるから、罹病者の数がとても多いだらうと想像されるがそれがまた案外で在宿舎一萬人にたいし一日の病人が五・八人と云ふ統計を示してをるのである。これでも彼等の健康といふものが、どれだけ頑強であるかが分明するであらう。(山本実彦『満・鮮』改造社 一九三二)

山本が、苦力たちが不衛生であるにも関わらず罹病率が少ないことを特筆するのは、彼らの頑強さが、朝鮮人労働者との間に賃金格差を生じさせるからだ。山本は、苦力を朝鮮人と比較し、「鮮人労働者は生活費が高く、体力において苦力に及ばぬものがあり、一ヶ月の労働日数も到底苦力に及ぶべくもないから、その対立抗争にはたいへんに骨の折れることである」(同前)と、その雇用にかかるコストの低さを評価する。

また、満蒙産業研究会編『満洲産業界より見たる支那の苦力』(前出)では、「苦力は病気の外は決して休むことはなし」とされ、その美点は「内地労働者を多数使役すれば少なくとも一、二割は

病気又は事故の為に休むのが普通である、然し苦力にはかかる恐れが至て少ない、勿論係累の少ない点もあるが、彼等は実に壮健無病である。吾々には到底飲めない濁つた水を平気で飲んで何の異状もない」と述べられている。しかしその一方でそうした彼らの「壮健」さは、「殆ど入浴しない」、「猫にも劣る」「非衛生的の生活」によつて裏付けられている。苦力が劣悪な環境に耐える労働力であることは、「非衛生」という言葉によつて表象されるのだ。すなわち、彼らの低賃金と、日本人の嫌悪感を誘発する彼らの「非衛生」は一体のものなのだ。

林淑美はプロレタリア作家里村欣三の小説「苦力頭の表情」『文芸戦線』一九二六・六を論じる中で、プロレタリア文学運動における「インターナショナルイズム」が、民族間における「(饅頭問題)」＝「異民族への嫌悪の項目、すなわち社会規範、所作身振り・食習慣を含む慣習行為、そして身体そのものなど、ふつう文化と呼ばれるもののずっと手前でその基盤をなすほぼすべての項目による異民族に対する差異化の欲望」を隠蔽し、「民族間相互に生ずる「賃金問題」を保持してきたことを批判している。林のいうように「民族文化の問題はまず(賃金問題)を通してあらわれた」のだとすれば、苦力達の「非衛生」の表象は、彼らの低賃金を温存する構造をもそのまま表象しているのである。⁽¹⁶⁾

「万宝山」作中でも苦力たちは家畜の排泄物にまみれた存在として描かれている。しかしその家畜同然の衛生環境におかれ

た苦力たちの中で、その「非衛生」と汚辱の中から大秀は生を受けるのだ。苦力たちとともに満洲を移動する中で、趙判世たちは身体的なレベルにおいて、苦力たち下層労働階級と同化していく。

こうした描写によって初めて、苦力たちの存在は物語の後景としてではなく、生身の身体を備えた存在として見出されていくといつてよいだろう。苦力たちは一つの労働階級として表象され、知覚可能な存在となるのだ。しかし、この苦力の存在を公式化された階級闘争の図式に当てはめていくことは、逆にこの階級の表象を隠蔽することとなっていく。現実の万宝山事件において、苦力たちの存在が朝鮮人農民たちと互換可能なものとして不可視化されていったように。

こうした階級意識が民族意識を克服していくという構図は、プロレタリア文学が農民文学を包摂し、指導下に置こうとした構図と相似形を為すものであるのは見てきたとおりだ。だとすれば、農民文学の側からプロレタリア文学に投げつけられた次のような批判、農民作家大田卯がプロレタリア文学に投げかけた批判を論じる内藤由直の次のような指摘は、まさにプロレタリア文学運動自体が孕む植民地主義の問題そのものをも浮き彫りにしているともいえるのだ。

マルクス主義に依拠したプロレタリア文学の担い手は労働者ではなく、それが目的とするのは権力奪取によって少

数前衛が支配階級として君臨することである。こうした運動主体と目的の錯誤ゆえに、マルクス主義は大衆化やヘゲモニーを必要とするのだ。大田にとつてこれらは、プロレタリア文学の存在意義自体を消失させる致命的な矛盾であつた。（内藤由直「第五階級の文学——大田卯の農民文学／プロレタリア文学論」『立命館文学』二〇〇九・一二）

内藤は、日本における農民文学運動が、当初はプロレタリア文学との対立を乗り越え、揚棄しようとするものであつたことを、大田卯ら農民文学者の言説から明らかにしている。しかし、プロレタリア文学運動はマルクス主義に基づく組織論をその運動原理として摂取していくことで中央集権化し、農民文学は社会主義思想をひろめるための一手段として周縁化されていった。その過程で両者の共同の模索もまた、見失われていったという。こうしたプロレタリア文学運動の農民文学に対する姿勢は、収奪する都市とされる農村という「主従関係」を固定化し、再生産していくものであつたと内藤は指摘している。すなわち、プロレタリア文学は当初から植民地主義をその運動原理に内包し、運動の実践において再生産するものであつたのだ。そしてその植民地主義は同時に、植民地における民族問題を捨象していくものでもあつたことは見てきた通りだ。

これに対し、伊藤永之介「万宝山」は、朝鮮人農民や苦力たちの具体的な身体描写から、この民族問題を浮き彫りにして

見せた。それは両者の間に横たわるわずかな差異を身体レベルで捉えるという作業でもある。

西川長夫は、植民地主義を考える際、そうした差異を生産していく機構を明らかにすることの必要性を次のように述べる。

（民族等の）差異は、今言ったこととは違う形で、資本と国家の本性から生まれるものであると考える必要があると思います。問題は、差異がどのようにして生産され、どのようにして統合され、共有されていくか、その点を見ていくことであると思います。（西川長夫『植民地主義の時代を生きて』平凡社 二〇一三）

西川の言葉を手がかりにするならば、東北の窮乏と朝鮮農民の窮乏、両者の類似性とともに、その差異もしっかりと見極められる必要性があったはずだ。その差異の中からこそ、両者とともに植民地主義の問題として捉えることができるのだ。

しかし、朝鮮人労働者と苦力たちとの交流が、まさに回想の中でしか語られ得なかったことに象徴的に現れているように、農民文学を語る作家の意識は、結果としてこの差異を隠蔽していくことに加担したとはいえないだろうか。堀江信男が評価するように、その後の伊藤の農民文学への傾倒が、プロレタリア文学が農民文学に対して行使しようとしたヘゲモニーからの解放によってなされていたのだとしても、〈満洲〉という複数の

差異を抱えた身体が息づくトポスは、少なくとも作家の意識からは見失われたように思う。

「万宝山」はプロレタリア文学と農民文学との狭間にあって引き裂かれた作品であり、この両者の断絶をつなぎ合わせることは、そこに生起するわずかな他者との接触の記憶を手繰り寄せ、その痕跡を浮き彫りにすることによって初めて可能となるのではないだろうか。

注

（１）この契約では、県政府の認可を必要としていたにもかかわらず、郝はこれを受けておらず、また、開墾にともなう用水路建設には契約に該当しない地主の土地も含まれていた。

（２）ここで集められた朝鮮人たちは、みな故郷の土地を追われた自作農、あるいは小作兼業の自作農であった。これに対し、最初に土地を借りた九人の朝鮮人らは、日本総領事館監督下の朝鮮人民会金融部から開墾費用の三千元の融資をうけ、水田の設計や種籾九〇石を南満洲鉄道株式会社に仰いだことから、日本官憲と密接な関係にあったとする説（菊池一隆「万宝山・朝鮮事件の実態と構造——日本植民地下、朝鮮民衆による華僑虐殺暴動をめぐる——」『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』二〇〇七・九）もある。

- (3) 万宝山事件の経緯については以下の資料を参照した。緑川勝子「万宝山事件及び朝鮮内排華事件についての一考察」『朝鮮史研究会論文集』一九六九・六。朴永錫『万宝山事件研究——日本帝国主義の大陸侵略政策の一環として——』(第一書房 一九八一)。長田彰文「万宝山事件」と国際関係——米国外交官などが見た「事件」の側面『上智史學』二〇〇七・一一。李相瓊「一九三一年の「排華事件」と韓国文学」『植民地文化研究』二〇一〇・七。
- (4) 『満洲・万宝山事件(一九三一年)と中国、日本、韓国文学——李輝英・伊藤永之介・李泰俊・張赫宙——』『東京大学中国語中国文学研究室紀要』二〇〇四・四。

- (5) 前出「万宝山事件及び朝鮮内排華事件についての一考察」

- (6) 「朝鮮革命軍は(中略)万宝山入植の一般的朝鮮人農民に対して客観的に彼等が果たした役割を日帝の中国東北への出兵の口実を与えるものであるとして糾弾し、即時万宝山から出て日帝と親日朝鮮人の手から脱するよう要求した。これは、彼らが「中国人との親善融和」によって在住朝鮮人の生活を保障し「朝鮮革命」の発展を期するという考え方から出てきている」(緑川勝子「万宝山事件及び朝鮮内排華事件についての一考察」前出)。

- (7) 前出「満洲・万宝山事件(一九三一年)と中国、日本、韓国文学——李輝英・伊藤永之介・李泰俊・張赫宙——」

- (8) 同前

- (9) たとえば、松本武祝『植民地権力と朝鮮農民』(社会評論社 一九九八)は、近代朝鮮における農村の状況について次のように述べる。

一九二〇年代から三〇年代前半にかけての朝鮮農業における最も基本的な特徴は、水稲生産量増加と農民の窮乏化とが楯の両面のごとく同時進行したことである、と筆者は考えている。

ところで、これまでの研究史における有益な成果のひとつとして、いわゆる「動態的地主」——すなわち、種子・肥料等生産手段や営農資金を小作農に前貸しし、かつ小作農経営の周到な管理を通じて水稲生産Ⅱ小作料増徴を実現した日本人と一部朝鮮人大地主——論を挙げることができる。そして、そうした大地主の対極に、高率小作料と高利貸的債務に喘ぐ大量の零細な小作農が堆積していったと把握されている。

- (10) こうした観点に立つて書かれた作品に中国人作家李輝英『万宝山』(上海 湖風書店 一九三三)がある。この作品は、伊藤永之介の「万宝山」に比べ、プロレタリア文学としての構図をより具現化しているように思われる。岡田英樹はこの作品についてつぎのように述べている。

「中・朝両民族の圧迫された民衆の連帯」というテーマを押し出すために、朝鮮人農民という事実を消して、水路工事を請け負った人夫頭と苦力の集団に置きかえた。したがって苦力たちは、水田の完成には直接的な利害関係はなく、水路を埋め戻す行動に躊躇なく結集できたのである。しかし現実には、土地を奪われ、耕作する水田を求めて移住してきた朝鮮人の農民たちである。一方は、自分たちの耕地に無断で水路を築かれ、水路の変更で生じるかもしれない洪水の恐怖に怯える中国の農民たちである。土地をめぐる農民たちの民族的対立は、双方とも死活問題につながる深刻なものであったはずだが、その側面がそっくり切り落とされ、階級的連帯に解消されてしまった。

岡田英樹「李輝英「万宝山」——事実と虚構の狭間」『立命館文學』二〇一一・二

- (11) 堀江によると伊藤の「鳥類物」に見られる特質とは、「農村におけるさまざまな人物の織りなす関係を通して、農村の生きて動い

ている姿を浮き彫りにする」「農民を個性としてよりも集団としてあつかう」「農村におけるさまざまな層の人々が密接に結びつき、からまりあつて存在するありようを、總体的にとらえる方向」にあるという（伊藤永之介論『解釈と鑑賞』一九八三・八）。

(12) 武田清子「加藤完治の農民教育思想——国民高等学校運動と満洲開拓団——」『国際基督教大学学報 I・A 教育研究』一九六五・三）など

(13) 「一九三二年の「排華事件」と韓国文学」前出

(14) 可児弘明『近代中国の苦力と「猪花」』（岩波書店 一九七九）

(15) 「日本人夫費を二〇〇に対する満洲人夫、即ち苦力の指数は三三・三となる」『満洲の苦力』前出

(16) 林淑美「インターナショナルイズム」は〈饅頭問題〉を超えられたか——日本プロレタリア文化運動のなかの朝鮮』（『昭和イデオロギー——思想としての文学』平凡社 二〇〇〇）

付記

引用文中における旧字は新字に改めた。

なお、本稿は、立命館大学生存学研究センター特別企画「帝国の盛衰と日本人の移動」（二〇一三年二月六日）における発表内容に加筆修正をしたものである。当日、会場から貴重なご批判を賜った。記して感謝申し上げたい。

迎合と抵抗の記憶

太宰治『惜別』と大東亜共栄圏

澤辺 真人

はじめに

一九四一年、日本が米英に宣戦布告し、太平洋戦争が勃発すると、日本は大東亜共栄圏の建設に着手した。大東亜共栄圏建設の理念は、欧米植民地としてのアジア諸国を解放し、団結することにあった。しかしそれは大義名分に過ぎず、その実態は盟主日本による事実上の植民地支配に等しかった。翌一九四二年には大東亜建設審議会が設置され、さらに翌一九四三年一月五日には大東亜共栄圏諸国の首脳を招請した大東亜会議が開かれるなど、大東亜共栄圏の建設は矢継ぎ早に進んでいった。大東亜会議にて大東亜共同宣言が採択されると、内閣情報局と日本文学報国会を通して、その五大原則を文学作品化する企画が持ち上がった。その企画の中で生まれた唯一の小説が、太宰治の『惜別』（朝日新聞社 一九四五年九月）である。⁽¹⁾

日本文学報国会によって、小説、詩、短歌、俳句、劇文、漢詩漢文の各部会幹事会が各々ひらかれたが、特に小説部会は活発であった。「大東亜各国民に皇国の伝統と理想を宣布し共同宣言の大精神を滲透」させることを目指し、十一月一日付発行『文学報国』で既に執筆候補者に久米正雄、火野葦平、菊池寛ほか諸氏が挙げられ、十一月五日、二四日、翌年一月三日と討議を重ねた。⁽²⁾そこに太宰治が名を連ねたのは、一月三日の協議会でのことであった。そこでは約五〇名の執筆希望者に対し小説の梗概並びに意図の提出を求め、同年末審査のうえで太宰を含む六名の作家が選ばれた。⁽³⁾正式に執筆依頼を承けた太宰は、小田嶽夫らの援助を受けつつ、また仙台での実地調査を経て、一九四四年末に『惜別』の稿を起こし、翌年二月に脱稿した。

以上の成立背景に明らかなように、『惜別』には太平洋戦争下における国策小説としての一面が色濃くある。そこに、「東

京八景」(『文学界』一九四一年一月)以来の太宰ファンを自称していた竹内好が嘔みついた。竹内は太宰の「戦争便乗の大勢に隻手よく反逆」する「芸術的抵抗の姿勢」に惹かれていたが、『惜別』を目にして「太宰治、汝もか、という気がして、私は一氣に太宰がきらいになった」という⁽⁴⁾。これに端を発し、赤木孝之は『惜別』を時局への「便乗、迎合」⁽⁵⁾と捉え、藤井省三は『惜別』を「戦争協力文学」と断じている⁽⁶⁾。

また併せて、『惜別』に描かれる「周さん」なる人物と、そのモデルとなった中国の文豪魯迅の相違点も、批判の槍玉に挙げられる。竹内は、特に日本留学時に「魯迅の受けた屈辱への共感が薄い」と指摘している⁽⁷⁾。この指摘に埋没する形で、先の国策小説としての一面はいわば前提となり充分に論じられずにいたきらいがある。総じて、魯迅研究の権威による酷評は当時から現代に至るまで根強く、その意味で『惜別』の評価は低迷の一途を辿っているといえるだろう。

先行研究における『惜別』批判の主な論拠は二点、一つは国策小説であること、いま一つは「周さん」と魯迅との相違である。しかし、後述するように、前者は戦時下の太宰文学に散見する抵抗の姿勢を、後者は同時期に太宰が古典やフォークロアのパロディ作品を多く執筆していたことを、それぞれ放棄している。それにもかかわらず、『惜別』が竹内諸論に規定された文脈のみに拠って論じられるようになって久しい。そこで本稿では、戦時下における太宰の姿勢と作風から『惜別』の国策小

説としての一面を問い直し、そこに眠る戦時下の記憶を喚起したい。

一 戦時下の太宰文学 ― 迎合と抵抗 ―

戦後、「十五年間」(『文化展望』一九四六年四月)にて「昭和十七年、昭和十八年、昭和十九年、昭和二十年、いやもう私たちにとつては、ひどい時代であつた」と回想されたように、戦火は無論のこと、紙そのものの不足、言論統制下という状況、様々な事情が重なり、多くの作家が筆を折った戦時下における太宰の仕事ぶりには舌を巻く。太宰は古典やフォークロアの優れたパロディ作品を多く世に送り出し続け、その名を高からしめた。単に著作数という意味でも群を抜くが、神谷忠孝は戦時下の文学の価値について次のように述べ、太宰の功績を称えている。

戦時下の文学を考えるとときの一視点ということについて私見を述べれば、文学的抵抗のかたちとして、筆を折る場合は除外すると、素材の中にいかにさりげなく抵抗の姿勢をこめたかというところで作品の価値が問われていいと思う。発禁すれすれのところで、読解力のある人なら了解するようなレトリックをいかに駆使するかはその作者の力量がうかがえるのである⁽⁸⁾。

戦後に、戦時下の自身を「情報局の注意人物」と自虐的に振り返ったように、太宰は度々作品の一部ないし全文を削除されていた。⁽⁹⁾一方で、内閣情報局の目をくぐり抜けた太宰の抵抗の証も多く残っており、神谷ほか多くの研究者がそれを指摘している。その最たる例としては、やはり『お伽草紙』（筑摩書房 一九四五年一〇月）が挙げられよう。

『お伽草紙』は一九四四年六月に脱稿され、「まえがき」と「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」の四編からなる。作家である語り手は、「カチカチ山」までを書いて、「舌切雀」冒頭で次のように語りはじめる。

私はこの「お伽草紙」といふ本を、日本の国難打開のために敢闘してゐる人々の寸暇に於ける慰労のささやかな玩具として恰好のものたらしむべく、このごろ常に微熱を発してゐる不完全のからだながら、命ぜられては奉公の用事に出勤したり、また自分の家の罹災の後始末やら何やらしながら、とにかく、そのひまに少しづつ書きすすめて来たのである。

「日本の国難打破のために」といえば、一見敬虔な日本国民的姿勢を示しているようではある。「不完全からだ」でありながらも、お国のためと身を粉にして尽くす精神は、まさしく国家総動員体制下における戦意昂揚の美談といえよう。しかし

続けて語り手は、「カチカチ山」と「舌切雀」との間に「桃太郎」を書く予定があつたこと、そしてあえて「桃太郎」を書かなかつたことを告白する。

しかし、私は、カチカチ山の次に、いよいよこの、「私の桃太郎」に取りかからうとして、突然、ひどく物憂い気持ちに襲はれたのである。（中略）いやしくも桃太郎は、日本一といふ旗を持つてゐる男である。日本一はおろか日本二も三も経験せぬ作者が、そんな日本一の快男子を描写できる筈が無い。私は桃太郎のあの「日本一」の旗を思ひ浮べるに及んで、潔く「私の桃太郎物語」の計画を放棄したのである。

その言い訳がましい語りに隠れて、日本の旗を背負った桃太郎の姿を書きたくないという意志がうかがえる。戦時下において「桃太郎」が戦意昂揚に用いられていたこと、そしてそれを『お伽草紙』から「除外」したことの軍国批判性については、高田千波が整理している。⁽¹¹⁾桃太郎に日本軍の影を、鬼に所謂鬼畜米英の影を見たとき、桃太郎が鬼を討つ物語を書きたくないという語り手に、断じて日本軍に加担しないという抵抗の姿勢を読み取ることが容易であろう。その文脈に即せば、先の語りにも、寧ろ不自然なまでに遜った恭しい語りによって浮き彫りにされるように、「不完全のからだ」の国民に「奉公の用事」を

強い、罹災者を救わない国家に対する、語り手の非難の意がみえてくる。その意味で、先の敬虔な姿勢は同時代言説のカリカチュアであつた。

しかし、この方法が両義性を孕む危険な綱渡りであつたことは否めない。字面をさらえば、「日本の国難打開のために敢闘してゐる人々」のための物語は、やはり戦争協力文学と見做されうるものであつた。

他にも、例えば「十二月八日」(「婦人公論」一九四二年二月)に次のような一節がある。

本当に、此の親しい美しい日本の土を、けだものみたいに無神経なアメリカの兵隊どもが、のそのそ歩き廻るなど、考へただけでも、たまらない。此の神聖な土を、一歩でも踏んだら、お前たちの足が腐るでせう。お前たちには、その資格が無いのです。日本の綺麗な兵隊さん、どうか、彼等を滅つちやくちやに、やつつけて下さい。(中略)かういふ世に生れて、よかつた、と思ふ。ああ、誰かと、うんと戦争の話をしたい。やりましたわね、いよいよはじまつたのねえ、なんて。

「十二月八日」は、「日本のまづしい家庭の主婦」の綴つた日記という体裁を採っている。「どうも極端すぎる」「愛国心」を持った「主人」も含めて、開戦直後の戦争言説のカリカチュア

ではあるものの、字面を追えばやはり開戦の昂揚が描かれた戦争協力文学と見做されうるだろう。⁽¹²⁾

また、同時期に書かれた『右大臣実朝』(錦城出版 一九四三年九月)についても、武田泰淳は「かにを食べるところなんて滑稽感を出しているが、あのなかに太宰の複雑な反抗心がこもっている」として、それを「抵抗しているという証拠はないわけけれども読む人が読めばわかる」方法というが、一方で鳥居邦朗は、「アカルサハ、ホロビノ姿デアラウカ」の一節について「やはり客観的には滅亡の美学として、体制側からは歓迎されるものとなる」と、その拭えない戦争協力文学としての一面を指摘している。⁽¹⁴⁾ 泰淳も「あの当時実朝を書くということは安全なのですね、日本の伝統を研究するのだということ」と前置きしているように、当時「実朝を書くということ」自体が、日本賛美の姿勢として時局への迎合と見做されたととは否めない。

戦時下において、太宰は時局に迎合した日本讚美に乗じて、あるいは過度な愛国精神を描くこと自体に、アイロニーを忍ばせていた。古典やフォークロア、そしてその題材自体の持つ日本賛美による迎合の姿勢は、その隠れ蓑として重宝された。そして現代もなお戦時下の太宰文学は、戦争協力文学か「読む人が読めばわかる」「文学的抵抗」かの間で解釈が割れている。しかし、その両義性は、戦時下における太宰の創作方法の一つとして相対化され、捉え直されるべきであらう。

二 『惜別』執筆背景

戦時下における太宰の方法をおさえたところで、本章より『惜別』に目を向けていこう。太宰の『惜別』執筆の影には、些に入り組んだ背景がある。先行研究では、国策小説を書くことと魯迅を素材にした小説を書くこと、これらに対する太宰のモチベーションが混同されがちである。

まず、『惜別』前後（『文芸日本』一九五九年六月九月）及び「大東亜共同宣言と二つの作品——『女の一生』と『惜別』——」（『文学』一九六一年八月）で本格的に『惜別』に取り組んだ尾崎秀樹は、同文学作品化企画において「太宰治の名前が、最初の場合には見当たらず、十九年一月の記事にはじめて登場すること」に留意している。⁽¹⁵⁾ 本稿冒頭で示したように、「最初」は執筆候補者のリストを、「十九年一月の記事」は執筆希望者のリストを、それぞれ指している。後者から太宰の名が見られるのは、すなわち太宰が国策小説を書くことを自ら希望したということか。

一九四四年一月三〇日山下良三宛書簡、これは今日確認できる限り最古の『惜別』執筆についての太宰自身の言であるが、そこに次のようにある。

新年早々、文学報国会から大東亜五大宣言の小説化といふ難事業を言ひつけられ、これもお国のためと思ひ、他の

仕事をあとまはしにして、いささか心胆をくだいてゐます。

「難事業を言ひつけられ」云々とみえ、国策小説執筆の主体性を疑うこともできるが、一方で、国策小説執筆を自ら希望したことに対する負い目とその秘匿と捉えることもできる。

また、『惜別』「あとがき」に次のようにある。

この『惜別』は、内閣情報局と文学報国会との依頼で書きすめた小説には違ひないけれども、しかし、両者からの話が無くても、私は、いつかは書いてみたいと思つて、その材料を集め、その構想を久しく案じてゐた小説である。

太宰は『惜別』を「書いてみたいと思つて」「その構想を久しく案じてゐた」という。これを鵜呑みにはできないが、事実太宰の魯迅への関心が深かったことについては、尾崎が次のように整理している。

太宰が魯迅を読んだのは、岩波文庫の『魯迅選集』くらいからだつたと思われる。（中略）小田巖夫の『魯迅伝』が出たとき早速読んだことは前に書いた。小田とつきあうようになってからは、かなり魯迅について教えられるところがあつたらしく、内閣情報局と文学報国会に依頼されたときは、魯迅を対象に忖んだことからして、太宰の傾倒の

程が伺われる⁽¹⁶⁾

『魯迅選集』が岩波書店から刊行されたのは一九三五年、小田の『魯迅伝』が筑摩書房から刊行されたのは一九四一年である。国策小説企画の持ち上がる以前から太宰は魯迅に関心を抱いていたようである。なお、魯迅逝去が一九三六年一〇月で、例えば貴司山治創刊「文学案内」では、一九三六年一月号で特集が組まれ、翌三七年三月号で藤野巖九郎寄稿「謹んで周樹人様を憶ふ」が掲載されるなど、魯迅に関する同時代言説に触れる機会にも事欠かなかったであろう。

また、太宰は一九四〇年頃から「清貧譚」（「新潮」一九四一年一月）、「帰去来」（「八雲」一九四三年六月）、「竹青」（「文芸」一九四五年四月）といった中国文学にモチーフを得た作品を断続的に執筆していた。一九四四年八月二九日弟子堤重久宛書簡に「そろそろ魯迅に取りかかる。いまは小手調べに支那の怪談『竹青』など試作してゐる」とみえ、着々とその土壌を耕していたことがうかがえる。しかし、ここで考えなければならぬのは、尾崎は太宰が「依嘱されたときは、魯迅を対象に択んだ」としているが、『惜別』「あとがき」に内閣情報局と文学報国会からの「話が無くて」も「書いてみたいと思つて」いたとあるように、太宰にとって国策小説を書くことと『惜別』を書くこととはそもそも全くの別問題ではなかったかという点である。『惜別』に関わる太宰の言としては、先に挙げた一九四四年

一月三〇日山下良三宛書簡、八月二九日堤重久宛書簡に加え、一〇月一三日小山清宛書簡にも「私は西鶴の仕事も一段落で、そろそろ魯迅に取りかかるうか、それとも短編集でも一つ編まうかと思案中」とみえる。年始、「難事業を言ひつけられ」と山下に愚痴を零してから半年を優に過ぎ、ようやく「そろそろ魯迅に取りかかる」と堤に宣言したかと思えば、その一月後には「短編集でも一つ編まうか」と小山に漏らし、なかなか腰が入らない。内閣情報局と文学報国会から正式に国策小説を依嘱されたのは一二月に入ってからのことではあるが、先に述べた魯迅に対する関心とは裏腹に、執筆は遅々として進んでいなかった。

依嘱を承け、太宰はようやく仙台での実地調査に向かった。仙台での收穫としては、二〇〇字詰め原稿用紙一五枚程の所謂『惜別』ノート⁽¹⁷⁾が残されている。当時の仙台の世相や風俗、仙台医専の行事、新聞の広告や報道記事が散見する。当時の魯迅その人を知る資料は得難く、そういった意味では、『惜別』の素材は得られたが、「周さん」の素材はさして得られなかったようである。帰京した太宰は、魯迅研究の権威から僥倖を授かる。後述する竹内好の『魯迅』（日本評論社 一九四四年二月）である。先述したように太宰の「芸術的抵抗の姿勢」に惹かれていた竹内は、「武田泰淳から、太宰治が私『竹内好』のことをほめていたという話」を聞き、嬉々として自著『魯迅』を謹呈したという⁽¹⁸⁾。それが一九四五年二月初めのことで、それを機に

太宰は、『惜別』「あとがき」曰く「少年の如く大いに勢いづいてこの仕事をはじめ」、同月二〇日に脱稿した。

先述したように、太宰は「日本の国難打破のために」と銘打った『お伽草紙』で、日本の旗を背負う桃太郎を描くことを拒否した。『惜別』が国策小説企画として刊行されたことは紛うことないが、それと太宰の執筆意図が重なるとは限らない。太宰の魯迅への関心、そして国策小説という体裁のみから竹内らが早々に捺した戦争協力文学の烙印、これらが負の方向にシナジーを生んで今日の『惜別』評の一角を形成している。しかし、その前提となる後者の戦争協力文学を積極的に書いたという解釈は、戦時下における太宰の迎合と抵抗の両義性を有した方法を踏まえても、問い直される必要があろう。

三 「老医師」の語り — その批評性 —

『惜別』は所謂入れ子構造を採っている。一九四四年頃、「老医師」が四〇年前の学友「周さん」との親交を綴った手記を、「自分（太宰）」が「これは……一老医師の手記である」と紹介するものである。先行研究では、竹内諸論に引かれる形で「周さん」と魯迅の相違に目がいきがちで、作中で「周さん」の物語が如何にして語られたか、という問題は等閑視されてきたきらいがある。しかし、語りの持つ批評性、これを読むことが、戦時下の太宰文学の方法を知る鍵となる可能性を『お伽草紙』ら

が示していた。そこで、「周さん」その人ではなく、彼を語る（綴る）「老医師」と、語られる（綴られる）「周さん」という視点から、『惜別』を捉え直してみたい。

「老医師」が「周さん」との親交を語り始めたその発端は、「記者」の捏ちあげた記事であった。「記者」は「日支親善の美談」を書くために、「魯迅」の嘗ての学友である「老医師」を取材に訪れた。できあがった記事を目にした「老医師」は、自身の「胸底の画像」との相違に苦痛を感じ、正しく書き残すことにしたという。

ここに太宰が戦時下のジャーナリズムに辟易していたことが反映されていることはいうまでもないが、「老医師」の語りに着目すれば、『惜別』では物語を生成すること自体への問題が提起されているようである。すなわち、典拠とそのパロディ作品間の抱える問題であり、ひいては物語内容を語り手が物語言語へと再構築する際の語りの問題である。⁽²⁰⁾「記者」が「老医師」の過去を記事へと再構築すること、或は「老医師」が自らの「胸底の画像」を手記へと再構築すること、その過程に、語り手たる「記者」「老医師」の如何なる恣意がはたらき、その物語行為そのものを如何に読むことができるか。「老医師」の物語行為についての問題意識は顕著で、「周さん」が後に「魯迅」として書いた作品について次のように述べる。

ひとの話に依れば後年、魯迅自身も仙台時代の追憶を書

き、それにもやはり、その所謂「幻燈事件」に依つて医学から文芸に転身するやうになつたと確言してあるさうであるが、それはあの人が、何かの都合で、自分の過去を四捨五入し簡明に整理しようとして書いたのではなからうか。人間の歴史といふものは、たびたびそのやうに要領よく編み直されて伝へられなければならぬ場合があるらしい。どんな理由で、魯迅が自分の過去をそんな工合に謂はば「劇的」に仕組まなければならなかつたか、それは私にもわからない。

「周さん」は後に「魯迅」を名乗り、自身の「仙台時代」をモチーフとする小説を書いたようである。現実の魯迅に即するならば、『呐喊』『自序』（一九二二年一月著）と「藤野先生」（一九二六年一月著）に、留学時代に経験したという「幻燈事件」と文芸への転身が描かれている。しかし、「老医師」にいわせると、それはもはや「劇的」に再構築された創作であり、そのモチーフとなつた「仙台時代」とは当然乖離しており、そのみを妄信することに警鐘を鳴らしている。そしてわざわざそれを行つた「魯迅」の意図は解さないという。

一方の「記者」は、「社会的な、また政治的な意図をもつた読物」を書くために、「老医師」の「胸底の画像」すなわち情報元を歪曲させた。語る側から提示されたその論理に、「老医師」は語られる側から苦言を呈した。

作者太宰は、無論作中の「自分（太宰）」を含めて如何なる語り手とも区別されるが、ストーリーテラーという意味では、語る側の「記者」の立場に近い。しかし、『惜別』で太宰はまず、語られる側による語る側への苦痛を描出している。古典やフォークロアを優れたパロディ作品に再構築してみた太宰が、また『惜別』で典拠との相違を痛罵されることとなる太宰が、である。典拠とそのパロディ作品の距離について、すなわち近すぎでは模倣とされ、遠すぎれば歪曲とされる、パロディの手法自体の抱えるパラドックスに、太宰は既に防波堤を築いていた。典拠とそのパロディ作品の相違について、すなわち竹内らの批判的である魯迅と『惜別』における「周さん」との相違について、少なくとも太宰が無心に典拠を陵辱していたわけではないと考えてよいだろう。竹内諸論のような批判が想定内のものであつたことは、「老医師」の語りに明らかである。

また、記事において「老医師」は「記者」に語られる者であつたが、手記においては語る者となる。「老医師」は自らの「胸底の画像」を頼りに手記を書き出したものの、「どこかに非常な見落しがあるかも知れず」、「どうせ、私には名文も美文も書けやしない」と、甚だ自信なさげであつた。しかし、語り手自らを貶め、弱者の側から穿つ批評の方法は太宰の十八番ではなかつたか。²⁾

といつても私は、何もあの新聞に連載された「親和の

先駆」といふ読物に、ケチを附けるつもりは無いのである。あのやうな社会的な、また政治的な意図をもった読物は、あのやうな書き方をせざるを得ないのであらう。私の胸底の画像と違ふのも仕方無いことで、私のは謂はばまあ、田舎の耄碌医者が昔の恩師と旧友を慕ふ気持だけで書くのだから、社会的政治的の意図よりは、あの人たちの面影をただいていねいに書きとめて置かうといふ祈念のほうが強いのは致し方の無い事だらう。(中略) 私の仕事も、敵の空襲に妨げられ萎縮するなどの事なく順調に進んで行きさうな、楽しい予感もする。

ここで「老医師」は、「ケチを附けるつもりは無い」「仕方の無いこと」とはいいつつも、「社会的な、また政治的な意図をもった読物」すなわち国策のプロパガンダを「あのやうな」と相對視している。そして「田舎の耄碌医者」を自称し、「昔の恩師と旧友を慕ふ気持だけで書く」とそれに反発する。「日本一はおろか日本二も三も経験せぬ作者」が桃太郎を書くことを拒否した『お伽草紙』の方法を想起させよう。そして「社会的政治的の意図」を持った読物の取材に「しどころもどろ」になった「老医師」であつたが、それを排して「昔の恩師と旧友を慕ふ気持だけ」で手記に臨むとき、「順調に進んで行きさうな、楽しい予感」を抱く。「老医師」にとっては、日本の「社会的政治的の意図」もまた、「仕事」の妨げになるという意味では「敵」

に等しかつたのである。

このような「老医師」の時局に対する抵抗の姿勢は、若き日の「津田憲治」との交流においても、対比的に浮かび上がっている。東北の田舎出身であることに劣等感を禁じえない「老医師」に、東京人たる「津田」はいわば「国家の方針」の代弁者とみえ、手記には彼から受けた「第三国人」との交流についての指摘が綴られている。次に三点挙げる。

いけない。君は、それだからいけない。(中略) 何せ、いま戦争中なのだからね。中立諸国の者たちには、実に複雑微妙な外交的術策を用いなければいけない。

これは国際問題だ、と彼はれいの如く大袈裟な事を言ふのである。(中略) すなはち、周さんの背後には、一万名の清国留学生が控へてゐる。周さんひとたび怒らば、この一万の留学生は必ず周さんを応援して立ち上る。しかる時には、仙台医専の不名誉は言ふもさらなり、わが文部省、外務省も、清国政府に対し陳謝しなければならなくなるやも計り難い。実に、日支親善外交に、一大汚跡を、踏み残す事になる。

あいつ「周さん」は清国政府から選ばれて、日本に派遣されて来た秀才だ。日本は、あいつに立派な学問を教へ

込んでやつて帰国させなければ、清国政府に対して面目が無い。僕たち友人の責任も、だから、重大なんだよ。

「津田」は、実に当時の日本人らしい、国家に従順で敬虔な日本人の典型として「老医師」に映っていたといつてよいだろう。「津田」は常に日の丸を背負い、国際社会の一員たる自負を行動の基盤に置いて「複雑微妙な外交的術策」を駆使し、それを同じ一日本国民として「老医師」にも強いる。日頃「日本の外交方針に添った努力」をしている「津田」は、不登校気味でクラスの和を乱す「老医師」を誇り、「君はクラスの注意人物なんだ」と告げる。

そもそも、「外交的術策」を重んじる「津田」とそれを「ばからしい」と考える「老医師」は相容れるはずもなかった。両者の関係は、さながら後の「人間失格」(「展望」一九四八年六月)における「大庭葉蔵」と「堀木」の関係を髣髴させる。「堀木」は「世間」を盾に取って「葉蔵」を誇るが、葉蔵はそれに「世間とは個人じゃないか」という思想めいたものを抱いて反発した。「世間」と「クラス」と、規模こそ違えど、また「人間失格」では「世間とは」ということに問題意識の矛先が向けられるが、多勢の論理で正義を翳して蹂躪してくる他者を弱者の視点から穿つ批評の方法について、『惜別』にも通じるものを見出せる。また、「津田」の「外交的術策」は、「周さん」に「過度の親切」「少し苦痛」と言われてしまうようなものであった。如何せん

そこには、日露戦時の、ひいては太平洋戦争時に連なる、日本の功利的な外交意識が露骨に現れている。「津田」のいうところの「中立諸国の者たち」は、日露戦時における中国を指しているようであるが、一九四四年頃という「老医師」の語る同時代的文脈を鑑みるに、大東亜共栄圏諸国の影も重なってみえる。「第三国人」のスパイたる可能性に怯え、「清国政府に対して面目が無い」などと他国の顔色を窺うような台詞に隠れてはいるが、「立派な学問を教へ込んでやつて帰国させ」という物言いは、日本による大東亜共栄圏諸国の事実上の植民地支配の文脈から捉えられるべきであろう。日本で学ばせ、それを自国で広めさせる、その発想は「周さん」をいわば占領の苗木とするものである。後に「周さん」の送別会で見せた涙が「老医師」の溜飲を下げはしたが、日露戦時における「津田」の言説を以て、太平洋戦時における「独立親和」の意味が問い直されている。「劇的」か否かは兎も角、『惜別』における「周さん」も、四〇年の歳月を経て「老医師」の語りに再構築された存在である。所詮、竹内の魯迅像と比較すべき四〇年前の「周さん」に、竹内も我々も触れることはできない。問題の所在は、一九四四年に嘗ての学友を「周さん」として再構築する「老医師」の語りにある。

以上では、「老医師」の語りから、その人となりや批評の対象を探ってきた。それでは、「老医師」は如何なる意図を以て嘗ての「周さん」を再構築したか。

四 大東亜共栄圏からの解放

鲁迅と「周さん」の相違を逸早く指摘したのは竹内好であった。それが『惜別』評を築き、今日にまで及んでいる。しかし、明確なモデルや典拠のある作品にそういった批評が生じうるとを太宰が無論想定していたことは明白であった。語られる側の、無心に陵辱されることへの苦痛を描いていることが、それを証明している。考えるべきは、鲁迅と「周さん」の相違の有無ではなく、その意図であろう。

まず、竹内の批評を整理し、鲁迅と「周さん」の相違を確認しておこう。

鲁迅が、仙台の医学校で、日露戦争の幻燈を見て志を文学に立てたという話は、あまねく人口に膾炙している。これは彼の伝記の伝説化された一例(小田嶽夫『鲁迅伝』)であって、私はその真实性に疑を抱く。そんなものでは恐らくあるまいと思う。(中略)／説話の出所はやはり彼の文章である。一つは「呐喊」自序であり、一つは「朝花夕拾」に収められた「藤野先生」である。⁽²²⁾

小田嶽夫の『鲁迅伝』がそうであるように、先行研究では鲁迅が文学へと転向した背景として、『呐喊』『自序』と「藤野先生」に描かれる二つの事件が屢々引かれる。一つは、語り手「私」が嘗て「藤野厳九郎」にノートの添削を受けていたことが、一部の同級生に不正行為と邪推された事件(以下、竹内好『鲁迅』に倣い「いやがらせ事件」とする)である。「私」のもとに「汝悔い改めよ」云々と綴られた手紙が届く。不正行為自体は事実無根であり、「私」の疑いはすぐに晴れるも、中国人は低能児であるため、疑われるのは仕方がないと考えるに至る。いま一つは、所謂「幻燈事件」と呼ばれる事件である。「幻燈事件」は、日露戦争の折、ロシア軍のスパイとして捕えられた中国人が銃殺され、それを見た中国人が歓声をあげるといふ場面を、幻燈で観たことを指す。以上二つの事件を経て、自国民に絶望した鲁迅は彼らを救済するために文学へ転向した、というのが一般的な鲁迅解釈であるらしい。

『呐喊』『自序』は鲁迅が小説を書くに至った経緯を記したものである。そこに「幻燈事件」はみえるが、「いやがらせ事件」はみられない。三年後の「藤野先生」で初めて「いやがらせ事件」と「幻燈事件」が並んで登場する。この点から竹内は、「いやがらせ事件」を鲁迅の「文学志望とは直接に関係しない」虚構である可能性を示し、あくまで「象徴的」なものであると解釈している。これは後の尾崎秀樹も同様であり、二つの事件のみから鲁迅を論じることの危うさを指摘している。竹内は、鲁迅が「藤野先生」に「いやがらせ事件」を「象徴的」なものとして書いたとして、次のように述べる。

幻燈事件は、その前のいやがらせ事件と関聯を持っており、その両方に共通したものが、この場合は問題なのである。彼は幻燈の画面に、同胞のしみじめさを見ただけでなく、そのしみじめさにおいて彼自身をも見たのである。それは、どういうことか。つまり彼は、同胞の精神的貧困を文学で救済するなどという景気のいい志望を抱いて仙台を去ったのではない。恐らく屈辱を噛むようにして彼は仙台を後にしたと私は思う。(中略) 幻燈事件が彼に与えたものは、いやがらせ事件と同じ性質の屈辱感であつたと思う。屈辱は、何よりも彼自身の屈辱であつた。同胞を憐むよりも、同胞を憐まねばならぬ彼自身を憐んだのである。

二つの事件は、鲁迅の文学への転向の契機にはなりえても、理由にはなりえない。竹内は、二つの事件に象徴される「屈辱感」こそが彼の転向の軸となつていて、と解釈している。そして、いわば「劇的」に描かれた二つの事件によって、すなわち「説話の面白さによつて真実を枉げてはならぬ」という。本章冒頭の引用と併せて、竹内は「真実」すなわち鲁迅その人を追究し、こと彼の文学への転向においてはその内奥の「屈辱感」にこそ契機があるとしている。

それでは、一方の「周さん」はどうか。太宰は『惜別』にて、確かに「いやがらせ事件」を描き、「周さん」の文学への転向

に『幻燈事件』は、少くともその総決算の口実の役目を勤めたという事は認めざるを得ない」とおさえてはいる。しかし、竹内のいう「屈辱感」を描ききつたとはいいたい。まず、「いやがらせ事件」について、『惜別』では主犯「矢島」が深謝し「周さん」と和解することで事件が「四方八方まるく」収まつてしまつてゐる。それでは鲁迅の「屈辱感」が薄まり、連なる「幻燈事件」での「屈辱感」も強調されえない。太宰は竹内の指摘する「いやがらせ事件」の「象徴的な意味」、すなわち、「屈辱感」そのものを描きえていないのである。また「幻燈事件」についても同様で、『惜別』では、「周さん」は幻燈を上映する教室から忍び出てしまつてゐる。「藤野先生」では、鲁迅が幻燈に「同胞のしみじめさを見ただけでなく、そのしみじめさにおいて彼自身をも見た」場面であるはずが、「周さん」は自己と向き合うことを避けており、尾崎曰く「自己嫌悪という言葉が、底の浅いところで捉えられて」しまつてゐる。

もっとも、以上で整理してきた批判や相違は、先述したように竹内の鲁迅像というフィルター越しに「周さん」及び『惜別』をみてのものである。それでは、「老医師」の語る「周さん」に目を向けよう。「周さん」が文学を志した理由について、「老医師」は「所謂『幻燈事件』に依つて、その疑問が、突然、周さんの胸中に湧き起つた」という説は、少し違つてゐるのではなからうかと私には思われる」として、自身の「周さん」像を次のように語る。

彼は、あの幻燈を見て、急に文芸に志したのでは決してなく、一言でいへば、彼は、文芸を前から好きだつたのである。(中略)そうして彼の、かねてからの文芸愛好の情に油をそいで燃えあがらせた悪戯者として、あの一枚の幻燈の画片を云々するよりは、むしろ、日本の当時の青年たちの間に沸騰してゐた文芸熱を挙げたほうが、もつと近道なのではあるまいかとさへ私には思はれる。

「老医師」は、「周さん」が文学を志した理由を、「文芸を前から好きだつた」ためとし、幻燈ではなく「当時の青年たちの間に沸騰してゐた文芸熱」がそれに拍車を掛けたとしている。これに竹内の重要視する魯迅の「屈辱感」は霧散してしまう。浦田義和も「絶望からの新生」が浮かび上がってこないと指摘している。²³しかし、くどいようだが、寧ろみるべきは、「老医師」の捉えた、或は太宰による、「屈辱感」の抑えられた「周さん」像の意味である。

「いやがらせ事件」と「幻燈事件」はそれぞれ、日本の中国蔑視、中国支配の文脈から生まれたものといえる。竹内の指摘するように、二つの事件に象徴される「屈辱感」を魯迅の文学転向の軸とするならば、魯迅の文学転向もその文脈の中で生まれたものとも捉えられる。それは後の文芸運動の原動力となるが、それすらも日本の中国支配の文脈で解釈可能なものではなかった

か。

一方の「周さん」について、『惜別』の意図に「魯迅の晩年の文学論には、作者は興味を持てませんので、後年の魯迅の事には一さい触れず」とあるように、また「老医師」も「私は彼の後年の尠大な著作物に就いては、ほとんど知るところが無い。それゆゑ、所謂大魯迅の文芸の功績は、どんなものであつたか何もしらない。」として、ともにそれを避けている。しかし、「このごろ皆の言つてゐるやうに所謂『幻燈事件』に依つて」云々とあるように、「老医師」は「魯迅」の周辺についてある程度の情報を得ていたようである。また、作中には「文章の本质、とかいう題」で、次の文章が挙げられている。²⁴

文章の本質は、個人および邦国の存立とは係属するところなく、実利はあらず、究理また存せず。故にその効たるや、智を増すことは史乗に如かず、人を誠むるは格言に如かず、富を致すは工商に如かず、功名を得るは卒業の券に如かざるなり。ただ世に文章ありて人すなはち以て具足するに幾し。嚴冬永く留り、春氣至らず、軀殼生くるも精魂は死するが如きは、生くると雖も人の生くべき道は失はれたるなり。文章無用の用は其れ斯に在らん乎。

「老医師」はこれを『同胞の政治運動にお手伝いするため』の文芸』とは異なる「名文」として、また「奇妙な執着を感じ」、

反復愛誦していたという。「老医師」が「社会的な、また政治的な意図をもった読物」すなわち国のプロパガンダを避けていたことは先に述べた。文章に「個人および邦国の存立」「実利」を求めず、しかし「用」であり、かつ「用」でありながら「実際の政治運動の如く民衆に対して強力な指導性を持たず、徐々に人の心に浸潤し、之を充足せしむる用を為すものだ」という「文章の本質」に惹かれたことも頷けよう。そして、「周さん」が後に「魯迅」として書いた「扈大な著作物」やその「文芸の功績」に、「老医師」は「政治運動」の香りを感じてそれを避け、文学を政治や革命運動の道具に用いるために志したのではなく、純粹に「文芸を前から好きだった」一青年像を「周さん」にみていたかった、とするのは牽強附会の説であろうか。少なくとも、「文芸を前から好きだった」と解釈するにあたつて、「老医師」が「周さん」の後の「政治運動」を知りながらそれをわざわざ排して「敢えて苦手の理窟を大骨折りで述べ」たことは、太宰が『お伽草紙』でみせた、書かなかったことを書くことによる抵抗の方法を想起させる。「老医師」によつて「周さん」の文学転向の理由は一見チープなものに解釈されたが、一青年の内面から生じた衝動に端を発しているという意味では、政治性が「除外」され、日本の中国支配やそのプロパガンダの文脈から解き放たれる方向に向けられているといえる。

しかし、「老医師」が手記を綴る際のスタンスは、「昔の恩師と旧友を慕う気持だけで書く」というものであつたはずが、「老

医師」は「周さん」の表象から政治性を「除外」することによつて、すなわちそのような意図を含んだ時点で、彼の手記は彼の忌避する「社会的な、また政治的な意図をもった読物」となつてしまつている。そのアンビバレンスな物語行為を生んだのは、「老医師」の愛であつた。振り返ると、「老医師」には愛を以て物事を好意的に捉えようとする傾向があつた。「津田」の「外交的術策」然り、「矢島」の「いやがらせ事件」もまた然りである。「津田」の植民政策的言説や、「矢島」の中国蔑視の言説は、当初は当時の日本人のカリカチュアとして「老医師」に語られていたことは明白だが、それらは愛故のものとして解釈され、美談として正当化された。それは結果として、大東亜共栄圏の論理を補強しており、その意味では「老医師」の手記は寧ろプロパガンダとしての機能を有してさえる。

尤も、「老医師」の愛は「津田」と「矢島」の言説を正当化し、大東亜共栄圏の論理を補強してはいるものの、そもそも両者が大東亜共栄圏の論理を体現していたことは揺るがない。「老医師」の愛ある解釈の影響を受けたのは、やはり「周さん」の表象であろう。「老医師」は自己の解釈によつて、「周さん」の文学転向から政治性を「除外」しようとした。その意図を込めることによつて、結果として「老医師」の手記はプロパガンダ性を帯びることになるが、その毒を以て毒を制するような物語行為には、「周さん」とその文学、ひいては中国ほか諸国を大東亜共栄圏の論理から解放させようとする意志を見出せる。

おわりに

以上のように、本稿では、『惜別』がその成立背景こそ戦争協力文学そのものでありながら、「老医師」の語りには、文学をプロパガンダに用いること、或はそれを強いられることへの批判意識が少なからず表出していたことを明らかにしてきた。振り返ると、『お伽草紙』の語り手はプロパガンダとしての同時代の文脈を孕む「桃太郎」断筆を宣言し、「老医師」はプロパガンダに「ケチを附けるつもりは無い」としながらも「恩師と旧友を慕ふ気持だけで」手記を書くことを前置いていた。

日本賛美の中に日本批判を潜ませた戦時下の太宰文学の方法は、予てから迎合か抵抗かで議論されてきた。しかし、本稿では、そうした二極論に終始するのではなく、その迎合と抵抗の両義性を孕んだ方法を太宰一流の技法として相対化し、捉え直そうと試みた。殊に『惜別』が、国策小説として依嘱されているながら、その中に国策批判の一面を孕み、しかしまふまふ戦争協力文学のレッテルを貼らせたことは、相対化され問い直されなければならない。その危険性とそれを犯す野心は、『お伽草紙』などの比ではないだろう。

一方で、『惜別』に相当の野心を以て込められたであろう抵抗の一面は今日まで目の見ることはなかった。国策小説という体裁から、『惜別』は太宰文学の中でも屢々異端視され、

魯迅と「周さん」の相違に固執した竹内以下諸論によつて議論は停滞してきたのである。

太宰は、戦後になると、激動の時代の中で転々と掌を返す「新型便乗」を繰り返して批判した。²⁵戦時下に、抵抗のために形だけとはいえ時局に迎合した経験や責任が、それを許さなかったであろう。そしてまた、太宰は自身を含む全ての国民が戦争に加担したことを積極的に認めるよう促した。²⁶それは、抵抗のための迎合さえも罪として曝け出すことによる、戦時下に時局を妄信していた者らへの批判であり、また戦時下に散々神国日本を謳っておきながら、戦後掌を返すように戦時下の愚行を詰問し合う時局に対するアンチテーゼでもあった。太宰の戦後批判は、遡ってみれば、彼が戦時体制に迎合しつつも一方で抵抗の姿勢もまた有していたことを物語っている。

国策小説という体裁は、一般に、自由な表現活動を縛る足枷である。しかし、『お伽草紙』や『右大臣実朝』に描かれた日本文材と同様に、国策小説という体裁もまた、『惜別』においては、太宰の特質を開花させるために不可欠な制約であった。学生時代は素封家という出自、作家デビュー後は權威的文壇といった様々な制約の下で筆を走らせ、制約そのものを揺るがしてきた。『惜別』は、太宰文学の異端ではなく、むしろその正統な流れを汲むものであったのである。竹内らが魯迅に背負わせてきた「屈辱感」、それは植民地主義批判を大義名分とする大東亜共栄圏の論理に添うものであったが、「老医師」の語りは「周

さん」をその文脈から解放した。迎合か抵抗か、国策小説か否か、戦時下の太宰文学もその不毛な二極論から解放されなければならない。

注

- (1) 本稿における太宰作品並びに書簡からの引用は、全て『太宰治全集』筑摩書房 一九九八年二月（各巻に拠っている。なお、□は引用者注を、／は改行を示す。
- (2) 大東亜共同宣言の小説化企画については、尾崎秀樹の労作「大東亜共同宣言と二つの作品——『女の一生』と『惜別』——」（『文学』一九六一年八月）を参照した。
- (3) 「小説の部」の依頼作家は以下の通りである。なお、実際に発表されたのは、太宰治『惜別』（朝日新聞社 一九四五年九月）と、「戯曲の部」の森本薫『女の一生』（一九四五年四月渋谷東横にて初演）のみであった。
- | 「共同宣言」全般に互るもの | 大江賢次 |
|---------------|-------|
| 「共存共栄」の原則 | 高見順 |
| 「独立親和」の原則 | 太宰治 |
| 「文化昂揚」の原則 | 豊田三郎 |
| 「経済繁栄」の原則 | 北町一郎 |
| 「世界進運貢献」の原則 | 大下宇陀児 |
- (4) 竹内好「太宰治のこと」（『太宰治全集 第三巻』『月報』（筑摩書房 一九五七年一月））。引用は『竹内好全集 第十三巻』（筑摩書房 一九八一年九月）。
- (5) 赤木孝之「戦時下太宰治の側面——『惜別』をめぐる——」（『新編 太宰治研究叢書1』（近代文芸社 一九九二年四月）。引用は赤木孝之『戦時下の太宰治』（武蔵野書房 一九九四年八月）。

- (6) 藤井省三『鲁迅——東アジアを生きる文学』（岩波書店 二〇一一年三月）。
- (7) 竹内好「藤野先生」（『近代文学』一九四七年三月）。引用は竹内好『竹内好全集 第一巻』（筑摩書房 一九八〇年九月）。
- (8) 神谷忠孝『惜別』（東郷克美・渡部芳紀編『作品論 太宰治』（双文社出版 一九七四年六月））。
- (9) 太宰治「返事の手紙」（『東西』一九四六年五月）ほか。
- (10) 一例としては、「雲雀の声」（未発表 一九四三年一〇月脱稿）は出版が見送られ、「花火」（『文芸』一九四二年一〇月）は発表後に全文削除の命を受けた。
- (11) 高田千波「除外のストラテジー——太宰治『お伽草紙』論への一視角——」（『駒澤国文』一九九五年二月）。
- (12) 何資宜「太宰治『十二月八日』試論——〈語り〳〳騙り〉構造——」（『国文学攷』（広島大学国文学会 二〇一〇年九月））は、「十二月八日」は太宰が同時代の十二月八日言説をコラージュ形式で繋ぎ合わせたものであり、そこに太宰のアイロニカルな「芸術的抵抗」を見出している。一方で、赤木孝之『戦時下の太宰治』（武蔵野書房 一九九四年八月）は、「十二月八日」を「太宰の昂ぶりを素直に書きとめた戦争小説」としている。
- (13) 武田泰淳・臼井吉見対談「太宰治と現代文学」（『太宰治全集 第八巻』『月報』（筑摩書房 一九六七年一月））。引用は『武田泰淳全集 別巻一』（筑摩書房 一九七九年九月）。
- (14) 鳥居邦朗「文学的抵抗」（三好行雄・竹盛天雄編『近代文学6 昭和文学の実質』（有斐閣 一九七七年一〇月））。
- (15) (2) に同じ。
- (16) 尾崎秀樹『惜別』前後」（『文芸日本』一九五九年六月九月）。引用は尾崎秀樹『鲁迅との対話（増補版）』（勁草書房 一九九六年八月）。以下の尾崎の言も同書同論による。

(17) (16) に同じ。これにしたがって、尾崎は、この時点での「周さん」像は小田の描く魯迅像に依るところが大きかったと考えている。

(18) (4) に同じ。

(19) 太宰治「十五年間」(「文化展望」一九四六年四月)に「戦時日本」の新聞の全紙面に於いて、一つとして信じられるやうな記事は無かった」とあるほか、諸書簡にもジャーナリズム批判が散見する。

(20) 「物語論」諸用語は、G・ジュネット著(一九七二年)／花輪光・和泉涼一訳『物語のディスコース』(水声社 一九八五年)による。

(21) 亀井勝一郎「大庭葉蔵」(亀井勝一郎『智識人の肖像』(文芸春秋新社 一九五二年七月)に次のようにある。引用は小山清編『太宰治研究』(筑摩書房 一九五六年六月)。

「死の抗議」という言葉がある。あらゆる表現を失った後、或は表現に傷ついた後、自分の死体を以て応酬する一種の復讐である。徹底的な敗北者の、或は弱者の、無抵抗の抵抗と云ってもよい。太宰治の抵抗はそういう種類のものであり、そのとき黒点は最大の原動力であり、またこれを最大限に活用した。換言すれば自己崩壊の極限を示す。崩壊せる自己をまず設定する。最も卑しく恥ずかしめられたものとしての醜態を虚構すると云ってもよい。彼はいたるところで生々と「死骸」を描いた。そしてすべては「世間」に対する抗議につながる。

(22) 竹内好『魯迅』(日本評論社 一九四四年二月)。以下の竹内の言も同書による。

(23) 浦田義和『惜別』(「無頼の文学」一九七八年二月)。引用は浦田義和『太宰治 制度・自由・悲劇』(法政大学出版局 一九八六年三月)。

(24) 魯迅が仙台留学を終えた翌年に発表した評論「摩羅詩力説」に、同様に「無用の用」に関する一節がある。しかし、原文とも、当時太宰が目にしたであろう松枝茂夫訳とも、異なるところが多い。現実に沿って解釈するならば、作中作「文章の本質」は後の「摩羅詩力説」の草案といった扱いが。

(25) 一九四六年一月二日尾崎一雄宛書簡に「このごろはまた文壇は新型便乗、ニガニガしき事かぎりなく、この悪傾向ともまた太いに戦ひたいと思つてゐます。」とあるほか、一月一日井伏鱒二宛書簡に「このごろの雑誌の新型便乗ニガニガしき事かぎりなく」云々、一月二五日堤重久宛書簡に「いまのジャーナリズム、大醜態なり、新型便乗といふものなり。」とある。

(26) (25) 前掲書簡等にみられるほか、(9) 前掲「返事の手紙」でも「私たちは程度の差はあつても、この戦争に於いて日本に味方をしました」、「私たちはこの大戦争に於いて、日本に味方した」と繰り返されている。

特集 ● 占領と開拓の〈記憶〉

歴史の裂け目を縫うように

貴司山治「雷新田」論

村田裕和

はじめに

度重なる逮捕・勾留の後に転向したプロレタリア作家貴司山治は、『維新前夜』全七巻（春陽堂書店、一九四一―四四年）に代表される通俗小説を次々と発表する中で、「東亜協同体」の理想実現に自身の作家的使命を託し、そのことによって、危機の時代を乗り越えようとしていた。太平洋戦争開戦後の一九四二（昭和十七）年には小説『青人草』を『報知新聞』に連載したが、これは、国内での農地開拓運動に参加することによって「東亜協同体」への参加を実践しようとする男女の物語である。貴司は、「開拓」を描くことを通して、「転向作家」としての自己のイデオロギー的な立場を表明したのである¹⁾。

『青人草』にとつての「開拓」は、「転向」を声明するための単なる物語的題材だったのではない。むしろ、「開拓」を物語

る行為そのものが、物語に「転向」という実質を充填していった。描かれた「開拓」が、「転向」を代理表象すると同時に、行為遂行的にその意味を実体化させていく。思想的方法論としての〈開拓〉と題材としての「開拓」が、相似的な関係にあるテクスト、それが『青人草』であった。

貴司は一九三七年の警察留置所における不当な長期勾留によつて肉体的に転向を強いられ、一九四一年の妻の死によつて、心身ともに打ちひしがれた。また、旧左翼作家を含む多くの文学者が「徴用」される中で、その選から洩れたことに、作家としての自尊心を大きく傷つけられた。こうした中で貴司は、世界的意義を認識した日本人を指導的立場として日・満・支が協同して西欧資本主義を克服するという「東亜協同体論」に、「日本民族」と共に歩むべき自己の作家的立場を求めたのである。

一九四三年には、当時日本が実質支配していた内蒙古（蒙古自治邦地域への旅行を執行する。帰国後に整理された日記『蒙

『古日記』の出発当日の記録には、「まだ日本の作家がだれも切り拓いてゐない世界——芸術上の仕事のプランを獲得してこないかぎり、私はかへつてこないつもりだ。／どこまでもどこまでも、日本人の一人もゐなくなる最前方までで行くつもりだ。自分の行く場所が蒙古であつても支那の奥地であつても、どこであつてもそれは問ふところではない」（一九四三年九月十五日）⁽²⁾とあつて、旅行によつて作家としての再生の契機をつかもうとしていたことがうかがえる。

また、この蒙古旅行以前（『青人草』の連載終了直後）には、日本文学報国会の企画で新潟県古志郡の山村に出かけて、そこで



図1:「雷新田」公演ポスター

はじめて見た「雷新田」とよばれる棚田の光景とその集落に強く関心を示している。『青人草』で「内地開拓」を題材とした直後であつただけに、「時局」とは無関係に、古代から営々と続けられてきた「開拓」の実践例を見て、大いに我が意を得たとの思いがあつたのだろう。後述するよう

に、いくつかの曲折を経つつも、これを直接の機縁として戦後に発表・上演されたのが戯曲「雷新田」（『テアトロ』一九四九年九月、図1）であつた。

蒙古旅行の後、いよいよ戦局が悪化し、東京吉祥寺の自宅周辺にも空襲が及んできた一九四五年四月、貴司は京都府胡麻郷村に一家を挙げて「入植」し、本物の開拓者となっている。さらに、敗戦後には開拓農民組合の設立にも関わり、京都府の農地委員としても積極的に働いている。一九四九年の「雷新田」は、こうした「開拓者」生活を切り上げて、焼け残った東京の自宅に戻ってから発表された。つまり、「雷新田」の執筆開始と完成は、ちょうど貴司の「開拓」時代の始まりと終わりに重なるのである。そして、この「開拓」なるものが、「転向」と深く結びついたものであつたとすれば、「雷新田」というテキストは、日本のプロレタリア作家にとつての「転向」の意味を明らかにする上でも、重要なテキストであるといわねばならない。

本稿では、「雷新田」における「開拓」の記憶や、その意味の変容・再定義に焦点を当てるとともに、そこに重ねられた作家自身の軌跡もふまえながらテキストの歴史性を考察する。

一 木澤村

「雷新田」は、新潟県古志郡東山村木澤（作中では木澤村／木澤部落）の農民たちの戦中戦後を描いた戯曲である。「雷新田」

とは、この地方の棚田を指す古い言葉で、雷雨だけを頼りに米作りが行われるところからその名称がついたとされる。初出は二幕五場で構成され、一九四九年九月号の演劇雑誌『テアトロ』に掲載された。

初出版のテキストにしたがって、物語を確認しよう。作品の中心人物は、木澤村の「二巻」の「巻頭」である「松倉與兵衛」とその孫の「清一」である。「巻」とは同族集団を表す単位で、村は三軒の「巻頭」が代表する三つの「巻」で構成されている。松倉家は、木澤村にもっとも古くに入植した者の末裔で、現在は地主として小作人を抱えつつ農業を営んでいる。與兵衛の二人の息子はすでに戦死し、長男の子である清一が跡取りで、その下に妹の「はる」がいる。與兵衛の次男にも二人の男児があり、八十三歳の與兵衛は、合計四人の遺児たちを一人で育てていた。第一幕は一九四三(昭和十八)年秋、清一が小作人の「横里国雄」とともに、満蒙開拓青少年義勇軍に参加するために村を出る朝から始まる。「巻頭」を継ぐべき清一が、高齢の祖父と幼い子供(妹・従兄弟)たちを残して村を捨てるということは、松倉家にとつても、「一巻」にとつてもあつてはならないことであつた。しかし一方では、「時局」がそれを要請していた。大叔父(與兵衛の弟)の「石津源吉」は強く反対するが、清一らはそれを押し切つて、満洲に第二の木澤村を築くため、「出征者」と同じ覚悟を持つて村を後にする。

第二幕第一場は戦後、一九四六年である。清一らは満洲で応

召し、今はソ連に抑留されているという情報が村には届いていた。與兵衛は、農地改革に従つて小作地を解放するに際して、「天保池」より下の優良な「古新田」を分け与えると宣言し、源吉はこれに反対する。與兵衛はもはや病篤く、清一の名を呼びつつ亡くなる。

第二幕第二場(一九四八年)では清一が国雄の遺骨を抱いて川口駅に到着、第三場で妹の「はる」や元小作人の若者「武石」らに向かつて、雷新田の開墾を続け、村を共同農場化するという理想を語る。帰国当初の清一は、「満蒙開拓」が他人の土地の略奪にすぎなかったと言い、そうした行為の「つぐない」としてもう一度大陸に渡つて労働奉仕するという希望を語つていたが、物語は雷新田の開墾を引き継ぐことで、與兵衛の遺志を受け継ぎながら、亡くなった国雄を鎮魂する方向へと向かうのである。和製コルホーズともいえるような新たな「村」への生まれ変わりは、「つぐない」の代行なのである。ただし、事の成否は不明のまま、雷新田に沛然と降る夕立の中で、清一の「ぢいさあー」という叫び声が響き、幕が下る。

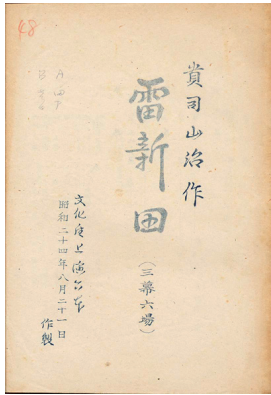


図2:「雷新田」台本

本作は、一九四九年九月十四日(二十七日に、東京日本橋の三越劇場で、

劇団「文化座」の第十二回公演として上演されている。演出は座長の佐々木隆、装置は伊藤薫朔であった。戯曲はこのとき三幕六場に改訂された⁽⁴⁾。

前述の通り、この戯曲は戦時中に実際に木澤村を訪問したことをきっかけとして執筆された。そのあたりのことが、劇場発行のパンフレット「雷新田」(三越芸能部編集、一九四九年九月十四日発行)に収録の、貴司山治「雷新田」余談」に次のように記されている。

私はこの時(*一九四二年九月)の木澤村訪問から戯曲「雷新田」を着想したのだけれど、はじめは一幕物として第一幕二場だけを書いた。それを長岡に帰住している松岡譲君のところへ送って、ナマリを訂してもらった。／当時の移動演劇用として発表しようかとも迷ったが、松岡君の忠告で、筐底にかくしてしまった。これが昭和十九年ごろ。／敗戦となつて、私は丹波の山の中で開拓をやっていた。この生活が京都府開拓農民組合運動となり、全国開拓者連盟運動となつて行つた。／はげしいそうした日々の中で、私は又「雷新田」の原稿をとり出して、第二幕を書き、全部で五場とした。「テアトロ」にのせたのがそれである。

(*は村田注、／は改行を示す。以下同じ)

一幕物の「雷新田」(以下、「草稿版」とする)は、方言のチェツ

クを依頼した古志郡出身の作家松岡譲の忠告によって、発表が控えられていたのである。⁽⁵⁾第一幕では、石津源吉が、激しながら「時局」を批判する場面があり、このことが松岡に危惧を抱かせたのではなからうか。戦後になって、「時局」批判を書き足した可能性も考えられなくはないが、源吉の批判はプロットの根幹と関わるため、大きな変更が行われたとは考えにくい。

貴司の『蒙古日記』の最終日(一九四三年十一月二十四日)には、満洲へ知識人開拓団を送出するプランが記されており、帰国後には移動演劇隊(後述)を内蒙古に創設するための働きかけを蒙古代表部と日本移動演劇連盟に対して行っている(一九四四年五月頃)。「雷新田」草稿版の執筆時期は特定できないが、おそらく満蒙旅行からの帰国後半年ほどの間に、「時局」への積極的な関与を強める中で書かれたものと思われる。ではなぜ「雷新田」がテーマだったのだろう。木澤村訪問時(一九四二年九月七日)の「日記」には次のような感想が記されている。

冬になると、この村は一丈も二丈もつもる雪の中に埋もれ、川口駅との交通も殆ど杜絶するらしい。村の戸数は八十六、稲作、畑作、養蚕。全戸自作農ばかりかと思つたら、小作人が二十何戸あるといふ。どの家も相当大きくて、富裕な村である。八十六戸が、星野、廣井、間野、小林、平沢、阿部などの姓に分れ、星野姓のものだけが二十何戸も

ある。その内の十二戸を一巻（まき）として、とよさんの家はその一巻の巻頭（まきがしら）である。巻頭といふ古来の自治制をこゝへきてはじめてみる。珍しく思ふ。二時間あまり星野さんの家でいろ／＼とむしろ村のことばかりきいて引きあげ、その村のことを、もっとよくききたいと思つて、今度は国民学校へ行く。

貴司は、「巻」を「古来の自治制」と理解している。現代社会において、「古来の自治制」なるものがそのままに機能していたとは考えにくい。しかし、その遺制ともいふべき山上の集落は、いわば「東亜協同体」の原型（論理を待つまでもない最初の自治共産社会）として貴司の目に映つたものと思われる。したがつて、そうした共同体を題材に選び、戦時下におけるその亀裂や葛藤を描くということは、「日本」の現状を見定めるための思考実験を行うことでもあつた。いいかえれば、木澤村というトポスそれ自身が物語の主題であつた。

二 日本の母

與兵衛の弟・石津源吉によれば、木澤村の歴史は古く、同村の八幡神社の縁起帳には、欽明天皇（在位五三九～五七一年）の時代に神木が切り出された記録があり、その神木を背負つて入植したのが松倉の家だという。源吉が、松倉家の存在をふまえて

「日本の国はこういう山の中の村にいたるまで、古い伝統と制度で下から固めあげられている」と説くとき、そこには、自分たちこそが、記憶の古層をくぐつて本来の「日本」なるものとつながっていることの自覚と自負を表明していたはずである。源吉の「時局」批判は、こうした「古い伝統」の論理の側からなされることになる。

おう、昂奮するとも！ 翼賛会や青年団の役員が、時局をタテに村をこわすならこわすがええ。（中略）無頓着にやれ国策だ、それ共栄圏だと一夜づくりの時局思想で片っぱしからこわして行くのなら、それこそ国をつぶすやり方というもんだこつて。⁽⁶⁾（p.71）

古来の村の伝統に依拠して、「時局」が批判され、村の危機的状況を示すことによって、戦争や国策なるものの矛盾が顕わにされている。このままの文言が草稿版に記されていたとは言い切れないものの、「雷新田」第一幕は、巧みに対抗的な言葉を発する人物を造形したとひとまずはいえるだろう。

この戯曲の元になつた木澤村行きは、日本文学報国会と読売新聞社が提携して企画した「日本の母」というシリーズの取材旅行であつた。戦死した兵士の母親などを各都道府県から一名ずつ、東京のみ二名、樺太から一名の合計四十九名を選び、それぞれ異なる文学者が取材して訪問記に仕立てて顕彰するとい

う企画である。貴司の他、川端康成、高村光太郎などの作家・詩人らが名を連ねている。一九四二年九月から十月にかけて『読売報知新聞』に連載された後、『日本の母』と題して一九四三年四月に春陽堂書店から刊行された。⁷⁾

同書の跋文(中満義親筆)によれば、「聖戦完遂」のために、農山漁村の無名の母を顕彰するとの目的で立案され、「軍人援護会」の協力によって主催者が「銓衡」したのだという。取材された女性の多くは、病や戦争で夫を失って、母一人で多くの子供を育てあげており、しかもその子(場合によっては複数の子供たち)が戦死しても、気丈にふるまい力強く生きている、という姿が描写されている。「大東亜戦争」を戦う兵士を讃えた詩集などとは違い、そこにあるのは夫や息子の死を私的に悼むことさえ許されない母たちの姿であり、文学報国会の文化事業のなかでもとりわけ痛ましい。

たとえば甲賀三郎が取材した樺太の「水本ハマコ」という女性⁸⁾は、「二児を軍隊に送り、軍事扶助さへ辞退して、一人ぼつちで依然として激しい労務に従つて」いる。貴司山治が取材した「星野とよ」もまた、三児を失つてなお「気強」くふるまっている女性であった。

貴司は、靖国神社の例大祭に招かれている「とよ」が身を寄せていた千葉県館山の彼女の三男の家を訪ねて、そこで「とよ」と面会した。彼女が流す涙を見た貴司は、「温い情愛にみちたよき妻であつた」と記すが、「淡々としてその悲しみを口にし

ない」ことには「合点」がいけないと述べている。その後、木澤村を訪ね、彼女の家が「巻頭」であつたことがわかると、「泣かない母」の理由を古代からの族長意識に求め、謎が氷解したかのように「防人の頭なのだ」と記す。親子を古代の「忠臣」になぞらえて讃えることで、貴司は取材記者としての役目を果たそうとしていたのである。しかし、この短い文章のなかで感動の頂点は次のようにどこに置かれている。

あゝ、東山村木澤！ 私はこの山の中の越後の村を尊ぶ。村人の先祖代々の努力によつてつくられた米作山村、そこからは今年などは、五百人の村人が食ひあました七百俵の供出米が都会に送られる。越後の一山村が日本を養ふのだ。その上に村からは多くの出征者が出て国の守りについでゐる……⁸⁾

農村が、都市の食糧を、ひいては国家を支えている。その上出征して「国の守り」にもついている。農村こそが国家の礎なのである。「東亜協同体論」に傾斜していたとはいえ、貴司は、都市・国家に搾取され続ける寡黙な農民(農村)の側に立つて、その象徴として「星野とよ」を見ようとしていた。「越後の一山村が日本を養ふ」というレトリックがその証である。しかし同時に、そのレトリカルな発話において、無数の村落と幾万の兵士によつて維持される母胎としての「日本」が立ち上がる。

実は、九月七日に木澤村を訪れた際、「とよ」は留守だった。貴司は彼女に会えなかった。千葉県の子の家に「とよ」を訪ねたのはその後である。記事では、館山で「とよ」を取材した後で木澤村を訪ねたというように再構成されている。(日本の母)という物語を描くにあたって、「とよ」の心理を謎として提示した上で、そこに「族長意識」を代入するという方法が採られたのである。

作家たちには、それぞれが捉えた現実を「あるべき姿」へと脚色／適合させることが求められていた。書き手にそうした身体訓練を施すこと、そのようにして現実加工可能であると思わしめることこそ、『日本の母』のような企画の重要な教育効果だったにちがいない。その際、女性たちの寡黙や沈黙は、テクストにおいて意味を充填すべき空所として機能した。(日本の母)とは、現実が記述・再編され、「東亜協同体論」へと回収されるポイントだったのである。

同様の事態は、「雷新田」でも起こっていた。

戯曲の第一幕第二場で、清一を見送らずに開墾を続ける與兵衛のところへ、新聞記者「天野」とカメラマン「前田」が通りかかる。彼らは、二児を失ったなお孫を満洲に送りだしたという老人の取材にやってきたのであるが、目の前の男がそれだとは気付かず会話を行った後、新聞記者「天野」は次のような解説を加える。

だいたい稲という奴が南は南洋から北は満洲のような寒いところまで、どこにでもつくれる適応性の豊富な植物なんだ。日本の百姓はそれを立体的に利用したんだ。どんなに高い山の上でも切りひらいて、そこを田圃にして稲を植える。平地から高地へ土地を上へ上へと求めて行つて、三千五百萬石を五千萬石にし、六千萬石にして行つたんだよ。実際、古志郡のような山地の農民なんか、同じ越後でも、中蒲原あたりの平原地帯の百姓とくらべて、どんなにわりの悪い労働に服してきたか。しかもこの辺りの農民のだけ一人、有利だからといって平地におりようという者はなかった。みな先祖代々の村を守り、山をひらいて、(中略)三十年間の増産は、みんなこういう山の中のわずかな耕地を切りひらいて行つた百姓の汗のしずくなんだ。(p.173)

この引用の後では、「やれ増産だ、食糧自給だと目の色かえたやうにいつてもらいたくないね。百姓は昔からちゃんとやつてのさ」とまで言う。寡黙な農民の心中を代弁するこの発言は、作品テーマへの自己言及的な語りとなっている。連綿と農業を続けてきた木澤村の(すなわち日本の)農民は、「時局」にかかわらず、はるか以前から食糧増産・食糧自給を実践していたのである。これは、古代からつづく開拓・開墾の努力を救済する言葉であり、あまりにもないがしろにしてきた「百姓」に今さら「増産」を強いる政府への痛烈な批判である。

しかし同時に、「昔からちゃん」と行っていたという批判が有効だとすれば、それは現実を一旦肯定した上でなされるきわどい論理である。なぜなら、「増産」を要請する「時局」そのものは容認され、さらにそれを奨励することへとつながるからである。実際、與兵衛の写真を撮ったカメラマンは、これで「増産コンクール」で一等を取れると喜ぶのである。

批判は協力へ、たやすく滑りこむ。〈日本の母〉と同じポイント(空所)は、ここでは寡黙な〈百姓〉である。この代弁者・天野の発言を「作者」の主張、あるいはテキスト全体のテーマとして理解することもできそうだが、しかしそのことを一旦留保するなら、すべては両義的で、決定不能となる。テキストは、批判と協力の両極へと引き裂かれたままに宙づりされている。あるいはこうも言えるだろう。テキストを宙づり状態へと転化させて批判を脱臼させると同時に、現状の追認へと導く力こそ、〈開拓Ⅱ転向〉の言説力学だったと。

三 移動演劇

前掲の「雷新田」余談」には、戯曲を「移動演劇用として発表しようか」と考えていたことが明かされていた。

移動演劇とは、内閣情報局・大政翼賛会の統制下に一九四一年六月に設立された日本移動演劇連盟(委員長岸田国士)が推進した国策宣伝のための巡回演劇運動である。連盟結成に先駆け

て、一九四〇年九月に東宝移動文化隊(図3)、同年十一月に松竹移動演劇隊が結成されている。歌舞伎、新派、新劇を問わず、また弾圧後の左翼演劇人たちの多くもこれにかかわった。

後に「雷新田」文化座公演で舞台装置を担当した伊藤熹朔は、この移動演劇連盟の事務局長を務め、運動に深く関わっていた人物であった。⁽⁹⁾彼の『移動演劇十講』(健文社、一九四二年、図4)によれば、「移動演劇は大都会の芝居を見慣れた観客を対象にしてゐるのではなく農山漁村、工場鉱山等の勤労層に見せることが主な目的」(p.61)で、その脚本は、「楽しみと共に直接啓蒙のよすがとなる主題が要求される」(p.60)とされている。「移動演劇用」を意識していたということは、貴司が、実際に農民たちに見ってもらうことを念頭においていたこと、また、「国策」に沿う主題であると認識していたことを示している。



図3：戦時下の移動演劇の様子(東宝移動文化隊)、『写真週報』182号(1941年)

また一九四二年二



図4：『移動演劇十講』
(装幀伊藤熹朔 1942年)

月に結成された文化座も、劇団の出発当初から移動演劇にかかわっていた。敗戦時は、満洲演芸協会の招きで新京にあり、帰国したのは一九四六年八月のことであった。⁽¹⁰⁾ 帰国後の文化座は、戦後しばらく存続していた移動演劇連盟の仕事も継続し、また独自に炭鉱地帯などでの巡業も行っている。前掲のパンフレット「雷新田」の中で座長の佐々木隆は、「戦争で、都会が焼けただれ、そこから逃げだした汽車の窓から田舎の農村の風景が美しく緑に輝いているのを見たとき、まことに当然な、しかも公平な、「百年のかたきを一瞬でとられた」ような気がして、正直云つて気持よかつた」（ととりとめもなく）と書いていたが、文化座は、移動演劇を内面化した感性を戦後にまで持ち越した劇団だったのである。開拓者・貴司山治の作品が、伊藤熹朔を迎えて舞台化されたのは、いわば当然の成り行きだった。

しかし、実際の公演成績は思わしくなかったようである。『劇団文化座五十年史』（一九九二年）には、この不入りで「大劇場での上演を、一時的にせよ臆病にした」（p.88）とまで書かれている。大当たりだった前年の東京公演が、三好十郎原作の「その人を知らず」で、これは出征を拒否したキリスト者の姿を

通して日本人の罪と過失を問い直すというテーマであった。戦争責任という点では「雷新田」は、「その人を知らず」に通じる部分があり、劇団は二番煎じを狙ったともいえるが、興業不振の要因は複合的であり、必ずしも脚本の罪ではないだろう。⁽¹¹⁾

同時代評では、『朝日新聞』東京版（一九四九年九月十七日付、朝刊、二頁、署名「井沢」）が、「農地改革の問題を中心に日本農村の封建的な姿を描いた貴司山治の創作劇」と要約しつつ、「くどくて、こなれていない」、「演技の形が古く、動きとセリフが分裂」しているなどと厳しい評価を下していたが、この記事を書いた井沢淳は、『テアトロ』一九四九年十一月号の劇評「文化座と雷新田」では、次のように書いていた。

戦後、満洲から引揚て来たこの劇団は他の新劇団と比べて非常に不利な立場に立っていた。（中略）それにもかゝわらず、この劇団の諸君は断然、自分らの演劇を守ろうと激しい団結に燃えていた。／息ずまるような舞台のセリフのやり取りは、若い新劇団の熱情のほとばしりのようである。あたりの演劇的修業なのだが、そこに演劇の楽しさが忘れられているようであった。忘れられている——といったところで、それを思うよりもっと切実な演劇的な情熱であつた。

井沢の厳しい評価は、引き揚げ劇団としての文化座が、独自

の道を歩もうと苦闘していることへの理解の上で発せられていたのである。また、『日本演劇』一九四九年十月号の利倉幸一

「文化座雑感『雷新田』評によせて」でも、「文化座は閨歴そのものが戦争中につながつてゐる」とした上で、「この時代」に朴直に生きてゆかうとする態度。これはめづらしい、「愚直な百姓と朴直な文化座。性格が合致した」と指摘されていた。「雷新田」公演は、劇団の将来に期待を抱かせるに十分な芝居だった。

しかし同時にこれらの評は、劇団の反時代性をも示唆している。とりわけ「雷新田」では、満蒙開拓に動員された農民自身の加害意識が問われていた。また、移動演劇に起源をもつ、いふなれば土にまみれた舞台であった。東京の観客たちの中には、敗戦前後の食糧難の中で、郊外の農村に買い出しに出かけて、足下を見られながら衣類を売り払った記憶を持つ者も多くいたはずである。そうしたことが入場者の低迷に直結したかどうかは分からないが、同じような戦争批判・自己反省の舞台であつても、「その人を知らず」に比して「雷新田」はあまりに農村的であり、「百年のかたき」を見せつけるような反都市的舞台だったことは確かである。

「時局」に対する批判と協力の両義性。移動演劇をルーツとする反時代性と反都市性。原作のテクストが戦時下から持ち越されたことと同様に、舞台「雷新田」もまた、戦時下の文化状況からそのままに取り出されたかのようにである。

ところで、戦時期の穀物流通に詳しい大豆生田稔によれば、

戦前期の食糧需給構造は安定的に推移していた。それが急速に崩れるのは、日中戦争の開戦にともなう貿易統制によつて、アメリカ、オーストラリアからの小麦の輸入が途絶したことであつた。日・満・支ブロック圏内での深刻な小麦不足が満洲産の粟の需要を押し上げ、これによつて玉突き式に穀物流通は混乱する。それまで満洲産の粟は朝鮮半島で消費され、それが朝鮮米の日本への移出を担保していたが、その供給がストップしたことで、結果的に日本は「南方」を確保して「外米」を移入せざるを得なくなつたのである。

満洲では戦前期（一九三四―三六年）の平均で、三五・七万トンの米を生産し、四三・八万トン消費していた。日中開戦後（一九三七―三九年）の平均では、一二万トン増産し、五七・七万トンの生産高であつたが、消費は七五・七万トンと、三二・九万トン増加しているのである。この数字が示すのは、「満蒙開拓」が進むほど米が足りなくなるといふ現象である。これを自給率で表すと、八一・五％から、七六・二％へ、五・三ポイントの減少であつた。満洲に移り住んだ大量の日本人移民と関東軍は、間違いなく米の消費を押し上げ、食糧不足に拍車を掛けたのである。松倉清一らは、何のために、いったい何をしに満洲にまで渡つたのか。そのことがもう一度問い直されねばならない。そして、この反時代的な舞台で観客たちが何を見たのかを確認したい。

四 開拓者の末裔

清一の祖父松倉與兵衛には、「巻頭」としての矜持があった。その源泉は、ひとえに最古参の「開拓者」としての歴史とその自覚に求められる。営々と切り拓かれてきた田圃は、先祖から代々受け渡されてきた遺産であり、そこにいくらかの利子を付け足して次代に贈ることが彼の務めであった。だからこそ、八十を超えてなお「開拓」を率先し、山頂に「雷新田」を切り拓いている。しかし、與兵衛は、「開拓者」としての倫理を徹底的に内面化しているからこそ、孫の清一を止めることはできない。なぜなら清一もまた、同じ「開拓者」倫理に則って行動していたからである。松倉清一は、義勇軍に入隊する際の挨拶で渡満の意気込みを次のように語っていた。

横里君にとつては大陸の新天地へ移任^{マツ}して、新しい第二の村をつくる理想がその宿命でありましょう。ぼくは地主の倅であります。しかし、ぼくは農村に生れたものとして、自分の身に横里君と同様の理想を感じます。木澤の村を救うことは巻頭たる松倉清一の先祖から与えられた義務であります。ぼくは率先して第二の木澤村を、横里君と二人で満洲につくります。(89d)

清一は、大陸に「第二の村」を作ること「先祖から与えら

れた義務」だと述べている。石津源吉は「長男の分際で」(p.63)と清一を非難するが、地主の長男だからこそ、この「出征」は小作人の口減らしなどとは次元の異なる国家的な崇高さに参与することの証明ともなるだろう。清一を迎えに來た助役の「竹澤」は、「国家の要請に挺身して満洲へ出て行く」ことを、「その精神において、その目的において、出征同様である」と語っていた(p.68)。ここにおいて「開拓」は、食糧問題である以上に、倫理の問題としても提示されていたといわねばならない。

前出の白取道博『満蒙開拓青少年義勇軍史研究』によれば、青少年義勇軍は都道府県別に割当があつて、良質の人材を効率的に囲い込む必要から、十五、六歳の高等小学校卒業者をターゲットとして募集活動が行われていた⁽¹³⁾。出願者は農家の次男以下が七割ほどを占めていたとはいへ、戸主・長男も一割ほどあつた⁽¹⁴⁾。さらに、「義勇軍」は「郷土」を単位として編成され、彼らには「郷土の代表者」といった宣伝がなされていた。祖父與兵衛に見送ってもらえない清一が、助役の竹澤に「君は古志郡南部の班長だぜ」(p.67)と非難されていたことと照応するだろう。

石津源吉は、「村の制度をこわし、国の伝統を破つて、何が御奉公じや。清一の時局熱を木澤の歴史にてらしてまともに導いてやってくれるのが、(*青年団代表の)廣瀬さのような知識階級のむしろ責任だこつて」(p.77)と主張していたが、移民送出を手がけた拓務省は、「家族こそが青少年の応募を抑止す

る存在である⁽¹⁵⁾」と判断し、応募勸奨を担う教員を対象にした講習会まで開いていた⁽¹⁶⁾。源吉のような反論はとうに予見され、地域ぐるみで対策されていたのである。

太平洋戦争が開始され、大日向村のような大規模な分村移民が下火になる中、青少年義勇軍は満蒙開拓の主軸となりつつあった。食糧需給は混乱をきたし、対ソ戦を想定した国防備も行わなくてはならない。もはや問題は、内地の余剰人口対策どころではなくなっていたのである。そこでは、父が戦死してもなお郷土の発展を期して渡満しようとする松倉清一のような人物こそが要請されていたはずである。

「雷新田」に悲劇があるとすれば、この清一の一途な情熱と責任感そのものであった。現実には何一つ倫理の問題ではなかったからである。清一が訓練所に入る約半年前、一九四三年三月には、「開拓政策戦時体制促進要綱案」が開拓総局によって示され、「ソ」満国境要線を中心に義勇軍のさらなる補充が目指されていた。清一の「決意」や「理想」は出来合いの言葉に過ぎず、その純粋な郷土愛はすでに何重にも囲い込まれていたのである。

前述のように、開拓者の末裔である松倉家は、村の起源にまで遡る歴史を持ち、その先祖は八幡神社の神木を担いで入植したとされる。八幡神は国家鎮護の神であり、武家の守り神ともされたことから東国征伐の歴史とも縁が深い。大和政権が地方豪族や先住民族を駆逐し、東国を支配／占領したことの証を、

松倉家は神話的伝承とともに「開拓」という営為によって今に伝えていたのである。入植当時の松倉家は、明治期の屯田兵や満蒙開拓における武装開拓団と同様の性質を備えていたはずである。だが、このいにしへの占領の記憶は遠く消え去り、完全にテキストの外部に置かれている。

そのような〈木澤村〉を実験的トポスとして、與兵衛が「開拓者」の倫理を強調し、源吉が伝統的・日本的な共同体の価値を強調していたのである。両者は清一の「満蒙開拓」をめぐる対立したが、実はいずれの主張も元をたどれば、同じ起源へと行き着く。それは、一言でいえば農本主義的な「君臣共治」のイメージに限りなく近い。テキスト中で、くりかえし「加藤先生」と出て来るのがその〈指標〉の一つであろう⁽¹⁷⁾。加藤完治は、満蒙開拓青少年義勇軍の内地における訓練施設であった「内原訓練所」の所長であり、満蒙開拓事業に影響力を及ぼした人物であった。戦時下の山間に幻視された開拓者コミュニケーション〈木澤村〉。テキストは、その実験場に走るいくつもの亀裂を露呈させた。そしてそのことによって、テキストの外にある震源地を指し示そうとする。しかし、あくまでもそれは示唆されるに過ぎない。上記のいくつかの〈指標〉から類推すれば、この初出テキストが次のように改訂されたことは一応納得できる⁽¹⁸⁾。

改訂された台本版では、村の助役竹澤が軍需物資の横流しで捕まり裁判で断罪される噂が伝えられ、青年団代表として清一に「出征者」と同じ覚悟を説いていた廣瀬はきわめて利己的な

人物として描かれている。末端とはいえ、戦前の支配権力の不正や俗悪さが暴露されることで、観客は、村を崩壊に導いた存在が誰であり、それがいかに低劣な本質を持つものであったかを想像することとなる。清一に付与された共產主義的イデオロギーが、そうした「悪」と対置された「正義」であるのも分かりやすい。こうした物語の明瞭化は、実際の舞台を観ている観客たちにプロットを納得させる上でも必要な配慮だっただろう。

だがここにはすでに、戦後何度も再生産されていくこととなる物語の祖型が現れている。その定型的な物語とは、日本を誤らせたのは軍部であり、ファシスト官僚たちであり、彼らの無責任体質であるというものだ。しかし一方、松倉清一が古代からの開拓者／義勇軍の末裔であり、加藤完治が「日本精神」を強調していたことから考えれば、テキストの外部にある震源地は「天皇」なのかもしれない。だとすれば、初出版に対する台本版は、軍人・政治家を断罪し、昭和天皇を免責した極東国際軍事裁判と同じ構造をもつことになる。

しかしはたしてそうなのだろうか。軍部や官僚であれ、天皇であれ、テキストは、そのような外部に対象化されたものとしての「責任の所在」を教えようとしていたのだろうか。とりわけ、明確な悪者も登場せず、「開拓」にこだわる清一の情熱の源も明示されていない初出版のある種の分かりにくさを、台本版の説明は正しく解きほぐしたことになるのだろうか。観客あるいは作者や演出家さえも）が見逃したのは、敗戦を挟んで接合

されたテキスト／舞台の、その落ち着きの悪さ、言語化されない違和感そのものだったといわねばならない。

五 終わりなき「開拓」——まとめにかえて——

筐底に隠されていたテキストは、敗戦によってようやく発表の機会が与えられた。貴司山治は、第二幕・第三幕を書き継いで完成させた。八月十五日は、第一幕と第二幕の間にあって、その接続の処理に無理はない。

完成されたテキスト（初出版・台本版）には二つの読解可能性が示されている。一つは、すでに見てきたとおり「開拓者」としての自負と矜持が、世代を超え、歴史を越えて受け継がれる物語である。もう一つは、第二幕で、戦後の山間地農業に共産的集団経営・多角経営の導入を推奨するというイデオロギー的かつ実利的側面である。特に改訂された台本版では、その手立が詳細に解説されている。かつて『ゴー・ストップ』（中央公論社、一九三〇年）で、通俗的ストーリーに乗せてストライキの実践法を大衆に分かりやすく説いた貴司山治らしい配慮である。しかし、木澤村で農村を集団化・多角化することには、いったいどれほどの現実性があったのだろうか。初出版・台本版ともに、アンゴラ兎の飼育に希望を託す姿が描かれている。たしかにアンゴラ兎は戦時中から農家の副業として注目を集め、戦後には投機的と呼べるほどに、人気が高まっていた。⁽¹⁹⁾しかし、

馬県附近の山の中へはいつて、新しい畑と村をつくるつもりなんだ。

清一たちのかつての渡満は、村を救うためだった。帰国後の再渡満の希望は満洲の民に「つぐない」するためである。さらに農地改革後の木澤村への帰村とそこでの新農法の実践は村を救い、死者につぐなうためである。最後に、右の「国営開拓」参加は、「土地のないもん」を救うためである。第一幕に接合された「雷新田」は、「救村」と「贖罪」が交互に繰り返される物語であった。

ところで貴司山治も丹波の山中で関わった内地開拓は、事變下の食料増産を主な目的として一九四一年三月に開始され、やがて大戦末期の疎開者対策へとシフトしたものであつた。それが戦後には、大陸からの「引揚開拓農民」の受け皿へと再編さ

れていた。安岡健一によれば、「引揚開拓農民」の多くは「送出元である「地元」へと戻ることができず、新たな地へ向かわねばならなかった」のであり、引き揚げを経て、「再び国策としての開拓政策に則つて入植」していた。⁽²⁰⁾ 右の引用で、「長野

県さかいか、群馬県附近の山」に入るとあるのは、かつて『青

人草』で舞台となった浅間山麓あたりを想起させるが、ここにも戦後、「引揚開拓農民」が入植している。疎開者や引揚者を中心とする農民共同体に合流しようとする清一の姿は、かつて満洲へと「送出」された農民たちにとどこまでも寄り添うことを

意味するだろう。〈開拓Ⅱ転向〉の論理の実践としての「開拓」

の物語は、〈開拓Ⅱ救済〉の希求によって上書きされたのである。

ただし、前章で述べたように、初出版の分かりにくさにこだわるなら、このテクストが、単に〈救済〉を希求するものと捉えることはできない。むしろ、〈救済〉の希求さえ「開拓」からは逃れられない物語としても現れているのではないだろうか。戦時下に起動された〈開拓〉というプログラムは、敗戦など意に介さないかのように、その運動を止めないのである。それは、満蒙開拓から内地開拓へと連続する農民たちの姿に重なる。テクストは、満蒙開拓の過ちに気付きながら、それでもなお、あるいはそれゆえに、「開拓」に励むことを奨励している。しかしその「つぐない」としての「開拓」は、誰のいかなる行為の代償だというのか。清一たちが「満洲」の曠野で見た（あるいは関与した）出来事はどこにも語られない。もしかすると、物語は〈開拓Ⅱ転向〉にともなう日本人のトラウマのような記憶を〈救済〉することに向かっているのかもしれないが、その真偽も不明のままなのである。

言説空間としての〈木澤村〉では、批判は協力へと横滑りし、開拓者の末裔としての矜持は「時局」に包摂されていった。批判と協力が、選択可能な異なる二つの立場だと考えるのは「戦後」的な思い込みではない。その上、縁起帳に記された神話的な入植譚も、清一たちの満蒙開拓も、出来事の外形だけしか示されず、その核心部ではいったい何があったのかを私たちは

知ることができない。「雷新田」（とりわけ初出版）は、急激な言説空間の変容の中で、そうした不確定性そのものを顕わにする歴史の開口部Ⅱ裂け目なのである。一方、台本版は、そうした不明瞭さ・分かりにくさを残しつつも、戦後の観客に了解しやすいよう綻びを繕ったものであった。

いまだ分節化されない土地を、人間が利用可能な状態へと改編しつつ、原野の風景を消し去るのが「開拓」だとすれば、言説行為としての〈開拓〉もまた、起源の記憶を消し去りつつ、読者に了解可能な言説空間を準備するだろう。それは戦後を再出発するために必要なことであつたといえ、転向以後の苦難の記憶（無数の人々の記憶たち）を上書きしていくことでもあつた。ふもとの開拓地を失い、天空に取り残された「雷新田」は、希望の象徴である以上に、今まさに喪失されつつある〈記憶たち〉のかすかな残像だったのである。

注

（１） 本誌前号の拙稿「計画された国土、構成された未来——貴司山治『青人草』と〈東亜協同体の論理〉」を参照されたい。

（２） 貴司山治研究会編『貴司山治全日記DVD版』（不二出版、二〇一一年）所収。「開拓」のアナロジーによって作家主体の再確立が希求されている点は興味深い。以下、貴司山治の「日記」からの引用はすべてこのDVD版に拠る。

（３） 満蒙開拓は、一九三二年の「満洲国」建設に伴って始まった。当初は在郷軍人会を中心とする武装移民であつたが、一九三七年以降本格化し、大規模な分村移民が行われた。同じ三十七年には、「満

- 蒙開拓青少年義勇軍」の設立が閣議決定し、翌年から、十五歳から十八歳の少年たちが茨城県内原町にあった「内原訓練所」で数ヶ月間の訓練を受けた後に送出された。白取道博『満蒙開拓青少年義勇軍史研究』（北海道大学出版会、二〇〇八年）によれば、一九三八年から一九四五年までの間に、八万六五三〇人が送出されている。清一たちはこの内原訓練所に向けて出発するのである。
- (4) 台本版は公刊されていないため、貴司山治旧蔵本を息子伊藤純氏に閲覧させていただいた。表紙には「昭和二十四年八月二十一日作成」とある。台本版でも大筋は同じであるが、国雄の妹「きくえ」が新たに登場し、女郎として売られて行く彼女を共産党員の青年「桜井」が弁舌によって救助するエピソードが付け加えられている。総じていえば、共産主義的な価値の賞揚と、戦前権力の本質暴露といった要素が強調されたものとなっている。
- (5) 夏目漱石の弟子としても著名な松岡譲は、一八九一年生まれで貴司よりも八歳年長であった。「日記」によれば、貴司は一九二五年一月に、京都鹿ヶ谷に住んでいた松岡を初めて訪問して以来、何度も訪れ、妻筆子からも手料理を振る舞われている。
- (6) 貴司山治『雷新田』（『テアトロ』一九四九年九月）。以下、断りない限り本文からの引用はすべて初出に拠り、掲載誌のページ数を付すのみとする。
- (7) 貴司山治『尊し、女丈夫の心事 白木の箱で迎えた三人の愛児（日本の母7新潟県星野とよさん）』（『読売報知新聞』一九四二年九月十五日）。のち『日本の母』収録にあたり「巻頭の妻の心 新潟県・星野とよさん」と改題。
- (8) 日本文学報国会編『日本の母』（春陽堂書店、一九四三年）一一二頁。引用は復刻版『帝国』戦争と文学25日本の母他一篇（ゆまに書房、二〇〇五年）による。
- (9) 移動演劇関連の編著に『移動演劇の研究』（日本電報通信社出版部、一九四三年）がある。伊藤嘉朔は貴司山治原作『坂本龍馬の妻』（金子洋文演出、新橋演舞場 一九四〇年八月）の装置を担当し、『維新前夜』の装幀も手がけている。
- (10) 長春（旧新京）での苦難の一年の間には、命を落とした開拓民たちの墓標削りまでしたという。河村久子『満洲で聴いた玉音放送』『劇団文化座五十年史』（劇団文化座、一九九二年）所収。
- (11) 実際、「その人を知らず」の大阪公演は不入りで、その要因は宣伝の失敗などの「複合作用」とされている。同前、七九頁。
- (12) 大豆生田稔「戦時食糧問題の発生——東アジア主要食糧農産物流通の変貌」『岩波講座 近代日本と植民地』第五卷（岩波書店、一九九三年）一八一頁（表2）。
- (13) 前掲『満蒙開拓青少年義勇軍史研究』一六三頁（表33）。
- (14) 同前、一三二頁（表26）。
- (15) 同前、一六五頁。
- (16) 同前、一七〇頁。
- (17) 加藤完治『日本農村教育』（東洋図書株式会社、一九三四年）では、「農村と云ふものは自分と離るべからざる関係にある所の大きな命」であり、「日本精神」のもとでの村民の「一致協力」が必要とされている（一一七頁）。
- (18) 貴司山治『雷新田』余談（本文前掲）によれば、劇団側から改訂の要望があった。貴司もそれに賛同して改訂に協力したので、台本を「定本」とすると宣言されている。
- (19) たとえば、『朝日新聞』朝刊（一九四九年四月七日、二頁）の写真付き記事「ふえる「アンゴラ」には、「輸出のホープ」アンゴラうさぎは終戦時には全国で六万頭しかいなかったが現在四十万頭、年内には百万頭を突破という盛況ぶり」とある。
- (20) 安岡健一『他者』たちの農業史——在日朝鮮人・疎開者・開拓農民・海外移民』（京都大学学術出版会、二〇一四年）一七六頁。

日本語は誰のものか？

ポストコロニアル台湾の日本語作家・黄靈芝の方法

下岡友加

はじめに

近代の日本は国民国家としての遅れを取り戻すため、急激な変革＝欧化と強力な国民統合を必要とした。その際、「国民」という「想像の共同体」(ベネディクト・アンダーソン)^①とともに創造されたのが「国語」である(イ・ヨンスク)^②。ここで確認しておきたいのは、一国・一言語・一文化主義という同一性を前提とする言語ナショナリズムは、敗戦によって抹消されることなく、現在の日本においても依然として生き残っているということである。西川長夫はそのような純粹言語思想を否定し、「国語」の虚構性を次のように指摘した。

言語は交流し変容する。言語はつねに雑種的であり、純粹で孤立した言語などはありません、国語(日本語、フランス

語、等々)は虚構である。言語を民族と一体化させ、何かある有機的な統一体があつて、そのなかでは直接無媒介的なコミュニケーションが成り立つという考え方(国語や母語)、逆に言えばそこに引かれた境界を越えたとまったく別の言語や世界が存在するという、国境や国民国家の原理を反映した考え方を変えなければならない。現存する言語は交流と変容の過程における一段階であり、一言語は結局は他「多」言語から成り立つ。(『国民文学の脱構築』『国民国家論の射程』柏書房、一九九八・四、六四―六五頁。傍線は下岡が私に付した。以下同様)

国民国家を支える「国語」という制度は、言語を必須の媒体とする「文学」の場において、よりあからさまにその姿をさらす。小森陽一は「日本語」と「日本文化」が「最も直結している領域」として「日本文学」をとりあげ、近代日本が「日本文

学」を通じて、「日本」―「日本人」―「日本語」―「日本文学」という結合の再生産」を「繰り返し演じ」てきたことを指摘した。⁽³⁾このような四位一体を前提とする「日本文学」のありようは、日本語作家として出発して既に一八年目を迎えたリビ英雄に、次のような感想を吐露させている。

日本人として生まれた人たちから、「日本語ができるのか、できないのか」だけではなく、深層において「所有しているのか、所有していないのか」という問題を、絶えず突きつけられてきたような気がする。そして最後には、日本語の「所有権」が持ち出される。日本人として生まれなかったものには、日本語の「借地権」という条件がついていたのである。借地はありうるけれど、所有ではない。いずれ、返さなければいけない。『我的日本語』筑摩書房、二〇一〇・一〇、三三頁

リービの言は、「日本」―「日本人」―「日本語」―「日本文化」という結合が未だにいかに強固であるかを我々に教える。

近年、黒川創編『外地の日本語文学選』全三巻（新宿書房、一九九六・一・二三）等の刊行により、作家の属する国籍・民族・文化ではなく、あくまで使用される言語に重きを置いた「日本語文学」というカテゴリーが一般に認識されつつある。しかし、一九七〇年代初めからいち早く自らの作品を「日本語文学」と

公言してきた在日朝鮮人作家・金石範は「日本文学」に対し、二〇〇九年に改めて次のように批判した。「日本文学は日本語文学であるけれども、日本語文学≠日本文学ではない」「日本文学は、これまで、単一民族の文学としての日本文学という枠組みをもつて、それで、在日朝鮮人の文学を計ろうとしてきた。いわば、日本文学には他者がなかった。朝鮮の文学は、他者でさえなかった」。⁽⁴⁾

果たして他者を持たない「日本文学」は、一体いつになれば自身の貧しさと偏狭さを自覚し、そこから脱することができるのだろうか。

本稿は、右のような問題意識に基づき、日本統治下の台湾で日本語を習得し、公用語が中国語へと転じた戦後も日本語で創作し続けた台湾人作家・黄霊芝（本名…黄天驥。一九二八―）の文学営為をみようとするものである。植民地統治という帝国日本の占領行為が台湾に遺した〈負の遺産〉としての日本語。それを自己表現の道具として利用する黄の営みは、未だナショナルな民族意識を付帯し続ける「日本語」「日本文学」を相対化する視座を我々に与えてくれるはずである。

一 なぜ日本語を使うのか？―黄霊芝の言語観―

黄霊芝は一九二八年、台南市の裕福な家庭の末子として生まれた。父・黄欣（一八八五―一九四七）は台湾総督府評議員をつ



写真1:『黄灵芝作品集』全21巻(一部)

とめる知名の人物であったため、台湾人でありながら、例外的に日本人子弟のための学校に通った。日本の敗戦時、一七歳であった黄は、既に作家になることを志すほどの高度な日本語の使い手であった。

戦後の言語転換、すなわち国民党政府による中国語公用化と日本語禁止(一九四六年、新聞雑誌の日本語欄廃止)により、黄は一度は文芸の道をあきらめた。しかし、一九歳で結核を患い、「あす死ぬかもしれない」と言うと言葉の作品を作って生き証しを残したいと考えた。だとすれば、日本語を使うしかな

かった(「自序」黄灵芝作品集 巻一) 一九七二(一)という切迫した理由から、日本語による創作を開始する。その後、三〇代後半に結核は治癒。結果として、黄は今日までに俳句、短歌、小説、評論、童話など幅広いジャンルに渡る日本語作品を生み出

した。彼の主要な作品を収めた単著として『黄灵芝作品集』全二一卷(一九七一・一〜二〇〇八・一二)がある。また、創立当初(一九七〇)から現在まで台北俳句会の主宰をつとめており、編著に『台北俳句集』全四〇集(一九七一・一〇〜二〇二二・八)がある。

二〇〇四年、日本で出版した『台湾俳句歳時記』(言叢社、二〇〇三・四)の功績により、第三回正岡子規国際俳句賞を受賞。二〇〇六年秋には長年に渡る俳句活動が評価され、旭日小綬章を受章した。津島佑子は戦前・戦後の台湾を舞台とした小説「あまりに野蛮な」(『群像』二〇〇六・九〜二〇〇八・五)の執筆にあたり、黄の『台湾俳句歳時記』に特に学ぶところが多かったことを明言している^⑤。その他、黄の小説集として、国江春菁(日本統治下で使用された黄灵芝の日本名)著・岡崎郁子編『宋王之印』(慶友社、二〇〇二・二)、黄灵芝著・下岡友加編『戦後台湾の日本語文学・黄灵芝小説選』(溪水社、二〇二二・六)が刊行されている。台湾においても、黄自らが日本語を中国語に書き直した小説「蟹」で、一九七〇年、第一回呉濁流文学奨を受賞している。二〇〇六年には台湾の真理大学から台湾文学家牛津奨を受けた。このように日本・台湾双方で高く評価されながら、黄は未だ一般的にはそれほど知られた存在とは言えない。なぜならば、日本語で書かれた黄の作品は台湾では市場(読み手)を持ち得ず、その創作の殆どは部数の限られた作品集(自費出版)に収められているからである。台湾では黄の創作は日本語で行われているという点から、長い間評価の対象として見なされてこな

かった。また、日本では植民地の戦後についていったいに無関心であった。⁽⁶⁾

黄自身、「台湾で日本語を用いて創作することは、白いキャンバスに白い絵の具で絵を描くようなものだ」とその虚しさを語っている。⁽⁷⁾ それでは、読者の期待できない台湾で、中国語で小説を書きうる能力を身につけた後も、黄はなぜ日本語を用いつづけてきたのか。

黄は言う。「一つの言葉を覚え、それをこなすには殆んど一世代を要するものだ」「私は見よう見真似で中国語で小説を書いてはいる。がそれには日本語で書く以上に、恐らくは十倍以上の労力を要し、そして多分十分の一ほどの効果も上っていないのではないかと懸念している。短かい人生に於いてこれだけの浪費をしなければならぬ理由が何処にあるのだろう」(「自序」『黄霊芝作品集 巻一』一九七一・二)。⁽⁸⁾ すなわち、黄の日本語使用の理由には第一に効率の問題がある。小説を書きうるほどの言語能力は一朝一夕に身につくはずがない。そのことは、黄の同世代で台湾を代表する中国語作家となった鍾肇政(一九二五)の言にも明らかである。日本の敗戦時に二〇歳であつた鍾は六年後には中国語で処女作を発表した。しかし、本人によれば、それは「習作程度で、小説と呼べるものではなかった」。日本語から脱却するのに一五年かかき、二〇歳から三〇歳までの「自分の思想を体系づくる最も大切な時期」を言語習得に費やしたことで、自分の「思想が貧しいのしかたがない。

日本語も中国語も中途半端で、どうしたって大作家にはなれない運命だ」と鍾は述べている。⁽⁹⁾ 気の遠くなるような時間と労力を費やして新たな言語を習得しても、表現や思想上の不十分を感じずにはいられない。かと言って、日本語では台湾で作家として立つことはできない。いずれにしても台湾の人々が戦前のみならず、戦後にも言語をめぐる深刻な葛藤に苦しめられ続けたことに変わりはない。

こうして五〇年に渡る日本の統治は、戦後も台湾の人々に重い負担を強いてきた。もはや言うまでもなく、『日本語』は日本人のみが使うのでも、使われたのでもない(黒川創)⁽¹⁰⁾。黄の日本語創作の背後には、「日本語でしか自分の世界を展現できなかった数々の台湾の戦前の作家たちの、その後には強いられ

た唾の無念さ」(黄霊芝)⁽¹¹⁾ が存する。さらに、黄の同世代であり、台湾歌壇(台北歌壇)の創立者である孤蓬万里(本名…吳建堂。一九二六—一九九八)の言も見ておきたい。孤蓬は、自分たちが戦後に日本語創作をはじめた経緯を次のように説明している。

戦後、日本人が引き揚げると日常生活から日本語は急速に駆逐された。経済不況から文学どころでない真空状態が十年ほどつづく。中国文学が漸次庶民に及び、漢詩などは隆昌の一途をたどる。しかし、一個人にとって幼少のころから馴染んだ言語は、その思想形成に影響が大きい。台湾

人で現在六十五歳以上のの人たちにとって、日本語は一生のうちでもっとも自分の情操生活に寄与した言葉となっている。二十歳前後になつてから学んだ中国語は、どうしても文学的素養となるには質量ともに不足である。いわゆる

「過渡期を克服した人々」といわれる一握りの人たちを除いて、外省人に伍して中国文学を今さらやっつけていくだけの覚悟がわいてこない。一九五五年ごろから「文学に国境はなし。短い一生のこと、外国文学として日本文学をつづけるにしかず」という気風が生まれた。『孤蓬万里半世紀 台湾万葉集補遺・付』集英社、一九九七・九、二四三―二四四頁）

右の孤蓬の説明にも明らかな通り、青年期に至るまで日本語教育を受けてきた黄たちの世代にとつて、日本語はもはや自身の一部と化した言語であつた。また、黄たちはあからさまに口にしないものの、彼らが日本語を手離さなかつた背景には、戦後台湾の政治状況も関わっていると考えられる。

戦後に大陸から渡つてきた国民党は、日本の植民地統治から台湾を解放してくれたはずであつたが、実際には台湾人を政治の場から排除し、圧政を敷いた。多くの台湾人が虐殺された二・二八事件（一九四七年）、一九五〇年代に横行した白色テロ、一九四九年から世界最長三八年に及んだ戒厳令と、民主化を成し遂げるまでに台湾は政治的に長く暗い時代を強いられた。台湾の人々は、戦前の日本時代と戦後の国民党政府による「二つ

の時代、二つの文化、二層の植民地統治」（黄智慧⁽¹²⁾）下を生きることを余儀なくされたのである。

右のような状況下で、日本語は「日本（人）に強制された言語」から意味合いを変えていった。日本語は、戦後に国民党とともに台湾へ渡つた人々（外省人）と戦前から台湾に住む人々（本省人）を分かつ指標となり、戦前に学校教育を受けた台湾人のアイデンティティの一つとして再認識されるに至つたのである。かつての宗主国の言葉である日本語で創作を行い続けることは、一見異様な行為にみえるかもしれない。しかし、黄たちが置かれた立場からすれば、少なくとも中国語よりは、日本語のほうが「自分たちの言葉」であつた。戦後の台湾で日本語で創作し続けた黄は、日本語がいわば身体化した彼の世代の「代弁者」（澤井律之⁽¹³⁾）の一人としても位置づけられるのである。

ただし、黄が日本語を使用するのは、決して受動的、消極的な理由からだけではない。黄は言う。当初は死病にかかつたためにやむを得ず選択した言語だったが、日本語を使用するうちに「実は日本語がかなりにしたたかな言語で奥の深いことがわかつてきた」。そして、「お人よ、お人らよ、日本語は使うに足る言語なのだ。ゆめ疑うなかれ⁽¹⁴⁾」と今日ではユーモアすら交えて日本語に対する愛着を語り、自身のことを親日ならぬ「親日本語」人だと自称する。すなわち、強いられた屈辱の言語としての日本語の出自、来歴を踏み越えて、黄は日本語という言語の持つ魅力を日本語使用継続の積極的理由としてあげているの

である。

また、黄は早い段階で自身の言語観を次のようにも述べている。「日本文で表現し易い主題を日本文で取り扱い、スペイン文に適する主題をスペイン文で書く。こう云う使い分けが出来れば文芸はもっと完璧になる性質のもの」であり、私たちがそれをなし得ないでいることは、「考えようによつては文芸家の恥でもある」（『序にかえて』『黄霊芝作品集 卷三』一九七二・五）。通常、我々が身につける言語は生まれた国や政治、時代や環境にあらかじめ定められる要素を持つが、「文芸家」は自身が求める主題にふさわしい言語を、自らを選ぶ（「主体」であるべきだと黄は主張するのである。このように、あくまで「言語を選



写真 2：黄霊芝（2009 年）

択する主体」としての作家の立場と能力を重んじる黄の認識は、ドイツ語と日本語で創作を行う作家・多和田葉子による、次の言葉にも通底する。

植民地支配は徹塵も正当化できないが、「ころんでもただでは起きない」したたかさで、ころんだ時に掘んだフランス語という泥で作品を作り上げてほしいのではないか。（…）運命のいたずらで他所の言葉を使わなければならないとなった作家だけが例外的に言語を選択しなければならなくなるのではない。一つの言語しかできない作家であっても、創作言語を何らかの形で「選び取って」いるのであれば文学とは言えない。（『エクソフォニー——母語の外へ出る旅』岩波書店、二〇〇三・八、七頁）

多和田は、かつてフランスの植民地下にあったセネガルの作家を例にあげて右のように述べているのだが、まさしく黄霊芝の日本語使用の発端と、その後の言語選択を代弁しているよう。

ただ、フランス語、或いは英語とは異なり、世界のなかで日本語の使用される地域は極めて局所的であり、読者を自ら狭める行為でもある。そのことについても黄は述べている。「作品とは読者がいなければ作者の独り言に果ててしまう」が、「名作でさえあれば、どこかで誰かが残してくれる」。「名作は後世に至っても名作だ。中国語で書こうと日本語で書こうと、そん

なことには関わらない」「言葉の問題ではない。名作かどうかの問題なのだ」⁽¹⁶⁾。

言語の種別にかかわりなく、「名作」であること。その条件を満たすことを念じて創作してきた黄は、あくまで作品本位の芸術至上主義的価値観の持ち主と言える。それでは、実際に日本語を用いて彼はどのような文学をあらわしているのだろうか。

二 立ち上る滑稽 — 黄霊芝文学の相貌 —

黄霊芝は先行する日本語の表現体である「日本文学」に通曉している。終戦時、日本へ引き揚げる日本人から大量に全集類の書籍を購入したことも証言しており、⁽¹⁷⁾ 実際『台湾俳句歳時記』内だけでも、横光利一、内田百閒、谷崎潤一郎、石川啄木、佐藤春夫、泉鏡花、久保田万太郎など、多数の作家名が見える。しかし、黄の文学は彼らの誰にも似ていない。個性とはそういうものである。黄の文学の性質を小説を中心に述べるならば、常に不幸な結末を提示することで人間という存在の不完全さ、哀しさを描きながら、饒舌な語り口とどんでん返しの展開により、読者を煙に巻く諧謔性を持った文学と言えるだろう。以下、紙幅は限られているが、そうした個性の実態を彼の小説の①題材・テーマ②表現・構造③登場人物の各要素から紹介する。

① 台湾を描いて台湾を超える — 題材・テーマ

黄霊芝の小説の舞台は、黄自身が生きてきた戦後の台湾に設定されている（一部戦前の日本時代も含む）。よって、小説は台湾の歴史や社会問題を必然的に映し出しており、たとえば「董さん」⁽¹⁸⁾（『黄霊芝作品集 卷一九』二〇〇一・七）は、一九四七年に発生した二・二八事件を語る。この事件では多数の台湾人エリートが政府によって虐殺された。小説はその犠牲者の一人である「董さん」が、実は戦前の日本統治時代の抗日事件（西来庵事件、一九二五年）で両親を殺された日本人であったことを明かす。「董さん」は両親を失くした後、台湾人女性のお身によって弁護士となり、日本人ではなく、台湾人として生きること誇りを持っていた。しかし、結果として「董さんの父親は日本人だったために台湾人により殺されたが、董さんは台湾を愛したがゆえに中国人に殺された」。小説はこうした不条理を「董さん」について何も知らない「僕」の視点から明らかにしていく。

右の「董さん」を典型的な例として、黄の小説は戒厳令下（一九四九～一九八七）の台湾では決して公にすることはできない、政治に対する批判を孕んだ内容を描いている。黄の文学は戦後の台湾を台湾人の立場から記録し、物語っているという点で、歴史的な資料の一つとしての価値を持つ。

ただし、彼の小説では台湾固有の歴史的な状況や問題を告発することに主眼が置かれているのではなく、台湾を描きながら台湾を超えること、すなわち、全人類に共通する普遍的な問題や生活感情を描くことがより重んじられていると考えられる。

たとえば、黄の処女作「蟹」(『黄霊芝作品集 巻一』)で追究されているのは、「食べること(すなわち他者をそこなうこと)なしに人は生きられないのか」という、人間であれば誰もが逃れることのできない、極めて実存的な問いである。台北で暮らす老乞食の「おい」は、戦後急激に悪化した生活環境のなかで日常的な飢えに苛まれている。ある日、偶然蟹を食べる機会に恵まれ、蟹のおいしさに目がくらんだ「おい」は、蟹を再び食べるために海をめざして都会を後に旅立つ。しかし、旅の途中で行き倒れとなった「おい」は、最終的には蟹を食べるところか海辺で自身の体を蟹にいばまれることとなった。動物としての原始的な人間の存在意義(『他者の餌となること』)が、蟹を食べる⁽²⁰⁾蟹に食べられるという関係性のなかに提示された小説である。

人間の根元的生存欲求(食欲)をテーマとして描くこの「蟹」同様、その他にも、黄の小説では、金銭と血縁(家)に縛られる人間の在りようを描いた「金」(『黄霊芝作品集 巻一』一九七・二)や、老い(死)への恐怖を語る「古稀」(『黄霊芝作品集 巻一』)、自然物を思い通りにコントロールしようとする人間のエゴを剔出した「豚」(『岡山日報』一九七二・二・三)、自分たちに都合のよい物語を期待する無責任な民衆心理を暴いた「輿論」(『黄霊芝作品集 巻九』一九八三・二)など、いずれも台湾を作品の舞台としながら、時代や場所を変えても共通する、人間社会に普遍的なテーマが設定・追究されている。⁽²¹⁾

②読者をペテンにかける―表現・構造

それでは、①のようなテーマは具体的にはどのように体现されているのか。その表現の在り方に、黄文学の独創は色濃くあらわれている。

たとえば、生まれてはじめて蟹を食した乞食の「おい」の様子は次のように語られている。

おいは足を一本ちぎり取った。嗅いでみた。噛んでみた。それから啜ってみた。甘い柔らかい美味しい味が喉にとろけて五体にしみ透った。旨いったらありはしなかった。それはおいが想像していたのと寸分違わない、いやその何倍も何十倍も美味しい、初々しいばかりに汁気を湛えた、味と言うよりも味のエキスだった。おいは一本、さらに一本と足をもぎ、股をもぎ、啜っては食らい、食らっては甲羅を剥いだ。今やおいは我を忘れ、鬚を振りかざし、獣のように舌鼓を打った。おいは蟹をたいらげてしまったのである。大満足であつた。もう死んでもよかった。(蟹)

小気味よく短文を畳みかけて、夢中になって蟹にむしゃぶりつく「おい」の様子がリアリティに想起される文章である。さらに、引用末尾の「もう死んでもよかった」というやや大げさな感想が、滑稽さを醸し出してもいる。この後、食べ過

きた「おい」は野外に出て、腹を下すのだが、その様子は次のように表現される。「おいは皺腹を抱え、天界に恥を晒しながら、だが五臓を洗って流れ去る凄まじいものをあたかも天界の音楽のようにうつとりと聞き惚れていた」「おいはいきおいの好いものがおいを洗い浄めるのに身を委ねながら、川の濁りがどんなと押しながされて行くような恍惚感にすら浸っているのであつた」。

糞すら詩の材料たりうというのは、既に正岡子規が指摘するところだが、黄はそれを実際に美的感覚に訴えて実現している。糞の表象は「紫陽花」(『岡山日報』一九七・一一―一二)にも次のように見える。

耳を澄ませていると、明けがたの闖入者は彼の家ばかりでなく付近一帯に散らばっているのがよく解るのであつた。ほうぼうの家屋の内臓のようなものが攪拌されている音が聞こえて来る。とくに一番近いのはすぐ裏の少女の家であつた。二軒の家ではほとんど同じくして無法者によつて攪拌され、汲取口にぶつかるブリキの音やら水音やらが反響し合つて、あたかも相聞の歌を奏でている風に聞こえるのであつた。(…)そして伸の家から汲み出された水液は大通りで待っている運搬車の水槽のなかで突然に少女の水液に邂逅するのだつた。その時異性の彼等は互いに羞み合い、もじもじとし、それから青きドナウの流

れのようにしずしずと混じり合つて一つになるのであつた。彼等は運搬車に積まれて町を出、百姓たちの肥料として地球上のどこかで手を取り合つてしみ込んで行くのである。

自分の家と、恋する少女の家との糞尿の攪拌の反響音を「相聞の歌」とした上、水液の合流を「青きドナウの流れのよう」と形容する。右は二〇歳の男の思念であるが、その恋心が特異な見立てによつて、ユーモアたつぷりに表現されている。

さらに黄の小説は、文体のレベルに止まらず、小説全体の構成にも確かな力量を見せる。かつて志賀直哉は芥川龍之介の小説が「仕舞で読者に背負投げを食はす」ことを批判したが、黄はむしろその芥川流の「背負投げ」を自身の身上として、どんな返しを積極的に活用する。

たとえば、「天中殺」(『黄霊芝作品集 巻九』一九八三・一一)では、高級住宅街に貸家を持つ「僕」が借り主に勝手に家を改造され、家の門の前にタイヤを外した車を置かれるといった嫌がらせを受ける。それに対抗すべく「僕」は知人の弁護士に相談し、家を元通りにするための費用負担をめぐつて、警察や裁判所で相手と争う。そして、ようやく和解にこぎつけて一段落かと思いきや、小説は末尾に次の一文を置く。「――それから一年ほど経ったある日、寢室の床下から白骨が一体分でて来た。」このたった一文の存在によつて、これまでの小説の内容はその意

味を変える。まず、ただに借り主の趣味で家の改造がなされたのではなく、それは死体を隠すための工作だった可能性が新たに浮上する。さらに、この騒動は、「僕」が時間と労力とお金を巻き上げられた不運な出来事というレベルに止まらず、「僕」自身が殺人の容疑者として疑われるかもしれないという、まさに「天中殺」と呼ぶほかない物語へと化するのである。床下の死体は誰であり、殺人者は誰なのか、いつさいは明かされぬまま小説は閉じられ、読者は大きな謎のなかに投げ出される。

このようなどんでん返しは黄の小説では多用され、「作家は常にペテン師であるを要する」⁽²⁵⁾と述べる黄の思惑通り、読み物としての面白さを生み出している。

③悲喜劇を生むもの―卑俗な登場人物たち

黄の小説が用意する、どんでん返しの後に待っているものは、登場人物たちからすれば、ことごとく不幸な結末である。「天中殺」の「僕」がさらなる禍に巻き込まれたように、或いは「蟹」の「おい」が海辺で最期を迎えて蟹に体をついばまれたように、黄の小説の登場人物たちは死、失恋、失望、挫折、喪失のなかへと追いやられる。そこに黄が生きた時代とそのなかで育まれた黄の世界観の反映を見ることができよう。ただし、登場人物たちの不幸が単なる悲劇というより、しばしば悲喜劇の様相を呈するところに、黄文学の大きな特色と魅力がある。

果たして喜劇の要素はどこから生まれるのか。それは、黄の

小説に登場する人物が立派な心境を吐露する人格者では決してなく、むしろ市井を生きる卑小な人間として描かれていることによるところが大きい。

たとえば、「豚」(『岡山日報』一九七二・二・二三)の「私」は、自らを「大工芸家」と称する人物である。地主であつた「私」は、戦後の農地改革により、急に収入の術を失う。それでも「上役に頭を下げるなど真つ平だ」と会社勤めを拒否。妻に対しても「お前にまで飢え死にして欲しいとは思っていないから、もう一度嫁に行けといっているのだ。今度は小作人の所へ行けば丁度いいじゃないか」と、尊大な意識丸出しの主張を行う。しかし、そんな「私」にも自己反省を促す契機が訪れる。小説末尾で「私」は自分が家族同様に大切にしていた豚を売りに出さねばならなくなり、「ああ、私めは人間ではなかったのだ」と自らを認識するに至る。「私」は常に傍若無人の自信家であつただけに、この結末は笑いを誘う。

他にも、黄の小説では糞尿の音すら相聞の歌と聞こえてしまう「紫陽花」の男のように、奇想天外な発想や自己中心的な言動を行う人物が多い。そうした登場人物の妄想や自説が生き生きと饒舌に披露されているだけに、最終的に彼らの陥る不幸な顛末との落差は大きく、哀しくもおかしい。そこに、真面目一方の深刻小説を読むのとは異なる、黄文学の与える愉楽と味わいがある。

黄の小説は一人称を多く採用するが、それは右に述べた人物

たちの内面をより細やかに再現させるに有効な方法と言える。そうして読者は十全に展開される人物の卑小なる内面に時に苦笑しながら、作家の仕組んだどんでん返しの劇のあとの静けさのなかで、はたと彼らとそれほど変わりない場所にいる自身の卑小さをも感じて身につまされるのである。恋の狂気や動物の命を自分たちの食糧や金銭に換えるのは、何も小説のなかの登場人物に限った話ではない。黄の小説の基底には、人間を不完全で滑稽な生き物と把握する、諦観を伴った深い洞察と認識がある。人間という存在意義に対する根元的な懐疑とともに、その愚かさを慈しむまなざしがユーモアに託されつつ描かれた表象世界、それが黄霊芝の文学である。彼の文学は「日本」・「日本人」・「日本文化」を担うこととは異なり、台湾を描いて人類を代表させるといふ、新たな「日本語」の表象可能性を見せる豊かな他者なのである。

おわりに

戦後台湾における黄霊芝の日本語文学とは、その存在自体が日本の統治の事実を決して忘れさせない記録、〈記憶の装置〉である。また、彼の文学は戦後の国民党体制からすれば、〈異物〉に他ならない。黄の日本語創作とは、実は極めて反権力的な方法である。

しかし、既に見てきた通り、黄の文学はそうした政治的意識

を内に潜め、あくまで全人類に奉仕する芸術の創出を目指している。

黄の繊細かつ完成度の高い日本語表現を見るとき、在日中国人作家・毛丹青（一九六二）の言葉が想起される。毛は同じ中国人である妻との喧嘩の際、日本語に逃げ込む自身の行為をもって「言語⁽²⁶⁾というのは、牢屋であると同時に広場である」と述べている。戦後生まれの毛丹青とは異なり、黄霊芝の日本語使用の由来は、日本の植民地統治というとりかえしのつかない暴力に基づくことは重々承知しておかねばならないが、黄は日本語を用いることで、自国に多くの読者は期待できない（それは「牢屋」に自ら入る行為に傍からは見えるだろう）という現実よりも、彼のより自由な個性の発現を可能にする「広場」としての日本語の可能性に賭けたのではないだろうか。

多和田葉子は言語創作を次のように位置づける。

言葉遊びは閑人の時間潰しだと思っている人がいるようだが、言葉遊びこそ、追い詰められた者、迫害された者が積極的に掴む表現の可能性なのだ。『エクソフォニー——母語の外へ出る旅』七〇頁

「日本語」は誰のものか？——それは国籍・民族・文化には帰属せず、日本語を使用する者すべてに開かれた道具である。そして他言語同様、様々な場と価値観を表象しうる、汲めど尽

させぬ可能性である。そのことを黄霊芝の文学は我々に改めて教えてくれる。

注

- (1) ベネディクト・アンダーソン著／白石隆、白石さや訳『定本想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』（書籍工房早山、二〇〇七・七）
- (2) イ・ヨンスク『『国語』という思想』（岩波書店、一九九六・一二）
- (3) 小森陽一「言語と文化の複綜性」『群像』一九九六・七、一六〇―一六一頁。小森は『（ゆらぎ）の日本文学』（日本放送出版協会、一九九八・九）においても、同様の問題をより詳細に論じている。
- (4) 金石範「文学的想像力と普遍性」（青山学院大学文学部日本文学科編『異郷の日本文学』社会評論社、二〇〇九・四、二〇頁）
- (5) 津島佑子・堀江俊幸「対談 野蛮からはじまる」『群像』二〇〇九・二、一五四―一五五頁
- (6) 黄霊芝の生涯、並びに創作全般に目配りした唯一の先行研究として、岡崎郁子『黄霊芝物語―ある日本文学作家の軌跡』（研文出版、二〇〇四・二）がある。また、拙稿「解説」（黄霊芝著・下岡友加編『戦後台湾の日本文学・黄霊芝小説選』に、本論の内容に通じる概説的な文章がある。
- (7) 黄霊芝の作品を掲載した『岡山日報』代表取締役主宰・原敏に宛てた書信の中の言葉。引用は岡崎郁子（注6、二二五頁）に拠る。
- (8) 同様の理由は次のようにも語られている。「日本の植民統治を受

け、日本文化の洗礼あるいは薫陶を受けたことのある人々にとつては、「日本語は外国語というよりは外国語になってしまった言語であり、日常工具としては、戦後に至りではじめて習得した自国語（中国語）よりも、より母国語的存在である。このような人たちが中途半端な自国語に頼るよりも、使い慣れた日本語で俳句をつくった方が手つとり早く、且つ成就が高いのも当然であれば、文芸が芸術の一分野であるという意念を肯んずる限り、民族意識を別として、わざわざ不得手な自国語で俳句をつくらなければならない必要性は別にない道理となる（ブラジルやカリフォルニアの日文俳句、また同じ）。（黄霊芝「ありげな問題のいくつか―国際交流での―」『黄霊芝作品集 巻一八』二〇〇〇・一二、一三六―一三七頁）

- (9) 岡崎郁子『台湾文学―異端の系譜』（田畑書店、一九九六・四、五二―五三頁）
- (10) 黒川創『国境』（メタロゲ、一九九八・二、九三頁）
- (11) 黄霊芝「戦後の台湾俳句―日本語と漢語での―」（『台湾俳句歳時記』言叢社、二〇〇三・四、二八七頁）
- (12) 黄智慧「ポストコロナル台湾における重層構造―日本と中華（西川潤・蕭煌編『台湾研究叢書4 東アジア新時代の日本と台湾』明石書店、二〇一〇・二、一八四頁）
- (13) 澤井律之「岡崎郁子著『黄霊芝物語』から考えたこと」（山田敏三先生古稀記念論集刊行会編『南腔北調論集』東方書店、二〇〇七・七、七七八頁）
- (14) 黄霊芝「違うんだよ、君―私の日本文芸―」（『戦後台湾の日本文学 黄霊芝小説選』二六六頁）
- (15) 黄霊芝「非親日家―台湾人の俳句を主宰・魅せられた「一七文字」」（『朝日新聞』朝刊、二〇〇七年二月一日）
- (16) 黄霊芝「そういえばそうかもねえ―ある日本文学作家がいう

のには」(『国文学 解釈と教材の研究』学燈社、二〇〇六・八、六三―六四頁)

(17) 注14の二六三頁、注16の六三頁。

(18) 「董さん」の詳細については、拙稿「戦後台湾の日本語文学―黄霊芝「董さん」の方法―」(『昭和文学研究』第58集、二〇〇九・三) 参照。

(19) 黄の文学は、台湾意識を前面に掲げる台湾の文学運動(郷土文学)とは一線を画している。黄霊芝「あとがき」(『黄霊芝作品集 巻九』一九八三・一一、一九九―二〇〇頁)には次のようにある。「いわゆる郷土文学なるものが文学の一分野であることは言を俟たない。(…)しかしそれだけが文学ではない」「文芸雑誌を経営する場合に一つの枠を設けて枠内で仕事をする。もちろん、これによって一つの主義ないし風格を標榜することはできるだろう。しかし、デパートの方が一商店よりはるかに図体の大きいことを知るべきである。わざわざ間口を狭め、自らを縛る愚は、かの繭蚕に任せればよい」。松永正義は「黄霊芝先生の描いているのは紛れもなく台湾の社会ですし、台湾という場所を離れて黄霊芝先生の文学は成り立たないだろうと思いますが、しかし同時にそこに描かれているのは、台湾であろうとどこであろうと普遍的に存在する、人間の不安定さ、不可思議さです。黄霊芝先生の文学が素朴なリズムと決定的に異なるのはそのためだと思います」と述べている(『黄霊芝文学雑感』山田敬三先生古稀記念論集刊行会編『南腔北調論集』七六六頁)。

(20) 「蟹」の詳細については、拙稿「黄霊芝「蟹」論―人間の原始的な意義とは何か?―」(『現代台湾研究』第37号、二〇一〇・三) 参照。

(21) 「豚」「輿論」の詳細については、拙稿「黄霊芝文学・その基底としての悲喜劇―小説「豚」の表象世界―」(『国文学攷』第

二〇八号、二〇一〇・一二)、拙稿「一九五一年の台湾表象―黄霊芝の日本語小説「輿論」―」(『近代文学試論』第50号、二〇一二・一二) 参照。

(22) 正岡子規「蕘の句」(『ホトトギス』一九〇〇・三)には、「西洋の詩や支那の詩や随分沢山あるけれど我等が見ただけでは蕘の詩といふは見た事が無い」「さらば蕘は到底詩にならぬかと思へば俳句には蕘の句が沢山あるから不思議だ」と指摘されている。引用は『子規全集 第五巻』(講談社、一九七六・五、三九二頁)に拠る。

(23) 「紫陽花」の詳細については、拙稿「黄霊芝の日本語文学―小説「紫陽花」を中心に―」(『現代台湾研究』第35号、二〇〇九・三) 参照。

(24) 志賀直哉「杏掛にて―芥川君のこと―」(『中央公論』一九二七・九)。引用は『志賀直哉全集 第六巻』(岩波書店、一九九九・五、一二頁)に拠る。

(25) 黄霊芝「文学」(『黄霊芝作品集 巻四』一九七三・七、八九頁)。その他、「文芸家とは所詮は読者をベテンにかけ、感動の渦へ誘い込むべく、時々刻々、文芸効果を念頭に入れている詐欺師でなければならぬ」(黄霊芝「俳句について」『黄霊芝作品集 巻六』一九八二・五、一八三頁)との言もある。

(26) 毛丹青「越境作家フォーラム 全記録」(二〇〇五年十一月九日、於名古屋市立大学人文社会学部。土屋勝彦編『越境する文学』水声社、二〇〇九・一一、二九〇頁)における発言。

特集 ● 占領と開拓の〈記憶〉

特別寄稿 サンパウロから帰国して — 石川達三『蒼氓』雑感

尾西康充

二〇一三年九月一五日から三カ月間、ブラジルのサンパウロ大学日本文化研究所の客員教授として、同大学の大学院生に日本近代文学を講義した。渡航費や滞在費、教材費などのすべての経費は、国際交流基金の負担であった。滞伯中、リオデジャネイロやブラジリアの連邦大学でも日本近代文学をテーマとするセミナーを担当した。

日本近代文学といっても、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫など、芸術的な志向の強い作品の系統は、ブラジルではすでに紹介されているので、それとは異なる社会的なテーマを扱った作品を講義することにした。短い期間ではあったが、①日系移民の悲劇を描いた山崎豊子「二つの祖国」、②原爆の被害を描いた原民喜「夏の花」と大田洋子「屍の街」、③貧困と格差の現実を描いた小林多喜二「蟹工船」を講読することにした。

「二つの祖国」は、第二次世界大戦中にアメリカ西海岸に住む日系人約一三万人が強制収容所に移送された歴史を描き出した。ほとんどのブラジル人は知らないのだが、ブラジルでも大戦中に、日系人が連行され、財産の没収や肉体的な虐待がおこなわれた。つぎに邦字紙「サンパウロ新聞」の「真相究明委員会」で初めて議題に「二〇一三年一〇月一五日」という記事を紹介してみよう。

サンパウロ市議会で二〇日に開かれたサンパウロ真相究明委員会の公聴会の中で、一九四二〜四七年のジェツリオ・バルガス政権下で日本移民に対して行われた迫害についての討議が行われた。六四〜八五年の軍事



サンパウロでの授業

政権時代以外に行われた圧政が議題となったのは、同委員会の設立以降で今回が初めて。ブラジル真相究明委員会のロザ・カルドーゾ弁護士は「ブラジル人を代表して謝罪をし、被害者に許しを請いたい。ブラジルのエリートたちは常に人種差別主義者だった」と述べた。

排日運動は、大戦前の一九二三年、日本移民を制限するレイス移民法案が連邦下院に提出された頃からはじまっていた。ジェトウリオ・ヴァルガス大統領の独裁政権（一九三〇～四五年のエスタード・ノヴォ体制）下では、表向きは外国人移民全体を対象としながらも実質的に日本からの移民を制限する新憲法が制定された。ブラジル国民の《白人化》を進めるためには脱アフリカ・脱アジア化が必要であるとし、日系移民による被植民地化に対する警戒感が示されていたのである。大戦を契機として、日系人に対する差別が本格化することになった。そして大戦終結後も、「勝ち組負け組抗争」という日系人社会の混乱に乗じて日系人の強制収容がおこなわれた。右の記事によれば、この公聴会では、「四六〇四七年にサンパウロ州北部海岸地域のアンシエッタ島に強制連行され、島内の収容所で収監された一七二人の日本移民について触れた謝罪文が読み上げられた」。「負け組」の脇山甚作退役陸軍大佐を殺害した容疑で、アンシエッタ島に一五年間収容されていた「勝ち組」の日高德一氏（八七歳）は、「一七〇人の日

本人收容者のうち約一四〇人は無実だった」と証言したという。

他方、原子爆弾の被害もまた、ほとんどのブラジル人が知らない。原爆文学を読むことを通じて、非人道的な核兵器の問題を共有することができた。サンパウロには、日本食料店を営む森田隆氏（八九歳）が住んでいる。広島市で被爆した森田氏は、在ブラジル被爆者協会の会長である。森田氏を店舗に訪ねると、店先で三脚椅子に腰を掛けて、日本から約一か月遅れて販売される岩波の雑誌「世界」を読んでいた。森田氏によれば、被爆当時、陸軍憲兵中国憲兵隊司令部において憲兵隊長を務め、国民を取り締まる側の人間であった。しかし被爆の惨状を目撃した瞬間、それまでの世界観が一変したという。今では大勢の家族に囲まれる幸せな生活を送っているものの、ブラジルの日系人社会でも被爆者に対する差別があったと語った。

ブラジル社会における最も深刻な問題は、貧困をめぐる社会問題である。「蟹工船」は院生たちに大きな刺激を与えた。日本で出版されたばかりの拙書『小林多喜二の思想と文学』（大月書店）を、出版社から直接現地に郵送してもらって、補助教材として院生たちに配布した。

サンパウロ市内には、いくつものファベラ（貧民窟）がある。福祉施設の市職員に案内してもらって、私は、麻薬と暴力がはびこっていたモンテアズールという町名の貧民窟にかけた。市政府は補助金を出したり、授産所を設けたりと、様々な施策をおこなっている。ブラジルの連邦政府も、連邦大学の学生定員および連邦下院の議席の二〇パーセントから五〇パーセントを、黒人貧困層に割り当てるなど、相当強引な方法で格差を是正しようとしている。しかし、これには保守・中道層からの反発も強い。

貧民窟の隣には、高級マンション街が聳えていた。彼らは交通渋滞を避けるため、自宅からヘリコプターで通勤する。他方、ファベラのなかは環境整備が不十分で、狭い路地には救急車などの緊急車両も入ることができない。明治の文学者北村透谷が「知らずや、人は魚の如し、暗きに棲み、暗きに迷ふて、寒むく、食少なく世を送る者なり」（時勢に感あり）と記した通りの光景が、サンパウロには今も実在するのであった。



銀行のストライキ

* *

神戸北野の山本通にある国立海外移民収容所は、南米ブラジルを中心とする海外移民を送り出すための施設であった。移民たちは出航前にこの施設に入所して、現地での生活の基本情報に関する講話を聴き、健康診断や予防接種を受けた。一九三〇年三月八日、春雨に煙る神戸港の情景から小説を起筆したのは、石川達三であった。達三本人が大阪商船の移民船らぶらた丸に乗って渡伯した体験は、小説「蒼氓」（「星座」創刊号、一九三五年四月）として発表された。排水量七二六七トン、船客数九〇〇名のらぶらた丸は、喜望峰を経由する西回り南米東岸航路に就いていた。一九二六年から三九年まで合計三二回日伯間を往復し、移民輸送総数は一万八四〇四名にのぼった。達三は移民たちの姿をみて衝撃を覚える。達三によれば、「私は雨の中にひとり出て行き、赤土の崖のふちにうずくまり、だれにも顔を見られないようにして、しばらく泣いていた。私はこれまでに、こんなに巨大な日本の現実を目にしたことはなかった」という。さらに「私はこの時はじめて『作家』になっ

かった。そしてこの衝撃を、私は書かねばならぬと思った」と。また「蒼氓」は第一回芥川賞（一九三五年上半期）を受賞したことで知られている。「蒼氓」を第一部とし、第二部「南

「蒼氓」は第一回芥川賞（一九三五年上半期）を受賞したことで知られている。「蒼氓」を第一部とし、第二部「南

海航路」と第三部「声無き民」を合わせて単行本『蒼氓』（三五年一〇月、改造社）が出版された。しかしブラジル移民の間では、ほとんど読まれていない。私自身も日系文学の関係者に尋ねてみたところ、本のタイトルしか知らないし、別に読む気にもならないという人ばかりであった。「移民の悲惨イメージを広めた張本人とされる作品」として、きわめて評価が低いのである。たとえどれほど自分の生活がみじめで悲しいものであっても、それを他者によって語られることは、恥辱を与えられるのに等しい。ちなみに同書のポルトガル語訳は、ブラジル移民一〇〇周年に当たる二〇〇八年にサンパウロのアテリエ・エディシヨナル社から刊行された。マリア・フサコ・トミマツ、モニカ・セツヨ・オカモト、タカオ・ナメカタが翻訳し、マルシア・ヒトミ・タカハシが校閲した *Sobô Uma Saga da Imigração Japonesa* である。しかし、版元が学術書を専門に扱う出版社であったこともあって、日系コロニアの社会——大戦後、ブラジル永住を決意した人たちの間から「日系コロニア」という言葉が使われるようになったとされる——では、ほとんど普及されなかったという。

その一方、細川周平氏によれば、『蒼氓』の「第三部のブラジル編ではあつけられんとするほど気楽な暮らしが描かれて」おり、「この描き方には政府の定住政策が関わっていると考えられる」という。⁽³⁾「政府の定住政策」に沿って書き進められているとされる点は、石川巧氏が「権力の期待する通りに成長する群衆を美しく描くという手法において権力の機構そのものを温存するような働きさえしている」と指摘した点に重なるだろう。⁽⁴⁾

このように『蒼氓』は、ブラジルの日系コロニアの人たちからは「悲惨すぎる」といわれ、文学研究者からは「楽観的すぎる」といわれている。移民の場合に限らず、だれかに代わってその人の生活を描くことの難しさがみられる。とりわけそれが社会正義の視点から表現される場合、そこに一方的な価値判断が下されてしまっているという印象を持たれてしまうと、その作品から説得力が失われてしまう。達三は、当時の日本社会には「生活の絶えざる脅威と圧迫、絶えざる反抗と焦慮、不安と怒りと絶望とが有るばかり」であったとする。収賄や汚職といった政財界の腐敗、金輸出解禁にともなう経済危機、「工場のストライキと共産党事件の裁判」、軍縮会議などの事

件が続く、「母国の終焉を見るように悲しかった」という。ブラジルには猛獣や毒蛇、鰐、そしてマラリヤなどの「無数の迫害」があるが、それでも「日本の農村の津々浦々までも行き互った文明の脅威」に比べれば何でもない。「日本の農村のどこに農村らしい駭蕩としたものがあるか」というのである。

達三はこの作品に「農民出身の移民集団を描くことによって、政府の移民政策に一種の抗議をするような性格」を持たせようとし、「権力に対する庶民的な抵抗という姿勢」を示すことを作家人生のモチーフとした。⁽⁶⁾しかし移民船のなかの移民たちは、どれほど不平が高まっても「いつまでも煙を上げているばかりで纏まった意見は出来あがらず、監督に交渉するという実力手段もなかなか行われるものではなかった」。彼らは「力を合わせて、塊になって不平を叩きつけるという方法を知らないようであった」。E室の黒肥地は「まだ二十五、六歳の血気あふれるばかりな九州男児」で、彼らの間で「一番はげしく反抗の口吻を洩らしていた」。しかし彼もまた、直接その不平を監督に向かって叩きつけるような意識は持たなかったのである。

彼等は農村に在っていつもこういう不平を抱きながら、しかも誰に叩きつけてよいかわからないで親子代々をすごしてきた。不平は不平だけで終り、満足な状態にむかつて積極的に努力するということは常に不逞なことを考えられて来た。それは永いあいだの政治の悪が馴致した憫れむべき習慣であり習性であったかもしれない。「政道に対して口をさしはさむ」者は刑に処せられる時代が永く彼等を支配していた。船のなかの不平は不平のまま夜で夜のふけるとともに消えて行つた。

この後、黒肥地は酒を買って飲んで寝てしまう。「そうすることによって自分の不平を消すことができる」のを彼は知っていたからだという。調教された奴隷の心性を描いたこれらの表現を読めば、石川巧氏が指摘するように「権力に虐げられた人間の「抵抗」などどこにも存在していない」ように思われる。⁽⁶⁾

主人公の一人、秋田県田沢出身の大泉進之介は、司厨室の手伝いをはじめると、自分たちの食膳には決して運ばれることのない贅沢な食材が冷蔵庫に貯蔵されていることを知る。「郷里にいれば何も考えない善良な百姓であったが、船に入り司厨室の手伝いをしてみて「階級」というものを見せられたのだ」。「心の底から善良な男」であった大泉は、「こういう比較をすることによって自分が不幸になるにすぎない事を感じていた」。同じ船には、彼ら移民たち三等船客とは異なる、アメリカ人などの一等船客も乗っていた。「シンガポールから乗りこんだアメリカ人の女」が事務長を呼びつけて、夕食の時間に日本人がデッキで運動するので、寝かしつけていた赤子が目を覚ますと苦情を申し立てた。移民の間から子守を雇うなどの対処がとられたが、それも失敗に終わってしまい、移民の間には「外人という奴はけしからん」という感情が残るだけであつたのである。

*

*

人種や資本によつて構成される「階級」を目の当たりにしながらも、何ら抵抗できなかったのは、なぜか――。松本清張は「蒼氓」（芥川賞受賞作。第一部）を読み返してみても、その描写が小林多喜二に似ているのを知った。石川のリアリズムは、プロレタリア文学からの影響である。しかしプロレタリア文学とは対極にあるのは、達三の「傍観者の観察態度」であるという。このような松本の発言や、「蟹工船」における集団描写の技術⁽⁷⁾が『蒼氓』の表現方法に影響を残しているかもしれないとする久保田正文の指摘を踏まえ、松本和也氏はつぎのように論及した。

「蒼氓」とは、文学シーンにおける「社会性」の欠如が強迫観念的に意識された文芸復興期に、「蟹工船」の社会性を持つ題材や題材を生かす手法を換骨奪胎して、時代性と社会性を持った題材を常識的・表層的に小説化したテキストなのだ。しかも「蒼氓」は、「蟹工船」後に小林が提唱した社会的現場における実体験を重視した『報告文学』⁽⁸⁾の実践としても見事にその圏域に収まっている。⁽⁹⁾（傍点およびルビは原文ママ）

「換骨奪胎」や「常識的Ⅱ表層的に小説化」という言葉に否定的な意味を込めた松本氏による論及は、さきに引用した「権力の機構そのものを温存するような働きさえ果たしている」という石川氏の指摘とともに、『蒼氓』というテキストが抱えている問題点を剔抉している。「移民とは口実で、本当は「棄民だ」と言われていた」移民の側に立つといいながら、⁽¹⁰⁾実際の作品は、それを見事に裏切っていたと思われるのである。「反権力を謳う石川がいかに関心を持権化しているか」という「石川の作家的資質」が問い直される必要があるのはいうまでもない。⁽¹¹⁾また、『蒼氓』が「プロレタリア文学と報告文学を接続」することで「社会性を持つ題材」を描こうとする「昭和十年前後の言説編成」に一役買ったことや、⁽¹²⁾「ある主体が群衆を間に挟んで国家と対峙し、自分はひとりで立っている」という認識のもと、超越的な位置から群衆を眺め、彼らの成長を見とけるといふ展開がいかに関心を持権化しているか、権力の機構そのものを温存してしまう」結果になったことなど、⁽¹³⁾『蒼氓』に対する批判は尽きないようにみえる。

だが、ここでもう一点考慮すべきことがあるように思われる。多喜二は「蟹工船」執筆に際し、労働農民党や労働組合が北洋漁業の労働問題をめぐって闘争していた経緯を取材した。その一方、達三の前には（読者が期待するような）権力に抵抗する移民などそもそも存在しなかったのである。海外移民は、外貨および植民地の獲得のために『海外雄飛』するという「名譽」を与えられると同時に、過剰人口を日本社会から放逐するために『口減らし』するという「余計者扱い」を受けていた。プロレタリア文学壊滅の後、文学的抵抗がほとんど不可能になったとき、このような両義的な意味を担わされていた彼らに、それまでプロレタリア文学によって社会的関心を高められていた読者が、『抵抗する群像』というイメージの形を通じて、もはや満たされなくなった自分たちの願望を投射しようとしたにすぎないのである。

細川周平氏によれば、アメリカやメキシコへの移民のなかには共産党と連帯した人々もいたが、ブラジル一世が政治運動に加わったという報告はない。⁽¹⁴⁾また、一九五三年からの戦後移民は、永住を前提とする政府間事業

として取り組まれたので、戦後の移民船の小説にプロレタリア文学の雰囲気がないのは当然であるという。⁽¹⁵⁾ サンパウロ在住の文芸評論家安良田済氏（九八歳）に尋ねてみたところ、日系コロニアの作家たちにはプロレタリア文学の影響はなかったという。高い見識を持ち、日系作家のなかでも尊敬を集めている安良田氏自身は、「父帰る」などの菊池寛の作品が好きで、そこから社会正義のテーマを学んだと話した。生活条件のため低く抑えられた学歴しか持たない農民層が主であった移民たちにとって、たとえ差別され抑圧された現実を目の当たりにしていても、それが「階級」による社会格差であることには気づかないのであった。コーヒー農園での作業がいかに過酷なものであったのか、アマゾンでの開拓事業がいかに困難に満ちたものであったのか、各自の実感をもつて個別的な状況を描いた記録類は、数多く残されている。個別的な体験を積み重ねてゆけば移民一般の生活を再現でき、現地を知らない読者でも、それらを読めば彼らの生活を追体験できるだろう。しかしそれだけでは文学作品として真に価値のあるものにはならないのである。

*

*

日米開戦にともなって米国支持を表明していたヴァルガス政権は、連合国側に加わることを表明し、日本政府に対して経済断交や国交断絶を宣言した。その結果、一九四二年七月、在伯日本公館の職員が外交官交換船で帰国してしまう。笠戸丸に乗って渡伯した〈第一回移民〉の香山六郎は、そのときの心境をつぎのように語っている。

我々は平素一面には天皇陛下の赤子だと認識を強いられながら、一面はいざとなればサヨナラもつげられずに棄民扱いをされたのだ。私達は駐伯日本外交官の吾々に対してサヨナラも告げずにかくれるように逃げていくような態度に彼等の民族的、否人間的教養の浅はかさをしみじみと感じていた。吾々移植民に永住せよなんておすすめる外交官連中が敵性外国人となれば一番に尻に帆かけてにげ出すお偉方なんだ。日本外交官頼むにたらず——と痛感した。⁽¹⁶⁾

香山は、耕地通訳や鉄道工夫、大阪朝日新聞通信員などを務めた後、邦字新聞「聖州新報」を創刊したという経歴を持つ。《錦衣帰国》¹⁷でできる日を夢見て生きていた移民たちは、このとき自分たちが《棄民》であることを否応なく見せつけられた。このとき国家と個人との間の信頼関係が損なわれたのだが、そのことに抗議したのは少数で、むしろ大多数の者は《名譽》回復にむけて国家への忠誠心を昂じさせたのである。サンパウロ人文科学研究所の元所長宮尾進氏は、このときの心情を分析し、「戦時状況下での邦人の唯一の望みは、「神国不敗」の信念のもとに、やがてかなえられる戦勝の暁に、帝国日本の勢威あまねき「大東亜共栄圏」の地に再移住し、安住できる日を待ち望むことであり、その日に備えて皇国臣民として恥じない耐乏の生活をする¹⁸ことが、正しい生き方であった」とする。ここにみられるのは、社会的周縁に生きる人ほど承認の欲求が強く、社会的統合を希望するという論理である。

この逆説的な論理は、日本敗戦後に、日本の勝利を信じて疑わない「勝ち組（信念派）」と、敗戦を認める「負け組（認識派）」抗争となつて噴出する。この抗争に関しては、まさに「サンパウロ新聞」を引用したが、今なお不明なところが多い。敵性民族の言葉である日本語を使うことが一切禁止され、情報量が乏しかった当時、正確な情報を入手できにくかったという事情もあったが、サンパウロ州の奥地を中心に日系移民の八〇九割が「勝ち組」に加担していたといわれている。¹⁸「勝ち組」の過激分子は武装組織を結成し、主に都市部にいた日系コロンビアの支配層や知識人層の「負け組」を襲撃した。襲撃事件は八六件、暗殺された者は二三名に上った。「勝ち組」の機関誌「旭号」が休刊宣言をおこなう一九五六年二月まで続いたこの抗争は、現在に至るまで日系人社会に分裂の禍根を残している。これほど深刻な問題に関しては、私などが容喙すべきではない。だが、これは個人が「名譽」と「尊厳」の回復を求める「承認をめぐる闘争（Kampf um Anerkennung）」¹⁹であったといえるのではないか。この抗争の背景には、だれもがブラジルに永住する気持ちはなく、いつかは祖国に帰りたいと思っていた日系人の社会が抱え

ていた、『価値共同体としての社会集団』の未成熟という問題があった。農村部にいた大多数の移民にとって、都市部にいた支配層や知識人層への帰属意識は低く、彼らの口から日本敗戦の報を知らされても俄かにはそれを信じられなかった。農村部では、理想的な社会集団の構成員にみられる個性化や平等化などの意識が発達しておらず、都市と農村との間で日系人社会の連帯感が不十分であったからである。本来異郷の地にあって連帯すべき同胞であるにもかかわらず、集団的な内部抗争を通じて、祖国への直接的な社会的統合を志向するという手段をとったのである。

* *

さきに述べたように、神戸移民収容所のバラックの待合室に充滿していた「人いきれとみじめさ」を、達三は「私はこの時はじめて『作家』になったかもしれない」と告白した。この部分、三・一五事件で特高警察によって激しい拷問を受けている組合同志の代わりに、自分がその惨状を告発しなければならないと思った多喜二の作家的出発に似ている。多喜二の場合、「私はその時何かの顕示をうけたように、一つの義務を感じた。この事こそ書かなければならない。書いて、彼奴等の前にたゞきつけ、あらゆる大衆を憤激にかり立てなければならぬと思った」（一九二八年三月十五日、「若草」第七卷第九号、一九三一年九月）という——達三（一九〇五〜八五）と多喜二（一九〇三〜三三）は同じ秋田県出身である。「蟹工船」開巻劈頭の「おい、地獄さ行くんだで！」と、『蒼氓』冒頭の移民の最初のセリフ「大泉、進之介でござえまし」、いずれも秋田方言である——しかし社会正義の視点から、だれかに代わってその人の生活を描くという作家の使命感は、作家の意図通りには機能しないという事態を招くことがある。『声無き民』をめぐる問題群は、つねに『植民地主体』の語りのアポリアと密接に関連している。

二〇一二年、日系三世中里オスカルが、日系移民の苦難の歴史を描いた『NINONJIN』という小説で第五四回ジャブチ賞（ブラジル書籍協会主催）を受賞した。ブラジルにおける最高の文学賞の設置から五四年目に、はじめて日系人が受賞できたこととともに、三世にしてようやく日系人みずからが自己の来歴を語る本格的な小説を描くこと

ができたことに注目すべきであろう。三世にもなると生活言語のポルトガル語が第一言語になっており、もはや日本語は失われてしまっていることが多い。この小説もポルトガル語で執筆されている。だがそのことによって歴史と距離をとることができるのかもしれない。決して一般化されることのないような特殊なできごとに着目し、そのなかにある人間実存の普遍的な相を見定めて表出することによって、ようやく文学本来の使命が達成されるのではないだろうか――。

石川達三の本文は、新潮社版『石川達三作品集』に拠った。

注

- (1) 石川達三『心に残る人々』(一九六八年十二月、文藝春秋社、一九四―一九五頁)
- (2) 細川周平『日系ブラジル移民文学』Ⅱ(二〇一三年二月、みずず書房、七頁)
- (3) 同右
- (4) 石川巧「群衆はいかにして国民となるか―石川達三『蒼氓』」(『国文学解釈と鑑賞』第七〇巻第二号、二〇〇五年二月、八〇頁)
- (5) 石川達三『経験的小説論』(一九七〇年五月、文藝春秋社、一一頁)
- (6) 同右、八〇頁。
- (7) 松本清張「石川達三」メモ(『文学界』第三九巻四号、一九八五年四月、一一七頁)
- (8) 久保田正文「もう一つの昭和十年代」(『昭和文学史論』、一九八五年一〇月、九〇頁)
- (9) 松本和也「石川達三『蒼氓』の射程―『題材』の一九三〇年代一面」(『立教大学日本文学』第八九号、二〇〇二年一月、一五〇頁)。なお松本氏は、杉内昌子氏「石川達三の『蒼氓』に関する研究―構成と成立過程を中心に」(『実践文学』第四一号、一九七〇年二月)の「この作品が『個人』よりも『集団』を描いている」という指摘を踏まえている。

- (10) 前掲(1)、一九四頁。
- (11) 前掲(4)、七三頁。
- (12) 前掲(9)、一五〇頁。
- (13) 前掲(4)、八〇頁。
- (14) 前掲(2)、九八頁。
- (15) 前掲(2)、三二二頁。
- (16) 香山六郎『香山六郎回想録 ブラジル第一回移民の記録』(一九七六年九月、サンパウロ人文科学研究所、四一八～四一九頁)
- (17) 宮尾進『臣道聯盟 移民空白時代と同胞社会の混乱―臣道聯盟事件を中心に』(二〇〇三年一月、サンパウロ人文科学研究所、一八二頁)
- (18) 泉靖一編『移民Ⅱブラジル移民の実態調査』(一九五七年八月、古今書院) 参照

「頹廢」の価値

マルクス主義文学における／または平林初之輔の〈デカダンス〉

福岡弘彬

マルクス主義文学と〈デカダンス〉、いかにも取り合わせの悪いこれら二項の関係を本稿が問題化するのには、平林初之輔の以下の三つの言葉を契機とする。

ポーやヴェレレイヌのやうなデカダンの詩人はただ現実
に圧しつぶされて頹廢し外道に落ちてゐたのではない「…」
彼等は現実には逆してゐたのである。

「反抗的精神と文芸」(「サンエス」大9・10)
崩壊は崩壊であり、頹廢は頹廢である。頹廢^{マヤ}の後に新しい
ものが生れるとしても頹廢それ自身は新しいものではない。
い。

「婦人の享樂的傾向」(「婦人公論」大11・11)
かつて、エドガー・アラン・ポオやボオドレエルのやうな
政治的価値のない、若くは反価値のあるたい廢的な作家の
作品のもつ芸術的なみ、力にも打たれるといった「…」／私
とても、もちろん、ポオやボオドレエルの傾向を決してお

う歌してゐるのではなく、たゞこれ等の作品のもつ芸術的
なものに打たれるといったたゞ^{マヤ}ある

「文芸時評5」(「東京朝日新聞」昭4・8・3)
これら三つの評論——反現実としての「デカダン」に対する
肯定、「頹廢」に対する有無を言わさぬ否定、「たい廢派」作品
の部分的評価¹⁾——の間に横たわる差異を、ロマン主義から「種
蒔く人」へ、さらにマルクス主義における〈内なる外部〉²⁾へ、
という平林初之輔の文学的足跡として解釈することは、ひとま
ず妥当であろう。しかし、この溝からすくい上げることができ
るのは、一人の文学者の主義変更のみに留まらない。

明治三十年以降、日本に移入された〈デカダンス〉の概念は、
時代の変遷とともに意味の振幅を持ちながらも、現在まで残存
している。しかし、尹相仁が指摘するように、その初期には積
極的な効果を認められていた同概念は、いつしか忌避すべきも
のとして認識されるようになる。稿者の考えでは、その否定的

評価が日本近代文学史上決定的となったのは、マルクス主義文学運動における評価軸による。「唯物史観」において、〈デカダンス〉は超克されるべきブルジョアジーの「頹廢」として判を押され、同じく否定すべきものである〈モダン〉＝〈終末の時間〉と、ひとしなみに処されることとなるのである。

その生涯を通じて、「デカダン」や「頹廢」を多様に評価した平林初之輔は、如上の〈デカダンス〉概念の変遷を体現し、またそこからの逸脱を可能とした者であった。さらに平林は、マルクス主義文学の立場をとりながらも「頹廢」の〈潜勢力〉を感じた、希有な存在でもある。「進歩史観」と「頹廢」の間で引き裂かれる彼が、自覚的にその力を考察することにはなかったとしても、この事態は記憶されてもいい。以下本稿は、平林初之輔の「デカダン」や「頹廢」評価を、思想的背景の考察や時代的文脈との比較を通して、横断的に検証することで明らかにしつつ、〈デカダンス〉の文学史的研究の一端を試みたい。

一、「反抗」としての「デカダン」

文芸評論家・平林初之輔がその初期においてロマン主義的認識を有していたことは、現在ではよく知られている。渡辺和靖が述べるように、平林は「自由主義」としての、「現状打破」としての、「リアリズム」否定としての「ロマンチズム」を提唱し、それは「当時文壇の主流をなしていた「自然主義」

を射程としていた。⁽⁴⁾現状を徹底して否定し、「現実」の裏面にある「真理」へと到達することの必要を説く、時に過激な平林の理論からは、硬化した文壇への苛立ちがありありと見てとれる。

「デカダン」に対して肯定的な評価がなされている「反抗的精神」と文芸（「サンエス」大9・10）は、この時期の平林における代表的な論説である。「反抗的精神は芸術活動の原動力である」といふことを私はかたく信じてゐるものである。」という自身の立場表明からはじまる当論では、「反抗的精神」が文芸を革新してきた西欧「近代文学史」が素描された後、「常識」を維持し続ける「現代」＝「自然主義時代」の日本文学が批判される。論の中で繰り返し表明される現状打破への意志――。「デカダン」は、その「反抗」の方途の一つとして、以下のように提示されている。

自然主義、現実主義、必至主義に対してヨーロッパに起つた反抗運動を大体に於て二つにわけることが出来ると私は考へる。一はデカダンによりて代表され、他はアイディアリストによつて代表されてゐる。ポーやヴェルレイヌのやうなデカダンの詩人はただ現実に押しつぶされて頹廢し外道に落ちてゐたのではない（尤もそんなことを考へてゐる人があるといふのではないが）。彼等は現実に反逆してゐたのである。版でおしたやうな平板な退屈な現実、亀の甲のやうにかたくなつた習慣、微温湯のやうな無刺激な常

識を破らうとしてゐたのである。

この後、「アイデアリスト」の「反抗」は、「真正面から常識に対してオフエンスィヴをと」り、「デカダン」とは「反対」のものとなる。ならば渡辺和靖の指摘の通り、平林は「デカダン」に「逃避」としての「反抗」を看取したのである⁽⁵⁾。一見それは無力な受動的「頹廢」と映るかもしれないが、「デカダン」の営為とは、構築された制度的「現実」「習慣」「常識」の、「退屈」や「無刺戟」への、意識的な「反抗」と解されている。

このような「デカダン」認識は、平林の「(尤もそんなことを考へてゐる人があるといふのではないが。)」という注記にもあるように、特別に珍しいものではない。「デカダン」を否定的に捉える言説は当時にも数多くあるが、反対にその文学に対する肯定的評価も確かに存在している。例えば平林と同じく早稲田大学文学部英文科を卒業した本間久雄は、大正五年の時点で、西欧の「デカダンの人々」に関して以下のように述べている。

彼等が不道徳に見え不健全に見え、乃至生活力の壊滅を象徴してゐるやうに見えるのは、彼等がその時代の社会制度既成道徳既成宗教等に満足することが出来なくなつた結果ではあるまいか。普通凡庸の人間が、何等の不満なく何等の疑惑なく、それに従つてゐるところを、彼等の神経が余りに敏感であり、彼等の氣質が余りに感受的であるために、彼等デカダンの人々は更にそれ以上の制度、道徳、宗教等を求めてゐるのではあるまいか

『デカダン文学の批難に対する疑ひ』(『新小説』大5・10)

「デカダンの人々」の、「不道徳」や「不健全」、「生活力の壊滅」の「象徴」と見紛う外貌。それは鋭い「神経」や「感受」性によって、既存の「社会制度既成道徳宗教等」に妥協することができないからであり、彼らは自分たちを圍繞するそれらの諸制度を革新しようと努めたのではないか。以上の本間の論理は、平林の抱く「デカダン」像とほぼ重なつていふと言えよう。

しかし、平林の論で際立つのは、「デカダン」を現在に関する問題として定義していることである。そもそも当論では、古きものを解体し新しきものを生みだすための「新陳代謝」を担う力として「反抗的精神」が捉えられており、その代替置換の必然性は「進歩」を前提としてゐる。「進化論そのものの適用」⁽⁶⁾がなされた当論では、「反抗的精神が萎縮してゐる時は文芸の衰頹期」とされ、「現代」日本はまさに「自然主義衰頹時代」と規定された後、先に確認したようにヨーロッパにおける「自然主義」への「反抗」として「デカダン」が紹介されている。すなわち「デカダン」は日本文学の停滞を切り開き、次の段階へと進む方法として、ここで提示されているのである。

平林の「デカダン」とは、西欧の過ぎ去つた一文学ではなく、(いま・ここ)にある「現実」に抗い「進歩」するための方法であつた。彼の文学的「進化論」の中で、同概念は古きを淘汰する力動性を備えるものとして把握されている。しかしこの認識は、マルクス主義との邂逅によって反転し、「デカダン」は

やがて、淘汰されるものへと場所を移す。

二、「病」としての「頹廢」

菅本康之によれば、「平林におけるロマン主義からマルクス主義への過程は、移行ではなく、「機能転換」というべきものであり、その「転換」が完了したのは、「唯物史観」(『進歩史観』)と「階級闘争」を受容⁽⁷⁾し、「平林が自らの批評活動の中心に「階級闘争」をおくとき」であるという。「転換」後の平林の言説には、「進歩史観」に裏打ちされた、明瞭な「階級闘争」論が唱えられている。だが、こと《デカダンス》に関しては、「機能転換」の謂いには収まらず、フェイタリスティックな「階級」論の中で、極めて厳しく排除の対象とされる。

或る民族、或る国民、或る階級の衰頹期にはその社会の綱紀が弛み、将来に対する人々の希望が消失して、努力の感じがなくなり、一世をあげて自暴自棄的の刹那生活に没頭するやうになる。かういふ時代の特色は享樂的傾向を帯びる。「……腐敗した社会は自ら崩壊しながら自滅してゆく。新しい社会を構成する『勢力』はそんなものをしんだり、嘆いたりしてはをられぬ。況んやそんな現象に『自由』や『解放』の幻影をゑがいて喜んでゐる暇などはない。崩壊は崩壊であり、頹廢は頹廢である。頹廢の後に新しいものが生れるとしても頹廢それ自身は新しいものではない。

「婦人の享樂的傾向」(『婦人公論』大11・11)

プロレタリアの声であるプロレタリア文学は健全な文学である。不健全な、病的な、頹廢的な文学ではない。虚無主義や無政府主義が、真の無産階級の志向を代表してをらぬ点は、何よりも先づ健全性を欠いてゐる点である。

「釈明、弁駁及び啓蒙」(『新潮』大12・5)

「衰頹」する「階級」が必然的に辿る帰結として「頹廢」が語られ、「頹廢的な文学」が「プロレタリア」の対極に——後者の論では「虚無主義」や「無政府主義」とのヘゲモニー争いの文脈で——布置されている。「不健全」で「病的」なものとして痛罵されるこのような「頹廢」の決定論的位置付けからは、一節で示した「デカダン」の力動性を読みとることは不可能である。

このような平林の「頹廢」観には、マックス・ノルダウ『頹廢⁽⁸⁾』の影響を見てとれる。貝澤哉によれば、同書は「当時流行していたロンブローゾの理論にもとづいた医学的観点から、「世紀末」fin-de-siècleや「デカダンス」décadenceなどこの時代の現象を科学的に批判した書として、ロシア語を含むあらゆる欧語に翻訳され全世界に流布し、大きな反響を呼んだ⁽⁹⁾」という。また、日本でも夏目漱石や自然主義作家たちに影響を与え、大正三年に抄訳『現代の墮落』が出版されている。⁽¹⁰⁾「一九世紀末のヨーロッパ芸術の退廢的傾向を、医学的観点から、道德的に激しく非難した書物である」⁽¹²⁾『頹廢』を、実は平林も早くから

読んでいたのだが、「階級闘争」と「進歩史観」という認識枠を獲得した後、ノルダウの社会進化論的「頹廢」観がそれらに合致する〈知〉としてせり上がってきたと考えられる。

ノルダウは『頹廢』で、「世紀末的気分」を「病める人の力なき絶望」、「周囲の世界が生々と育ち行く中に、自己のみは刻一刻、死に近づくかざるべからざるを感じつゝある衰弱者の感ずる絶望」(『現代の墮落』より引用、三頁。以下頁数のみ記す)と規定し、ここに見られるような「世紀末」的(declinatory)現象の原因を、物質文明の変化によって引き起こされる、人々の「心身疲労」に帰す。同書では、「世紀末人」たちの様々な病的「徴候」が紹介された後「疲労が生み出せる」「世紀末の文学、芸術」はあくまで「病的」なものであり、「光明ある未来を示すものにあらずして、それは過去を指すものなり」(五六頁)と断言される。「弱き者と変質者は滅するならん」。「文学、芸術に於ける病的現象は将来を持たざるべし。人類が疲労より恢復するときに、其等の病的現象は消滅すべし」(三八二頁)と弱者の滅亡が予告され、「健全なる人々は」「新なる境遇に應じて、それ／＼何等かの途を見出し行くべし」(三七六頁)「強きものは新なる境遇に適合するか、然らざれば境遇を自己に適合せしむるならん」(三八二頁)と適者生存の法則が説かれるに至る。

優生学に連なる非常に危うい論理が胚胎しているが、確認すべきは、ノルダウが「世紀末」における「頹廢」を、文明や人間の「衰頹」として捉えており、そこには如実に社会進化論が

見てとれるということである。⁽¹⁵⁾「病的」な「頹廢」には、一度陥るとそこから回復することは不可能とされ、淘汰されることが宿命づけられている。彼らとは異なる「強者」、すなわち「健全」な人々こそが自らと社会を適応させ、生き残ることができののだ。

平林の「頹廢」観には、以上のノルダウの論理が、「階級闘争」——「唯物史観」の論理としてスライドしている。すなわち、歴史の「進歩」の過程で、「病的」なブルジョアジーは「崩壊」「頹廢」へと至り、「健全」なプロレタリアに必ずや淘汰されるのである。ここにおいてマルクス主義という決定論的プログラムの中で、「頹廢」は没落「階級」の「病」として、烙印を押されることとなる。

さらにこうした平林の言説は、以下の諸論とも共振している。

最高の発達階段に達した階級及び国民の文化は古典的である。自己を表現せんとして戦つてゐる階級はロマンチックである。而して此のロマンチズムは『スツルム、ウント、ドラング』の典型的特色を具へてゐる。衰頹期に向つてゐる階級は、これとは別種の、即ち幽鬱的、幻滅的、頹廢的なロマンチズムの形態をとる。

ルナチャルスキイ、平林初之輔訳「労働者の自主教育」⁽¹⁶⁾
私は現代の芸術家はプロレタリアートの解放的努力によつて靈感づけられ「ねばらない」とは云はない。否、若し

も林檎の樹が林檎を生み、梨の木が梨を結ばねばならないとしたならば、ブルジョアの見地に立つてゐる芸術家は、上記の努力に反対して立たねばならないのである。頽廢期の芸術は頽廢的（デカダ^{ママ}ン的）でなければならない。これは必然である。

ブレハーフ、蔵原惟人訳『芸術と社会生活』

（昭2・2、同人社書店、二二六頁）

貝澤哉によれば、ノルダウの『頽廢』はロシアでも大きな反響を起こし、「病」としての「デカダン批判」の言説はマルクス主義の批評家ユシケーヴィチ、ルナチャルスキーらにまで継承されたというが、ルナチャルスキーの「衰頽期に向つてゐる階級は」「幽鬱的、幻滅的、頽廢的なロマンチズムの形態をとる。」という、ブルジョアに「病的」要素を見る「階級」観や、ブレハーフの「頽廢期の芸術は頽廢的（デカダ^{ママ}ン的）でなければならない」という決定論からは、ノルダウ―平林と同様の論理構造を――平林自身が翻訳した前者は当然でもあるが――抽出できるであらう。¹⁸⁾

彼ら代表的マルクス主義者の「頽廢」観も手伝つたのだらう、詳しくは四節で示すが、この後、プロレタリア文学運動において「頽廢」は「階級闘争」の中で敵対する「階級」の属性とされ、ここでは「病」の「徴候」が看とられるようになる。もちろんその「頽廢」観の源泉を、ノルダウに全的に帰すことはできないが、少なくとも平林の「階級闘争」を支える決定論に、マ

ルクス主義と社会病理学との癒着を指摘することは妥当である。

三、「芸術的価値論争」における「頽廢」

しかし、大正一二年以降共産党から離れ、運動の前線から退きながら、唯物論を独自に洗練させた平林は、自身のとつていた決定論的「階級闘争」観を修正するに至る。マルクス主義文学運動を内在的に批判する視座を獲得した平林によつて、「頽廢」はその一義の意味付けから解放されている。日本近代文学史上最も大きな論争の一つ、「芸術的価値論争」の口火となつた「政治的価値と芸術的価値」（『新潮』昭4・3）には、平林の「頽廢」評価が以下のように記された。

たとへば、ボオドレー^{ママ}ル若しくはエドガア・アラン・ポオの作品を例にとらう。『…』これ等の作家によりて描かれた頽廢性、不健康性は、プロレタリアの闘争のために無論のこと、一般に人類の向上進歩のためにすら反効果をもつものであるのに、私たちが、それ等の作品に、多かれ少なかれ芸術的価値を認めるのは何故であらうか？／こゝに一元論をもつては解釈しがたい謎がある。

平林は、ボードレー^{ママ}ルやポオの「頽廢性」が、「階級闘争」にも「人類の向上進歩」にも「反効果をもつ」ことを認めながら、それを理由に作品の「芸術的価値」を捨象することはしない。一節で見た「逃避」としての「デカダン」肯定とも、前節

で確認した「頽廢」の全面的否定とも異なる、「頽廢」に対する平林の複雑な評価が、ここに表れている。

同論は周知の如く、「芸術的価値」と「政治的価値」の弁証法的「一元化」を否定する「懷疑論」として捉えられ、他のプロレタリア批評家たちから悉く反論を浴びるのだが、右の箇所も一つの争点として、数多くの批判が寄せられた。川口浩は、ボードレールやポーの作品を、「疑ひもなく芸術であるだらう。」「イデオロギーの如何に拘らず、芸術性を持つたらう。」としながら、「歴史的——階級的基準によつて測られる以外のいかなる価値を持つてゐるのだらうか？」と、平林の述べる「芸術的価値」を退ける。また、大宅壮一は、同じく平林の謂う「芸術的価値」を、過去の「技術」や「歴史的意義」を「間接的」に保持するだけのものとし、もし平林がボードレールやポーに「芸術的価値」を「直接的に」感得するならば、その「イデオロギーの本質」は「デカダン作家」らと「相通ずる」のだと言う。「もちろんそれは平林氏だけではなく、われ／＼中間知識階級の頭脳には各種のイデオロギーがはんらんしてゐることは事実であるが、その多元性を弁護したり、あるひは弁護にひとしい効果を与えたりする議論は極力排撃すべきである」⁽²¹⁾。革命運動の理論的指導者、蔵原惟人も、川口や大宅と同様の論旨である。「ボードレールやヴェルレーヌの詩は芸術性をもつてゐるか？ 勿論、持つてゐる、或は非常に多くの芸術性を持つてゐるかも知れない。しかしボードレールやヴェルレーヌの詩は、現代に於いて

その芸術性に比例した価値を持つてゐるかと云ふに、持つてゐない。それは芸術作品の芸術性と云ふことがそれ自身価値でない証拠である。」「我々は常に、芸術性そのものをも社会的な観点から見てそれが何等かの意味で——例へば技術的形式の意味に於いて——プロレタリアの勝利に役立つものであるならば、その価値を認め、それ以外のものはその価値を認めない」⁽²²⁾。

ここで注目すべきは、平林に対する反論のほとんどが、「デカダン作家」の「芸術性」をある程度は認めている、ということだ。批判者たちは「芸術性」と功利主義的「価値」との間に線を引き、「デカダン」の作品に後者が無いことを厳しく追及するのだが、このことは逆説的に、本来忌避すべき作品から「芸術性」を看取してしまう、彼らの認識枠を浮き彫りにする。そこで行われる「芸術性」の認容は、恐らく弁論術としての譲歩のみではなく、大宅が示すように「われ／＼中間知識階級の頭脳」で実際に行われているのであり、しかしそれはプロレタリアを代行する際には、ノイズとして抑圧——排除すべきあくまで「病的」なものである。蔵原が「プロレタリアートの仕事の發達と勝利」に貢献しない「病的な美の觀念を伝染する所の頽廢期の芸術」の「価値」を、少なく見積もるように⁽²³⁾。

ならば、冒頭に引用した「ボオやボオドレールの傾向を決しておう歌してゐるのではなく、たゞこれ等の作品のもつ芸術的なものに打たれるといったまで」^{ママ}ある」という弁解めいた言辞に続く、平林の以下の言葉は、彼らへの応答として概ね正しい。

一般に一階級は、自己の階級に関することがらばかりに興味をもつものでなく、それとは反対のものにも興味をもつ。このことはロマンチズムの文学の場合にもつともよくあてはまる。ロマンチズムはブルジョアの文学であつたけれども、同時にブルジョアをもつとも軽べつした多くの作品を生んだ。「…」／＼このことはプロレタリアについてもいへる。「…」／＼ストライキばかり労働者が美を見だすと考えるのは、そして又一步を譲つて、労働者の喜ばないものには美がないと考へるのは、メーリンクが指摘したやうに、「乱暴な」「面白からぬこと」である。かやうな考へは一種の狂信と見なさねばならぬ。

「文芸時評5」（『東京朝日新聞』昭和4・8・3）

平林は、批判者たちの論中に表出される（かくあるべき）理想としての「新興階級」と、現実との差異を指摘しているわけであるが、その射程は、「プロレタリア」を代理―表象する論者たち自身が抑圧―排除する「反対のもの」への「興味」にまであると言える。彼の慧眼は、理論の硬化を招く「階級」観の窮屈さのみでなく、論敵たちの「狂信」――〈主体〉的欲望を封じ、理想的プロレタリアへと捧げる信仰――までを射抜いている。

しかし、「たい廃派作品の価値」と副題されるこの論は、「階級闘争」という論争のコードに合致してはいるが、平林が把持する「頽廢」観を矮小化して伝えているのではないだろうか。

平林の「芸術的価値論争」前後の言説は、右で述べられる、「興味」の対象としての「頽廢」の「価値」とは異なる可能性を伝えているように見られる。だがこれについては五節で考察するとして、マルクス主義的「頽廢」観が辿る経路を確認しよう。

四、「頽廢」と「モダン」

川口浩・山田清三郎編『プロレタリア文芸辞典』（昭和5・8、白揚社）には、「頽廢」の項目が以下のように記されている。

デカタン^マといふフランス語で一般に通用してゐる。頽唐といはれることもある。自己を統一することなく、道德的には、極度の主我的行為をほしむに似し、何等道德律によつて自律しないことであり、心理的には、確固たる意志を全く持たず、感情的で、喜怒哀楽に病的におぼれることであり、自己偏愛がすべてに表はれてくるといった状態をいふのである。これは社会的には過渡期に発生する現象である。

二節で確認した『頽廢』を引き写したかのような記述であり、ノルダウの強い影響力が窺える。⁽²⁴⁾この後、「過渡期に発生する現象」の例として「封建社会の末期」＝「江戸末期に表はれた芸術、為永春水とか鶴屋南北の作品など」が挙げられるが、⁽²⁵⁾実質的には、「階級」間の覇権が交替しようとしている現在の意であることは、多言を要すまい。問題は続く以下の記述である。

また最近に於いては、芸術派の文芸家の理論がこの傾向を表はしてゐるのを見る、これらの人にとつてはこの頹廢が一種の美と感ぜられるのであるが、プロレタリア芸術にあつては、極度に排撃さるべき傾向である。

平林が既に脱却した窮屈な「階級」観に則つて、「藝術派」＝「新興芸術派」に「頹廢」の「診断」が下されている。「プロレタリア芸術」にとつての現下の敵が、「過渡期に發生する現象」として認定され、「極度に排撃さるべき傾向」として断罪されるのである。

バーバラ・ハミルは、「モダニズム」が「マルクス主義」者たちから「資本主義の頹廢的現象として完全に否定された」ことを指摘しているが、そのような「否定」が如何なる論理を辿るかを、右の言は明確に示している。マルクス主義文学陣営は、過去の「病的」な「頹廢」を敵対する「モダニズム」へと投影することで、没落する「階級」を（いま・ここ）で「頹廢」の状態にある者とし、「進歩」の外側へはじきだそうとするのである。

同種の言説は数多くあるが、例えば上田進の「モダン」批判⁽²⁷⁾の論旨を追おう。上田は当時文壇を騒がす「形式主義論」に触れながら、「芸術が内容を失ふことは、文化の頹廢期に於いて常にある救はれ難き病氣」と述べ、それが悪化した「意識的なデカタンの傾向^{マヤ}」として、龍胆寺雄ら「若い新しい作家達」を糾弾する。

かれらは社会の進展に対する自己の無能力を知つてゐる。だからかれらは社会の動きに対して眼を閉ぢ、利那的刺戟を求めるモダンな生活がかれ等には最も新鮮な強烈な刺戟を与える。そこでジャズが、ダンスホールが、レヴエ^{マヤ}か、ステッキガールが、スポーツが、銀座が、カフェ、マルキシズムが、……等々がかれ等の生活の対象であり、芸術の中心である。

彼らの「病的」な傾向は、「社会の進展」に対して何ら寄与することができない。従つて、「モダン」＝（終末の時間）に宙ぶりにされ、「利那的」な——未来へ通じる時間から切断された——「刺戟」にふけるのである。上田の透徹した論理によつて、「モダニズム」のあらゆる現象は、深く考察されることのないまま、厳しく否定される。

このような論理が孕む転倒を、青野季吉の以下の叙述⁽²⁸⁾から抽出できる。青野は「芸術派型、ナンセンス型、単なるエロチシズムの作品」に見られる「超現実的、空想的、遊戲的」「諸要素」を「モダン・デカダン」と名付け、その末路を皮肉に予告する。

内容の現実的生命を排して、ひたすらに感覚のパラドックスにしがみついてゐたものが、更に発展し、分化した、超現実^{マヤ}は、空想的、遊戲的等々と成つて行くのは、生命の論理からいつて当然な話であつて、ブルジョアジーの芸術もこゝまでくれば、いよいよそのブルジョア性を『輝か』したといつてよいだらう。

『輝か』した」という暗示の意味するところは、明らかである。⁽²⁹⁾しかし、「当然」と強弁される「生命の論理」の「当然」性は、実のところ何にも保証されていない。青野は、プロレタリア文学の「正しい方向が、まず／＼現実的に志向してゐる」と、ブルジョア文壇の「新しい諸現象の実質がまず／＼現実的な諸コースをとつて来てゐること」を、各「階級生命」の「反映」とするが、それは結局、自らの依る「階級」を規準とした、敵対「階級」文学の転倒的な読解——「階級闘争」の論理から逸脱するどのような現象も、滅亡を前にした「階級」に巢食う「病」の「徴候」とする読解——ではない。

マテイ・カリネスクは、「現代の資本主義と、その死にゆく文化の進行する腐敗」を表す「デカダンス観念」が、「人間の疎外の終焉としてのコミュニズムという終末論的なヴィジョン」を持つ「マルクス主義」にとつて「重要」であることを述べている。⁽³⁰⁾カリネスクの正鵠を射た指摘の通り、自らが代理表象する「階級」の正統性を担保する「デカダンス観念」は、彼らにとつてどこまでも「重要」である。「頹廢」という一方的「診断」によつて、「病者」を「進歩」から隔離し、「モダン」を「終末論」の最後尾に位置付けることで、公式主義者たちは「歴史の必然性」の論理を完成させることができるのである。

五、「頹廢」の〈潜勢力〉

平林はこれらのマルクス主義文学者とは異なり、「モダニズム」を積極的に評価した人物であつた。時に彼は、「モダン派の文学」に「末世的な、崩壊期の文学」である「軽文学」との「類似」を見てもいるが、⁽³¹⁾それがただの「頹廢」否定と異なることは、「芸術派とプロレタリア派と近代派と」（『新潮』昭5・5）に明らかにである。同論には、「モダアニズム」の持つ「進歩性」について述べられた後、以下のように記されている。

土地と工場とは、田園に、又は郊外に姿をかくしてゐる。そして消費の尖端だけが銀座にあらはれる。銀座のフラツパーやシイク・ボーイは、現代の一産物ではあるが、ただそれをつかんだだけでは、現代の末端をつかんだことにしかならない。それは、政治機構に、経済機構に、つながつてゐる。この胴体にこそモダニズムの母胎がある。それを見逃してゐる限り都会芸術は、いつまでたつても華やかではあるが薄つべらなイリュージョンでしかない。

平林は、「モダアニズム」と「モダアニズム文学」を分け、後者を「モダアニズムの消費的末梢だけに敏感な文学」としてたしなめている。しかしそれは裏を返せば、「現代」の風俗を表層的に扱う、今はまだ浮薄なその文学が、「政治機構」や「経済機構」という「モダニズムの母胎」への回路を獲得したときに、「進歩性」へと通ずるということだろう。「モダニズム」を峻拒していた公式主義者たちとの甚だしい懸隔が表出している。⁽³²⁾

彼の特異な「モダニズム」観は、「社会時評」（『新潮』昭5・

3)にも確認できる。平林は、ノルダウの「世紀末」に対する「診断」を紹介し、その記述の妥当性を認めた後、「現代」⁽³³⁾と「世紀末」を切断しようとする。曰く、「今から二十年前には世紀末的特徴を備へた人は、時代の尖端を歩む人であり、その時代を最も尖鋭に代表する人であつた。ところが、今日では、さういふ特徴は、もはや時代後れとなつた人々を代表している」。例えば、「世紀末」の人々は「スケプチズム」の特徴を有するが、「現代の尖端を歩む人にはもう懷疑はない」のである。

同論にも、過去の「頹廢」と「モダン」を接続していた他のマルクス主義者たちとの差が顕著であるが、本稿はこの平林の論理から旋回し、今一度彼にとつての「頹廢」を問い直すことで、論を閉じたい。平林が共産党から離れた後に残した「頹廢」についての言及を概観すると、単純だが興味深い事実が理解できる。それは、平林は過去の「頹廢」については「価値」を認めるが、現在のそれについては、あまり評価を与えない、ということだ。三節で確認したように、平林はボードレールやポールの「頹廢性」を「階級闘争」や「進歩」には無効であるとしつつ、その「芸術的価値」を認めていた。また別では、「前世紀末のデカダン」が、「文学における不道德性、文学とブルジョア道徳との背反」の「絶望的表現」とされ、「階級」内部の自己破壊運動として、肯定的に捉えられている⁽³⁴⁾。

しかし、現在における「デカダン」や「頹廢」の問題となると、とたんに平林の口ぶりは変わる。平林は「モダニズム」と「世

紀末」を差異化していたが、他にも「十九世紀的な、古典的なもしくはデカダンの、美の概念」を、「現在の社会を特色づけてゐる最も重要な力」「機械」の「運動に取り残されてゆく」ものとして述べる⁽³⁵⁾。また、「江戸川乱歩」〔新潮昭5・1〕では、「頹廢的なもの、病的なもの、グロテスクなもの」と「健康なもの、進歩的なもの、澁刺たるもの」が対置され、後者を拒み前者へと傾倒することに、乱歩作品の「大衆性の限度」を指摘している。「頹廢」は「進歩」とは対極に位置する過去のものとして評価され、現在にはそぐわないものとして処されているのである。

このような論理に潜む綻びを解くために、少し遡るが、大正一五年二月「探偵小説壇の諸傾向」(「新青年」)を見てみたい。同論でも平林は、江戸川乱歩と横溝正史に通底する「場末の寄席でみるやうな、デカダンの空氣」を、「とりのぞいて貰ひたい」と述べている。彼は、探偵小説家を、乱歩、正史、小酒井不木、城昌幸の「不健全派」と、正木不如丘、甲賀三郎の「健全派」に二分し、後者の「今一段の発達を希望する」のであるが、同時に自らの「趣味」に関して、以下のように記す。

一体私は、自分では可なり不健全な、病的な趣味を多量にもつてゐるものであり、且つこれは程度之差こそあれ、すべての人間に共通の現象であると思ふのであるが、かゝる趣味に対するアンチオド「反発」も亦凡ての人に共通して存在するであらうと思ふ。ところが、現代の日本の探偵小説作家はあまりに不健全趣味に片寄りすぎてゐるや

うに思ふ。あまりに、人工的な、怪奇な、不自然な世界を追ひすぎてゐるやうに思ふ。かやうな傾向は、頽廃期の特徴である。そして如何なる芸術からも避くべきである。

右からは、平林が「頽廃」に引き裂かれている姿を、明確に看取できるであろう。平林はそれ以前にも、「日本の普通の小説は、むづかしくてよくわからないから、そして私の頭のやうに疲れてしまった頭を刺戟する力がないから、刺戟を与へてくれる読物として先づ第一に探偵小説を選んでゐる」と、自分の「世紀末病」的な症状を申告しているのだが、ここで彼は「不健全な、病的な趣味」をはつきりと自覚し、自らが「頽廃」に魅了されてしまう者であることを明かしている。しかし、平林は「頽廃」への「アンチトオド」を普遍化することで、自身の均衡を保っているように見える。「頽廃期の特徴」は「如何なる芸術からも避くべき」という、「進歩史観」の原則を遵守するが如く――。

以上から推察できるのは、平林は、「頽廃」を過去のものの、「進歩」の対極にあるものとするあまり、自分が「頽廃」に対してなぜ魅力を感じるのか、「頽廃」が本当に「進歩」と「反対」する過去のものであるのか、といった問題を、内在的に追究することが、不可能であったということだ。「進歩史観」に憑かれてしまっている平林は、過去の「頽廃」の「価値」を触知することはできても、現在の「頽廃」を評価することはできない。「芸術的価値論争」の際に論敵に向けられていた慧眼は、「進歩」

の「反対のもの」への自らの「興味」を射抜いていながら、それを掘り下げ、〈現在化〉することには至らない。

しかし平林が、現在における「頽廃」の深層に潜む、「進歩」への力動性を捉まえていたことは重要である。

私たちの美の観念はいま急激に変革の過程をたどりつゝある。科学、工業、機械、都市……さういつたものが、私たちにとつて、自然以上の美を、み力をもちはじめつゝある。大都会においてブルジョア文明のたい廃のみを見ることを強要する人たちはあやまつてゐる。そこには次の文明の骨組が見られる。

『文芸時評1』（『東京朝日新聞』昭4・1・30）

平林は、「大都会」に「病」を「診断」し、〈終末の時間〉を見る人々から、「たい廃」に潜むものを庇おうとする。「ブルジョア文明のたい廃」の奥には、同時に「次の文明の骨組」が、新たなものへの胎動が潜んでいる。「進歩」へと通じる「たい廃」の「潜勢力」が、ここでは確かに感知されているのである。それはあくまでも「頽廃」そのものの力ではないが、この〈潜勢力〉は、日本のマルクス主義における「デカダンス」評価の臨界点として位置付けられるものである。⁽³⁸⁾

如上のように、「頽廃」を「進歩」と対蹠的に捉えていた平林は、これ以降「頽廃」について自覚的に考察することはなく、また、このような〈潜勢力〉を備給する文学作品を具体的に見出すこともなかった。平林の死後、マルクス主義陣営からも、また、

モダニズム陣営からも、〈デカダンス〉はしばらく忌避されるべきものとしての命を全うする。

次に同概念に積極性を見出すのは、革命運動がほとんど挫折した昭和一〇年、日本浪曼派の中心人物、保田與重郎である。保田はマルクス主義的「頹廢」觀を継承しつつ、その価値を反転させるを試みるのだが、これについては別稿を期したい。

注

(1) 本稿では、「デカダン」と「頹廢」（及び「退廢」、「たい廢」、「廢類」）の双方を、翻訳の關係と見なし、ほぼ同じ記号表現として扱う。従って論中において二語の記号内容が異なる場合、記号表現の相異として処理せず、その原因を、時代の変化、論者の思想的変遷、論者間の思想的差異などに帰す。

(2) 青野季吉「平林初之輔論」（『新潮』昭6・8）をはじめ、平林初之輔を「転向者」と捉える論は数多くあるが、本稿は、大正一二年以降共産党から離れた後も、平林は一貫してマルクス主義者であったという視座に立つ。

(3) 尹相仁「近代日本文学と「世紀末」」（『世紀末と漱石』平6・2、岩波書店）参照。

(4) 渡辺和靖「平林初之輔とロマン主義」（『自立と共同』昭62・11、ぺりかん社）。

(5) 注(4)に同じ。なお、「逃避」とは平林初之輔「現実と真実」（『新潮』大9・8）の、「現実に対してはこれを破壊するか逃避するかより外に道はない。」による。

(6) 大和田茂「平林初之輔の再検討」（『社会文学・一九二〇年前後』

平4・6、不二出版）。

(7) 菅本康之「ロマン主義からマルクス主義へ、シンボルとアレゴリー」（『モダン・マルクス主義のシンクロニシティ』平19・1、彩流社）。平林初之輔研究を刷新した同書から、本稿は多くの示唆を受けている。

(8) 原題は“Entartung”（1892-1893, Berlin NW: Carl Duncker）、英訳は“Degeneration”（1895, London: William Heinemann）。他に「墮落論」「退化論」などと訳されたが、ここでは平林初之輔が同書を「頹廢」と呼んでいた（『ジャアナリズムと文学其他』、『新潮』大11・8）ことに倣う。

(9) 貝澤哉「デカダンという病」（『比較文学年誌』平6・3）。

(10) 石原千秋小倉脩三・小森陽一・富山太佳夫「漱石と退化論」（『漱石研究』平7・5）、鎌倉芳信「自然主義文学とマックス・ノルダウ」（『国文学 言語と文芸』平14・11）などを参照。

(11) 中島茂一訳『現代の墮落』（大3・3、大日本文明協会）。

(12) 木股知史「大日本文明協会編『現代の墮落』（木股知史編『近代日本の象徴主義』平16・3、おうふう）。

(13) 注(8)の「ジャアナリズムと文学其他」の他、既に大正八年七月六日「やまと新聞」掲載の「七月の文壇」（筆名はH・H生）に、「世紀末病の診断をやつたマックス・ノルドーに現代の日本を診察させたら彼は何といふだらう」という言辞がある。

(14) これについては、後年の平林の記述がそのまま解説となる。平林は昭和五年三月、「社会時評」（『新潮』）で、ノルダウが指摘した「世紀末人の、即ち変質者の精神的特徴」を、①「道德的觀念、善惡の觀念が著しく欠如」、②「エモーショナルリズム」、③「ペシミズム」、④「凡ゆる種類の活動をきらふ」、⑤「著しい夢想的」、⑥「スケプチズム」、⑦「ミスティズム」とまとめている。また、ノルダウを「多少誇張的である」としつつ、「彼の診断は、少く

も誤診ではなかった」と評価している。

- (15) ジャン・ピエロ、渡辺義愛訳『デカダンスの想像力』(昭62・10、白水社、六九頁)、貝澤哉「デカダンという病」(注(9)に同じ)参照。

- (16) 平林初之輔『無産階級の文化』(大12・1、早稲田泰文社)。なお、同書所収の「無産階級の独立文化へ」(大11・9、初出誌未詳)で平林は、引用部の後、「ブルジョア文化は諸文明国に於てその古典時代を過ぎて今や頹廃期に入つてゐる。」と付している。

- (17) 注(9)に同じ。

- (18) ただし、「病者」を回復不能とし、彼らの衰滅を宣告するノルダウの峻烈な文言とは異なり、平林はブルジョアジーに、延命のための道筋を残してもいる。例えば、「無産者文学のプログラム」『プロレタリア文学綱領』大12・4、世界思潮研究会)では、「ブルジョア文学には目標がない。無目的である。それだからちよつと常規をはずすと、自暴自棄となる。頹廃的となる。換言するとブルジョア文学には未来がないがプロレタリア文学には未来がある。」と、「ブルジョア」の終末を予告するが、「ブルジョア観念の自滅はブルジョア文学の崩壊である。その崩壊のあとに何が残るかといふと、一部は反動的となつて過去へ逆戻りし、一部は腐敗頹廃し、一部はプロレタリア観念に徐々に融合して来る。」と、「ブルジョア文学」が生き残る道を、確かに示している。

- (19) 同時代的にも、またその後の研究史においても、平林初之輔は同論争で「政治」と「芸術」の「二元論」を問題化した人物として捉えられていたが、菅本康之「ヘゲモニーとしての政治」(注(7)に同じ)はこの従来の認識を誤謬としている。「平林において「政治的価値」とは「科学」と「芸術」という「二元論」の危機に際して「科学」＝「マルクス主義」を救済するために持ち込まれた、「ヘゲモニー」にほかならない」という同氏の指摘は

示唆に富む。

- (20) 川口浩「平林初之輔氏の所論その他」(「戦旗」昭4・5)。

- (21) 大宅壮一「事実と技術」【四】、同【五】(「東京朝日新聞」昭4・5・18、19)。

- (22) 蔵原惟人「マルクス主義文芸批評の旗の下に」(「近代生活」昭4・8)。

- (23) 注(22)に同じ。

- (24) ノルダウの『頹廃』には、「世紀末病」の症状として、「自己にとりては唯自己のみが意識の中に現れ来る」「自我狂」(二二九頁)についても、詳しく解説されている。

- (25) 西洋の「世紀末」を日本と重ね合わせ、江戸末期を「頹廃」と捉える言説は、特に珍しいものではない。例えば高須梅溪「近世デカダンスの享楽趣味」(「中央公論」大10・5)は、春水や南北の作品に「江戸文化の頹廢期の空氣」の反映を見ている。

- (26) バーバラ・ハミル「日本的モダニズムの思想」(南博編『日本モダニズムの研究』昭57・7、ブレイン出版)。

- (27) 上田進「文芸時評(1)」(「信濃毎日新聞」昭4・6・22)。

- (28) 青野季吉「文芸時評【6】」(「東京朝日新聞」昭5・1・7)。

- (29) ただし青野は、「これがすべての行詰まりでなく、これから更に、ヨーロッパの実際に見るやうに、新神秘主義等々といったやうな、さまざまの形態をもつてする超現実的乃至反現実的な意識のデヴエロープして来るのも、余り遠いことではないであらう。」と、海外の文芸事情を踏まえて、衰退の長期化を予示している。

- (30) マテイ・カリネスク「デカダンスの観念」(富山英俊・梅正行訳『モダンの五つの顔』昭64・11、せりか書房)。

- (31) 平林初之輔「文芸時評六」(「東京朝日新聞」昭4・9・4)。

- (32) 平林初之輔の「モダニズム」論に関しては、バーバラ・ハミル「日本のモダニズムの思想」(注(26)に同じ)、菅本康之「機械仕掛

けのマルクス主義」、「臨界点としての唯物史観から歴史的唯物論へ」(注(7)に同じ)を参照。

(33) 注(14)参照。

(34) 平林初之輔「文芸時評3」(『東京朝日新聞』昭4・11・3)。

(35) 平林初之輔「日本の文学は何処へ行く」(『新潮』昭6・2)。なお、平林の「モダニズム」論における「機械」の重要性については、注(32)の文献を参照。

(36) 平林初之輔「私の要求する探偵小説」(『新青年』大13・8)。

(37) ノルダウの『頽廢』には「神経病」の一症状として、「疲労せる者は」「麻痺せる神経を刺激せんが為に」「興奮剤を使用し、自ら病的になり行く」と記されている(五二―五三頁)。

(38) 「日本」と限定したのは、テオドル・W・アドルノ『没落』後のシュペングラ―(渡辺祐邦・三原弟平訳『プリズメン』平8・2、筑摩書房)の以下の言葉による。

暴力的で抑圧された生の世界にあつては、この生や、その文化、その粗野さと崇高さの従者であることを辞めると通告するデカダンスこそ、より善い世界の避難所である。「…」西洋の没落に対立するものは、復活した文化ではない。そうではなく、没落してゆく文化像のなかに言葉なく問いかけながら、しまい込まれているユートピアである。

アドルノは、シュペングラ―が『西洋の没落』で示す、「人間侮蔑」的で「運命」論的な「歴史」の決定論から逃れるものとして、「頽廢」のなかで自由になるさまざまな力」を見出している。マテイ・カリネスクが述べるように、アドルノは「デカダンスを否定性の文化として理解し」「美的デカダンスの概念を、マルクス主義的かつ弁証法的なイデオロギー理論の枠内で再評価する可能性を、示唆している」。アドルノによって、「ある特定の歴史的モメントの表現として、デカダンスはもはや「ブルジョワ・イデ

オロギー」の有害な現われとしてではなく、逆にそれに対する反動として、それどころか、深刻で真正な危機の意識として出現する」のである(以上、注(30)に同じ)。紙幅の都合上、詳しく検討できないが、「たい廢」の奥に「次の文明の骨組」を見出す平林と、「デカダンス」に「しまい込まれているユートピア」を指摘するアドルノの論理は、共振している。しかし、決して「頽廢」そのものを評価しているわけではない前者と、「デカダンスこそ」を可能性と捉える後者には、やはり差異がある。アドルノの「デカダンス」は、マルクス主義者・平林初之輔の「頽廢」が備えていたかもしれない、未発の可能性を示唆しているようにも思われる。

付記

原則として漢字は新字に改め、ルビは適宜省略した。引用・参考資料の副題は省略し、引用文中の「…」(省略)、「改行」、「」(注記)は稿者による。

■展覧会レビュー

いま「昭和初年代」を見直すこと

『昭和モダン 文学と絵画 1926-1936』展
(2013年11月2日～12月29日 兵庫県立美術館)

秋吉大輔

昭和の初めての十年間である一九二六年から一九三六年は、実に様々な芸術潮流が現れた時期である。本展覧会は、この時期の様々な芸術潮流を、絵画と文学——特に洋画と小説——に焦点をあてて紹介したものである。

日中戦争(一九三七)に出征する兵士を熱狂的な雰囲気の中で見送る人々の様子を描いた阿部合成「見送る人々」(一九三八年)が、本展覧会の最後に展示されているように、昭和の初めての十年間は、「国家総動員法」(一九三八年)をはじめ日本が全面的に戦争へと突入していく「直前」の時期であった。日中戦争へと向かう兵士を「見送る人々」が、七十五年後の「いま」本展覧会の鑑賞者を美術館から日常生活へと見送るという展覧会の構成は、本展覧会の開催中に「特定秘

密保護法」を成立させた日本の現時点を「戦前」として二重写しにしているようにも思える。おそらくそこにこそ「いま」昭和初年代を見直す必要性があるのだろう。

問題は、昭和初年代を「いま」どのように読むのかである。

本展覧会では、この時代を第一章「プロレタリアの芸術」、第二章「新感覚・モダニズム」、第三章「文芸復興と日本的なもの」の三つのセクションに分けて展示している。これは、平野謙が「昭和史」で示した枠組みと同じものである。平野謙は、既成のリアリズムの延長である「私小説」と、関東大震災以後の「プロレタリア文学」、そして「新感覚派」の三つに分けて昭和初年代を捉えた。いわゆる「三派鼎立」論である。そして、プ

ロレタリア文学の瓦解後、そこからの転向派も組み込む形で『文学界』を作った小林秀雄に、戦争に抵抗しうる「人民戦線」の可能性を読みとっていた。このような見方は、福田恆存が批判的に指摘していた(文壇的な、余りに文壇的な『新潮』一九六二年四月)ように、「新日本文学」(後に「民主主義文学」へと至る一派)、「近代文学」、「風俗文学」が「三派鼎立」していた「戦後」の同時代的な状況への平野謙による応答でもあった。プロレタリア文学の直接的な継承・発展を絶対化することで、それ以外を排斥した「新日本文学」への批判であり、「近代文学」派による「戦後文学」の称揚である。平野謙は、安保闘争、原水爆禁止などに揺れ動く戦後空間の「いま」に対応させる形で、文芸復興期の小林秀雄に、戦争に抵抗しうる可能性を見ていたのである。

しかし、本展覧会を一回りすれば分かるように、何といってもその熱量に圧倒されるのは、平野謙が可能性を託した昭和十年前後の文芸復興期(第三章)よりも、

第一章「プロレタリアの芸術」だろう。第一章では、プロレタリア作家たちの小説と並ぶように、津田青楓から前田寛治、柳瀬正夢、矢部友衛、永田一脩、小野忠重、大月源二、岡本唐貴、村山知義などの画家の絵が配され、同時に『文芸戦線』『戦旗』などの雑誌や理論書、ビラ、ポスターが展示されている。プロレタリア芸術をまとめて見る機会が少ないことを考えると、これだけでも貴重な試みといえるが、第一章では、多くの人々が短期間に熱中した同時代の膨大な熱量を感じとることができる。

この熱量は後半にいくに従って希薄になっていく。もちろん第二章や第三章でも見るべきものは多く興味深いのだが、戦争に向かっていかざるを得ない閉鎖的な空気感は拭い難く、小林秀雄や『文学界』の扱いもあり目立っていない。平野謙と同じ枠組みを用いながらも、これまでとは違う昭和史が浮かび上がってくるのである。

それは、本展覧会が「文学」と「絵

画」というジャンルを超えた表現の交流や共時性に焦点をあてているからであろう。平野謙が考えた「文学」中心の枠組みを、「芸術史」全体から眺め直している点に本展覧会の特色があるのである。

「文学」と「絵画」というジャンルを超えた交流や協働は、これまでも多くの美術展や文学展で取り上げられてきた。本展覧会でもそうした交流や協働は多様に示されている。例えば、プロレタリア作家小林多喜二の『蟹工船』『新女性気質』『安子』と、そこに添えられた大月源二の挿絵。ふたりは小樽時代からの知り合いだった。作品は表現者たちの交流と協働の証なのだ。他にも「文学」と「絵画」（装幀・挿絵）では、川端康成と吉田謙吉、横光利一と佐野繁二郎、谷崎潤一郎と小出檜重、永井荷風と木村莊八などがある。さらに雑誌や演劇など、様々なメディアとジャンルにおける交流と協働が具体的に提示されている。しかし、本展覧会が重視しているのは、おそらくそこではないだろう。具体的な人々の交流や協働が

ないにもかかわらず、同時代にあらわれた表現の共時性に焦点をあてた展示となっているのである（この点については、図録所収の速水豊「1930年の絵画と文学——福沢一郎『無敵の力』と横光利一「機械」について」（兵庫県立美術館、二〇一三年十一月）で詳しく示されている）。

このような同時代の共時性の中で浮かび上がってくるのは、メディアとしての「本」の重要性である。とりわけ面白かったのが、一九二七年三月に金星堂から出た川端康成『伊豆の踊子』である。装幀を施したのは築地小劇場の舞台装置家でもあった吉田謙吉。彼が舞台装置を手がけた新劇協会による「三月廿一日」（池谷信三郎作）の帝国ホテル演芸場での公演（一九二七年二月二十五日から三月六日）初日の翌朝に、川端が逗留していた湯ヶ島温泉の湯本館に、実際に吉田が訪ねてスケッチし、それを元にして装幀の絵は描かれている。

本の函には、湯本館の欄間が描かれ、その一角には、歯ブラシ、剃刀、チュー

ブ、煙草などのカットが配されている。川端の「伊豆の踊子」の装幀その他」『文芸時代』一九二七年五月）によると、そこに描かれたものは、川端の伊豆生活に関わる景物のようである。湯本館は、多くの文学者たちが愛好した温泉宿であるが、それまでも尾崎士郎・宇野千代、池谷信三郎、今東光、鈴木彦次郎、岸田國士、中河與一、藤沢桓夫などが宿泊していた。実は『伊豆の踊子』の函には、歯ブラシなどと並んで、正体不明の丸い物体が描き込まれている。前掲「伊豆の踊子」の装幀その他」によると、これは林房雄が湯本館に忘れていった「金の入物」だという。函に残された林房雄の痕跡からは、当時の伊豆という場所が、新感覚派だけではなく様々な文学者を呼び寄せ、彼らが交差する場所となっていたことが伺えて面白い。

本の表紙には、笥や板橋で囲われた枠の合間に湯船や水槽が配されており、あたりに温泉の湯らしきものが雲のように漂っている。画面中央には碗や皿の並

ぶ朱塗りの膳と、雲から下がったブランコが浮かんでおり、ブランコの縄ひもは右下の湯船から伸びた手に握られている。同様に裏表紙も具象的かつ抽象的で、ふしぎな構図である。現在では、瑞々しい「日本的な美」の典型としてイメージされることの多い「伊豆の踊子」が、新感覚派に属しているモダンな作家の作品として同時代において読まれていたことが分かる。「本」というメディアは、作家や作品が位置していた同時代の共時性・文化圏を示すと言っていいたいだろう。

宮本順子の装画（新潮文庫版『伊豆の踊子』にあるような「日本的な美」のイメージは、もしかすると作品の映画化や『雪国』『古都』、ノーベル文学賞受賞記念講演「美しい日本の私―その序説」(一九六八年)などから事後的についたイメージなのかもしれない。文学史・芸術史を再考する上で、「本」というメディアへの着目が重要であることを、改めて気付かせてくれる展覧会であった。

またモダニズム系の画家である古賀春

江が装幀を手掛けたシリーズ『新鋭文学叢書』も面白い。龍胆寺雄、中村正常、久野豊彦、井伏鱒二、堀辰雄といった新感覚派・モダニズム系の作家だけではなく、左傾化した藤沢桓夫、片岡鐵兵を挟んで、黒島伝治、平林たい子、岩藤雪夫といったプロレタリア文学系の作家までも含む様々な作家が登場する。第一章から第二章の展覧会の至るところで『新鋭文学叢書』と出会うこととなり、その雑多さには驚いてしまう。特に中村武羅夫を中心に反プロレタリア文学をかかげて結成された新興芸術派の「十三人俱樂部」のメンバー（龍胆寺、久野など）も加わっている点が興味深い。後に新興芸術派の機関誌となった『近代生活』にも当初プロレタリア系の作家が多数参加していたことを考えると、両者は同時代の共時性の中で、互いに交錯し読者に読まれていたことが伺える。図書館などで閲覧できる「本」も体系的に展示することで、これまでとは違った文脈を示す。そういった点に本展覧会の意義もあるのだろう。

このような本や雑誌がメディアとして成立する背景には、大衆消費社会の成立が不可欠である。その点で本展覧会のプロローグで上映されていた芥川龍之介の映像は示唆的である。芥川の映像の正面に展示されていた改造社『現代日本文学全集』（一九二六年出版開始）は、円本ブー

ムの先駆けとなったものである。そのブームの広告合戦のさなかに久米正雄が監督となつて、芥川の映像は一九二七年に製作された。これは、文学全集宣伝のために開催された全国各地の文芸講演会で、作家の日常生活の映画を上映するという企画のために撮られた映像の一つである。上林暁によると芥川は「僕はボスタアの代りに立つてゐるのであります」と円本宣伝のための文芸講演会で述べていたようだが（上林暁「青春自畫像」『増補改訂 上林暁全集第八巻』筑摩書房、一九七八年一月）、それは大衆消費社会が浸透し、作家そのものが複製され消費される時代の始まりだったのである。芥川は、この映像の数か月後に自殺することとなるが、

昭和の始まりが、大正天皇の死ではなく、新聞などによつて一大ニュースとなつた芥川の死によつて象徴されることも、大衆文化時代の幕開けを示しているだろう。昭和初年代は、大衆文化と共に始まつたのである。

大衆文化という枠組みから見直すならば、第二章でのモダニズム芸術だけでなく、第一章のプロレタリア芸術についても新たな展望が見えてくるかもしれない。福本イズムの「流行」やプロレタリア芸術における作家の肖像画の多さ（本展覧会でいえば前田寛治による福本和夫の肖像など）、雑誌などに描かれる労働者像、ビラや雑誌メディア自体なども、大衆の登場を基盤としているといつていいだろう。第一回プロレタリア美術展出品作である永田一脩『「ブラウダ」を持つ蔵原惟人』（一九二八年、第二章）には、ロシアの上着ルバシカを着ている蔵原惟人のスマートな姿が描かれているが、ルバシカの着用は、永田の意向によるものだったという。どこまで自覚的だったかは分からないが、

永田が視覚的な宣伝効果を意識していることは間違いないだろう。その後、この絵は雑誌『戦旗』（一九二九年一月）に掲載されることで複製されていく。そこでは、それまでの一部の知識人青年による読者層とは違つた「大衆」という読者が想定されているのではないだろうか。

しかし、このように見てくるならば、本展覧会で欠けている点も浮かび上がる。それは、「大衆文学」である。小笠原克夫（炊絶）は「いわゆる（純文学論争）のために」（『群像』一九六二年七月）などで、平野謙の「三派鼎立」論には、「通俗大衆文学」が欠けていると批判していた。「三派鼎立」と同じ枠組みをもつた本展覧会においても、その指摘はあてはまる。同時代の共時性を再考するうえで、大衆文化や大衆文学を並列させることが必要となってくるだろう。それには、おそらく小笠原が指摘するような山本有三や同伴者作家を並べるだけではなく、『キング』『大衆文芸』などで活躍した作家や挿絵画家・エディターをも視野にいれた「芸

術史」として見直すことが重要となってくるはずである。

そして、もう一点本展覧会に欠けているのは、昭和初年代において不可視化されていく「歴史性」や「他者性」の提示である。文芸復興は、それらを基盤にしたながらも不可視化する形で形成されていったのではないだろうか。

例えば、「外地」の存在である。第三章の題名「文芸復興と日本的なもの」にもあるように、「日本的なもの」が前面に出てくるに従って、「外地」は「他者」ではなく「日本」内部の差異にすぎなくなっていく。安井曾太郎「薔薇」（一九三三年、第三章）で伊万里焼の花瓶が描かれる背景には、清の崩壊や鉄道施設工事などによって陶磁器が世界市場に一気に流入し、日本国内で陶磁器の鑑賞眼が再整備されるといふ世界的な背景があった。一九三〇年代に陶磁器の美をめぐる語彙が整備される中で陶磁器に関する鑑賞眼が発達し、西洋基準の評価軸や、陶磁器を製作した中国や朝鮮の「歴史性」を欠

落させた形で、日本中心的な美の価値観が確立していく（図録所収の西田桐子の論文「一九三〇年代美術の傾向——志賀直哉の豪華本『暗夜行路』と短編『万歴赤絵』をきっかけに」。「古美術」が消費対象として商品化されることと、そのことによる「日本的な美」の確立は、「外地」によって物質的に支えられながらも、その「他者性」を不可視化させながら形成されていったのである。その視点で見返すならば、日本的な油絵の確立という、西洋絵画からの影響の超克に苦心した梅原龍三郎が、熱海を西フランスの陽光に照らされたような明るい色彩でのびのびと描く「山荘夏日」（一九三三年、第三章）も不気味なものとして立ち現れてくる。そこには梅原独自の色彩感覚や形態への感性が現れていることは確かであるが、しかし後に同じ視線をもって、日中戦争の灯火管制下の北京を、明るい陽光に照らされた豊かな色彩によって描きだすとき（北京秋天（一九四二年）などの北京シリーズ）、そのように描き得る特権的な立ち位置（配給制の中で豊かな

油彩の入手、日中戦争下にホテルの中から描き得る立ち位置など）は、再考せねばならないだろう。「北京」シリーズののびのびとした「日本的な美」や日本的な油絵の確立は、「外地」などの「歴史性」や「他者性」を不可視化することによって獲得されているのではないだろうか。本展覧会を「外地」といった枠組みの中に置き直して見るならば、また違った「大日本帝国」としての昭和史が見えてくることになるだろう。

そして「外地」だけではなく、「東京」中心ではない地方からの歴史を見ていくことも、平野謙とは別の昭和史を思い描く上で重要だろう。関東大震災以後に花開いた阪神間モダニズムだけでなく、大衆文化や流通の規模は確かに小さいものの、京都などにも、週刊新聞『土曜日』などを中心として中井正一らによる人民戦線の可能性があったのである。それは、おそらく平野謙が小林秀雄に見たものは違った形のものであったはずである。エピソードでは、昭和十年に設立され

た芥川賞第一作である石川達三『蒼茫』（改造社、一九三五年十月）や、日中戦争の渦中に戦地で小林秀雄によって芥川賞を授与された火野葦平の『糞尿譚』（小山書店、一九三八年三月）が展示される。昭和初年代が芥川の死に始まり芥川賞の設立で終る時、まるで芥川を苦しめた「ぼんやりした不安」が、「他者性」への意識を欠落させて形骸化しながら、増幅して回帰してくるかのようなのである。そのような「不安」を自閉的に不可視化させて、トンネルの向う側に「美しい日本」を成立させたのが、芥川賞選考委員でもあった川端康成による「雪国」（昭和十年から書き継がれる）だったとすれば、いま川端を違う形で読みなおすことが必要かもしれない。

トンネルの向う側に保存された「美しい日本」は、戦後サイデンステッカーなどによって再発見され、川端のノーベル賞受賞へとつながっていく。それは、戦後日本が西洋から「再発見」された日本を内面化しながら、同時にアジア（外地）での歴史を不可視化していくことと相同

のように思われる。戦争に向かう中で描かれた「美しい日本」は、アメリカを中心とした西欧圏と日本の結託によって現在においても奇妙な形で継続し、アジアを不可視化することで称揚され続けているのではないだろうか。昭和初年代に焦点をあてた本展覧会は、まさに「いま」を見据える上で様々な問題を投げかけてくるのである。

「外地」と向き合う試み

藤森節子『少女たちの植民地』

——関東州の記憶から——

矢部真紀

「外地」の思い出

『少女たちの植民地——関東州の記憶から』は、著者である藤森節子氏の回想が主となっている。生まれ育った場所や家族と過ごした時間、学校での出来事、友達との遊び、季節の風物などが当時の社会的な出来事とともに語られる。記憶が曖昧なところは資料や調査によって補われ、子供の頃に経験した物事が現在の視点によって再び辿られる。このようなテキストはあるいは自分史と言えるのかもしれない。しかし本書はそういった位置づけに留まらないように思えるのは、藤森氏が生まれ育った場所がかつて日本の支配した「外地」であり、一九三〇年代の激動の時代が一人の少女の具体的な

生活とともに語られるからだと思う。さらに、思い出や記憶という個人的なものを語るだけではなく、解説として収録された林淑美「記憶の糸」と「資料さがし」で指摘されている藤森氏の「現在の（愕然）」が、読者である私にも揺さぶりにかけて胸に穴を開け、忘れがたい印象を残しているのだと思う。もちろんこのような感想を抱いたのは、私自身の研究上の関心が「外地」に向かっているからだ。当時の資料や文学作品を読むとは異なる読書体験であったと思う。

さて、本書のタイトル副題にある「関東州」とは、第二次世界大戦の敗戦まで日本が支配した地域の一つである。一九〇五年、日露戦争後のポーツマス条約に基づいて遼東半島の先端部分の租借権をロシア帝国から大日本帝国が引き継

いだ。東清鉄道とその附属地も引き継いで南満州鉄道（満鉄）を設立した。本書には目次の後に一九三二年に発行された「新満州国地図」（『新満州国写真大観』大日本雄弁会講談社）の一部分が掲載されており、関東州の位置関係が把握できるようになっている。遼東半島の海に面した方の端には旅順が、そこから大陸へ向かって大連、金州、普蘭店があり、普蘭店の近くに国境線がある。この国境は関東州と満州との境であった。藤森氏は一九三二年生まれ、同年に満州国が建国されたのである。藤森氏には若くして戦病死した兄、幼くして亡くなった姉が二人、七才、三才、一才離れた姉がおり、姉たちによって女学生の生活が家庭に持ち込まれて自分よりも年長の文化をうかがい知ることができた。戦火が激しくなるにつれて物資不足が進むが、姉たちはまだゆとりのあった時に少女期を過ごすことができたのである。藤森氏自身が女学校に進学したのは一九四五年春（Spring）、戦争末期でほとんど女学校教育を受けなかったが、

姉たちと一緒に過ごすことで女学生向けの歌を聞き覚えたりしたという。

目次を見てみると、「洋銭」^{ヤンチン}「普蘭店」^{パバオファン}「娘娘祭」^{ニョニョマツリ}「餃子」^{ギョウザ}「八宝飯」^{ハバオファン}「酸菜」^{サンチン}「火鍋」^{ハコウ}などの名詞を拾うことができる。

自由港であつた大連は外国製品が入手しやすかつたが、藤森氏が生まれる二年前まで一家は大連に住んでおり、家庭には英国製の毛糸や石鹸があつたという (p.112)。一方で、媳婦^{シフ}と呼ばれる中国人の既婚女性が家事手伝いのために通っており、餃子の作り方を習つて以来ずっと作り続けているという (p.22)。堅実志向の家庭とはいえ、西洋の製品と中国風の風物に囲まれた生活であろう。関東州の地名や草花、食べ物、家の中にあつた物や歌など、暮らしの中で身近にあつた物事を契機として藤森氏は回想を展開していく。本文では「酸菜」はスアンツアイ、「火鍋子」はフオクオズとルビが振られている。これらのルビは中国語の発音である。関東州で生まれ育つた藤森氏は家庭や学校で日本語を用いていても

小学校では中国語の授業もあり、中国や朝鮮の級友もおり、同じ土地で暮らす人々が話す中国語も見聞きしながら成長した。

「父が金融組合という、中国人との接点にあたる仕事をしていたせい、そもそも日本人が少なかったせい、遊びの場はいつも中国人たちとの境い目あたりだったような気がする」 (p.23) と藤森氏は述べているが、このような環境で子供が耳から覚えた言葉ならば、意味を理解する前に言い覚えることは不思議ではない。藤森氏は子供時代に耳から覚えた言葉の一つである「サンピーケー」 (p.16) を回想して立ち止まり、その中国語の発音が意味する言葉を友人に尋ねて「鎗斃給」であることを知り、日本語の意味は「銃殺」であると認識する。かつて日本人の子供たちが囁いて言っていた言葉は、周りで暮らす中国人を脅かす意味だったことに気がついたのだ。生まれ育つた「外地」の思い出をなぞり、現在の視点で辿り直すことによって、植民地で宗主国の

人間として過ごしたことを、そのつもりは無くとも傲慢さを放っていたことを、周囲で暮らした人々に対して残酷であつたことに思い至つて直面するのである。

さらに藤森氏の思いを複雑にするのは、第二次世界大戦の終結直後に普蘭店で起きた出来事である。藤森氏是一九四三年に普蘭店から金州に引越したために難を逃れたが、一九四五年に普蘭店では日本人に対する中国人の暴動が起きた。もしかしたら自分も暴動に巻き込まれた一人であつたかもしれないという思いから、藤森氏は中国人にも級友たちにも「詫びたい」 (p.28) という気持ちを刻みこんでいる。個人の思い出が否応なく国家的な歴史と絡み合っており、生まれ育つた地に対する懐かしさとともにどうしようもなく胸が張り裂けるような気持ちも抱え込まざるを得ないような複雑さ、このような事態はとも共有できるものではないだろう。けれどもこのような複雑さに向かう姿勢を、本書を読むことで読者である私も知ることができるのではないか

と思う。

「外地」へのまなざし

本書では関東州や満州に関する文学テクストがいくつか引用されている。大連に住んでいた安西冬衛の詩もその一つだ。安西の詩集『軍艦茉莉』に登場する大連や普蘭店と比べて、満鉄の地方部土木課に勤めていた古川賢一郎が描き出した満州の厳しさに言及して藤森氏は、「植民地のモダンな生活にはかけらほどの縁もないこの生活」(p.15)と述べている。

藤森氏は彼の足跡を追うが、「満州」をめぐる社会的な状況の変化とともに、それに巻き込まれていく詩人の葛藤や苦しさ、高揚感をテクストから読み取っている。藤森氏は古川より三〇才ほど年下だが、満州の風土や外地で暮らす日本人が置かれた環境などに対して親しみをもちながらテクストを読んでいく。一般的に、日本文学史を見れば旧植民地の詩人として有名なのは安西冬衛であり、大連

で発行された詩雑誌『亞』であろう。外地で暮らした古川賢一郎のような書き手は、本書を読むことで私は初めて知った。もちろんまずは私自身の不明を恥じるべきだが、詩人や作品だけの問題ではなく、満州という場所で仕事をして毎日の暮らしを立て、もがきながら紡がれたテクストの存在を忘れてしまうことへの自省を得られたのは私自身にとって有意義である。

藤森氏は満州鉄嶺で生まれて普蘭店で育ち、父親の転勤で金州へ移動もしたが家族とともに一五年ほどを過ごして、第二次世界大戦で日本が敗戦したことによって大連港から関東州を出た。引き揚げは一九四七年三月末である。敗戦によつて日本が有した租借権は失われ、藤森氏が生まれ育った地は異国となったのだ。

日本近代文学において「外地」で暮らした経験を織り込んだテクストは少ないが、例えば真杉静枝、高田敏子、林京子らのものを挙げることでできよう。

特に林京子是一九三〇年生まれ、翌年には家族とともに上海に移り、一九四五年三月に上海から長崎へ引き揚げた。藤森氏と同年代であり、少女時代を家族とともに外地で過ごして引き揚げを経験している。当時の上海には租界が置かれており、日本も共同租界に海軍陸戦隊を配置していた。上海の東北部あたりに位置する虹口は日本人が多く住んだ地域だが、林京子の一家はそこから少し離れた場所に住んだために周囲に中国人が多く住んでいた。藤森氏は関東州、林京子は上海と、過ごした場所は異なるし、そもそも両地は非常に離れているのだが、同時期に少女時代を外地で過ごした書き手として私には興味深い。藤森氏は女学生の時を回想して、「いつの間にか、転入生紹介もなく、上海はあぶないというので金州へやってきた上海内外綿の子が混じっている」(p.88)と述べている。個々の家庭での移動ゆえに公的な史料にはなかなか載らないようなことかもしれないが、それゆえに本書におけるこういった記述

は貴重なものとして忘れがたい。

そして台湾も「外地」の一つであった。日本が租借権を持った関東州とは異なり、台湾では植民地統治が行われた。日本による統治は一八九五年から一九四五年まで、第二次世界大戦の終戦後に台湾は



写真1：旧台湾総督府庁舎（現 中華民国総統府）

中華民國の統治下に入った。二〇一三年には台湾映画「セデック・バレ」が公開されたが、ご覧になった方も多いのではないだろうか。この映画は日本統治期の一九三〇年に起きた台湾原住民による抗日暴動事件、霧社事件を描いた物語だ。この暴動を鎮圧するために軍隊が出動した。日本統治期では武力も用いられたが、同化政策として日本語教育なども併せて行われた。そのために現在でも日本語を理解するご高齢の方は多い。例えば旅行で台北を訪れたでしょう。旧台湾総督府は観光名所の一つであり、平日の午前中など指定日には内部を見学することができる。（写真1）館内に展示されたパネルなどを巡りながら台湾について学ぶことができるが、見学者が日本人であれば日本語を話すガイドがついてくれる。数年前だが私が行った時のガイド担当はご高齢の男性の方で、第二次世界大戦中の日本帝国陸軍師団に詳しく、ご家族の歴史として日本統治期を経験されていた。

また、台湾を代表する作家である鐘肇

政さんは一九二五年生まれで日本語教育を受けており、日本語は流暢である。創作は中国語でされているが、中国語は日本統治期が終わってから独学で習得したという。私は近年、東アジアにおける日本語文学に関心を持ち、日本と台湾との文化的な交流に関する調査などを行っているが、二〇一二年に鐘肇政さんにお会いする機会を得た。台湾における日本語文学の第一人者である張良澤先生が鐘肇政さんにインタビューするところにご一緒させていただいたのである。

鐘肇政さんは客家の人々が多く住むという台湾北部の龍潭で暮らしている。近くには桃園客家文化館があり、ちょうど鐘肇政さんの展示が開催中であつたために、ご本人に案内していただくことができた。（写真2）展示会場では映像も放映されており、日本の敗戦によつて台湾が日本の統治下から「解放」されたところも見ることができた。当時のインタビュー映像で若き鐘肇政さんが「使命感にかきたてられて書いていた」と話され



写真2：張良澤先生（左）と鐘肇政さん（右）

ていたことは今も忘れることができない。この映像はインタビュを一緒に一緒にした方々とともに見ており、もちろん私一人の心中に限ったことであるものの、その場で覚えた感じはうまく表現することができない。激変していく動きを記録する映像を見ながらはっとするような強い印象だったが、やはりどのようなものだったのか今でも言葉が見当たらない。私事だがこのような経験を振り返るたびに、「外地」への関心が高まれば高まるほど問題の複雑さが増してくるようになる

し、まだ見えていない問題も多いのだろうと思う。

旧植民地であった地域における日本語文学文化に関心を持って資料や文学作品などを読み、映像や音楽なども見聞きするようにしていれば一般的な知識は増えていく。けれども、それを経験した当事者や、自分たちの歴史として学んできた若い世代の人々とは全く異なっているのだ。むろん彼らと同じ立場を目指すことはできないが、彼らとどのような対話を持つことができるだろうか考えることは方法の一つかもしれないと思う。そのためには自分の立場を考えながら「外地」という問題と向き合うことが必要だろうが、模索を始めたばかりの今の私にとって容易なことではない。歴史的な出来事と個人の思い出が絡み合った複雑さを、簡単に解釈せずにどのように向き合っていくのかを、本書を読んで藤森氏の姿勢から少しでも学びたいと思う。

〔翻刻・抄録〕貴司山治『蒙古日記』（一九四三年）

翻刻 村田裕和・澤辺真人
補注 伊藤 純

（凡例）

- ・貴司山治の『蒙古日記』全五冊（昭和十八年九月十五日～十一月二十四日）を翻刻・抄録した。翻刻には『貴司山治全日記DVD版』（不二出版）を用いた。記述範囲は次の通り。

『蒙古日記』第一冊（昭和十八年九月十五日～十月十六日）

『蒙古日記』第二冊（昭和十八年十月七日～十月十五日）

『蒙古日記』第三冊（昭和十八年十月十五日～十月二十五日）

『蒙古日記』第四冊（昭和十八年十月二十五日～十一月十一日）

『蒙古日記』第五冊（昭和十八年十一月十二日～十一月二十四日）

- ・抄録にあたっては、貴司山治の心情、交流した日本人の姿、当時の内蒙古の様子を特徴的に示す箇所を選んだ。

- ・本文中で省略した個所は「中略」で示す。本文中の「＊」は補注者による注記。改行段下げし＊を付した段落も同じ。

- ・ゴシック体の見出しは原文を参照しつつ新たに付した（原文のまま用いた場合もある）。

- ・旧字体は新字体に改め、各段落の冒頭に一字下げを施した。促音・

- ・拗音は小書きかどうか判別しがたいものもあったが、筆記された時代を考慮し大書き（直音）に統一した。
- ・記述の一部に今日の見地からすれば不適切な表現があるが、当時の時代背景等を考慮し、原文のまま収録した。

（目次）

九月十五日	水曜日（東京駅）……………	131
下駄履き、着流しでの出発		
九月十六日	木曜日（下関）……………	132
M画伯の出会い		
九月十八日	土曜日（北京）……………	133
日本軍の検問		
九月二十五日	土曜日（張家口）……………	134
臭気漂う蒙古政庁舎		
十月十二日	火曜日（貝子廟）……………	135
アパカ特務機関長・牧野中佐		

十月十四日	木曜日	(西ウジムチン)……………	135
出迎えた日本人	／赤い座蒲団	／狂乱の晩餐	
十月十五日	金曜日	(西ウジムチン)……………	139
M画伯との別れ			
十月十六日	土曜日	(西ウジムチン)……………	140
ホリシヤの実際	／蒙古草原を荒らす者		
十月十七日	日曜日	(西ウジムチン)……………	142
タラカン・バクシの仕事ぶり	／西ウジムチン小学校		
十月十九日	火曜日	(西ウジムチン)……………	144
曠野の魔王	／プランパゴ——小熊秀雄の追憶	／一つの人生	
十一月二十日	土曜日	(新京)……………	149
山田清三郎と再会			
十一月二十四日	水曜日	(朝鮮海峡)……………	150
知識層移民団を——	朝日新聞満洲総局長との船中談		
補注	……………		151
『蒙古日記』旅程一覽	……………		133
満洲・内蒙古関係図	……………		156

九月十五日 水曜日 (東京駅)

下駄履き、着流しでの出発

この二、三日丁度七月下旬にみるやうな湿った暑苦しいやな日和がつづいてゐる。私の一番いやなそして一番怖れてゐる季節が蒙古にでかける矢先きの九月の半ばになつてから再来したのだ。

暑氣と湿氣が膚にじめじめして、口をきくのも憂鬱になつてしまふ。不機嫌な氣持の中では旅行の仕度など何もできることでない。冬の外套や洋服を詰めこんだトランクを一つきのふ下関まで手荷物にして送つただけ。

けふ一時五分の臨時特急に乗るため、朝十時に家をでかける。きのふまで着てゐた紺の単衣を着たまま、下駄をはいて洋傘一本、折靴だけ提げて行く。(中略)

電車で東京駅に行く。東京駅のプラットフォームではますます蒸し暑い。とてもいやな感じの日だ。東京のこのたまらない空氣の中から早く逃げだして行きたい——まるでそれが蒙古へ行く目的のやうに感じられてくる。予定どほり東京発、孤独の、たつたひとりの出発。(中略)しかし今度の旅行はちつとも自分の骨休めではない。仇敵のごとき今から先きの生活の中で、死ぬまでにしとげるつもり自分の芸術の仕事が何であるかを、私は十分に弁へてゐる。そして東京の最近二、三年の間の自分の書齋の仕事の限度がみえてきたのを、ましがひなく知つてゐる。

この一年あまり次第にのしかかつてくる隘路——自分のやつてゐ

る芸術の仕事と現実のあいだに生ずる隘路を、いかに突破するかを、私はかてて加へて自分の小さな個人生活の一々の悩みにまで結びつけて突きとめようとした。そしてさうしたつもりだ。

旅ではさうした今までのケチな仕事の疲労も捨ててこよう。しかし更にその一段階上の、まだ日本の作家がだれも切り拓いてゐない世界——芸術上の仕事のプランを獲得してこないかぎり、私はかへつてこないつもりだ。

どこまでもどこまでも、日本人の一人もあなくなる最前方までで行くつもりだ。自分の行く場所が蒙古であつても支那の奥地であつても、どこであつてもそれは問ふところではない。

十三、四歳のころ、すでに自分は人間としてほかの何者にもならず小説作家になつて死んでやらうと一人で決心した。その時からいへばもう三十年たつてゐる。四十五歳の自分が、日本人として未曾有の時代に生き、善くも悪くもこの民族の運命を作家としての自身自身で、日本人の芸術の分野で、必ず解決してみせると信じてゐる。そのために今度のやうな旅行をひそかに企てたとしても私にとつては別段をかしいことでも大それたことでも何でもないわけだ。——汽車の中でそこまで考へる。はじめにそれだけ自分の考へを確めておけばたくさんだらうと思つて、あとはそのまま寝台にはいつて寝てしまふ。

車輪の軋りの中で一、二度眼がさめる。その時狭苦しい寝台にひそんで眠つてゐる自分を盗賊のやうに感じた。

(十九日北京において記す)

九月十六日 木曜日 (下関)

M画伯の出迎え

下関に着く。東京と同じやうに暑苦しく、いよいよもつてたまらない感じだ。

汽車から降りたところまで一日先きにきてゐるMに^①ばつたり会ふ。かれは棧橋詰め^②の山口県特高課員の島村といふ男をつれて私をプラツトまで迎へにきたのだ。

島村といふのは三十あまりのおとなしさうな人物である。この「特高」の案内で棧橋上の食堂へ行つて朝飯を食ふ。そしてやはり島村に普通の乗客よりも先きに連絡船に乗せてもらふ。

島村は自分たちのために釜山から向ふの寝台券だの北京までの切符だの、けふの船に乗る指定を受けてゐない自分たちを船の事務長に頼む世話だの、いろいろ奔走してくれる。

船の中でそのほか所持金の処理をする。支那や蒙古へは二百円しか持つて行けないことになつてゐるので、自分で二百円持ち、Mにも二百円持たせ、なほ残つた二百円は島村に預ける。

*この後、朝鮮海峡を渡り釜山に入港。すぐ北京行きの急行「興亜」に乗車し、朝鮮半島を丸二日ばかりで縦断して北京に到着する。

『蒙古日記』 旅程一覧（▼は今回抄録した項目）

9・15 ↓9・18	▼東京↓下関↓朝鮮海峡↓釜山↓北京
9・18 ↓9・22	北京滞在 *坂井徳三、黄子明、福田千之と会う。
9・22 ↓9・24	北京↓大同↓張家口（雲岡石窟見学）
9・25 ↓10・12	▼張家口滞在 *この間に張北、宣化（龍烟鉄鉱）、厚和、包頭に行く。蒙古自治邦、駐蒙軍の要人と会う。
10・12 ↓10・14	▼貝子廟滞在 *アバカ特務機関長牧野中佐、蒙古浪人猪口三蔵、西ウジムチン駐在員左近允正也と会う。
10・14 ↓10・21	▼西ウジムチン滞在 *蒙古浪人の笹目雄恒、元血盟団員森憲二と会う。 *ホリシヤ、漢人商人、小学校などを取材。 *元東ウジムチン王ドルジを訪問。
10・21 ↓10・26	貝子廟滞在 *青山守次医師を取材。手芸学校・中学校を取材。
10・26 ↓10・30	張家口滞在 張家口↓大同↓太原↓北京 *太原で山西省顧問甲斐政治と会う。
10・31 ↓11・3	北京滞在
11・3 ↓11・14	北京↓奉天↓ハルビン（*福田千之との旅行）
11・16 ↓11・19	ハルビン滞在
11・20 ↓11・22	▼新京滞在 *山田清三郎と会う。
11・22 ↓11・29	新京↓釜山↓朝鮮海峡↓下関↓東京

九月十八日 土曜日（北京）

日本軍の検問

北京着同じく十一時半（*午後）。プラツトに降りると夜風が恐しく寒くて、単衣の着ながしで下駄をはいてここまで来た私にはちよつとたへられないくらい。寒さのために全く歯の根も合はず、がくがくになるので、体中に力を入れなければプラツトが歩けないのがをかしくなる。（中略）

まもなく停車場司令部からかへつてきたMと一しよにめいめい洋車に乗つて南河沿の旅館翠明荘へ行く。

途中の電車通りで鉄砲に着剣した兵隊に誰何されて車から引きおろされる。中国兵だと思つたMが「君は何だ？」と喰つてかかると、若い兵隊は少したじろいで、Mの小さな体をためつすかしつのぞきこむ。その時はたからよくみると、日本の歩兵上等兵の肩章がついてゐる。日本の兵隊なのだ。Mの方でも同時にわかつたとみえて、「いやあなた方ですか。一体どうしたのです？」と頓狂なお世辞の声をだす。

かれは自分が厚和の特務機関員なので、いつも虎の子のやうにポケットに入れてゐてすぐに振りまはしたがる写真付きの身分証明書をここぞとばかりに取りだして、兵隊に向ひやら説明する。

私にはさうしたかれの態度がいかにもインチキにみえるのだが、日本の兵隊はとたんに態度が變つてMに対して鄭重になり、かれの鞆をあげさせて、

「やあ林檎がはいつてゐるな。食べ物を持つてはいるのはいけな
いんですが、しかし見逃しておきませうか。」

といつてゐるのがきこえる。兵隊たちはコレラの予防のために、
汽車から降りてくる通行人の荷物を調べて、食品を携帯してゐるか
ゐないかを調べてゐるのだ。

私の方へも別の兵隊がやつてきたが、

「食べ物は何も持つてゐません。」

と答へると、荷物はあけなかつた。

暗がりの電車道では一人一人の兵隊に自動車も洋車もみな止めら
れてゐる。ちよつとみると何事やらんといふものものしい光景だ。

自分の洋車に乗つてここをはなれる時、私は北京を掌握してゐる
日本軍の武力をかいまみたやうな気がした。

暗い広い道をいくつか走つて旅館翠明荘に着く。ここに泊る。

*北京には九月十八日から二十二日まで滞在し、松下銜次郎⁽²⁾、福

田千之⁽³⁾、黄子明⁽⁴⁾、坂井徳三⁽⁵⁾らと会つてゐる。次いで二十二日、

二十四日、山西省大同に行き修道院や雲崗石仏を見学し、二十四
日夜に張家口に入つた。

九月二十五日 土曜日 (張家口)

臭気漂う蒙古政庁舎

張家口第一日。

張家口は北京から蒙疆へはいつてくる時の入口で、はじめにここ
へくるはずなのを、私は最初に大同へ行つてしまつたのである。

はじめて「蒙古自治邦⁽⁷⁾」の暫定首都といふ張家口の町をみる。車
に乗つて宿をいで、蒙古政府の政庁——といつても、二階もない煉
瓦建ての汚れた建物で、廊下を通ると、恐しく小便の臭ひがする
——。その政庁に赴いて弘報局だの、総務局だのと札のかかつた部
屋部屋をたづねていろいろな役人に会ふ。

この政庁の廊下が恐しく臭いのは、建物の一番恰好の場所に便所
が設けられてあつて、その掃除が行きとどかないため臭気が建物
の中にいつのまにかすつかり行き渡つてしまひ、蒙古政府は丁度大
きな小便の桶のやうな建物となつてゐるのだ。

*九月二十五日から十月十二日の間は張家口に滞在。ここを拠点に

陸軍病院慰問講演、張北駐屯部隊慰問講演、華北交通鉄路局時局
講演などをこなし、宣化の龍烟鉄鉞見学⁽⁸⁾、大同の日本人への時局
講演、厚和(綏遠⁽⁹⁾フフホト)、包頭など内蒙の主要都市をめぐつ
てゐる。また、李守信將軍、岩崎駐蒙公司、蒙古自治邦興蒙委員

会顧問の岡部理⁽¹⁰⁾、蒙古軍最高顧問小倉達次少將、イスラム学のオ
ーソリティで当時は厚和の日本領事館の高官だつた須田正繼⁽¹¹⁾、自
治邦回教委員長蔣輝若⁽¹²⁾など要路の人々と会見、取材してゐる。

*そして十二日、張家口を發ち飛行機で当初の目的地だつた蒙古草
原の貝子廟におもむく。

十月十二日 火曜日 (貝子廟)

アパカ特務機関長・牧野中佐

貝子廟¹¹——ここはもうシリリングールの奥地だ。外蒙との国境もすぐ近くにある。ずいぶん遠くまできたものだ。飛行機のそばに立つて西北方を見ると、ラマ寺の建物のむらがつてゐるのがみえる。多分そこが貝子廟だらう。それを背景にして白い塀にかこまれた一廓に無電の柱が立つてゐる。(あとでそこが特務機関の牧野隊だとわかつた。)

その方向と反対の方には、やはり土塀に囲まれたシリリングール盟公署の一廓がすぐ前にみえてゐた。盟公署の塀外には洋風の二、三の大きな建物がみえた。それが保健所、中学校、技術養成所などとやはりあとでわかつた。〔中略〕

機関長牧野中佐に面会。牧野正民といふ機関長は騎兵中佐で、これもあとでわかつたのだが、常陸の笠間の藩主牧野家の当主か支族かである。当主だらうと思ふが、何度きいてもどうしても答へなかつた。痩せた蒼白い人で、たえず冷たい眼つきをうかべて、部下たちに対して朝から晩まで骨を刺すやうな皮肉をあげせるのがこの人の癖のやうだ。部下たちはみんな縮みあがつて、なるべく機関長の面前に出るのを避けてゐる。

私が挨拶した時にも、牧野中佐は眼鏡の底から冷たい、いくらか意地悪な目の色をうかべて、「こんな奥地まできて、わしのやうな手ごはい軍人に会つてはたまらんだらう。」といった。

「いや、鉄道沿線歩いてゐる間、たくさんな軍人諸公にお目にかかりましたが、みんな歓待してくれすぎて私には歯ごたへがなく、かへつてたよりない気がしたのですが、あなたに会つて、何だか気がしやんとして、体のだるいのが少し癒つたやうです。」

と、私が答へると、とたんに相手の中佐は眼鏡の中のその冷たい眼に思ひがけない微笑をただよはせた。〔中略〕

「ぢやあ、ゆつくり滞在していらいつしやい。疲れがなほるやうに草原のご馳走をさしあげませう。」

と用語まで改まつた。非常に神経質な、そして敏感すぎる人なのだ。事実私の今まで会つたどの軍人よりも牧野中佐は頭脳の明敏な談理の上でどこまでどんな話を仕向けていいか、その振幅をあらかじめこちらで期待できるやうな知識人なのである。

*翌日(十月十三日)午後、牧野隊長、猪口三蔵、¹²盟公署池田事務官、西ウジムチン駐在左近允正也¹³らとの座談会が行われた。内蒙古の社会・経済、ラマ僧対策などについて情報を入手し、膨大な記録を取っている。ここで出会つた左近允正也に誘われ、翌十四日、西ウジムチンを訪問する。

十月十四日 木曜日 (西ウジムチン)

出迎えた日本人

「さあ、みんなおきて下さい。」

左近允君は先きにおり立つて大声をあげた。私も車からおりて腰をのびしたが、M君はいかにも疲れたやうな顔で、長い蒙古服を引きずりながらトラックの上からおりてきた。

車のとまつてゐるのは寺の門前の向つて左角であつた。蒙古人たちが左近允君を迎へて一人一人すすみでると、片脚を地に折つて挨拶をした。左近允君はそれに対していちいちうなづきながら鷹揚に会釈するのだが、なるほどここではかれは王者のやうである。さつき話したかれの言葉がすべてここでは法律である——といふのも、嘘でない気がした。

寺の門から、今まで午睡でもしてゐたやうな蒼白い元氣のない顔をした日本人（*森憲⁽¹⁸⁾）が一人、兵隊服の上衣をぬいで、靴下を下駄をつつかけ、両手をバンドの間にさしこみながら近づいてきた。無精髭をはやした頬にさびしさうな笑皺をたたへて、「おかへりなさい。」と左近允君にいった。「中略」

門をはいつたすぐ左の隅に左近允君の宿舎があつた。中にはいるとたつた一と間だが、立派な蒙古絨氈を敷き、その上にまつ赤なふちとりをした西藏絨氈のラマ寺にしかない座蒲団を敷きつめてある。屋根の低い土の家の中にそれだけの敷物がぎつしり敷きつめてあるのが、もう何だかアラビヤナイトのどこかのページへまぎれこんだやうな感じである。「中略」

左近允君は私が森君と話してゐる間に背広を蒙古服に着替へてかれ自身の使用人らしい三、四人の蒙古少年たちを私にはわからない蒙古語で威猛高に叱りとばしながら、部屋の中をでたりはいつたり

した。私のためだといつて大へんなご馳走をしてゐるのださうである。相手役にのこつてゐる森君なる人の素性がはじめて私にわかつてきた。森憲二君は京都帝大経済学部とか法学部とかにゐる間に血盟団運動を計画した人である。かれ自身若槻某（*礼次郎）を暗殺することを引きうけてゐた廉で懲役十五年になり、何年かを牢屋で暮して、その後恩赦を受け、娑婆にでくると、蒙古にはいり、特務機関員として包頭に駐在中独断で何人かの革新的な仲間とともに西北工作を企てた。森君たちのしたことは寧夏甘肅の馬一族の勢力を日本側につけようといふので、馬將軍に連絡をとつたといふことである。私はまだよく知らないが、その他に当時包頭の特務機関員たちが五原策戦なるものを画策したらしい。それらが一括して参謀本部の忌諱にふれ、みんなくびになつた。森君は内地にかへつて靖臣寮といふ塾をひらき、西北に皇道を布くための挺身隊たるべき有為の青年を教育する仕事に没頭した。そこへ一兵卒として召集され、関東軍に入営した。入営後森君の素性がわかつてゐるので特務機関にまはされ、今は王爺廟の特務機関に属し、たつた二等兵だが機関長金澤大佐から十数人の蒙古語練習生を委託されて、それを引率してこの地へ派遣されてきてゐるのである。

*十月十九日の記事には、森が「死におくれた」と溜息をつく姿が記されている。「早い時代の国家運動に従事した所謂右翼運動者の知識分子が大東亜戦争の展開してゐる今のやうな時代にはいつて、案外にもすつかり個人的に頹廢して、たやすくは救ひがたい深淵に陥つ

てゐる姿を森君に発見した」とある。

赤い座蒲団

*貴司のために赤い屋根の包が用意される。コバルト色の蒙古服を着た左近允は、「赤い色の包は貴族の包」だと説明し、「王様になつたつもりで」過言すようにと言う。

「ちやあ、この赤い座蒲団なども貴族用ですか？」

と私は自分も尻の下に敷いてをり、そして西藏風とでもいふやうなこの狭い壁の中の部屋に敷きつめてある何枚もの座蒲団のことをきいた。〔中略〕

「さうです。草原では衣食住に関して、何でも赤い色のものは貴族用と思へばまちがひありません。〔後略〕」

「そんな大した座蒲団を、どうしてかう敷きつばなしにしておくのです？」

と、私がいふと、左近允君は得意になつて答へる。

「ここへは西ウヂムチン中の蒙古人たちがあらゆる訴へ事を持つてやつてくるのです。私はかれらの最高審判官です。それがきてみると、かういふ狭いところにあるのでは向ふで權威を感じません。しかしかれらが門口で馬を乗りすてて私のこの宿舎にはいつてきた時、入口に立つて、かうして赤い座蒲団が部屋中に敷きつめてあるのをみたら、たとへ王様でも容易に中へふみこめないのです。ましてそれ以下の役人や平民たちは絶対にこの部屋にあがることをなし

えません。そこで私は傲然とこの部屋の中から、赤い座蒲団の上に胡坐をかいて、『その方たち願ひの趣きは何事ぢや？』といふやうな具合にどなるのですが、実際の訴訟事は向ふの調べ室みたいな別の部屋で片づけれます。その前にここへかれらを引見して威服せしめるのに、この座蒲団をしまひこんでおいはいけないのです。これでなかなかどうしまして、いろんな苦心があるんですよ。」

「ふうん、するとあなたの權威は座蒲団によつて保たれてゐるわけですか？」

「いや、座蒲団によつて引き立つてゐるんです。座蒲団がなくても私を輕蔑する者は今では一人もゐません。」

かたはらにきいてゐた森君が、弱々しく笑つて、いつた。

「輕蔑どころか、みんな怖れてゐますよ。タラカン・バクシといへば泣く子も黙るといふくらゐですからね。」

「タラカン・バクシつて何です？」

「私の綽名ですよ。」

と、左近允君は平然とうなづいた。タラカンといふのは蒙古語で巨大の意味ださうである。バクシは先生とか大人とかの意味で、今の蒙古人は日本人をみさへすれば支那人が「先生」とか「大人」とかいふやうに、バクシ、バクシとよぶ。もとはバクシは大切な言葉であつたのを、今では日本人のために蒙古人はバクシをすつかり濫用してしまつてゐる。それにしても私は、コバルト色の蒙古服を着て大きな裾らんだ顔をした左近允君を、なるほど「タラカン・バクシ」だと思つた。

狂乱の晩餐

をりから左近允君の使つてゐる蒙古少年たちが入口にあらはれて、晩の食事のできたことを知らせた。左近允君の幕下には十一、二の少年が三人と、二十くらゐの青年が一人使はれてゐるやうであつたが、三少年はみな栗鼠のやうに敏活であつた。一青年の方は魯鈍な表情をしてゐたが恐しく眞面目で、のっそりと入口にあらはれると、ていねいなお辞儀をして両手を前にそろへてたれながら、小腰をかがめて左近允君に口をきいた。私はその青年が左近允君を、絶対的な君主として崇めてゐるのをみて、左近允君がそれほどの権力を持つてゐる男だといふよりも、蒙古人自身がここではなるほどまことに旧い封建的な性格をちゃんと保つてゐるのを、さつきからつくづくみてゐた。

その青年が先きに立つて羊の肉の料理を盛つたいくつもの井をはこんできた。青年のあとにつづいて三人の少年がそれぞれ一つづつの井をはこんできた。おいしさうな羊の肉の料理が湯気を立ててゐる。背の低い食卓にそれらの井がならぶ。茶碗を持ちだし、割箸をそろへ、焚けたばかりの白米の飯が湯気を立ててゐるお櫃を少年の一人が抱へてくる。左近允君はしばらくの間はそれらのこまかいいちいちのことを、喚きちらすやうな大声で指図するのである。左近允君の顔はすっかり紅潮して、額や首筋から汗がにじんでゐた。眼は血走つて少年たちに対し、ほとんど怒り狂つてゐるやうにみえた。割箸の数が足りないといつては何かその辺にあるものを一人の少年

に投げつけた。茶碗の中に埃がついてゐたのをみつけた時には、左近允君は爆発するやうな大声でどなつて、その茶碗を持ったまま部屋からとびだして行つた。少年たちは部屋の片隅に逃げて、頭をかかへながら泣いた。

座にもどつてきた左近允君は、再び大声で逃げちつた家僕たちをよんだ。家僕頭らしい青年が恐るおそるはいつてきて、洗ひなほした茶碗を食卓のはしにおいた。左近允君は自分で、みんなのためにいちいちの茶碗に飯をついだ。二人の少年が味噌汁のはいつた大きな鍋を台のやうなものにのせてはこんできた。青年が鍋の蓋をとつて味噌汁をついだ。

左近允君は味噌汁を椀から一口飲んでみて、たちまちそれをおくくと、青年に向つて眼を怒らせて喚き立てた。一番大きな井に盛つてある羊の肉の料理の中から骨のついた肉のひと切れを手にとると、青年の頭を目がけて投げつけた。青年はいつもさうされてゐるらしく、左近允君が羊の骨に手をかけた時にもう自分の頭をかかへて首をすくめてゐた。骨は青年の肘にあつた。青年はお辞儀をしながらしづかにでて行つた。

私だけでなく、みんな暗澹となつて食事をするのも手びかえてゐた。一とほり狂乱がおさまつたらしく、左近允君は気の抜けたやうな顔になつて、

「さあみなさん、飯を食つて下さい。」

私は妙な気持ちで食事を頂戴した。あとになると飯も羊の肉もずゐぶんうまかつたが、この最初の晩餐では左近允君の狂態にびつく

りして、味も何もわからなかった。

そしてこの日からここに住むやうになつて、私にはこの左近允正也といふ青年が、どんな意味で蒙古人たちから「タラカン・バクシ」とよばれてゐるかがだんだんわかつてきた。少くともタラカン・バクシは、食事の時間になると必ず顔色をかへ気が狂つたやうにどなりだす——だけでなく、家僕たちを追ひかけたり、ものを投げつけたり、時には大きな海軍ナイフを逆手に持つて、十一、二の子供が悲鳴をあげて逃げ走るのを、ほんたうに傷つけるつもりか威すつもりか、結果をかまはず投げつけた——さうした暴君であることも含まれてゐるのだとわかつた。

ともかくこの最初の晩の怖るべき晩餐は終つた。一座にはけふトラツクに一しよに乗つてきたM君や田中運転手のほかに、ササメ・バクシといふのがゐた。ササメバクシは齡のころ五十あまり、つんつるの丸坊主がぴかぴか光つて顔は女の子のやうに淡紅色である。ここへ着くまで私はけふのトラツクにかういふ人が乗つてゐるとは知らなかつたが、食事の前に名乗りあつて相手のさしだした名刺をみると、満洲国王爺廟に牧場を経営してゐるかたはら特務機関の囑託をも勤めてゐるといふ笹目雄恒氏である。「中略」森君の私に教へるところによると、ササメ・バクシは菊竹実蔵、佐藤富江、盛島角房とともに蒙古開拓の四天王ともいふべき経歴の人だとのこと。そのササメ・バクシでさへタラカン・バクシが荒れてゐる最中には鼻白んだ顔で、隅に鳴りをしづめてゐた。

十月十五日 金曜日 (西ウジムチン)

M画伯との別れ

*十月十五日、西ウジムチンの王府で少年の西ウジムチン王、七歳の活仏に⁽²⁰⁾拝謁、チベット医学の薬堂の見学などをする。一方、先達のもりで同行したMが、行く先々で素性を怪しまれ現地の関係者から排斥され、また、金についても極めてルーズなことが次第に露見してくる。問い質すと、Mの特務機関囑託の身分証は期限切れで、預けた金は「六十円」しか残っていない。ついに貴司は「先におかへりなさい」と宣告する。

蒙古にきて以来、私のつれてゐるM君はずゐぶん煩はしい同伴者であつたはずだが、そして事実私も腹にすゑかねたり、いやだと思つたり、いろいろしてゐながら、その実妙に苦にならない相手であつた。あるひはこれは私のだらしない性情かも知れなかつたが、今も相当冷酷にいろんなことをいつたあとだのに、かへつて私自身は機嫌がなほつたやうな清々した気持ちである。私にひどく侮辱されたはずのM君自身が一向にひがみもくじけもせず、けろりとしたやうにそばに寝てゐる——「中略」

私は自分がいま身を横たへて寝てゐるかういふ場所まで旅行してきたことに一種の孤独な楽しさを感じた。その楽しさの中には作家的な感情も溢れてゐた。自分の気持ちをだれかにわかちたい考へが次第に胸の中に溜つてきた。作家仲間のだれにも語るべき友としては

ない。いつのまにか私は長い作家生活の間で、友といふものを失つてしまつたらしい。それをさびしいとちつとも思はないのは自分自身にかうした場合の懷びを述べる表現の仕事がのこされてゐるからだ。

十月十六日 土曜日 (西ウジムチン)

ホリシヤの實際

昨夜おそくまで眠れなかつたため、眼を覺ましてみると十時であつた。M君の姿は包の中になかつた。やつとこさ起きて外にでてみると、空は曇つてゐた。風が寒く、少しばかりの水が地に凍つてゐる。左近允君の宿舍の入口まで行くと、そこにかけてある寒暖計は零下二度であつた。少年に湯をくませて顔を洗つた。(中略)

*この後、左近允、笹目とともに馬で王府から一里ほど離れた西ウジムチン旗ホリシヤ(協同組合)を訪問する。

私に嗅ぎ煙草入れをさしだした蒙古人は三、四人あつたが、最後の一人はかうした辞儀のすんだのちに、ふところから名刺をだして私によこした。名刺には「烏珠穆沁(*ウジムチン)右旗生活豪立希亜理事ウルチョングー」と書いてあつた。豪立希亜といふのがホリシヤのことである。

*ウルチョングーとの一問一答(要約) 従業員は三十六人、ほとんど蒙古人、漢人も若干。皆年中多忙とのこと。成吉思汗紀元七三五(西曆一九四〇)年十月創立、資本金五万円、後二一万円に増額、蒙古銀行借入一九万円。年商一〇五万円、利益一五万円、利益金処分は配当が出資金一〇円に対して四円。西ウジムチン三三〇六戸全戸が出資、貧困者には旗が立替(六〇四戸)。必需物資はシーブ(支那木綿)、買入は羊毛、買上羊毛は全部日本軍に納入。その代償に軍はシーブを渡す。牛一二〇頭、馬七七〇頭買上、満洲に売つてパイメン、砂糖、粟、黍を得る。一割がけ程度で旗民に売る。配給順序。1軍人遺族、2貧困者、3中流階級、4上流階級、5官吏、6王様。一面に絨氈工場がある。

左近允君は不機嫌さうな表情で、ホリシヤがその実、未だとかく上流階級や役人や王様の私益行為の対象となりやすく、十分その機能を發揮してゐないこと、ホリシヤに本来の機能を發揮させるためには王公制度から先きに改革しなければなるまいといふこと、それに反して一概に漢人売買を悪くはいへないといふこと、——などを語りながら、私をホリシヤのすぐ隣りの敷地に店を張つてゐる漢人売買へ案内するのである。

蒙古草原を荒らす者

私は又おつかなびつくりで馬に乗つて、漢人売買の建物の方までまはつて行つた。馬上でふりかへりながら、左近允君が話の続きを

した。

「第一なぜ漢人売買を悪くいへないかといひますと、ホリシヤで仕入れる品物よりも、漢人が蒙古人に売る品物の方が、同じ品物でありながら値が安いのです。そして漢人が蒙古人から買ひあげる品物の値段は、やはりすぐそばに店を張つてゐる大蒙会社が軍の權威を笠にきて蒙古人から買ひあげる値段よりも高いのです。漢人は蒙古人を搾る搾ると一口にいふが、私のみたところでは、「中略」おそらくその搾り方は王公階級や大蒙会社が蒙古人を搾るのに較べずつと害悪の少ないものなのです。」

左近允君は大蒙公司——この奥地に出張つてきてゐる日本人商人を非常に嫌つてゐた。

「僕はとてもあいつらが嫌ひですね。軍の御用商人だとはいつてももともとかれらは営利業者なのです。だから軍を笠にきて強権に物をいはせるから、強権も何も持つてゐない漢人よりは押しがきいて、蒙古人からは法外に安い値段で牛でも馬でもふんだくるんです。それでは蒙古の復興も何もありはしません。僕らが、蒙古人を擁護する立場からいへば大蒙公司などのやり口はまことに困るので、いろいろいひますと、かれらは軍へ私などのことを巧みに中傷するのです。その悪辣さは近づきたいものがあります。」

すると、かたはらを馬でついてくる笹目氏が赤い顔をして口調をあはせた。

「満洲では蒙古人から牛や馬を買ひあげるのは満洲畜産会社なのですが、われわれ蒙古関係者は、だれもそれを満洲畜産会社とは呼

びません。満洲畜生会社と呼びます。それくらゐかれらは非道なことを蒙古人に対して行ひつづけてゐるのです。みやうによれば、一番この蒙古草原を荒してゐるのは、その畜生どもでせう。そして同じ資本がこの自治邦にはいつてきて蒙疆畜産と名乗つてゐるのです。」

「大蒙公司は又別なのですか？」と、私はきいた。

「大蒙公司はやはり軍御用ですが、主として羊毛羊皮を買つて軍に納めてゐるのです。まあ先生は今ホリシヤをみたのですから、漢人売買をみてごらんなさい。そしてあとで大蒙公司によつてごらんなさい。どこが一番先生にとつて感じがいいか。僕などがあまり先入観をあたへない方がいいかも知れません。」

私たちは馬をおりた。漢人売買はアンペラで屋根を張つた粗末な掘建小屋であつた。

*どこまでも腰の低い漢人売買の番頭「馬生福(63歳)」からの聞き取り(要約) 蒙地貿易の商人は山西省付近に結集しており本店がある。社員は三年蒙地にはいり六ヶ月故郷で暮らす。妻帯者でもほとんど單身でいく。今ここには二十八人が駐在している。商品の補給は牛車で数ヶ月がかりで輸送する。二隊が動いている。バター、米、粟、菓子、パイメン、はるさめなどを持ち込み、牛、馬、羊、羊毛、金などを買い取る。それらは貝子廟と張家口で売りさばく。

*左近允の補足説明(要約) 牛車は移動商隊となつて包から包へ行商する。蒙古人の欲しがる商品を包の前で見せびらかし機嫌を

取り愛想よく売りつけ、産物を買収する。蒙古人の懐に深く食い込んでいる。日本商社の大蒙公司だの蒙疆畜産だのといつても、かれらはここに事務所を構えてふんぞりかえっているだけだ。日本商社は漢人売買を手先に使うブローカーに過ぎない。大蒙公司は大倉財閥系の会社である。

十月十七日 日曜日（西ウジムチン）

タラカン・バクシの仕事ぶり

けふは一日中空が曇つて、日中でも寒暖計は零度から昇らない。包をでて左近允君の宿舎に行き、人々と雑談しながら時をすごす。ここへきてみると西ウジムチンにおけるタラカンバクシの役割りや位置がわかつてきた。朝早くから——といつても蒙古草原の朝早くは午前九時か十時ごろである——タラカンバクシは蒙古服に着替へ、蒙古刀を吊し、蒙古帽をかぶつて宿舎をでて行く。それは丁度私の包に隣の一廊に建つ粗末な倉庫——それは倉庫ではなくて、タラカンバクシの警察であり、法廷であり、役場であつた。その土間にすゑた白木の机に陣取つてバクシは旗内から集つてくるさまざまな蒙古人たちの訴へをきいてゐるのだ。

相談に応じ、叱つたり、うなづいたり、判決をくだす。大小さまざまな草原の事件が一日中、諸方から馬で駆けつけてくる蒙古人たちによつてここへ持ちこまれる。

蒙古人に法律はない。今では事実上西ウジムチンの王に代る判決

者、命令者であるタラカンバクシの一顰一笑が蒙古人の法律であり、格言なのだ。

私は宿舎に寝ころびながらの雑談にも飽きて、ぶらぶら構内を散歩して、ふとその倉庫——いや、バクシの法廷をのぞいた時、三十二歳の大きな図体のバクシがむつとりと煙草を吸ひながら、三四人の蒙古人を集めて、その面前で二人の日本人を叱つてゐるのを見た。日本人のうしろにはきのふ会つた馬生福経理が三三人の手下をつれてきて立つてゐた。

「あんた方はさうして勝手な無法なことを漢人や蒙古人たちに仕向けて、それを私が取り締ると、又私のことをああだかうだと軍へ内報するのですからなあ。あなた方にはかなひませんよ。私は全くあはれな小役人ですからね。惨めな取るにも足りない若輩ですから、とてもとてもあんたの方がこはいですよ。恐れ入つてゐますよ。」

タラカンバクシは二人の日本人に向つてかなりしつこく同じことをくりかへして相手を窮させながら、汗のでるやうな赤い顔をして、なほいひついだ。

「何も僕のやうなけちな小僧がこんな奥地へきて、蒙古復興だの東亜の理想だのといつて夢中になつてゐるにはあたらないですよ。わづかな給料であたら青春の時期をこんなところに空費して臍を嚙まなくてもいいんですよ。いつだつてこんな小役人の位置なんか投げだしますよ。さつさと日本にかへつて、田舎で親の田地を耕して百姓にでもなるか、東京でサラリーマンになつて、喫茶店で女の子にいちやついてゐるか、どんなけちな暮らし方だつて、ここにあるよ

りはましですからね。明日にでもかへりますよ。ああ、かへりたい、かへりたい。その代り僕がかへる時には、「中略」あともかたもなくなるまであなたの方の仕事なんか土台からでんぐりがへしてかへつてやるからまあ覚悟してゐてもらひませう。僕は関東軍の一職員としては取るにも足りない虫けら同然ですが、一青年左近允正也にかへれば、銀座のまん中であんなくらゐな紳士の二人や三人張りたふすくらゐの乱暴な学生ですよ。癪癪を爆発させて僕はここで思ふ存分なことをして、かへる決心です。はつきり申しておきますよ。」

私はあんまり立ち聞きしてゐるのが悪い気がして、やうやくうす日のさしてきた庭の中をぶらぶら歩いた。そして宿舎にかへつてきて横になった。あとからかへつてきた左近允君は、蒙古刀だの帽子だの武装をほどこしながら、大きな体を敷物の上に投げだすやうに寝ころんで、

「ああ、やりきれん、やりきれん。先生きいてゐたでせう。僕は腹癒せをいひすぎたかも知れないが、蒙古人や漢人の前であれくらゐ日本人をやつつけておけば、得するのは僕なんです。蒙古人などはあれをみてどんなに僕を信頼するでせう。僕だつて三十二ですからね、政治的な駆引きだつてせざるをえませんよ。」

と、さつきのことにまだ興奮してゐる。きいてみると、あの二人の日本人は一人は大蒙公司、一人は蒙疆畜産の出張所員である。「中略」そしてこの二つの日本人商社は今関東軍の命令のもとにこの地で莫大な数の牛や馬を買ひ集めてゐる。その値段にいささか無理があつて収買ははかばかしくすすんでゐない。関東軍の特務機関員である

左近允君は側面からかれらの収買の手助けをしてやらなければならぬ。しかし左近允君の若い気持ちの中には、軍に名を籍りてかれらがどれくらゐ利益を食ふかを知つて、忿懣の情が沸きおこつてゐる。ともすれば左近允君の同情は、横暴な日本人からあはれな蒙古人や漢人を庇護しようとする傾きになる。をりからだんだん集つてくる牛馬が日本商人の手に引き渡される。それらの家畜の大群を管理してゐるのは傭はれた蒙古人である。時ならぬ時にこの附近へにはかに多数の牛や馬が集められたため飼料の不足がおこる。二人の日本商人は困つたためではあらうが、それらの牛や馬をこの旗の蒙古人たちの特定の大切な牧地へ追ひこんだ。一方、又漢人商人たちが旗公署から許されてゐる牧草採集地に侵入して牧草を刈りつた。訴へが両方からたちまち左近允君のところへとんできた。その事件が数日前から突発してゐるのである。きのふ左近允君が私に道々日本商人の悪口をつき、蒙古人や漢人の立場を庇護してゐたのは、今おこつてゐるさういふ事件を背景にしたかれ氏の感情が多分に加はつてゐるのである。

西ウジムチン小学校

時刻はおそかつたけれども、この公署の向ひ側にみえる小学校を訪問することにした。さつきの公署の前で車をおりた時、遠くにみえる小学校の方では、二三十人の子供の姿が褐色の地平線を背景に体操をしてゐるのがみえた。そこが小学校なのだ。

私は又牛車に乗つてそこまで揺られて行つた。騎乗の二人は私の

着く前に小学校へ着いたので、あとからやつてくる「王様」を迎へるため、生徒たちは一人のこらず整列して待つてゐた。そして私が牛車からおりて、歩いて行つた時、けたたましい号令がかかつて、蒙古の少年たちが数列にゐならんで敬礼をした。もしかしたら木銃をでも持つてゐれば、捧げ銃でもしたことだらう。私はびつくりして立ちどまつた。ちよつと考へたが、やはり、日本流に帽子をぬいで一同の方へいねいにお辞儀をした。〔中略〕

私は成吉思汗の画像に帽子をぬいで敬礼した。そして副校長にきいた。

「講堂ではどんな話をなさいますか？」

「はい、世祖成吉思汗の歴史の中からところどころ例を引いて話をしたり自治邦の成立までの話をしたり、大東亜戦争の話をいたします。」〔中略〕

左近允君が外からはいつてきて、私にいつた。

「さつきから生徒たちが、遠方からきたお客様に蒙古の歌を歌つてきかせるといつて、寒いのに整列して待つてゐます。すぐでてきてあげて下さい。」

私はいそいで外にでた。生徒たちははじめのとほり数列になつて整列してゐた。みんな国防色の制服を着てゲートルをつけてゐた。頭には防寒帽をかぶつてゐる者もあれば、むきだしの者もゐた。年齢は十歳くらゐから、十七八歳くらゐまでいろいろゐた。

私や左近允君笹目氏などの立つてゐる前で、生徒たちは一人の教師の指揮で、最初に「成吉思汗出征の歌」を歌つた。それはアジア

の遊牧民族に共通する一種の鈍重な牧歌の調子であつた。歌詞は少しもわからなかつたが、昔私が映画の「人生案内」で聞いた民謡や、シヤリアピンの「マセンカ」といふ民謡などどこか共通するその合唱の節まはしは、思ひがけなくもこの大草原の中に生きつづけてきたこれらの民族の歴史を私に味ははせた。

つづいて「蒙古自治邦の歌」だのいろいろな歌が歌はれた。

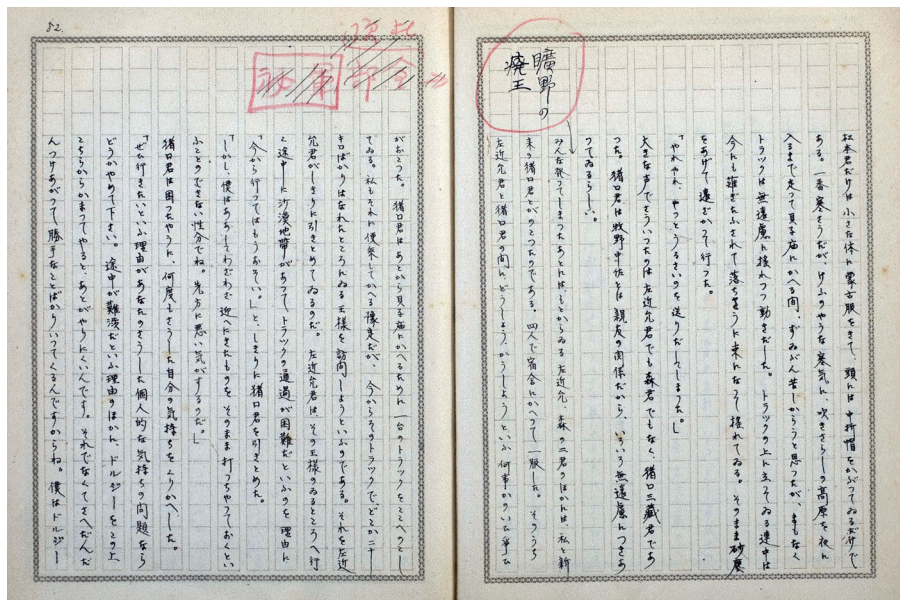
そして歌のあとでは分列体操もしてみせた。分列体操は上手だとはいへなかつた。しかし、ほとんどもう夜になつてきた日の落ちたのちの寒い草原で四五十人の子供たちが一所懸命にわれわれ三人の日本人にみせようと骨を折つてゐるその分列体操には、素朴な好感が感ぜられてならなかつた。私は立つてゐるのが寒くてやりきれなかつたが、我慢をしてじつとこれらの鈍重な体操ぶりをみてゐた。そして私たちは再び大勢の号令の敬礼に送られてここを出発した。

十月十九日 火曜日 (西ウヅムチン)

曠野の魔王

「ドルジ一つて一体だれのことです？」と、「*私は」猪口君にきいた。

「ドルジですか、前の東ウヅムチンの王様なんですよ。それが仕方のない低能児で、数かぎりもない悪政を領内に施して、旗民を塗炭の苦しみに陥れてしまひ、自治邦ができてからも持てあましてゐた男なのです。関東軍でも東ウヅムチンは西ウよりもつと軍事



「曠野の魔王」のページ（10月19日）。赤字で「此項全部軍秘」とあり、見せ消しされている（『蒙古日記』第3冊）。本稿では「曠野の魔王」「プランパゴ」「一つの人生」が該当範囲。

的に對外蒙の基地として重要なところですから、治安を確保しなければならぬといふ建て前から、ドルジのやうな王様に任せてはおけないといふ意見が強く、結局僕らが手を打って徳王にひつくらせたのです。謀叛をおこしてゐるといふ嫌疑によつて……ほんたうは別段謀叛といふわけでもないでせうが、客観的にいへば謀叛と名づけられるくらゐ無茶苦茶なことをやつてゐたのですからね。覚醒する余地があればと思つてひつくくらせたのですが、根が低能児ですから何にもわかるわけがありません。少しでもわかる男ならかへつてその時殺されてしまつたかも知れませんが、よくみるとただのばかなので、どうしよう？ といふことになり、結局表面的には日本軍から徳王に頼んで助命を乞ふといふ形で釈放してもらつたのです。そして私が個人的に軍から身柄を預つた形になつて北京へつれて行つたのですがね……」

「猪口さん、そんな話をしてもいいんですか？」

左近允君が腹立たしさに叫んだ。猪口君は脇枕でにこにこしながら、

「いいさ。僕はのんきだから、貴司さんになら何だつて話してしまふよ。書いていけないことは貴司さんの方で取捨するだらう。（後略）」

やつとドルジといふ魔王の素性がわかつてきた。なほ私の質問に應じて猪口君や左近允君の語るところを綴りあはせてみると、ドルジは謀叛の嫌疑で捕へられた時王位を退き、その代り東ウヂムチンの王の位にはその子をすえた。子は七歳か八歳のかれの

長男で、今一人六歳か七歳の男の子がある。それはドルジのそばにゐる。ドルジの父はやはり頑迷な王であつた。しまひには狂ひ死してしまつた。気が狂つた時、狂暴性を發揮するので鎖か縄でつないで包の中にとちこめてあつた。その子のドルジだから低能なのは仕方がない。蒙古の貴族にはよく発狂するのがゐるが、それは精神病的素質といふよりも、脳梅毒が多い。ドルジの父王も多分それであらう。ドルジはまだ三十あまりの美丈夫で、ここから二十キロはなれた地点に、若い後妻と、その二男の男の子をつれて、何人かの家来や、何百頭かの羊、何十頭かの牛、馬、何十台かの牛車などを持つて暮してゐる。そのドルジは、猪口三蔵君が機関長とともにここへきたのを知つて、けさ早く幽閉地から駆けつけてきて、自分の大恩人を賓客として自分のあるところへ迎へたい、と申しでてゐるのである。自分で迎へにくるのは、貴族としての最上の礼儀であつた。

ブランバゴ——小熊秀雄の追憶

「さあ、でかけませう。」

私は猪口君と話しながら宿舎の門前にでた。トラックの上には赤い上衣を着たドルジ王と黄いろい汚れた着たきり雀のローライ（*ドルジの従者）とがならんで立つてゐた。左近允君も一張羅の蒙古服を着て不機嫌さうに車の上に乗つてゐた。

私と猪口君は二人ならんで助手台にかけた。車は走りだした。気がつくくと、運転手は、貝子廟からくる時に私を乗せてきてくれた田

中君である。田中君はあれから貝子廟にかへり、今度はすぐ牧野中佐一行に加はつて奥地をまはつてゐるのだといふ。ここへくる時、ダウスノール附近でさんざん道に迷つて、湖畔で夜のあけるのを待つてゐたのだといふ。そのために牧野中佐の到着の時間がおくれたのだとわかつた。

「昔からダウスノールには古狐が棲んでゐると蒙古人がいふくらいであの辺で道に迷ふと、夜どほしぐるぐるのノールの周囲をまはり歩いて、本人は一定の方角へまつ直ぐにすすんでゐるつもりでゐるのです。そして夜があけるとやはりノールの附近からはなれることができないでゐる——さういふことが蒙古人の間にもたえずおこるので、古狐が棲んでゐるといふ伝説も生れたのでせう。一昨晩はすつかりダウスの狐にだまされて、一と晩湖のほとりに引きとめられたわけです。」

と、猪口君が笑つた。私などには昼間でも草原の方角はさつぱり見当がつかかなかつた。今も私の乗つてゐるトラックは、きのふ私が牛車で旗公署へ行つた時の道を走りだしたのはおぼえてゐるが、途中で右にそれて以来、どの方角へ走つてゐるのかさつぱりわからない。どちらをみてもなだらかな山の地平線ばかりである。

しかしだんだん車がすすむにつれて、けふは寒くて空が曇つてゐるせゐか、とりわけあたりが荒涼たる冬の感じになつてきた。灌木の枯枝が風に吹かれて枯草の上をころがるうち、ほかの枯枝や草の枯葉がひつかかつて丸い塊になり、それがころろ次ぎから次ぎへ曠野を吹きころがつてゐるうちに次第に発達して中にはずゐぶん

大きな枯枝の毬となつてころがつてゐるものもある。草原ではこれをブランパゴと呼ぶ。——さういふことも猪口君が私に教へた。大小いくつものブランパゴが遠く近くころがつてゐるのは、風のある日の現象である。

私はふと、亡き詩人小熊秀雄⁽²²⁾を思ひだした。かれは「ブランパゴ中隊」といふ恐しく長たらしい詩をつくつたことがある。その詩は仲間の間では大へん有名になつたが、だれもしかし、ブランパゴが何であるかを知つてゐる者はなかつた。小熊自身も人にそれを説明したこともない。小熊が死んでからものの十年もたつた今ごろ、私は蒙古草原をトラックで走りながら、はからずもそのブランパゴといふ言葉を又きいたのであつた。そしてブランパゴが何であるかを知つたのだ。怪びしい感じがした。

一つの人生

車はとまつた。トラックの上に乗つてゐたドルジとローライはすぐに車からとびおりた。何人もの家来たちが包の方からやつてきて出迎へた。それらのうしろにきらびやかな飾りを身につけた若い女が六七歳のかはい子供をつれて立つてゐた。それがドルジの妻であつた。向ふから近づいてきたのを見ると、背はあまり高くはないが、腰の張つたいかにも肉感的な、むしろ淫蕩な感じの女である。〔中略〕

「この女が又とんでもない悪女でしてね。二人の子供は先妻の産んだ子なんですが、ドルジの奴がこの女に惚れて、前の細君をず

ゐぶん虐待して叩きだしてしまつたのです。それにはドルジをそのかしたこの女の悪智慧がずゐぶんはたらいてゐるわけです。」猪口君が眼の前で私に話した。かれらには日本語がてんでわからないのだ。それをきいてゐた左近允君がなほつけ加へた。

「王府にゐる兄の子供は助かつてゐますが、弟のこのちびはこゝで継母に朝から晩まで苛められどほしなのです。いつか私が調べたら、このちびの尻つぺたは血痔だらけでした。みんなこの悪妻がつねつて傷をつけるのです。子供はすつかり怯えて、いぢけてしまつてゐます。」

かの女に手をひかれてならんでゐるかはい少年はみたところいぢけてゐるやうにはみえなかつた。継母が軽く後頭部をおさへると少年は私たちの方へべこりとお辞儀をした。

ドルジはわが家にかへつてくると、にはかに多弁になつて、何やらべちやくちやしやべりながら猪口左近允両君の肩口を取らんばかりにして自分の包へ案内した。

入口に立つて二人を包の中に入れると、かれは鼻声で何やらいひながら私の背中にも手をかけてつれこんだ。客人をつれてきたのが嬉しいのらしい。〔中略〕

「ドルジが貴司先生を一体何をする人だときいてゐるのです。」

と、左近允君が私にいつた。さういへばドルジは私の正体がわからないので、げげんに思つてゐるらしい。私は道々猪口君から、ドルジの一番こはいのは鼻を手術する医者だときいてゐたのを思ひだして、笑ひながら猪口君の方へ答へた。

「北京からきた鼻の医者だといつて下さい。一度診察してあげると伝えてもらいませう。」

猪口君は噴きだしさうな顔をしてドルジの方へさういつた。私はその間に鞆をあげて、中の鉛筆箱をがちやがちやいはせた。ドルジは逃げだしさうに膝頭で立ちあがつて、私の方へその片手をさしだして掌を立てた。片手では自分の鼻をおさへた。そして節のぬけたやうな大きな声で笑ひながら、しきりに何かいつた。

「器械をださないで下さい。鼻の病気はもう癒つたのです。私の鼻の病気のことは冗談です——といつてゐますよ。」

と左近允君が通訳した。ドルジはをかしいほど騒がしいばかり声をだしてはしやいだ。そしてとうとう何やらいひながらでていつてしまった。細君も子供をそこにおいてでて行つた。

*ドルジ夫妻から客人たちに狐の皮が土産として贈られる。宴の準備が始まるが、暗くなると砂漠の通過が危険になるため帰路につくことになる。

われわれはドルジの引きとめるのをふりきるやうにしてつひにトラツクに乗った。トラツクはドルジの家来たちが羊の料理を盛つた洗面器を手に捧げてめいめい立つてならんでゐる前で埃を捲きあげながら動きだした。

二三町も走つてふりかへると、曠野のまん中に野ざらしとなつて建つてゐる、白い二つ三つの包の前にドルジ夫婦の姿がみえた。

ドルジの着てゐる赤い上衣とその妻のつけてゐる頭飾りとが夕日に光つた。チヨメルゲン（*前出の少年・ドルジの次男）もそこにゐるはずであつたが、それはみえなかつた。

更に五町も七町も走つてもう一度ふりかへると、曠野の遠くにドルジの白い二つの包が暮れて行く空を背景に夕日の名残りを反射してゐた。まもなくこの広袤たる草原は夜になるであらう。そしてかれらはあの小さな包の中に、あんな小さな小さな子供も眠る。大草原の中の、何といふかすかな生き物の存在であらう。……

私のトラツクは走りに走つてかへりの道をいそいだ。もう日の落ちたあとの野の道はたそがれの色が渦を捲いてゐた。山七面鳥の姿もあちこちにみえたが、鉄砲を撃つてそれを威かしてゐる暇はなかつた。まつすぐに車はプランパゴを追つて走つた。

プランパゴ、プランパゴ——うす闇の野の面をプランパゴの吹きとんで行く草原もやがては冬に凍てつかう。ふりかへるともう包の姿はみえなかつた。いつのまにか私は再び無人の世界にかへつてゐた。そしてかへつてドルジの包がみえてゐた時よりも一そうはつきりとかれらの顔や声がまざまざと臉の中によみがへつて消え、消えては又よみがへつてきた。私は結局一つの人生をのぞきみたのだ。

*十月二十一日、貴司は猪口とともに左近允が滞在、支配する西ウジムチンを発ち、午後六時に貝子廟に帰着する。「西ウのやうなところからでくると、貝子廟は草原の大都会」とある。

*二十六日まで貝子廟に滞在、中学校見学、新設された「貝子廟手

芸養成所」開所式に立ち会う。また壮大な保健所が建設中で、かつて日本で救癩事業に挺身し、今はここ内蒙で僻地医療に身を投じている青山守次医師²³を取材し、内蒙古のあからさまな保健・医療状況を聞いている。牧野特務機関長は貝子廟のラマ寺の面従腹背ぶりを非常に気にしており「放火して慌てさせるか」などという。

*十月二十六日夕刻、飛行機で張家口に帰着。岡部参事官宅に宿泊、風退治などしてもらい三十一日まで滞在し、『蒙疆文学』同人、「蒙疆芸懇話会」の人々と懇談、張家口経済研究所を取材しいろいろな資料をもらう。満洲貴族憲容の邸に招待される。岡部理と古本屋をめぐり本の話に熱中する。

*十月三十一日、張家口出発。列車で大同經由、山西省太原へ。

十一月一日、山西省顧問で隠然たる実力者甲斐政治²⁴と面会。

*十一月三日、北京の福田千之宅に帰着。野田律太の息子浩一²⁵、村上知行、また新民学院教授数納兵治の人脈で、吳燕紹などユニークな人々と会う。中には盧溝橋事件のとき宗哲元軍の下士官で流暢な日本語で停戦協定を実質的にまとめたという曾廣准という人物もいる。

*十一月十四日〜十九日、福田千之の誘いで、奉天、ハルビンを旅行。

十一月二十日 土曜日（新京）

山田清三郎と再会

未明新京着。

一昨日新京にきてゐるはずの田邊氏に頼んでおいた駅のすぐそばのアラトホテルへ行つて、部屋をきくと寝てゐるのをおこされた番頭のやうな日本人の青年は仏頂面をして鍵をだしてくれる。

狭い一室にはいつて食事の時間を待つ。その間水道の蛇口をひねつても、手を洗ふ水さへ出ない。新京は午前中は水道の配水をとめてゐることである。部屋にはスチームも通つていない。外套を着たまま急に日本的になつてきたこの不自由感に堪へながら、やつと午前九時ごろになる。

*ホテルで朝食を済ませ、新京駅で北京に帰る福田と別れる。

アラトホテルにかへつて、満洲新聞社にゐるはずの山田清三郎²⁶を呼びだすと、私がこの地へきてゐるのにおどろいた山田君は、すぐに訪ねるからとのこと。山田君の電話が切れて三十分もすると、本人よりも先きに新聞社の写真班と記者がやつてきた。そして私の写真を撮り談話をきき取つて、何だかだと応答してゐるところへ山田君がきた。

記者と写真班がかへつたあと、山田君と二人だけになると、少し大陸ぼけがしてゐるみたいな山田君が、

「君はM君とそんなに古い友だちなのですか？」

と、きく。私はしばらく忘れてゐたM君の名をここできいて、一種の錯覚に囚はれながら、

「M君がここへきてゐるのですか？」

「いや、去年きて君の話がでたのですが、その時M君は貴司さんとはもう十何年来懇意にしているといてあるし、自分が案内して蒙古へつれて行くのだといてあましたが……」

私は苦笑した。万事さういふ風に対人関係で嘘をつくのが目立つてゐるM君の嘘のつき方に気がついてゐたので、ありていの話をした上、

「君のことをM君は、去年自分が北京にゐる時、林房雄を訪ねてきた山本君（*山田（清三郎）の誤記か）が向ふから会ひにきたのでいろいろ世話をしてやつた。山田清三郎君は今まで知らない人だが、どういふ人なのか？——と、去年の秋だつたか今年の春だつたか僕にきいてゐたことがあるが、君がM君と知りあひになつたのはその時か？」

と、きくと、山田君はおどろいて、

「すつかり君と僕をあべこべにしてしまつたな。僕の方がM君とは十数年来知つてゐるんだ。さうか、あははは。」

と、笑ひだす。

「十数年前にどこでどういふ知りあひなのだ？」

と、きくと、やつとM君の真相が判明した。

左翼の事件で山田君が千葉の刑務所にはいつてゐたのはなるほど今から十数年前であつた。その刑務所の中で愛嬌者でとほつてゐたMは、横山大観の書画偽造常習犯人として前科二犯、四年の刑期を千葉刑務所内に暮してゐた。さういふ場所での知りあひなのだ。

「へえー、おどろいたね。どうもすつかりかつがれてゐたわけか！」

それにしても念が入つてゐる——と、私は蒙古以来M君にしてやられてゐたのは、やつぱり私の方だと悟らざるをえなくなつて、にがにがしい思ひにとざされてしまつた。蒙古へ発つ前に山田君から一言と言さういふことをきく機会があれば……さういふ機会があれば私は蒙古へこなかつたかも知れない。すると、けふ別れた福田氏のやうな「老朋友」をえられなかつたかも知れない。まさしく福田氏のところへ私を案内したのはM君なのだ。瓢箪から駒の譬へのとほりだ。何といふことだらう！（中略）

山田君のかへつたあと、朝日新聞新京総局に電話をして、総局長の楠見氏と電話で話す。

睡眠不足を取りかへすために夜八時に寝てしまふ。

*十一月二十一日には朝日新聞社の車で市内見物をしたり、満洲文芸家協会の招宴に応ずる。「全く日本人によつて建てられた、二十世紀の美を持つたほんたうに新しい都市」、「新京の町の美くしさを眼にしみるやうに感じた」と綴っている。

*十一月二十二日、特急「光」で新京を発つ。

十一月二十四日 水曜日（朝鮮海峡）

知識層移民団を——朝日新聞満洲総局長との船中談

六時に起きる。

七時半（*午前）釜山着。ここで連絡船に乗るのに一時間あまり

行列をした。

私が蒙古を歩いてゐる間に、連絡船が一隻アメリカの潜水艦に撃沈されて何百人の死傷者をだして以来夜の航海をやめた。三隻一しよに出帆して、途中を飛行機や駆逐艦などが警戒することになつてゐる。そのために旅客は制限されてをり、乗船日と乗る船とがあらかじめ切符の裏に指定されてある。

あつちへ、こつちへ、いい加減たづねまはつて、やつと九時すぎに船に乗る。景福丸といふ船だ。船の名は口外してはならないさうだ。〔中略〕

救命具を体の前後にくつつけた不自由な恰好で、「やあ。」と私に挨拶した人があつた。みると、この間新京の駅で初対面の朝日新聞の楠見氏であつた。〔中略〕

昼の食事に食堂へ行つてみると、みんな救命具をつけて首もまはらない妙な恰好で、苦しうに食事をしてゐる。おまけに膳につてゐる飯は玄米のかちかちで、清し汁のお椀の中には魚の尻尾が少しばかりはいつてゐるきりだ。それで一円の食費を取るのも、日本的とでもいふのかしら。

船はよく晴れた朝鮮海峡を電光形に航海してゐる。非常な速力だが、方向をかへるたびにかなり船自身が傾く。フロートをつけた水上機が船の上を旋回してをり、遠くに駆潜艇か駆逐艦か、それとまただの発動機船か、二艘も三艘もの黒い船影が動いてゐる。いづれにしてもまづ昼間アメリカの潜水艦がここへあらはれるやうでは、日本ももうおしまひにちがひない。

私は別にアメリカの潜水艦を心配しなかつたし、サロンで何時間も楠見氏と対談した。

この時の対談のうち、私が楠見氏に約束をした一つの問題があつた。それは新京附近あるひは錦州附近に満洲国における義勇移民団の模範村をつくりたいといふ計画である。

楠見氏は最近に満洲国政府から求められて国内各地にすでに十数万にのぼる義勇移民団の実体を視察した。その結果痛感されたことは、これらの移民団が大東亜建設の理念の実現として、自己の任務の遂行にあたつてゐるといふ実質が、事実上失はれてしまつてゐるのが非常に多いことであつた。

これをそのまま放置すると、乃至はこのままで押して行くと、開拓移民事業の質的低下乃至崩壊をきたす恐れのある重大問題である。そしてこの欠陥はどこからあらはれたか？ それはこれら多くの開拓移民に大東亜建設の理念を理解するだけの知識や教養が不足してゐるのに主因する。で、ここに知識程度の相当に高い開拓移民村を建設して、理念と実践を一致させ、満洲国における開拓移民団の水準を示す模範村をつくりたい。

それには日本内地の知識階級層から移民団をつくりあげて、満洲国に移駐させなければならない。その知識階級移民団、模範開拓移民村は、主都新京の附近に建設したい。〔中略〕

現在満洲国では日本内地の文化人の来満を切望してゐるが、大東亜戦下食料供給地としての満洲は、今や手一ぱいで、小説を書き、絵を書く人を首都において一年中遊ばしておく食料がない。食料は

あつても住宅がない。そのために文化的はたらき手の来満を希望しながら、それが実現不可能の状態にある。この隘路を打開するのが模範開拓移民村の建設、知識階級移民団の実現である。――以上のうちあとの半分は、私自身の考へである。

楠見氏は朝日新聞の退職者中から、この知識階級移民団を一つ組つくる目的をも兼ねて、今度内地へかへるのだ、といふことであつた。夜になつて、船はやつと下関に入港。さすがの私も無事下関の港の灯がみえてきた時には、ほつとする。七十日あまりみなかつた故国を今再びみいだして何かの喜びを感じるといふことはなかつた。残念ながらそれはなかつたのだ。一步上陸してしまへば、あとはもう出発前の知りつくしてゐる艱難の多い生活の軌道が私を待ちかまへてゐるのだ。

汽船は吼えるやうな汽笛を鳴らした。

私の旅行は終つた。

(丁)

補注

(1) M…画家で厚和特務機関囑託を自称する人物。貴司を内蒙古旅行に誘い、前半同行して先達をつとめた。しかし、行く先々で身許を不審がられ金銭的にもルーズだったため、ついに貴司は同行を断り、西ウジムチン以降は一人旅となつた。後にその予想外の身許が明らかになるが、プライバシーを考慮してイニシャル表記とした。

(2) 松下衡次郎…東京の蒙古代表部で、北京に行つたら訪ねよと紹介さ

れた人物。日本軍用の製氷工場を経営する事業家だが懇懇な教養人で、中南海に住む特権をもつ「老北京人」。史蹟などを案内される。

(3) 福田千之…北京へ来たその日に知己となり、以後戦後に至るまで「老朋友」といえる親交を重ねた人物。若い頃から事業家を目指してドイツ、ロシア、ハルビンなどを流浪し、この時点では北京とハルビンのキャバレー雅叙園のオーナー。戦後日本に引きあげ、当初数カ月貴司家に寄寓、のち銀座にレストラン「トロイカ」を開業。一九五四年死去。

(4) 黄子明…戦前の親日映画演劇人。昭和天皇即位奉賛映画「民族の叫び」の原作者。

(5) 坂井徳三…プロレタリア詩人、中国文学翻訳家、著書に『坂井徳三詩集』(一九七三年)、翻訳に丁玲『太陽は桑乾河を照らす』(一九五六年)、『中国解放詩集』(一九五三年)などがある。一九〇一―一九七三年。

(6) 雲崗石仏…中国山西省大同近郊にある巨大な石窟寺院遺跡。竜門、敦煌とともに中国三大石窟といわれる。

(7) 蒙古自治邦…一九三〇年代から内蒙古自治運動を追求してきた運動のリーダー徳王(ドムチョクドロンブ)が、内蒙古を支配した関東軍との政治的妥協によつて成立させた内蒙古政府。一九三七年厚和(フホト)で「蒙古聯盟自治政府」として発足し、一九三九年九月張家口に移り「蒙古聯合自治政府」⇨蒙古自治邦となつた。一九四五年日本の敗戦にともない瓦解。

(8) 龍烟鉄鉱…一九二〇年頃、北京原人発見で著名なスエーデンの地質学者アンダーソンによつて発見された大鉄鉱山。良質の赤鉄鉱を産する。一九三七年七月の日中開戦により、日本軍(関東軍)が一方的に軍事制圧、鉄山を接収した。以来敗戦に至るまで、日本の重要な鉄資源鉱山として経営されてきた。

(9) 李守信將軍…モンゴル族の軍人。一九三六年徳王の運動に参加、

参謀部長、一九三七年蒙古軍総司令、一九四一年蒙古自治邦副主席、一九四九年国民政府敗北後モンゴルに逃亡、一九五〇年収監、一九六四年特赦、一九七〇年フフホトで死去。

- (10) 岡部理…興蒙委員会専門顧問。九大出身、元北満州の官吏。張家口で知りあい、以来非常に気が合い、世話にもなった。戦後日本に帰国し、その後も貴司と長く親交があった。

- (11) 須田正継…イスラム学のオースリテイ、当時は内蒙古・厚和（現綏遠Ⅱフフホト）の日本領事館高官。貴司は内蒙古旅行で知己となり、戦後、帰国した同氏と長く親交があった。多くの人を紹介され仕事の間でも関わりが深く、岡部とならぶ貴司の蒙古人脈の中心人物だった。イスラム学の専門家で学者でもあり、石井部隊と関係があったとも貴司日記本文に記載されている。

- (12) 蔣輝若…一九二〇年代内蒙の軍幹部だった中国人回教徒、貴司が会った時点では日本軍に協力し蒙古自治邦回教委員会委員長。品のあり聡明な印象の人物で「保商隊」という私兵を蓄えている、と記載されている。日本敗戦後軍事裁判にかけられ、一九四五年十月自殺。

- (13) アパカ特務機関…昭和八年に、蒙古浪人たる盛嶋角房が軍囑託として西ウジムチン王府に特務機関を設置し、昭和九年貝子廟に進出したが衰退、昭和十五年に正式に関東軍のアパカ特務機関として再発足した。満州蒙古（興安四省）以西の内蒙古北東部一帯を管轄する、百人近いスタッフを擁する大組織である。（※上記は主に内蒙古アカカ会・岡村秀太郎共編『特務機関』（国書刊行会 一九九〇年五月）三二～三九頁による）この特務機関がシリントに所在するのになぜアパカ機関とよばれているのかは不詳。『蒙古日記』にはこの西ウジムチンの盛嶋機関設置についての裏面の動きと盛嶋への批判などが笹目雄恒の述懐として記録されている。

- (14) 貝子廟…貝子廟そのものは内蒙古四大寺院の一つの呼称であり、貴

司が訪れた時点でも千人近いラマ僧がいると書かれている。その所在地は内蒙古の中央部を占める広大なシリングール盟の中心都市シリントであるが、貝子廟が有名なため、シリントの代名詞として用いられることもある。この『蒙古日記』でもシリントという都市名はほとんど使われず、もっぱら貝子廟が寺院ではなく、この町の呼称として使われている。シリントの西側の一帯がアパカ旗、東側の一帯が西ウジムチン旗（盟が日本でいえば府県、旗が郡というイメージ）であり、西約百キロにアパカの中心集落、東百五十キロに西ウジムチンの王府がある。

- (15) 機関長牧野中佐…陸軍騎兵中佐。昭和十五年設置当初からのアパカ（貝子廟）特務機関長。明敏な人物で関東軍の満蒙政策のリーダーの一人だったと考えられる。貴司の取材にも好意的に対応し暗黙に機密情報を開示したりしている。昭和十九年六月一面披（イーマンボ・ハルビン東南方百キロの町）機関長に転じた。（※前掲『特務機関』による）戦後シベリアに抑留、一九四六年十月十六日ソ連沿海州第十三收容所で死亡。ウラジオストク市民墓地に埋葬された。（※村山常雄編著「シベリア抑留死亡者名簿」（インターネット版 <http://yokuryu.hnucc/index.html> 2013/1/31 閲覧）による）

- (16) 猪口三蔵…ハイラル（現ホロンバイル市）で牧童をしていた。十七歳の時誤って越境しソ連チタ監獄に三年間在監、その後ハイラルでホテル経営とともに日本軍特務機関員として活動。ノモンハン事件や満蒙国境策定の日ソ交渉に関与、戦後帰国し間もなく死没。本文では笹目など多くの蒙古運動家が独断専行型であったのにたいし、猪口は軍や外務省の組織に従って行動するタイプで、また自己の功績を吹聴しない「物事に執着のない人間」と書かれている。

- (17) 左近允正也…早稻田出身で当時三十二歳の青年。牧野特務機関の囑託、盟公署の官吏という資格で西ウジムチン旗に駐在。この僻遠の

地で日本軍権力を代表する唯一の日本人として、西ウジムチン行政を専断するという不思議な地位にあった。巨漢で、現地の人々からは「タラカン・バクシ（巨大漢先生）」と畏怖されていた。（＊苗字の読みは一般にサコンジ、サコンジョウがありどちらで呼ばれていたかは不明）

この左近允青年のその後の運命は、前掲『特務機関』の記載を調べると、昭和二十年八月九日、ソビエト軍侵攻にともないアパカ機関は西ウジムチンなどの分派機関を含めて撤収後退を開始し、渤海湾に近い錦県（錦州市）で八月二十二日ソビエト軍に降伏、武装解除を受け事実上消滅した。ここで大部分のメンバーが釈放され帰国の道をたどるが、木村機関長以下二十名は長春に移送された。その移送者の中に左近允の名も含まれており、巻末名簿には「戦死」とある。

(18) 森憲一…第六高校から京大法字部に進学。在学中に猶興学会に入り血盟団運動に参加する。関西遊説中の若槻礼次郎を追うも暗殺に失敗した。判決は懲役四年。一九三七年、釈放。ソ連参戦後、行方不明（戦死）か。

(19) 笹目雄恒…中央大学中退、興蒙のロマンを抱き、大正十五年東京駒場に蒙古留学生のための戴天義塾設立、昭和三年北京に滿蒙義塾設立、昭和八年徳王私設顧問。『蒙古日記』の中に「内蒙自治政府の大事を決定した徳王主催の百霊廟会議の實質的仕掛け人だった」という趣旨の述懐が記録されている。ラマ教学博士、戦後ソ連に長期間抑留、昭和三十一年帰国。奥多摩大岳山に道院をたて籠る。『神仙の寵児』という著書があり神仙と交流があったと語る。なお、戦後の著作では名前は「恒雄」「秀和」などと表示されている。一九〇二～一九九七年。

(20) 活仏…チベット仏教独特の存在で、優れた修行者（ラマ僧）の生まれ変わりで、生まれながらに聖性をもついわば「生き仏」とされる存在

在。その一人であるダライラマなどはその一挙手一投足が世界政治に影響を与えるほどの大物だが、実際には蒙古草原にたくさんのかたがたの形骸化した活仏がいたと考えられる。活仏の転生は先代活仏の、あいまいな遺言に基づいて、一帯の幼小児から探索決定されるので、それまで僻遠の集落の演垂れ小僧だった小児が突然寺につれてこられ特訓をうけて「仏」となることが多い。西ウジムチンの活仏は七歳の小児であった。（この寺院は十月十四日の日記にある「ウルデイトノム寺」と推定される）

(21) 王・王様…伝統的に羊、土地、権力を保持する、一般的に言えば領主である。清国によってその権威と地位をオースライズされた特権階級だったので、中国風に「王」とよばれ、多人数存在する。昭和十八年の時点でも、この古い特権階級は隠然として存在しており、蒙地経済の近代化の問題点になっている様子が、日記にもしばしば登場する。

(22) 小熊秀雄…北海道小樽出身の詩人。旭川新聞記者などを経て一九二八年上京。一九三二年プロレタリア作家同盟に加入、一九三四年『詩精神』同人、一九三五年、詩集「飛ぶ櫓」刊行。一九四〇年には漫画「火星探検」を刊行、SFマンガの先駆的作品として最近注目されている。「ブランバゴ中隊」は詩集「飛ぶ櫓」に収載されている。一九〇一～一九四〇年。

(23) 青山守次医師…貝子廟で蒙古人医療に挺身し「ボルハン・エムチ」（仏の医師）と呼ばれている日本人医師。貴司は詳細な聞き取りを行っている。住民の梅毒感染率など「極秘」データを開示され、また、さまざまな苦労話も聴取し、当時の蒙古草原での医療の実体があからさまに記録されている。青山医師は内地では救療事業を行っており「小島の春」作者の小川正子の同僚と記載されている。

(24) 甲斐政治…戦時中は山西省顧問など、大陸で活動。若い頃は詩作も

あり、戦後右派社会党などから宮崎選出衆議院議員に出ている。

(25) 野田律太…一九二五年ころ共產党系の日本労働組合評議会委員長、貴司と親交有り「野田からの題材提供で書いた作品は、このころ無数にある」と貴司は述べている。戦時下に転向し保護司となり、多くの転向者の面倒を見た。一九九一〜一九四八年。

(26) 村上知行…中国文学翻訳家、随筆家。福岡出身、九州日報記者、新派座付き作者などをへて一九三〇年から北京の路地裏に住む。讀賣特派員となるが日中戦争勃発を機に退社、戦争報道と一線を画し市井に徹する。戦前には「支那及び支那人」「北京歳時記」「北京十年」など著書多数。一九四六年帰国し「聊齋志異」「水滸伝」「金瓶梅」など中国古典文学の紹介に努めた。一九七六年自死。

(27) 新民学院教授数納兵治…新民学院は北京を軍事占領していた日本軍が昭和十三年に、官吏養成の最高学府という位置づけで、滝川政次郎に委嘱して北京に作らせた高等教育機関。関連研究論文(*島善高「国立新民学院初探」『早稲田人文自然科学研究』52号、一九九七年十月)では数納の名前は見いだせないが、在職したものと推定される。数納に関してはむしろ戦後の再会が特筆に値する。敗戦後帰国した数納は、出版社富山房の社員となり、突然貴司の下に現れ、貴司の精選された作品集を出す豪語し、真に受けた貴司は収録作品を選び、組版やポイント指定まで入れた完全原稿を用意する。しかし、結局支離滅裂な話で出版は行われなかった。

(28) 山田清三郎…作家、評論家。『種蒔く人』同人、プロレタリア文学者として活動、『戦旗』編集責任者、プロレタリア作家同盟活動家。一九三四〜一九三八年下獄。『囚敵』『日本評論』一九三八年十月号で第八回芥川賞の一次候補。転向し一九三九年「満州新聞」記者となり新京に移住。戦後、五年のソ連抑留後帰国。新日本文学会会員。一九九六〜一九八七年。



チチハル

王爺廟

ハルビン

新京
長春

京新林

奉天

錦州

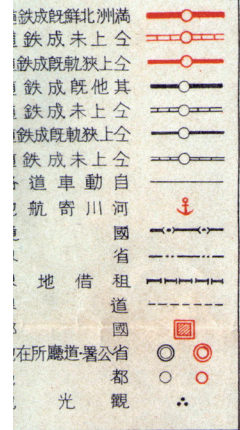
大連

京城



特務機 情報部

* 情報部本部・特務機関の位置は岡村秀太郎編『特務機関』（1990年）を参照した。



『フェンスレス』オンライン版 第2号
占領開拓期文化研究会 senryoku

北涯の“大東亜共栄圏”終末像

貴司山治『蒙古日記』解題

伊藤 純

一 『蒙古日記』の成立経過と特徴

貴司山治は、太平洋戦争の末期昭和十八年（一九四三年）九月から十一月にかけて約三ヶ月、内蒙古を中心に、北京、山西省大同、太原、旧満州のハルビン、新京（現・長春）を旅行した。そして“約百万字”におよぶ旅行記録『蒙古日記』を書き遺した。^①

この『蒙古日記』は、既にDVD版で刊行されている『貴司山治全日記』^②に画像データとしては含まれているが、内容的には、日々出来事を書き記していくいわゆる“日記”とはやや異なり、帰国後に、旅行中のノートや資料なども参照しながら、記憶に基づいて、速記者に口述したものである。その完成には、帰国直後から半年以上かかっており、若干の書き込み、推敲も加えられている。そういう意味では“日記”とはやや異なる独立した「旅行記」、一つの作品といえる形になっている。

以上のような成立事情から、この『蒙古日記』の特徴を要約すれば――

① さい果ての“大東亜共栄圏”に生きるさまざまな人びと（日本軍人、官吏、蒙古浪人、さらには蒙古の活仏^③王、役人、商人など）の生きざまを人間くさく描写記録する作家的記述。

② 当時の内蒙古の政治・経済・社会の実状を、軍司令官や公使、蒙古自治邦のいろいろなレベルの役人、特務機関長や囑託下僚、僻地医療に挺身する医師など、多くの人びとへの取材と、統計資料などで記録したジャーナリスティックな、調査的な記述、記録。

③ プロレタリア文学から転向して新たに依拠しようとした“東亜協同体”幻想からも裏切られつつある現実に向面して、その協同体の北涯をさまようことで、もう一度作家的スタンスを考え直そうとする、煩悶と自省の記述。



図1: 貴司山治全日記(左手前の平積みめの6冊が『蒙古日記』
全5冊と妻孝子による『留守日記』1冊)

という三つの要素が入り交
じって縷々展開されている。

これらを通して、具体的に
は例えば、三十二歳の日本人
青年が唯一人の権力者として
君臨する草原の果てのシャン
グリラ・西ウジムチンの滞在
記、徳王を見出し内蒙古自治運
動を事実上立ち上げた人であ
る生粋の蒙古浪人笹目雄恒の⁽⁵⁾
一夜語り、草原の奥に幽閉軟

禁されているある蒙古王の訪
問記(「軍秘」と注意書きされ
ている、更には「秘密」「厳秘」
などと添え書きされたシリ
ン
ゴール盟の人口推移や貝子廟中学生徒の梅毒感染率統計、献身的な
医療者青山医師が語った草原の医療の実態など、いずれもいわゆる
「正史」ではうかがいしれない昭和十八年という時点で内蒙古の
生きた姿、生きたエピソードが記述されている。

どのような経緯で貴司は内蒙古に行ったのか。昭和十八年という
戦局の押し詰まった時期に、対ソビエトの最前線である内蒙古に、
個人的に旅行などできるはずはない。

昭和十七年九月八日の貴司の日記には「今の自分の生活を救ふも
のは戦争だけだ。報道班員採用の命令がこないものかどうか。」と
戦地への徴用を待望する文言が記されている。

ただ、その真意はくみ取りにくい面もある。この時期貴司は、何
人もの速記者を雇って大衆小説を書きまくる(おそらく月産数百枚)
という状況で、大衆小説家としてはむしろプロレタリア文学時代よ
りはるかに恵まれた状態にあった。にもかかわらずこの煩悶は何な
のだろう。

第一には、日記のそこそこ書き込まれている、極めてプライ
ベイトなことであるが、昭和十六年に妻恵津(貴司悦子)を結核で
失ったという「悲劇」である。恵津は、若い頃から結核を病んでおり、
なかば病床にいろような生活だったから、主婦らしいことも母親ら
しいことも世間並みの半分くらいしかできなかった。しかし、日記
の文言によれば、文学的・思想的なものも含めて、生きることの重
要な支柱となっていたということが、くみかえし記述される。それ
は去ったものへの美化もあるかも知れぬが、ともかく、その支柱を
失ったことが作家としての「時代との戦い」に大きな喪失感をもた
らしていることがくみかえし愁訴される。

そして第二に、日記中にもう一つ繰り返されている特徴的な文言
がある。例えば昭和十六年十二月三十一日の年末総括的な記載――

来年はひきつゞきやはり通俗文学に終始する。芸術文学の作品をつくるのはついに私には四十五才（※数えて再来年の歳——伊藤注・以下同じ）以後となつてしまった。

“芸術文学”に取り組むことにより予想される収入減に対処するために、当面は通俗的な仕事に取り組まざるを得ない、という目算である。逆にいえば可及的速やかに通俗を脱して“芸術文学”に取り組まなければ作家としての己を失う、という危機感である。

通俗的な仕事というのが何で、芸術的な仕事は何なのかは議論を要するところだが、ともかく、月数百枚量産中の大衆作家が、その最中にも純文学強迫観念に囚われ続けているという現実が認められる。

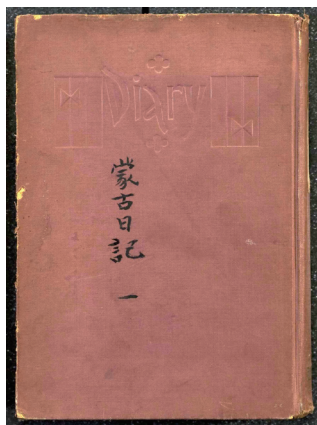


図2:『蒙古日記』第1冊目表紙

貴司に関していえば、少なくともプロレタリア文学の世界にいた時には、そのような強迫観念はそれほど露わではない。むしろ、大衆の心の中に直接に飛び込んでいける通俗作家としての技術と作風をもっていることで、それを持たず理解もでき

ない正統左翼作家を“見下す”境地を保っていたように見える。

しかし、プロレタリア文学が崩壊し、その思想的支柱が失われると、この強迫観念は復活する。貴司は自分が編集発行した雑誌『文学案内』で、志賀直哉や徳田秋声への対談を企画し、私小説的純文学の秘密に迫ろうとしたりもする。しかし戦争に向かいつつある時代は、そのような志向よりは「近代の超克」というような集団主義幻想がいやおうない選択肢として突き付けられてくる。しかも、大東亜の盟主として西欧を駆逐し、退廃と汚濁にまみれた西欧的資本主義近代を超克した新たなアジア共同体を構築する、というスローガンの下に戦争は始まってしまっているのだ。既成事実化した事態の前に、無理にでもこの共同体幻想に自己を同化させるしかない。純文学強迫をこの東亜協同体幻想に無理にでも置き換えるほかに、かくて「今の自分の生活を救ふものは戦争だけだ。」という結論が書き記される。

しかし、一旦はほぼ決まりかけていたかに見えた南方に行きたいという従軍希望は昭和十七年九月、海軍省によって拒否される。

その後、“華やかな”南方戦線ではなく、あまり注目されない内蒙古への派遣が浮上してくるが、その端緒や経緯は日記によってもあまり明らかではない。昭和十七年十二月五日の「池田M⁽⁶⁾両君に両国であひ、はせ川で食事。蒙古行の話。」というのが、内蒙古旅行関連の最初の記載である。池田はおそらく当時蒙古自治邦駐日代表部の職員で徳王⁽⁷⁾の秘書などもつとめたことのある池田武夫、Mは、

内蒙古旅行の前半貴司に同行し先達を務めた自称画家である。貴司はその後も何度かMとあい、旅行直前の昭和十八年夏には軽井沢の別荘にM夫婦を招待している。

内蒙古旅行中の貴司の身分は「蒙古自治邦囑託」となっており、旅行先の特務機関や関係の役所には駐日代表部から公的な旅程の連絡が廻っている。しかし、『蒙古日記』の記事から類推すると、蒙古自治邦からの旅費の援助を拒否したり、Mが密かに関係先から金を受けとっているのではないか、ということを厳しく詮議したりしており、旅費は自分持だったようである。おそらく、蒙古当局や日本の役所に対して提灯記事を書く様な負い目をできるだけ作りたくない、という配慮のように思える。内閣情報局や軍の特派員派遣というのとは少し異なるようである。

内蒙古旅行を前にした昭和十七・十八年、この時期は戦争の状況が大きく転回していく時代でもあった。その典型的なメルクマールに、昭和十七年六月五・七日に太平洋の真ん中で戦われたミッドウェー海戦がある。この海戦の敗北によって日本は早期講和の機会を失い、国力差による必然的敗北のコースに否応なく入っていく。この重大な転機が、まだ日本中が勝った勝ったと浮き立っていた開戦後たつた七ヶ月の出来事であったということは銘記すべきことだが、昭和十七年九月頃には貴司は「読売新聞第一線の会」（同紙寄稿家の会）での平出海軍大佐のオフレコ談でその真相を聞き、東亜協同体幻想が正に幻想と化したことを認知したはずである。⁽⁸⁾

昭和十八年六月四日の日記には――

……仕事から仕事へ、こゝが私の逃げ場かも知れない。毎日の戦況、世界をあげての大戦の渦中にあるのだといふことが瞬時として忘れられえたことはない。この怖るべき時代をいかに生くべきか？ ……時局に合奏する小説を書き思想をしやべる人間なんか、単なるジャーナリストにすぎない。

私は心が今の現実の負担にともすればたえなくなり、崩れそうになるごとに、戦後の世界、戦後の日本の生活といふものを醜の中に描く、……しかし、日本が破滅するか、打ち克つかかわかなければ、明日のこともわからない、……勝つにきまつてゐるなどといふ安易な考へは、今流行かも知れないが、自分にはひびかない。(……は中略を示す。以下同じ)

と記し、また――

ドイツは、二年目の今になつて、はつきりと失敗の泥濘中に立つたやうだ。

……日本の闘争が民族の生存権のための闘争であるかぎり、敗れないといふことは、日本人が二十世紀の歴史にのこす偉大な文化的教訓であらねばならない。(六月二十日)

など、錯雑した想いが錯雑した言葉となつて記されている。この

されている。

・岩崎駐蒙公使との会見。内蒙の現況についての談話が長文で記録されている。日本支配の公的な状況が読み取れる。

・警備司令部による乞食狩りを見学。指揮する音成中佐の懇切な指揮ぶりとは何となく間延びした軍隊の雰囲気。

・自治邦の役人で興蒙委員会囑託という岡部理と知り合う。⁽¹⁶⁾
厚和

・蒙古軍最高顧問小倉達次少将取材。興蒙の意見を聞く。

・回民駱駝貿易商曹英に駱駝貿易の実態を取材。

・イスラム学の大家で今は自治邦の高官となっている須田正継と相知る。⁽¹⁷⁾

包頭

・蒙古自治邦回教委員長蔣輝若⁽¹⁸⁾に面会。日本支配下の回民政策について聞く。

その他

・張家口の遙か北方、張北の駐屯部隊に慰問講演に行く。部隊長

森田大佐は大変変わった印象の軍人……

・龍烟鉄鉞を見学。

四 主な旅程② 貝子廟とアパカ特務機関

十月十二日～十四日。十二日朝、座席もない爆撃機改造の航空便⁽¹⁹⁾で貝子廟⁽¹⁹⁾にむかう。貝子廟は著名なラマ廟のある交通の要衝で、

百人近いスタッフを擁するアパカ特務機関がある。本来ここが蒙古草原の貴司の最終取材目的地だった。⁽²⁰⁾

ここの牧野特務機関長は明敏な騎兵中佐で、部下には煙たがられているが、貴司はいい関係を構築でき、機密書類も含めいろいろな情報に接することができた。ことに、特務機関員たちとの座談会はこの時点での、内蒙古の実質的な軍事支配、内政支配の具体的な状況についての、支配者側からの見方が率直に語られている。

貝子廟滞在の一日、貴司はこの中学校を見学、時間割や年齢別生徒数、親の職業や資産状況、など詳細な実態を記録している。

そして、上記の座談会で最もよくしゃべった左近允正也⁽²⁰⁾という早稲田大学出身の三十二歳の青年に注目する。彼はもともととは特務機関の職員だが、今は自治邦政府の囑託（蒙古側の役人）という形で、ここ貝子廟から東方百五十キロの草原のかなた、西ウジムチンに單身赴任しているという。そこは放牧の蒙古人しかいない純蒙地帯で、そこに左近允青年は実質的に関東軍特務機関を代表する唯一人の権力者として君臨している。そして、砂糖とか缶詰とか輸入煙草とか内地ではもはや見ることもできない貴重な品物を沢山コレクションし、加えてふんだんにある肉、乳製品に取り巻かれて暮らしており、貴司がきてくれれば大歓迎するという話であった。貴司は直ちにこの招待に応じ、翌日には任地に帰る左近允に同行して、午後一杯かかってトラックで西ウジムチンに行く。

五 主な旅程③ 西ウジムチンと左近允正也

十月十四日、二十一日の間、貴司は西ウジムチンに滞在した。全く飛び入りの旅程にも関わらず、滞在は足かけ八日間に及び、その記載は一五〇頁（約十五万字）に達している。この西ウジムチン滞りが『蒙古日記』のハイライト——いわゆる純蒙地帯で、同時に対ソ最前線、日本支配の最先端、いわば“大東亜共栄圏”の最辺縁という位置づけでその実態を凝視したと考えられる。

着いてみると、そこには一応王府、ラマ廟、盟公署、ホリシヤ（蒙古人の公協同組合）の店、漢人売買の店、蒙古人の包の群れ、そして日本の商社（大蒙公司）駐在事務所（数名の駐在員）などがあり、一地方のセンターではあるが、貝子廟とくらべてはるかにさびれた草原の小邑にすぎない。

しかし同時にそこは、青年左近允が司法、行政のすべてを統括するシャングリラであった。彼は、蒙古服蒙古刀のいでたちで、王公なみの赤色の包に着座し、次々と持ち込まれる訴えや決裁事項に決定を下す。神聖不可侵の絶対的権威であるはずの活仏とも平気で列座する。蒙古の感覚でいえば活仏と同列に座するなどということは即刻打ち首にあたいする無礼のはずだ。（もっとも、この活仏は七歳の可愛い男の子で、貴司も、菓子を手渡してうろたえさせるという大非礼を犯している）

左近允は日本人離れした巨大漢で、タラカン・バクシ（巨大な先生）とあだ名され、当地では泣く子も黙るといふ存在である。彼には、忠実一辺倒の家令と数人の少年家僕がかしずいている。何故か

絶対者左近允は食事の準備になると、突然荒れ狂い、ちよつとした瑕疵……たとえば茶碗にちよつとごみがついていたとか、箸が不揃いだとか、美味しそうな肉料理の味がちよつと気に入らないとかで、家令や家僕をどなりつけ、ものを投げつけ（時にそれが海軍ナイフの場合もある！）追いまわす。ただ、従者たちには毎度のことらしく、泣き声をあげて逃げ惑うわりには、上手によけるのでほとんどあたらない。

そしてひとあたり狂乱の嵐が過ぎると、左近允は突然柔和になり、客たちに、内地では想像もできないほどのご馳走を勧める。

絶対者左近允は当然のことながら、この地の実状についての、究極の消息通でもある。貴司は、蒙古人の生活を支える三つの経済組織——ホリシヤ、漢人売買（山西省を本拠に、牛車に荷を積んでこの地帯を行商し、深く蒙古人の暮らしに入りこんでいる。西ウジムチンにはその倉庫や二十人が寝泊まりする事務所兼宿舎がある）、日本の商社（事務所があり数名の日本人がいる）を案内され、詳細な聞き取りをする。

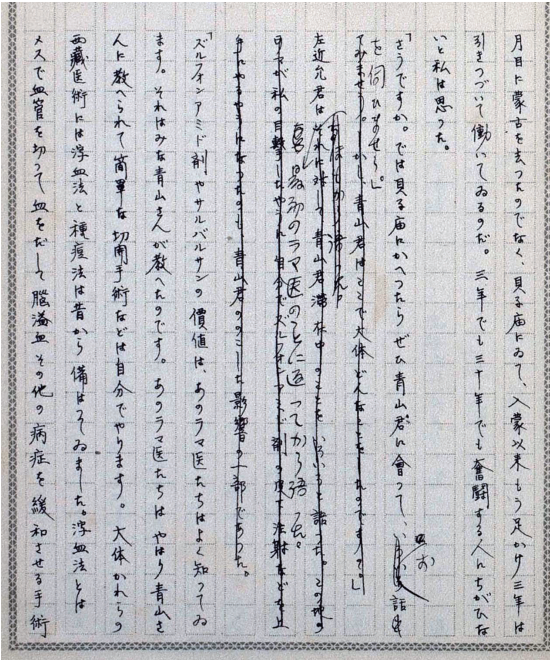
そこで、内蒙支配を担うはずの左近允や実際に満州蒙古で牧場を経営している笹目雄恒が異口同音に語った言葉が書き留められている。左近允は——

「僕はとてもあいつら（*大蒙会社の日本人商人）が嫌ひですわね。

……軍を笠にきて強権に物をいはせるから、強権も何も持つて

ゐない漢人よりは押しがきいて、蒙古人からは法外に安い値段で牛でも馬でもふんだくるんです。それでは蒙古の復興も何もありません。」

笹目は、満州で蒙古人から牛や馬を買い上げるのは満州畜産会社



図ハ・丸背ブック型A5版ノートに速記者「常光妙子」によって浄書された『蒙古日記』原文のページ面。若干ではあるが貴司の自筆

による書き加え、抹消などの跡もみえる。右は第3冊目で、左近允正也から現地のラマ医や青山守次医師について聞き取っている。

だが、みな満州畜生会社としか呼ばない、「それくらゐかれらは非道なことを蒙古人に対して行ひつづけてゐる……一番この蒙古草原を荒してゐるのは、その畜生どもでせう。」と極言する。

末端現場での「大東亜共栄圏」の現実が、あけすけに語られるのである。このシャングリラには、不思議な人びとが吸い寄せられるようにやってくる。

元血盟団員森憲二は服役後その志を評価されて特務機関員となり、貴司が訪れた時点では機関員への蒙古語研修の先生としてこの地に滞在していた。当時まだ三十歳台の若者だったが「死におくれた」とつぶやいて草原の奥に逼塞している風情を貴司は「オブローモフ」と評している。

笹目雄恒、猪口三蔵は、蒙古自治運動の初期からこの西北の草原を「遊弋」し、時にその裏面史に重要な足跡を残した「蒙古浪人」の大物である。格別の用事はなさそうなのに「遊びにきた」といって、そのような「古老」たちがぶらぶらしている。これも印象的な情景である。

この古老たちからも、貴司はいろいろ話を書き留めている。

例えばその一つ、蒙古自治運動の事実上の出発点となった徳王による百靈廟会議（一九三三年）は、徳王というリーダーのかつぎ出しを含めて、笹目らが画策したものだったという笹目自身の述懐が記録されているが――

戦後、笹目が公開した各種の回顧録では、蒙古自治運動に関

する記述が曖昧なので、貴司が日記に書き留めた記録はきわめて資料価値が高い。

と『貴司山治研究』で森久男氏がコメントしている。⁽²³⁾

六 主な旅程④ 内蒙軍事支配と民政

十月二十一日、貴司はトラックに便乗して西ウジムチンから貝子廟に戻り、数日を過ごす。シリンゴール盟の中心地である貝子廟では、手芸学校が開校し、大きな保健所が建設中で、いわゆる「殖産興業、保健衛生」などの民政的努力が垣間見え「ここから新しい蒙古が生まれつつある」という感想を貴司は記しているが、他方で、たとえば貝子廟（崇善寺）での講演会で、ラマ僧の出席は少なく、いろいろなことで日本の行政にたいする隠然たる非協力が感じられる。牧野隊長はこの状態を気にして「寺院に放火してあわてさせるか」と軍事権力者らしい冗談を口走る。

中学校を見学すると、校庭には自治邦の旗がひるがえり、壁には日本語の「宣誓」が掲げられている。曰く「我等ノ体ハ蒙古ノモノ、我等ノ心ハ蒙古ノモノ、我等ノ体ト心ヲ鍛ヘ、誓ツテ興蒙ノ礎トナラン」。

また、ここでずっと蒙古人医療に献身している青山守次医師からも長時間の聞き取りを行い、蒙古草原での医療の実態を、極秘というものもふくめたいろいろな統計データとともに記録した。また、

青山医師の多くの体験談、エピソードを書き留め、後にこの医師を題材に「沙漠に咲く花」という小説を書いている。⁽²⁵⁾

十月二十六日、貝子廟をたつて飛行機便で張家口に戻り、岡部宅に転がり込み風退治などをしてもらう。十月三十日まで滞在し、ここで「蒙古旅行」は終わる。

このあと、山西省太原にたちより、閻錫山の豪邸に住むカリスマ⁽²⁶⁾の省顧問甲斐政治に面会。ナチス親衛隊風の独自の「急進建設団」による山西省改革の理想を聞くなどして、北京の福田千之宅に帰り着く。福田家の隣に住む新民学院の教納兵治教授と知りあい、酒飲みで付き合いの広い教納に引き回されて生粋の北京の知識人たちを知り、素晴らしい骨董品や料理に出会うが、同時にこれらのものやわからな「老北京人」たちが、日本にほんの少しの共感も持っていない面従腹背の極地であることを悟る。

さらに、十一月十四日～二十日、福田千之とともに、満州、ハルビンへ旅し、ハルビンでは、ビヤホール、キャバレー、女給、キャビア、ふぐ料理、美人の女按摩……など、もはや内地ではみることもできない歓楽の極みが未だに咲き狂っているのに出会う。敗戦一年半前の満州である。

十一月二十日、新京で福田千之と別れ、満州新聞に勤務する山田清三郎にあう。ここで、まるで落語のオチのような一つの結末に出会う。この旅行の前半の先達役だった自称画家・特務機関員のMは、十年以上前、治安維持法違反で下獄していた山田清三郎が千葉

刑務所で知りあつた男で、彼の罪科は思想犯ではなく「横山大観の贋作師」であり、前科二犯、懲役四年で服役中だったというのである。生粋の詐欺師、詐欺師と二ヶ月ばかり旅したことが判明し、数奇な結末となった。

十一月二十四日、釜山で乗った関釜連絡船は、往路とはすっかり様子が変わっていた。乗客全員が常時救命具を装着し、船はジグザグの避雷行動を取りながら進むという厳戒態勢となっていた。実は、貴司が大陸を旅している間に、事件が起こっていた。妻孝子の記した「留守日記」に――

十月八日 崑崙丸（関釜連絡）が潜水艦の雷撃にあひ沈んだ――
――が報ぜられてあつた。六一六名中七二名生存したとある。

と書かれている。……ともかく、船は夕方下関に着き、旅行は終わった。

七 総括

貴司が蒙古草原で見たものは何だったのか。それは――「大東亜共栄圏」は幻影だったという具体的な現実だ。いや、蒙古草原まで行かずとも、大陸に着いた最初の夜の北京駅頭で、貴司は防疫取締りをする日本軍の警備に遭遇することによって「共栄圏」は軍事占領以外の何物でもないことを体験している。

草原の末端の「現場」にいて、事態はより鮮明になる。軍事権力の末端で事に当たる日本人自身が――「軍を笠にきて強権に物をいはいせ……蒙古人からは法外に安い値段で牛でも馬でもふんだくるんです。それでは蒙古の復興も何もありはしません。」「満州では蒙古人から牛や馬を買ひあげるのは満州畜産会社なのですが、われわれ蒙古関係者は……満州畜生、会社と呼びます。……みやうによれば、一番この蒙古草原を荒してゐるのは、その畜生どもでせう。」というのである。

たしかに、貝子廟のような枢要の地では、殖産、教育、医療などいわゆる「近代化」のために努力する日本人や蒙古人たちの、ある意味では涙ぐましい存在も見える。しかし、その背後には、特務機関長を焦慮させるような、ラマ教寺院の隠然たる非協力の影が立ち現われている。貝子廟の一時の平和は、軍事権力によって辛くも保たれているものに過ぎないことが、総体として感じられる。

そしてそのような構造が、昭和十八年秋という時点で、破綻寸前のゆきづまった、展望のない状態におちいつていることが、左近允青年や、アパカ特務機関のスタッフなど、現場の渦中にいる人びとの言葉の中に、時にストレートに、時に屈折したかたちで、溢れ出ているのを認めないわけにはいかない。

森久男氏は前掲書で「貴司は左翼転向作家として、東亜協同体の実現に新たな文芸活動の意義を求めた。しかし、戦局悪化にとまって、その幻影も崩れさつた……」「すべてに失望して帰国するや、新しい文学を創造する意欲はすでに失われていた。」と総括する。⁽²⁸⁾



図5：ラマ廟で、蒙古旅行中のスナップ
(撮影場所不明)

実際、冒頭に記したような文学的、生活的煩悶からぬけだす方途を探すための旅、という目的は失敗に終わった。しかし、それは予め分かっていた

も、……蒙古の奥地まででかけて行つたのだ。……（*そして）私は、わが身のさいなまれる生々しい思ひが、典型的な日本人として今日の日本民族全体の運命をこらへてゐる思ひに重なつてゐるのを知つた。（「日記」昭和十九年一月二日）

……流石に、けふは作家たちの小説を一冊、本にする紙もなくなつた日本の現実に暗澹となつてしまふ。物を書くことから離れて、この恐るべき戦争の時代をいかにたたかつて行くべきか？ 考へこみながらおそくかへる。すつかり頭痛をおこしかへるなり頭をかゝへてねてしまふ。（同四月十日）

……情報局へ行く……自分たち吉祥寺在住作家二三人が附近の工場に作家として働きにはいり、女子挺身隊や通年動員をうけた学生などの精神支持にあたる仕事をしたい（*——と申し入れをするが、何も具体的な結果は得られず文学報国会にもいく中村武羅夫、芳賀檀、米持格夫の三氏に同じ話一時間。このやうな人に何を話した所でどうなるものでもない。すつかり徒勞の感じ。」（同四月十四日）

帰つてきた日本列島には、一作家の思念を越える困難が押し寄せてきていた。昭和十九年に入ると状況はさらに逼迫してくる。

……私は自分の小さな私生活のなやみが、民族の大きな運命につながるいとぐちをみつけることのできないなやみのために

かくて、貴司は、昭和二十年春、爆弾の雨と降る武蔵野（武蔵野市は中島飛行機工場の存在によつて米軍爆撃の重要標的となつた）を逃れて「物理的に」生き延びるために丹波山中に疎開を兼ねた開拓民となつて移住した。蒙古旅行から一年余り後のことである。そして

そこで、意外な人間の紐帯を再発見することになる。

(以上)

注

(1) 『貴司山治日記』昭和十九年六月六日の項に「蒙古日記了る。ノオト五冊、原稿用紙にして二五〇〇枚」という記載がある。四百字詰め原稿用紙二五〇〇枚は百万字になる。但し、原稿は速記者(常光妙子)によってマス目のないノート用紙に浄書されているので正確な字数は算定しにくい、実際には概算八〇万字くらいと算定される。

(2) 『貴司山治全日記』…『貴司山治全日記DVD版』および別冊『貴司山治研究』(貴司山治研究会(代表立命館大学中川成美教授)編、不二出版、二〇一二年)。

(3) 活仏…翻刻補注(20) 参照。

(4) 王…翻刻補注(21) 参照。

(5) 笹目雄恒…翻刻補注(19) 参照。

(6) M…翻刻補注(1) 参照。

(7) 徳王…一九〇二—一九六六年。一九三三年の百霊廟会議に始まり一貫して内蒙古自治運動を主導したカリスマ的人物。ただ日本軍占領下にはそれと妥協して自治政府を立ち上げる、といった経緯もあり、戦後は政治犯として投獄されるが、一九六三年釈放され詳細な自叙伝を書きのこした。ドムチョクドンロプ著・森久男訳『徳王自

伝——モンゴル再興の夢と挫折』(岩波書店、一九九四年)

(8) 平出海軍大佐のオフレコ談…戦後昭和三十年刊行の『ゴーストアップ』巻末の「わが遍歴(未定稿)」という貴司自身が書いた略年譜風の一文に——「一九四二年。九月ごろ読売新聞第一線の会(同紙寄稿家の会)で海軍大佐平出英夫からミッドウェー沖の敗戦をうちあけられ、「日本敗北必至」をひそかに告げられて、自分の東亜共同体的認識や日本資本主義への認識が全く錯覚にすぎないことを知り、すべての自信を失って軽井沢の山荘にこもり、懊悩煩悶にくらす。自滅のつもりで平出を訪ね報道班員としてカー・ニコバル島へ赴こうとする。情報局が許可せず。／一九四三年。一月に日野原孝子と結婚。これに長男を托しておき、単身蒙古に脱出、死ぬつもりでソ連国境近くを徘徊……」(『日本プロレタリア長編小説集3 ゴーストアップ』(三)書房、一九五五年)二三四頁)と書かれている。もともとこの記述は戦後十年を過ぎた時期のものであり、それなりの美化修飾を感じ。例えば「山荘にこもり、懊悩煩悶……」というのは、内面は知らず、外形的には、やや作り事に過ぎる。小生自身の記憶(当時十歳)では、独身となった父が四く五人の若い女性速記者を従えて千が滝の別荘に暮らし、口述原稿の量産に励んでいたのは、子供心にも大変華やかな記憶であり「山荘にこもり……」という枯淡な印象とは相当に異なる。また、最も華やかに戦果を喧伝していた時期に、その露出の花形である平出大佐が本当にこのようなネガティブなブリーフィングを行ったのか、この貴司の戦後十年時点での記述の傍証は未だ確認できない。

- (9) 松下銜次郎…翻刻補注(2) 参照。
- (10) 坂井徳三…翻刻補注(5) 参照。
- (11) 黄子明…翻刻補注(4) 参照。
- (12) 福田千之…翻刻補注(3) 参照。
- (13) 蒙古自治邦…翻刻補注(7) 参照。
- (14) 龍烟鉄鉞…翻刻補注(8) 参照。
- (15) 李守信…翻刻補注(9) 参照。
- (16) 岡部理…翻刻補注(10) 参照。
- (17) 須田正継…翻刻補注(11) 参照。
- (18) 蔣輝若…翻刻補注(12) 参照。
- (19) 貝子廟…翻刻補注(14) 参照。
- (20) アパカ特務機関…翻刻補注(13) 参照。
- (21) 牧野正民特務機関長…翻刻補注(15) 参照。
- (22) 左近允正也…翻刻補注(17) 参照。
- (23) 森久男「貴司山治の『蒙古日記』」、前掲『貴司山治研究』五三頁。
- (24) 青山守次…翻刻補注(23) 参照。
- (25) 貴司山治「沙漠に咲く花」『講談俱樂部』一九五〇年十二月号。
- (26) 甲斐政治…翻刻補注(24) 参照。
- (27) 新民学院の数納兵治教授…翻刻補注(27) 参照。
- (28) 森久男「貴司山治の『蒙古日記』」、前掲『貴司山治研究』五七頁。

編集後記

第二号は特集「占領と開拓の〈記憶〉」として六本の論考を掲載した。このうち三本は依頼によるもの。快く応じて下さった尾西氏、下岡氏、小泉氏に感謝申し上げます。尾西氏にはサンパウロでの体験や感想を自由に綴っていただきたいとお願いした。誰よりも早く届いた文章は、学生や日系移民の方々と交流を語りながら、石川達三の『蒼氓』を読み深めていく魅力的な論考だった。学会誌のジャンルでは「研究ノート」と分類するのがふさわしいかもしれず、著者からもそのように示唆いただいたのだが、『声なき民』を代理表象することの困難^{（がたがた）}について書かれたこの論考は、他の特集論文に対する応答ないし問題提起としてきわめて重要であると思われる。そこで、編集部の判断であえてジャンル分けせず特集枠で掲載することとした。尾西氏をはじめとする各執筆者および読者諸氏のご賛同を得られれば幸いである。

本特集の趣旨は「はしがき」にある通りだ。

私たちの関心のあり方は、現在の私たちを取り巻く状況からの刺激を絶えず受け、変容していく。そして、状況の変化はすみやかである。「占領」や「開拓」の〈記憶〉を問い直すことは、「見失われた過去」を正しく取り戻すということを意味しない。むしろ、何が何を・どのように〈記憶〉たらしめ、あるいは〈記憶〉たらしめないのかを問うべきだろう。つまり、〈記憶〉の地政学であり、〈記憶〉の修辞学である。現在の私には、なぜこうした関心を抱くのか、整理してその全体を説明することは難しいが、説明可能な部分の余剰にこそ、現実の状況の中に置かれた私（たち）の生のあり様が刻印されているのではないかととも思う。今回の各論考でも、執筆者が自身の思考の全体像をはつきりとは把握し得ていないところもあるかもしれない。そのことは論文としての弱点には違いない。しかし同時に、その場所こそ、他者との対話が開かれていくポイントでもあろう。忌憚ないご意見を頂戴したい。

*

会員による一般論文は一本。福岡弘彬氏の

平林初之輔論は、氏のデカダンス文学研究の重要な一部をなすはずである。展覧会レビューは、実際の展示を見た人も、見なかった人も秋吉氏の報告との対話から新たな思考を紡ぐことができるはずだ。

書評は矢部氏に依頼した。ご自身の台湾生活もからめてと無理なお願いをしてみました。が、「外地」への関心が高まるほどに見えていない問題の多さに気づくという指摘もまた特集への応答なのではなからうか。

資料『蒙古日記』および伊藤氏の解題は、前号の貴司山治特集を引き継いでいる。日記中に生き生きと描かれている人物たちの多くが、その後日本の土を踏むことはなかった。戦争末期の内蒙古の記録として、またプロレタリア作家の文字通り彷徨の軌跡として貴重な資料である。

占領開拓期文化研究会では、次々頁記載の通り、昨年（二〇一三年）から会則を設け、会費制の研究会としてリニューアルした。若手研究者を中心とする研究交流の拠点でありつづけることはもちろん、より広く関心を共有する人々の情報交換と研鑽の場としても機

能させたいと考えている。そのためにも、研究者をはじめとする多くの方々のご協力を今後も仰いでいきたい。

現在の研究状況のもとでは、このような無名の研究誌に時間と労力を割いて文章を書くことは「暴挙」に等しい。それより一本でも多くレフリー付きの雑誌に論文を投ずべきである。にもかかわらず、多くの力のこもった論考が寄せられたことは「壮挙」ではなからうか。論文は論文として今後の批判を待つべきことは当然であるが、やがて錬磨を経て、それらが各氏の博士論文や単著の一部となつてゆくことを切に願う。

*

創刊号後記での予告どおり、昨夏から本誌をインターネット公開している (<http://senryokaitakuki.com>)。オンライン版では写真がカラーとなり、資料が追加されている。今号でもオンライン版のみ掲載の追加資料を準備している。八月頃の公開予定である。ぜひご覧いただきたい。

*

この一年間の研究会会員がかかわった刊行

物は次の通り。(順不同)

島木圭太著『リアリズムと身体——プロレタリア文学運動におけるイデオロギー』(風間書房)

内藤由直著『国民文学のストラテジー——プロレタリア文学運動批判の理路と隘路』(双文社出版)

貴司山治著・伊藤純篇『丹波アリラン——貴司山治小説集』(改訂版、貴司山治net出版)

同前『「ゴー・ストッパ」初版発禁版翻刻』(改訂版、貴司山治net出版)

牧野守監修・雨宮幸明解説『プロキノ作品集』(DVD版、六花出版)

柳瀬正夢全集刊行委員会(白井かおり他)編『柳瀬正夢全集』第一巻(三人社)

*

本号の編集では、早々に原稿を頂戴しながら、予定を大幅に超過しての刊行となつてしまった。今後はよりスムーズな編集を心がけたい。(M)

*

第二号編集委員／白井かおり・島木圭太・村田裕和

*

本誌の図版掲載にあたり、伊藤弘子氏(伊藤喜朔)のお世話になった。感謝申し上げます。

占領開拓期文化研究会会則

総則

第一条（会の名称）

本会は占領開拓期文化研究会と称する。

第二条（会の本部）

本会は別表に記載の代表幹事の所属研究室内に所在地を置く。

第三条（会の目的）

本会は昭和期日本とその周辺地域の占領と開拓に関わる芸術・文化の研究を目的とする。

第四条（会の事業）

本会は第三条の目的を達するために次の事業を行う。

一、研究発表会の開催。

二、機関誌の刊行。

三、その他必要と認められる事業。

会員

第五条（会員の資格）

本会は第三条の目的に賛同する個人および団体の会員をもって構成する。

第六条（会費の納入）

会員は付則に定める会費を負担するものとする。

第七条（会員の活動）

会員は本会の事業に参加し、機関誌の配布を受ける。

役員

第八条（役員）

第四条の各事業を遂行するために次の役員をおく。

代表幹事 一名

常任幹事 若干名

編集委員 若干名

研究会幹事 一名

監査 二名

第九条（役員の任期）

役員の任期は二年とする。但し研究会幹事は研究発表会とともに改選する。重任および兼任を妨げない。ただし監査の兼任は認めない。

第一〇条（役員の選出）

役員は総会において選出する。

総会

第十一条（総会）

総会は年一回開催し、当該年度の事業および翌年度の事業その他の事項について審議決定する。但し必要に応じて代表幹事は臨時総会を招集することができる。

会計

第十二条（経費）

本会の経費は会費・投稿料・寄付金・その他の収入による。

第十三条（会計報告）

会計報告は総会において行う。

第十四条（会計年度）

本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月末日に終わる。

会則の変更

第十五条（会則の変更）

会則の変更は総会において行う。

設立年月日

第十六条（設立年月日）

本会の設立年月日を平成二二年六月一日とする。

付則（略）

「この会則は二〇一三年九月一日より施行する。」

フェンスレス 第2号

2014年6月20日発行

編集兼
発行人 占領開拓期文化研究会代表 村田裕和

発行所 北海道教育大学旭川校 村田裕和研究室内
占領開拓期文化研究会
(〒070-8621 北海道旭川市北門町9丁目)

印刷所 洛西プリント社